

島根原子力発電所第2号機 審査資料	
資料番号	NS2-補-027-08 改 04
提出年月日	2022年10月28日

浸水防護施設の耐震性に関する説明書の補足説明資料

2022年10月

中国電力株式会社

## 補足説明資料目次

今回提出範囲：

1. 浸水防護施設の設計における考慮事項
  - 1.1 津波と地震の組合せで考慮する荷重
  - 1.2 自然現象を考慮する浸水防護施設の選定
  - 1.3 津波防護に関する施設の機能設計・構造強度設計に係る許容限界
  - 1.4 津波防護施設の強度計算における津波荷重，余震荷重及び漂流物衝突荷重の組合せ
  - 1.5 浸水防護施設の評価における漂流物衝突荷重，風荷重及び積雪荷重の設定
  - 1.6 津波波圧の算定に用いた規格・基準類の適用性
  - 1.7 浸水防護施設のアンカーボルトの設計
  - 1.8 津波防護施設の設計における評価対象断面の選定
    - 1.8.1 概要
    - 1.8.2 防波壁
      - (1) 防波壁（多重鋼管杭式擁壁）
      - (2) 防波壁（逆 T 擁壁）
      - (3) 防波壁（波返重力擁壁）
    - 1.8.3 防波壁通路防波扉
    - 1.8.4 1号取水槽流路縮小工
  - 1.9 強度計算における津波時及び重畳時の荷重作用状況
  - 1.10 耐震及び耐津波設計における許容限界
  - 1.11 強度計算に用いた規格・基準類の適用性
  - 1.12 津波に対する止水性能を有する施設の評価
2. 津波防護対象設備
  - 2.1 防波壁に関する補足説明
    - 2.1.1 防波壁（多重鋼管杭式擁壁）の耐震性についての計算書に関する補足説明
    - 2.1.2 防波壁（多重鋼管杭式擁壁）の強度計算書に関する補足説明
    - 2.1.3 防波壁（逆 T 擁壁）の耐震性についての計算書に関する補足説明
    - 2.1.4 防波壁（逆 T 擁壁）の強度計算書に関する補足説明
    - 2.1.5 防波壁（波返重力擁壁）の耐震性についての計算書に関する補足説明
    - 2.1.6 防波壁（波返重力擁壁）の強度計算書に関する補足説明
    - 2.1.7 防波壁の止水目地に関する補足説明
    - 2.1.8 漂流物対策工に関する補足説明
    - 2.1.9 防波壁の設計・施工に関する補足説明

- 2.2 防波壁通路防波扉に関する補足説明
- 2.3 1号機取水槽流路縮小工に関する補足説明
- 2.4 浸水防止設備に関する補足説明
- 2.5 津波監視設備に関する補足説明
- 2.6 漂流防止装置に関する補足説明
- 2.7 強度評価における鉛直方向荷重の考え方
- 2.8 津波の流入防止に係る津波バウンダリとなる設備の評価

(2) 防波壁（逆 T 擁壁）

防波壁（逆 T 擁壁）の平面配置図及び縦断面図を図 1.8.2-1 及び図 1.8.2-2 に、構造概要図を図 1.8.2-3 及び図 1.8.2-4 に示す。

防波壁（逆 T 擁壁）は、総延長は約 320m、天端高さは EL 15.0m であり、改良地盤を介して岩盤に支持される鉄筋コンクリート造の逆 T 擁壁による直接基礎構造で構成される。

逆 T 擁壁は、約 16m を 1 ブロックの標準とした壁体を連続して設置し、ブロック間の境界には止水性を保持するための止水目地を設置する。1 ブロックにおいて海側では 8 本、陸側では 4 本を標準にグラウンドアンカを設置している。

逆 T 擁壁は、全線にわたって同じ構造である。

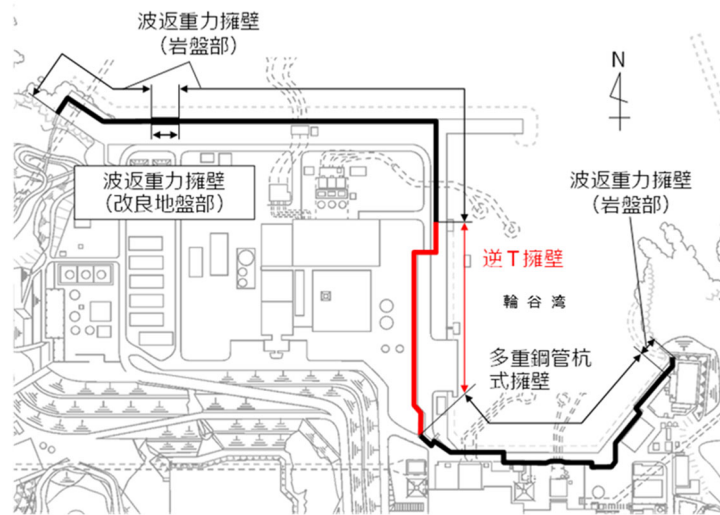


図 1.8.2-1 防波壁（逆 T 擁壁）の平面配置図

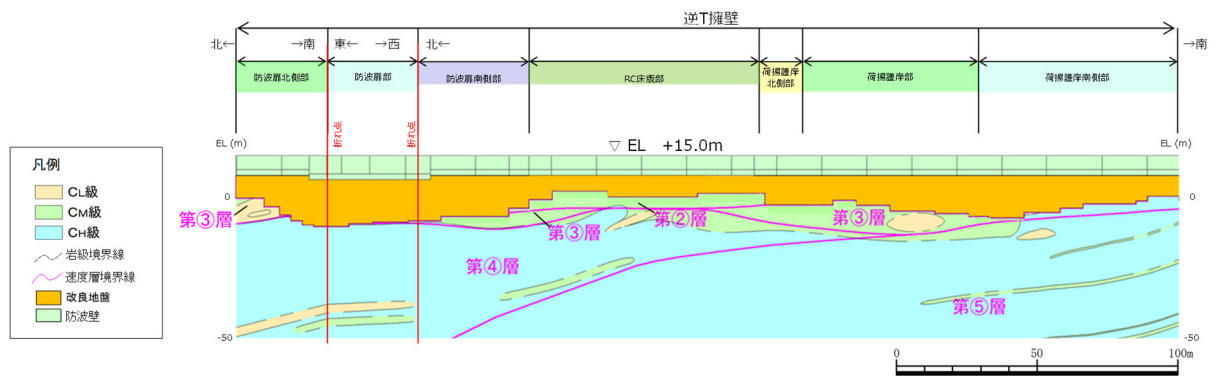
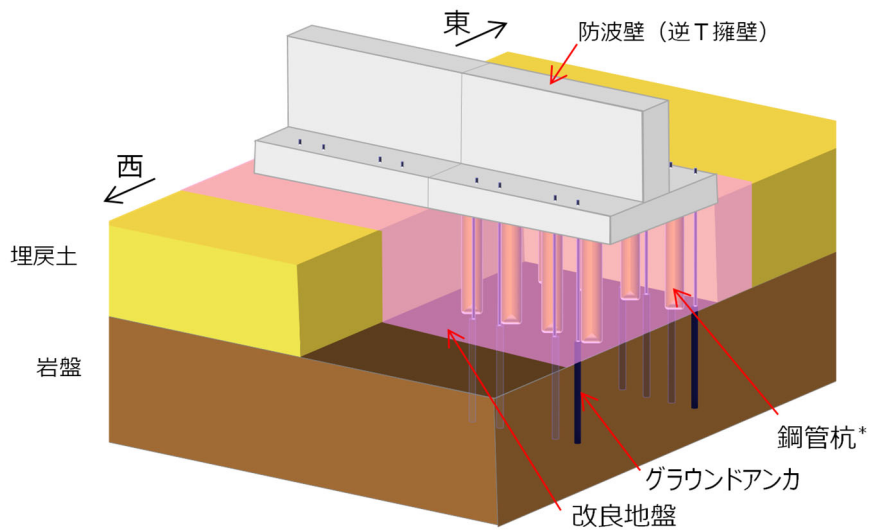
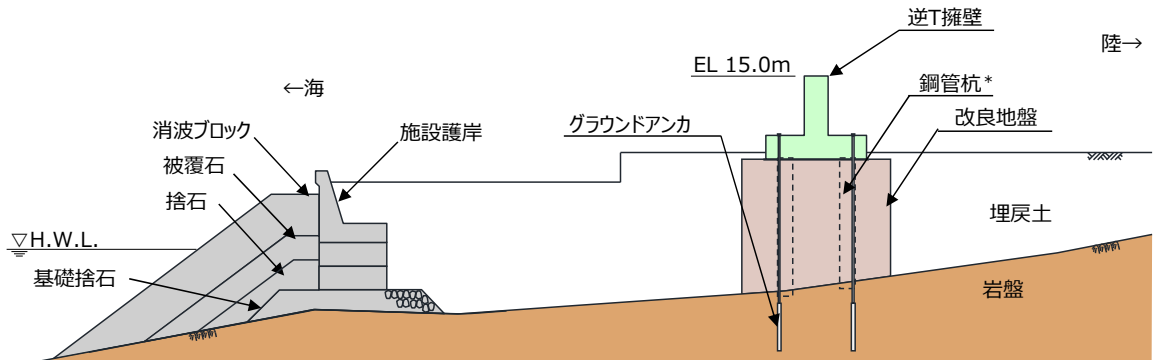


図 1.8.2-2 防波壁（逆 T 擁壁）の縦断面図



注記\*：防波壁（逆T擁壁）は鋼管杭の効果을期待せず耐震評価を行う。

図 1.8.2-3 防波壁（逆 T 擁壁）の構造概要図



注記\*：防波壁（逆 T 擁壁）は，鋼管杭の効果을期待せず耐震評価を行う。

図 1.8.2-4 防波壁（逆 T 擁壁）の構造概要図（断面図）

図 1.8.2-5～図 1.8.2-13 に防波壁（逆 T 擁壁）の平面配置図，縦断面図及び横断面図を示す。

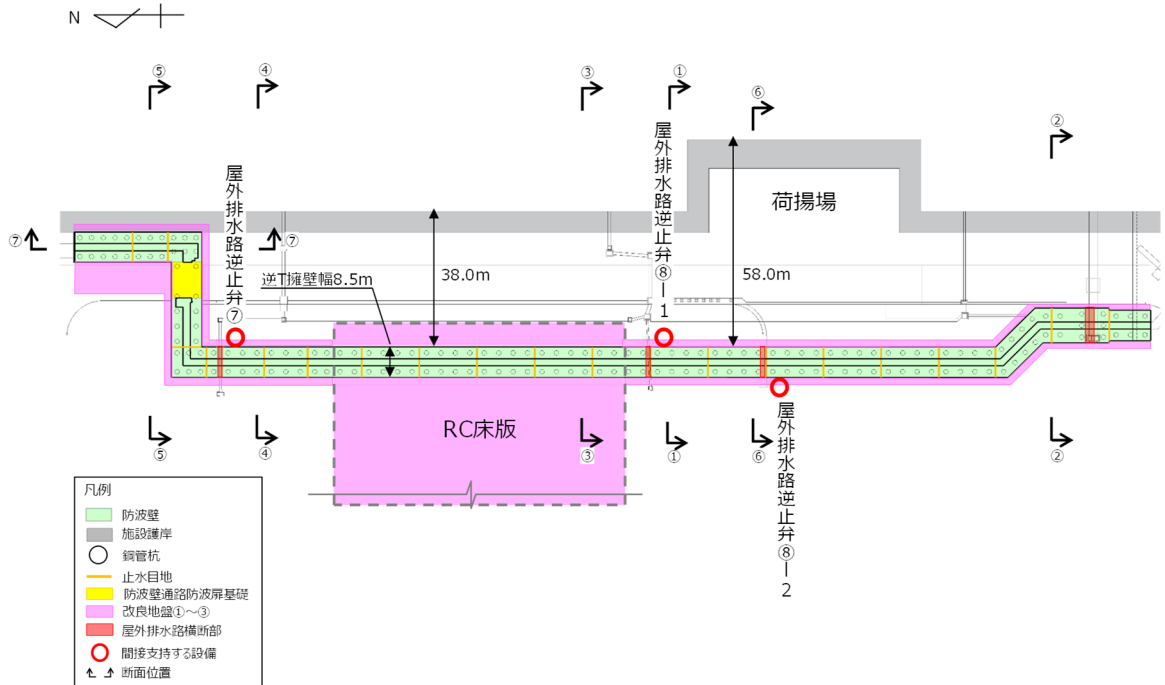


図 1.8.2-5 防波壁（逆 T 擁壁）平面配置図

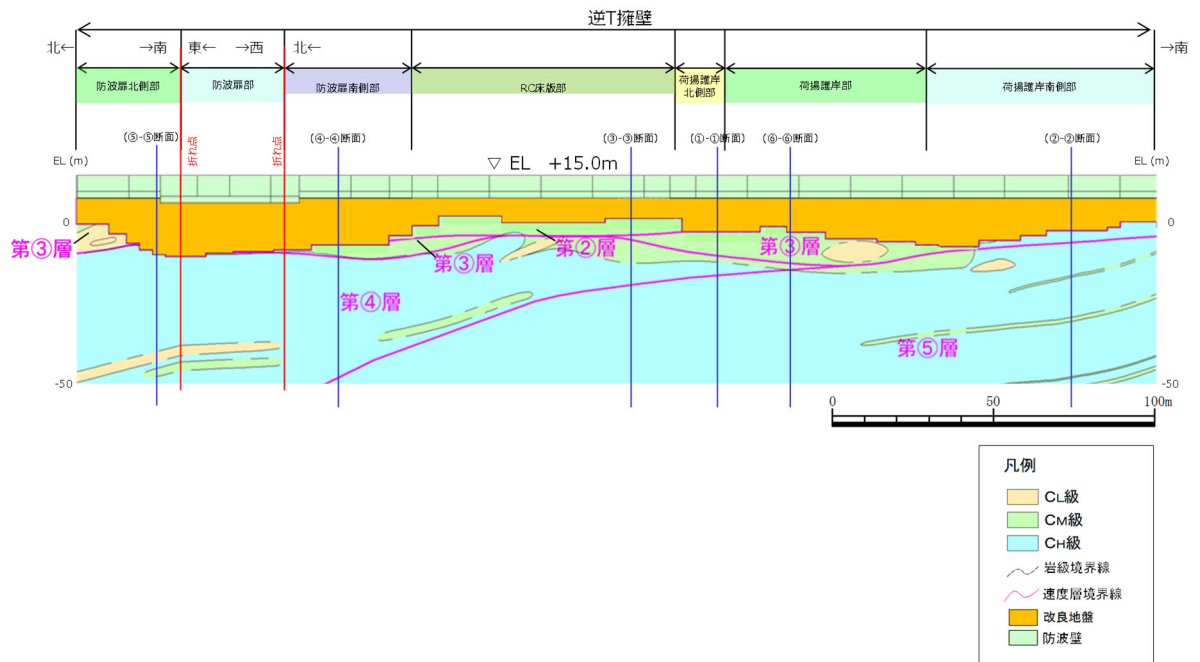


図 1.8.2-6 防波壁（逆 T 擁壁）縦断面図

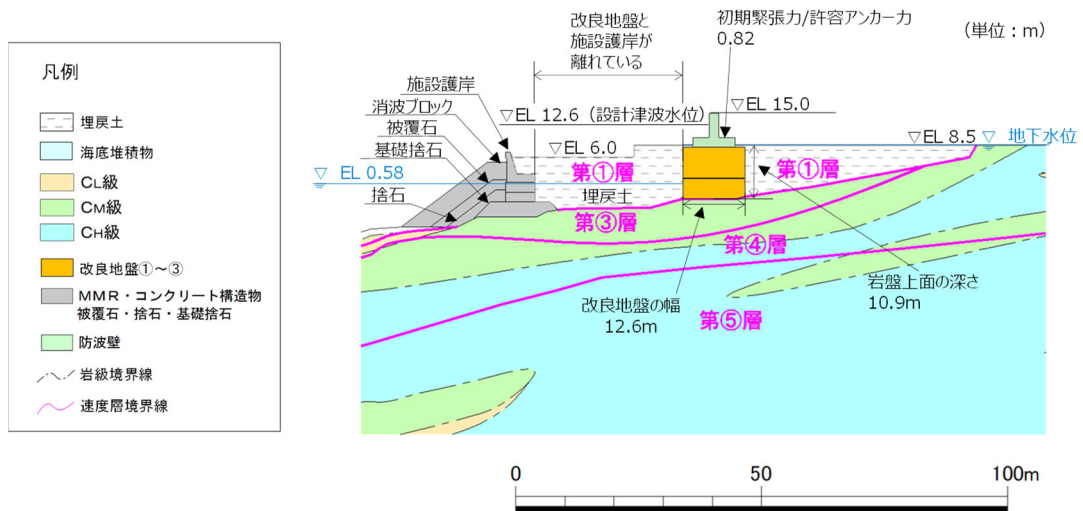


図 1.8.2-7 防波壁（逆T擁壁）の横断面図（①-①断面）

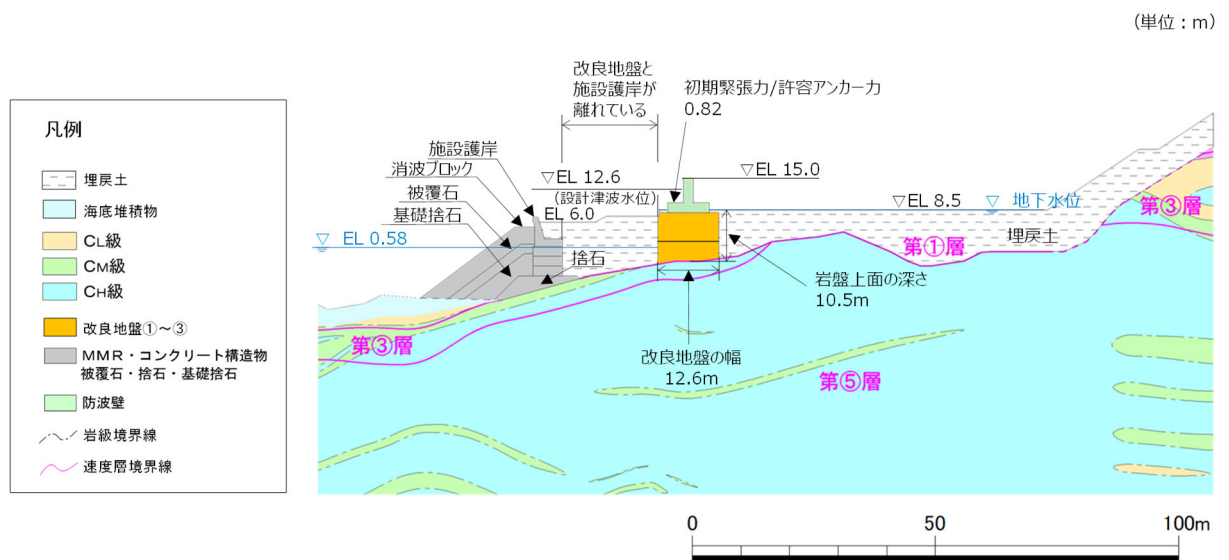


図 1.8.2-8 防波壁（逆T擁壁）の横断面図（②-②断面）

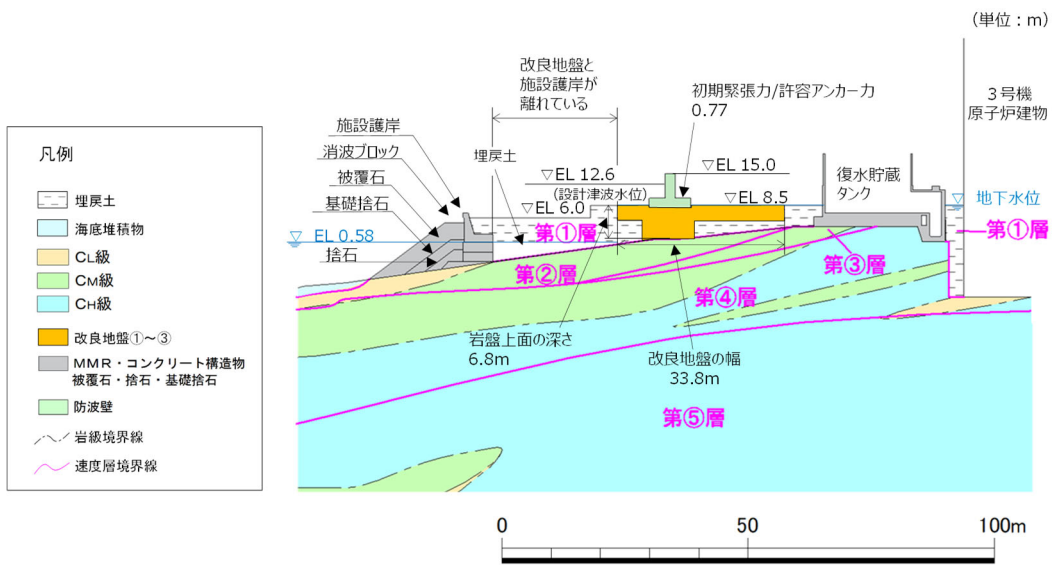


図 1.8.2-9 防波壁（逆T擁壁）の横断面図（③-③断面）

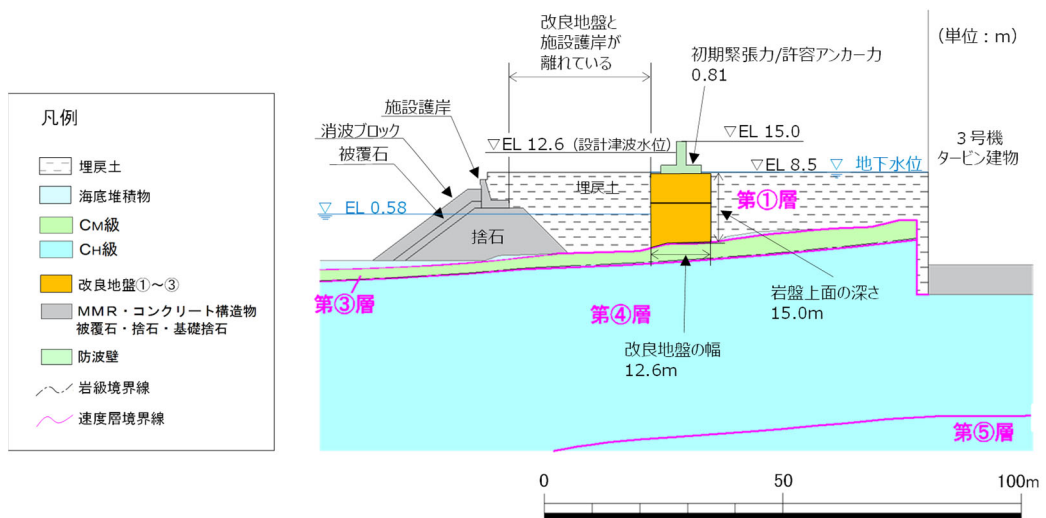


図 1.8.2-10 防波壁（逆T擁壁）の横断面図（④-④断面）



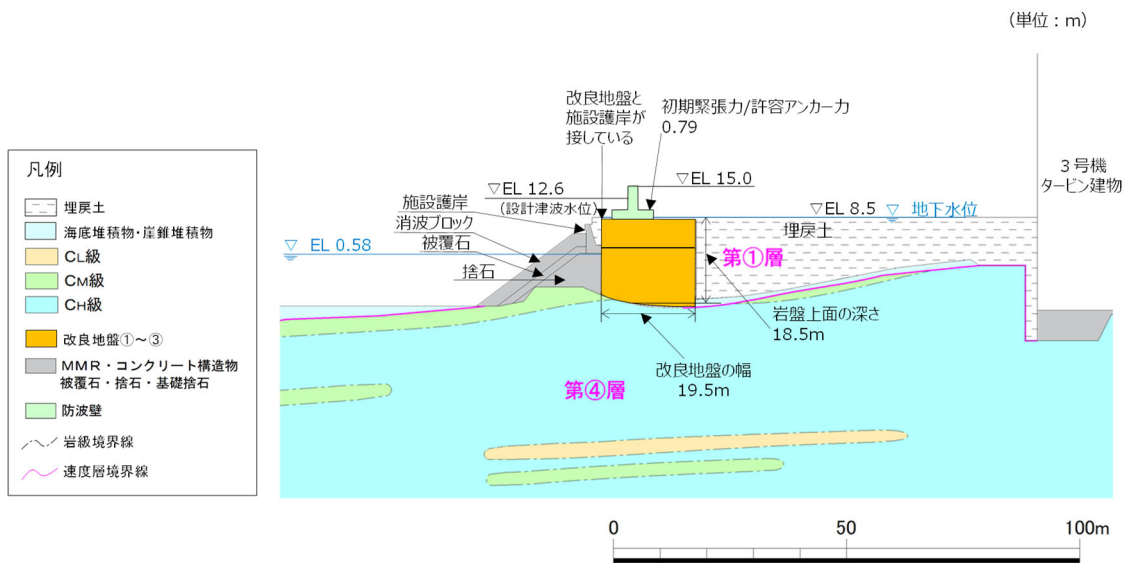


図 1.8.2-11 防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図（⑤-⑤断面）

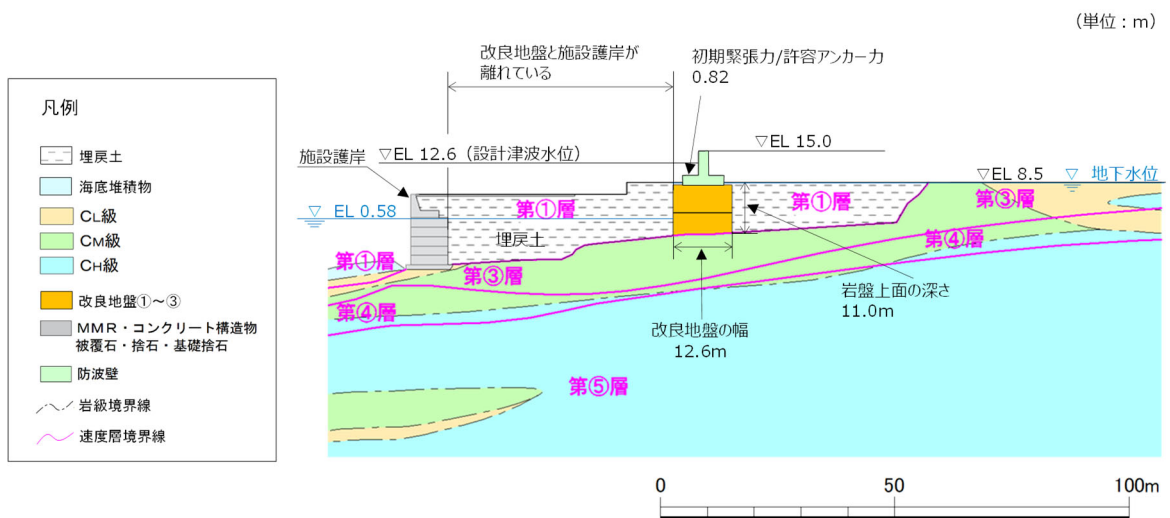


図 1.8.2-12 防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図（⑥-⑥断面）

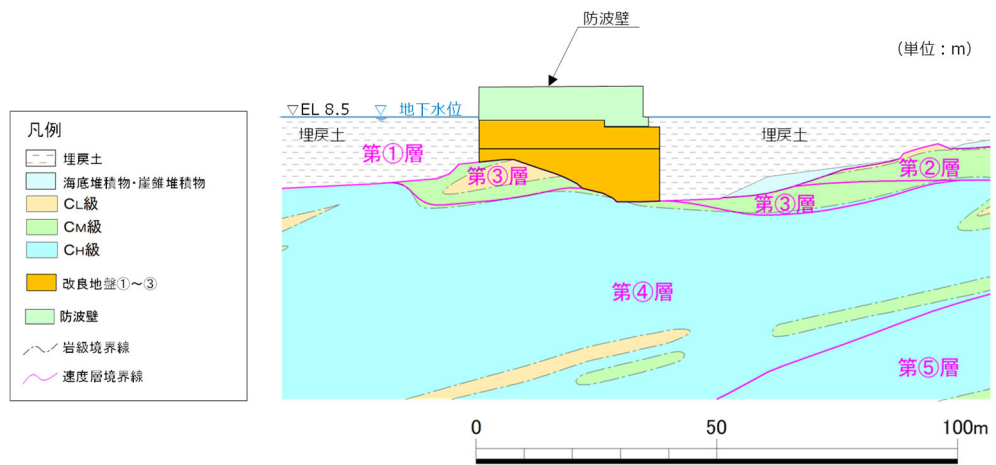


図 1.8.2-13 防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図（⑦-⑦断面）

a. 評価候補断面の整理

(a) 各部位の役割及び性能目標

防波壁（逆 T 擁壁）における施設及び地盤の役割を表 1.8.2-1 に、役割を踏まえた性能目標を表 1.8.2-2 に、性能目標を踏まえた照査項目及び許容限界を表 1.8.2-3 に示す。

表 1.8.2-1 防波壁（逆 T 擁壁）の各部位の役割

	部位の名称	地震時の役割	津波時の役割
施設 *1	逆 T 擁壁	・止水目地を支持する。	・止水目地を支持するとともに、遮水性を保持する。
	止水目地	・逆 T 擁壁間の変形に追従する。	・逆 T 擁壁間の変形に追従し、遮水性を保持する。
	グラウンドアンカ	・逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒を抑止する。	・逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒を抑止する。
	鋼管杭	・役割に期待しない。	・役割に期待しない。
地盤	改良地盤*2	・逆 T 擁壁を支持する。 ・基礎地盤のすべり安定性に寄与する。	・逆 T 擁壁を支持する。 ・難透水性を保持する。
	岩盤	・逆 T 擁壁を支持する。 ・基礎地盤のすべり安定性に寄与する。	・逆 T 擁壁を支持する。
	埋戻土	・役割に期待しない（解析モデルに取り込み、防波壁への相互作用を考慮する）。	・防波壁より陸側については、津波荷重に対して地盤反力として寄与する。
	施設護岸、基礎捨石	・役割に期待しない（解析モデルに取り込み、防波壁への波及的影響を考慮する）。	・役割に期待しない。
	被覆石、捨石		
消波ブロック	・役割に期待しない。	・役割に期待しない。	

注記\*1：漂流物対策工については、追而とする。

\*2：RC 床版については、保守的に改良地盤として扱う。

表 1.8.2-2 防波壁（逆 T 擁壁）の各部位の性能目標

部位		性能目標			
		鉛直支持	すべり安定性	耐震性	耐津波性 (透水性, 難透水性)
施設 *1	逆 T 擁壁	—	—	構造部材の健全性を保持するために、逆 T 擁壁がおおむね弾性状態にとどまること。	止水目地の支持機能を喪失して逆 T 擁壁間から有意な漏えいを生じないために、逆 T 擁壁がおおむね弾性状態にとどまること。
	止水目地			逆 T 擁壁間から有意な漏えいを生じないために、止水目地の変形性能を保持すること。	逆 T 擁壁から有意な漏えいを生じないために、止水目地の変形・遮水性能を保持すること。
	グラウンドアンカ			逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒抑止のために設計アンカー力を確保すること。	逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒抑止のために設計アンカー力を確保すること。
地盤	改良地盤*2	逆 T 擁壁を鉛直支持するため、十分な支持力を保持すること。	基礎地盤のすべり安定性を確保するため、十分なすべり安全性を保持すること。	—	地盤中からの回り込みによる流入を防止（難透水性を保持）するため改良地盤がすべり破壊しないこと（内的安定を保持）。
	岩盤				—

注記\*1：漂流物対策工については、追而とする。

\*2：RC 床版については、保守的に改良地盤として扱う。

表 1.8.2-3 防波壁(逆 T 擁壁)の各部位の照査項目及び許容限界  
(上段：照査項目，下段：許容限界)

部位		照査項目と許容限界			
		鉛直支持	すべり安定性	耐震性	耐津波性 (透水性，難透水性)
施設 *1	逆 T 擁壁	—	—	曲げ，せん断，アンカーによる支圧， 隣接する躯体同士の支圧	
				(短期許容応力度以下)	
	止水目地			変形	変形，水圧
				(許容変形量 以下)	(許容変形量， 許容水圧以下)
	グラウンド ドアンカ		引張		
			(許容アンカー力以下) *4		
地盤	改良 地盤 *2	支持力	すべり安全率 (基礎地盤)	すべり安全率	
				(1.2 以上)	
	岩盤	(極限支持 力度以下) *3	(1.5 以上)	—	

注記 \*1：漂流物対策工については，追而とする。

\*2：RC 床版については，保守的に改良地盤として扱う。

\*3：妥当な安全余裕を考慮する。

\*4：グラウンドアンカを考慮した滑動・転倒に対する照査も実施する。

(b) 評価候補断面の整理

(a)で整理した各部位の性能目標を踏まえ、評価候補断面整理の観点を整理した結果を表 1.8.2-4 に示す。観点の整理に当たっては、表 1.8.2-3 に示す照査項目である、曲げ、せん断、アンカーによる支圧、隣接する躯体同士の支圧、変形、水圧、アンカー力、すべり安全率及び支持力に影響を及ぼす要素として、地震時応答加速度、津波時荷重及び地盤変位に関係するかを判断項目とする。

また、改良地盤⑧及び鋼管杭の影響検討断面の選定については、1.8.2(2)c. に示す。

各観点の詳細は以下のとおり。

【構造的特徴】

- ・防波壁（逆 T 擁壁）の構造的特徴については、図 1.8.2-1～図 1.8.2-4 に示すとおり、全線に渡って一定の構造であるため、選定上の観点としない。

【周辺地盤状況】

- ・岩盤上面の深さについては、図 1.8.2-6～図 1.8.2-12 に示すとおり、岩盤上面の深さが深いほど、改良地盤及び埋戻土の厚さが厚くなり、地震時応答加速度及び地盤変位が大きくなると考えられるため、選定上の観点とする。
- ・逆 T 擁壁を支持する改良地盤の幅については、改良地盤の幅が狭いほど、地震時応答加速度及び地盤変位が大きくなると考えられるため、選定上の観点とする。
- ・岩盤上面の傾斜については、一様に東方の海側に  $5\sim 10^\circ$  傾斜しており、大きな差異は認められないため、選定上の観点としない。
- ・逆 T 擁壁背面の埋戻土については、液状化により傾斜方向（海側）に流動化し、逆 T 擁壁の地震応答に影響すると考えられるが、その土圧は岩盤の上面深さに依存すると考えられることから、岩盤上面の深さの影響に包含されるため、選定上の観点としない。
- ・改良地盤と施設護岸との位置関係については、改良地盤と施設護岸との間に分布する埋戻土は液状化により傾斜方向（海側）に流動するため、改良地盤と施設護岸が離れている場合、逆 T 擁壁への影響は小さくなると考えられる。改良地盤と施設護岸が近接している場合、施設護岸が液状化しないため、改良地盤及び逆 T 擁壁の地震時応答加速度等に影響すると考えられることから、選定上の観点とする。

- ・逆 T 擁壁前面の施設護岸等については、施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石は役割に期待していないが、これらが防波壁の変形を抑制することが想定されることから、施設護岸が損傷したことを想定し、念のためこれらが無い場合の影響検討を実施する。
- ・岩級については、地震時応答加速度及び地盤変位への影響がないことから、選定上の観点としない。

#### 【許容アンカー力に占める初期緊張力の割合】

- ・グラウンドアンカの照査に用いる発生アンカー力は、初期緊張力（設計アンカー力）に地震時緊張力増分を加えたものであり、大半を初期緊張力が占め、地震時増分は微小と考えられることから、許容アンカー力に占める初期緊張力の割合は、照査値と同等になる。

初期緊張力については、耐津波評価において、逆 T 擁壁が転倒しないよう、エリア毎に異なる値を設定している。

一方で、初期緊張力に応じてアンカー体長を変更することで、許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が 0.8 程度となるように設計している。（図 1.8.2-14 参照）

以上のことから、グラウンドアンカの照査値は、どの地点でも同等になると考えられるが、上記割合に若干の差異があること、照査値が 0.8 以上と厳しくなると想定されることから、選定上の観点とする。

#### 【地下水位】

- ・地下水位については、図 1.8.2-6～図 1.8.2-12 に示すとおり、設計用地下水位は防波壁より陸側は EL 8.5m、防波壁より海側は EL 0.58m で一定であるため、選定上の観点としない。

#### 【隣接構造物の有無】

- ・隣接構造物の有無については、図 1.8.2-6～図 1.8.2-12 に示すとおり、隣接構造物は無いため、選定上の観点としない。

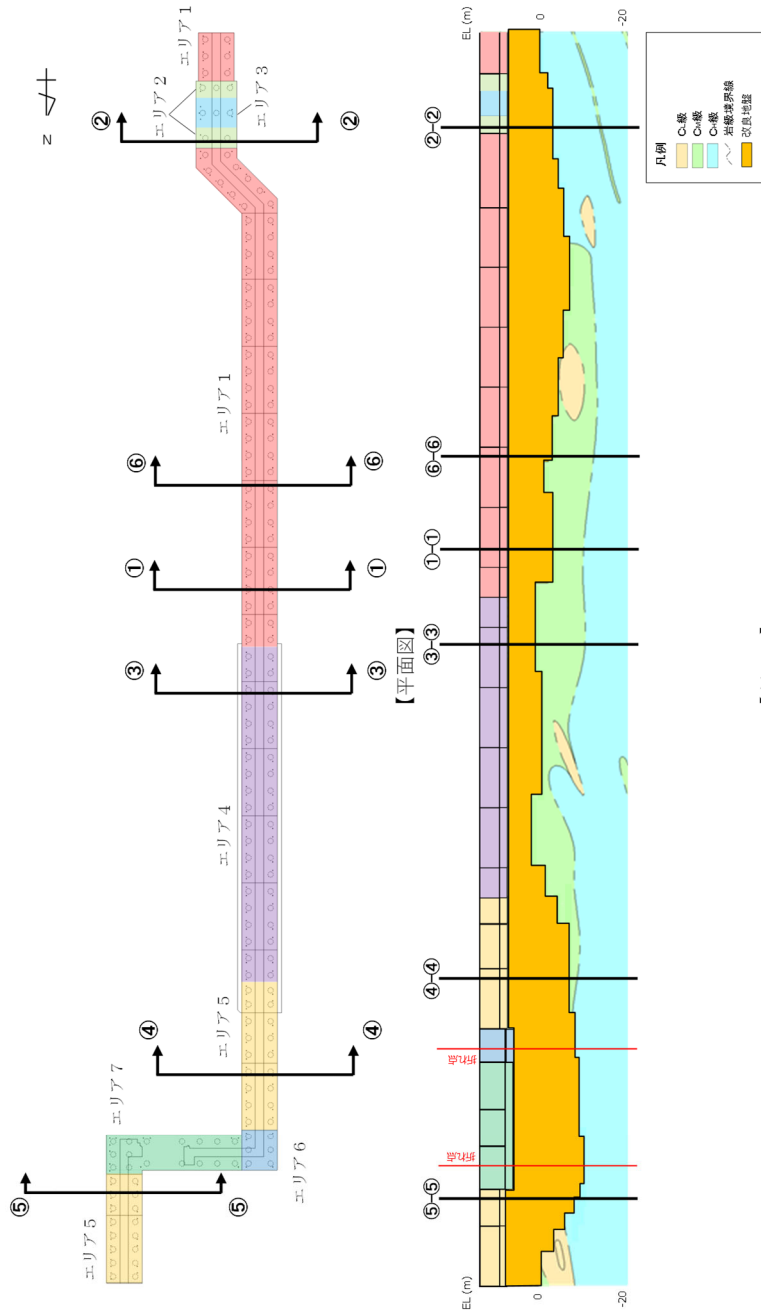
#### 【間接支持される機器・配管系の有無】

- ・間接支持される機器・配管系の有無については、図 1.8.2-5 に示すとおり、屋外排水路逆止弁を支持するが、屋外排水路逆止弁の耐震評価に用いる加速度応答抽出断面の選定については、「補足-027-08 浸水防護施設の耐震性に関する説明書の補足説明資料」のうち「屋外排水路逆止弁に関する補足説明」に示す。

**【入力津波】**

- ・入力津波については，図 1.8.2-6～図 1.8.2-12 に示すとおり，逆 T 擁壁における設計津波水位は EL 12.6m で一定であるため，選定上の観点としない。





【断面図】

アンカー種別	前孔径 (mm)	PC鋼φ (mm)	PC鋼本数 (本)	テンドン自由長* (mm)	アンカー体長 (テンドン拘束長) (mm)	テンドンの 極限引張り力 (kN)	テンドンの 降伏引張り力 (kN)	テンドンの 見かけの周長 (mm)	設計アンカー力 (kN)	許容アンカー力 (kN)	海側のグラウンド アンカー設置間隔 (mm)	設計アンカー力/ 許容アンカー力
エリア1	135	15.2	11	8000~18000	8500	2800	2400	138.4	1440	1764	2000	0.82
エリア2				11000~13500	10000				1700	2076	1650	0.82
エリア3				12500~13000	9000				1500	1868	1535	0.80
エリア4				7000~11500	8500				2800	1765	2000	0.77
エリア5				10000~20500	7000				1170	1453	1625(北側) 2000(南側)	0.81
エリア6				17000~18500	9500				1550	1972	1650	0.79
エリア7				17500~20000	10000				1650	2076	1650	0.79

注記\*：テンドン自由頂部はアンカー一体が岩盤に確実に定着するよう岩盤上面深さに合わせて長さを調整している。

図 1.8.2-14 逆 T 擁壁に設置されたグラウンドアンカーの諸元

表 1.8.2-4 評価候補断面の整理における観点（防波壁（逆 T 擁壁））

評価候補断面整理上の観点		評価対象断面選定の方針	観点*
構造的特徴		<ul style="list-style-type: none"> <li>全線に渡って一定の構造であるため、選定上の観点としない。</li> <li>逆 T 擁壁直下の鋼管杭は、支持地盤への根入れが浅く、鋼管杭の効果を期待せずに耐震評価を行うが、防波壁（逆 T 擁壁）のフーチングへの影響を確認するため、鋼管杭をモデル化した場合の影響確認を行う。</li> </ul>	△
周辺地盤状況	岩盤上面の深さ	・縦断方向に深さが変化し、岩盤上面の深さが深いほど、地震時応答加速度及び地盤変位が大きくなると考えられるため、選定上の観点とする。	○
	改良地盤の幅	・縦断方向に幅が変化し、改良地盤の幅が狭いほど、地震時応答加速度及び地盤変位が大きくなると考えられるため、選定上の観点とする。	○
	岩盤上面の傾斜	・岩盤上面の傾斜については、一様に東方の海側に 5~10° 傾斜しており、大きな差異は認められないため、選定上の観点としない。	—
	逆 T 擁壁周辺の埋戻土	・液状化により傾斜方向（海側）に流動化し、逆 T 擁壁の地震応答に影響すると考えられるが、その土圧は岩盤の上面深さに依存すると考えられることから、岩盤上面の深さの影響に包含されるため、選定上の観点としない。	—
	改良地盤と施設護岸との位置関係	・改良地盤と施設護岸との間に分布する埋戻土は液状化により傾斜方向（海側）に流動するため、改良地盤と施設護岸が離れている場合、逆 T 擁壁への影響は小さくなると考えられる。改良地盤と施設護岸が近接している場合、施設護岸が液状化しないため、改良地盤及び逆 T 擁壁の地震時応答加速度等に影響すると考えられることから、選定上の観点とする。	○
	逆 T 擁壁前面の施設護岸等	・逆 T 擁壁前面の施設護岸等については、施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石は役割に期待していないが、これらが防波壁の変形を抑制することが想定されることから、施設護岸が損傷したことを想定し、念のためこれらが無い場合の影響検討を実施する。	△
	岩級	・地震時応答加速度及び地盤変位に影響しないことから、選定上の観点としない。	—
許容アンカー力に占める初期緊張力の割合		<ul style="list-style-type: none"> <li>発生アンカー力の大半を初期緊張力（設計アンカー力）が占める。耐津波評価において、各断面で逆 T 擁壁が転倒しないよう、初期緊張力を設定している。許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が 0.8 倍となるようにアンカー体長を設定している。（図 1.8.2-14 参照）</li> <li>しかしながら、全体の照査項目のうちグラウンドアンカの照査値が最も厳しいことから、選定上の観点とする。</li> </ul>	○

評価候補断面整理上の観点	評価対象断面選定の方針	観点*
地下水位	<ul style="list-style-type: none"> <li>・逆 T 擁壁における設計用地下水水位は、防波壁より陸側は EL 8.5m、防波壁より海側は EL 0.58m で一定であるため、選定上の観点としない。</li> </ul>	—
隣接構造物の有無	<ul style="list-style-type: none"> <li>・隣接構造物は無いため、選定上の観点としない。</li> <li>・逆 T 擁壁には、液状化抑制を目的とした自主的な裕度向上対策として、流動化処理工法による改良地盤⑧が隣接している。改良地盤⑧は、埋戻土よりも剛性が高いため、大きな影響はないと考えられるが、念のため、改良地盤⑧をモデル化した場合の影響確認を行う。</li> </ul>	△
間接支持される機器・配管系の有無	<ul style="list-style-type: none"> <li>・屋外排水路逆止弁を支持する。屋外排水路逆止弁の耐震評価に用いる加速度応答抽出断面の選定については、「補足-027-08 浸水防護施設の耐震性に関する説明書の補足説明資料」のうち「屋外排水路逆止弁に関する補足説明」に示す。</li> </ul>	—
入力津波	<ul style="list-style-type: none"> <li>・逆 T 擁壁における設計津波水位は EL 12.6m で一定であるため、選定上の観点としない。</li> </ul>	—

注記\*：○；観点とする。—；観点としない。△；影響確認を行う。

b. 評価対象断面の選定

1.8.2(2)a. で示した評価候補断面の整理を踏まえ、評価対象断面を選定する。評価対象断面の選定には、図 1.8.2-6～図 1.8.2-12 に示す防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図及び縦断面図を用いる。

評価対象断面選定結果を表 1.8.2-5 に、評価対象断面の平面位置図を図 1.8.2-15 に、縦断位置図を図 1.8.2-16 に示す。

①-①断面は、逆 T 擁壁直下の改良地盤の幅が 12.6m と狭く、許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が 0.82 と最も高いことから、施設・地盤の健全性評価及び基礎地盤の支持性能評価の評価対象断面に選定した。

④-④断面は、岩盤上面の深さが 15.0m と深いこと、逆 T 擁壁直下の改良地盤の幅が 12.6m と狭いこと、許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が 0.81 と高いことから、施設・地盤の健全性評価及び基礎地盤の支持性能評価の評価対象断面に選定した。

⑤-⑤断面は、逆 T 擁壁直下の改良地盤の幅は 19.5m と広いが、岩盤上面の深さは 18.5m と最も深く、改良地盤と施設護岸が接していることから、施設・地盤の健全性評価及び基礎地盤の支持性能評価の評価対象断面に選定した。

また、⑤-⑤断面は、①-①断面に比べ、改良地盤の幅が広いが、岩盤上面の深さが最も深く、改良地盤と施設護岸が接していることから、止水目地の変形量が大きいと考えられるため、横断方向の変形性評価の評価対象断面に選定した。

⑦-⑦断面は、⑤-⑤断面に直交する縦断方向の断面であり、⑤-⑤断面位置における縦断方向の止水目地の変形量及び隣接する躯体同士の支圧力を求めるため、縦断方向の変形性評価及び隣接する躯体同士の支圧評価の評価対象断面に選定した。

表 1.8.2-5 評価対象断面選定結果（防波壁（逆 T 擁壁））

検討断面	評価対象断面整理上の観点				該当する 観点	選定理由
	(1) 岩盤上面の深さ (m)	(2) 改良地盤の幅 (m)	(3) 改良地盤と施設護 岸との位置関係	(4) 初期緊張力 /許容アンカー力		
①-①断面	10.9	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.82	(2), (4)	・改良地盤の幅が狭いこと、許容アン カー力に占める初期緊張力の割合が最 も高いことから、評価対象断面に選定 する。
②-②断面	10.5	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.82	(2), (4)	・①-①断面に比べ、改良地盤の幅及び 許容アンカー力に占める初期緊張力の 割合が同等であり、岩盤上面の深さが 浅いことから、①-①断面に代表させ る。
③-③断面	6.8	33.8	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.77	—	・⑤-⑤断面に比べ、岩盤上面の深さが 浅いこと、改良地盤の幅が広いこと、 改良地盤と施設護岸が離れていること、 許容アンカー力に占める初期緊張力の 割合が低いことから、⑤-⑤断面に代 表させる。
④-④断面	15.0	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.81	(1), (2), (4)	・岩盤上面深さが深いこと、改良地盤の 幅が狭いこと、許容アンカー力に占め る初期緊張力の割合が高いことから、 評価対象断面に選定する。
⑤-⑤断面	18.5	19.5	改良地盤と施設護岸が 接している	0.79	(1), (3)	・岩盤上面の深さが最も深いこと、改良 地盤と施設護岸が接していることから、 評価対象断面に選定する。
⑥-⑥断面	11.0	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.82	(2), (4)	・①-①断面に比べ、岩盤上面の深さが 深い、改良地盤の幅及び許容アン カー力に占める初期緊張力の割合が同 等であり、地表面最大加速度が小さい こと（表1.8.2-8参照）から、①-① 断面に代表させる。

□ : 番号を付与する観点

□ : 観点の番号付与が多い

□ : 選定した評価対象断面

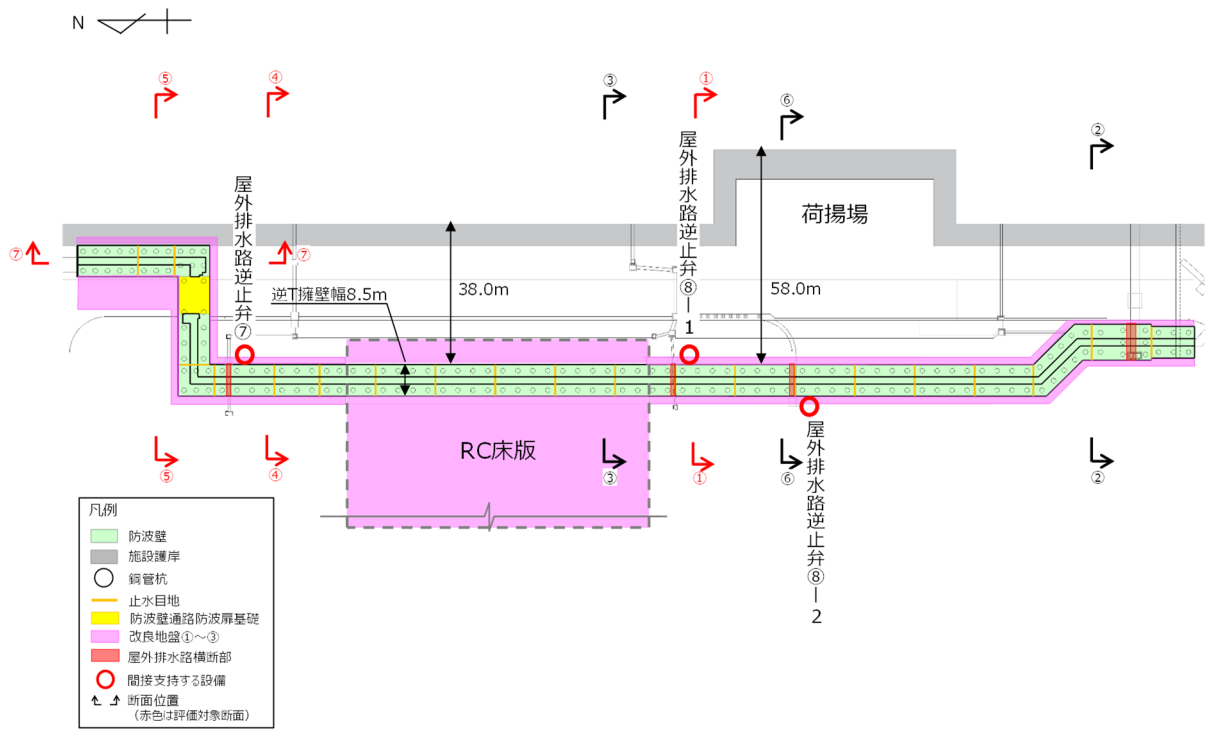


図 1.8.2-15 評価対象断面の平面位置図

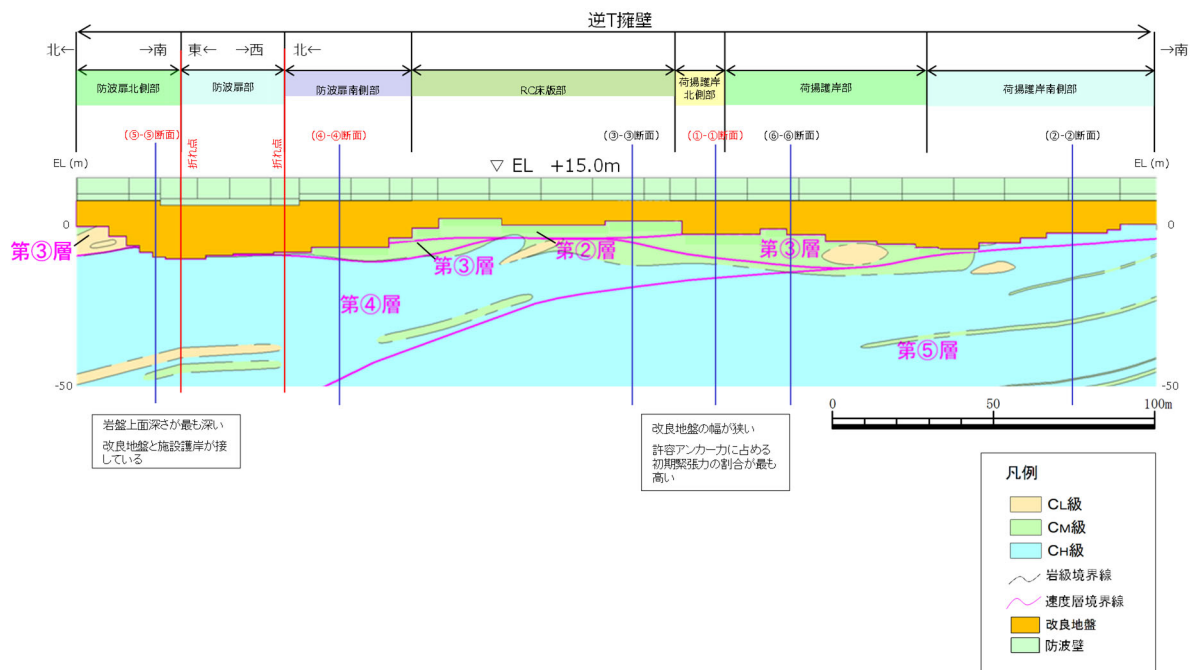


図 1.8.2-16 評価対象断面の縦断位置図

1次元地震応答解析の解析結果を表 1.8.2-6 に示す。

実施位置図を図 1.8.2-17 に、解析モデル図を図 1.8.2-18 に示す。

表 1.8.2-6 1次元地震応答解析結果

断面	1次元地震応答解析による 地表面最大加速度 S <sub>s</sub> -D (水平) (cm/s <sup>2</sup> )
①-①断面	1232
⑥-⑥断面	1218

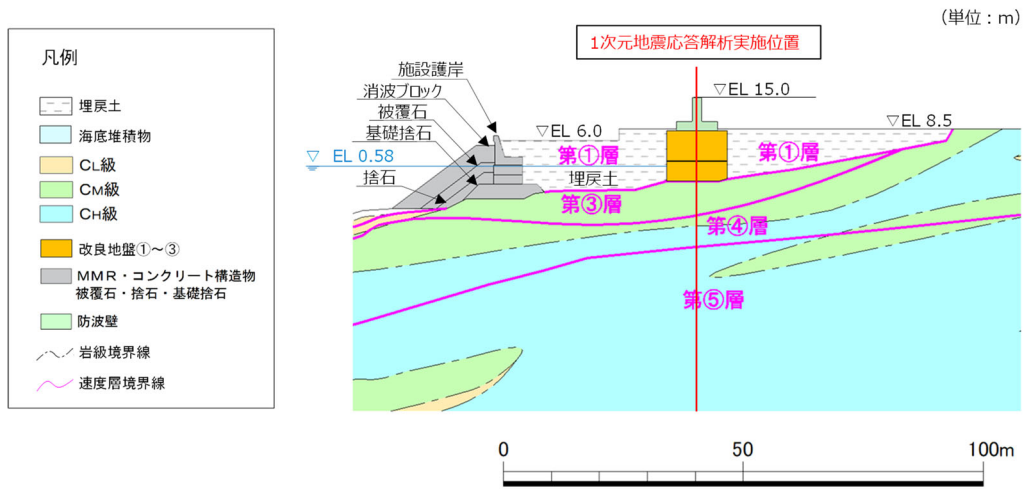


図 1.8.2-17(1) 1次元地震応答解析実施位置 (①-①断面)

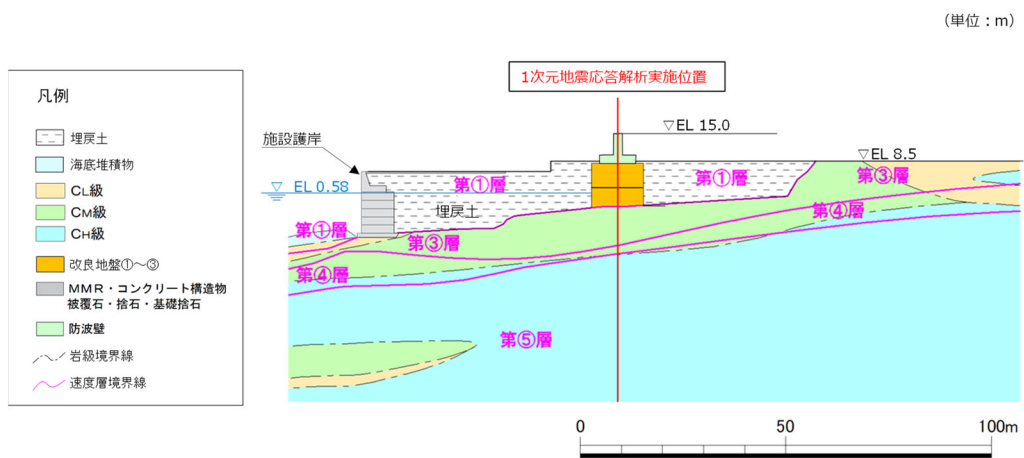


図 1.8.2-17(2) 1次元地震応答解析実施位置 (⑥-⑥断面)

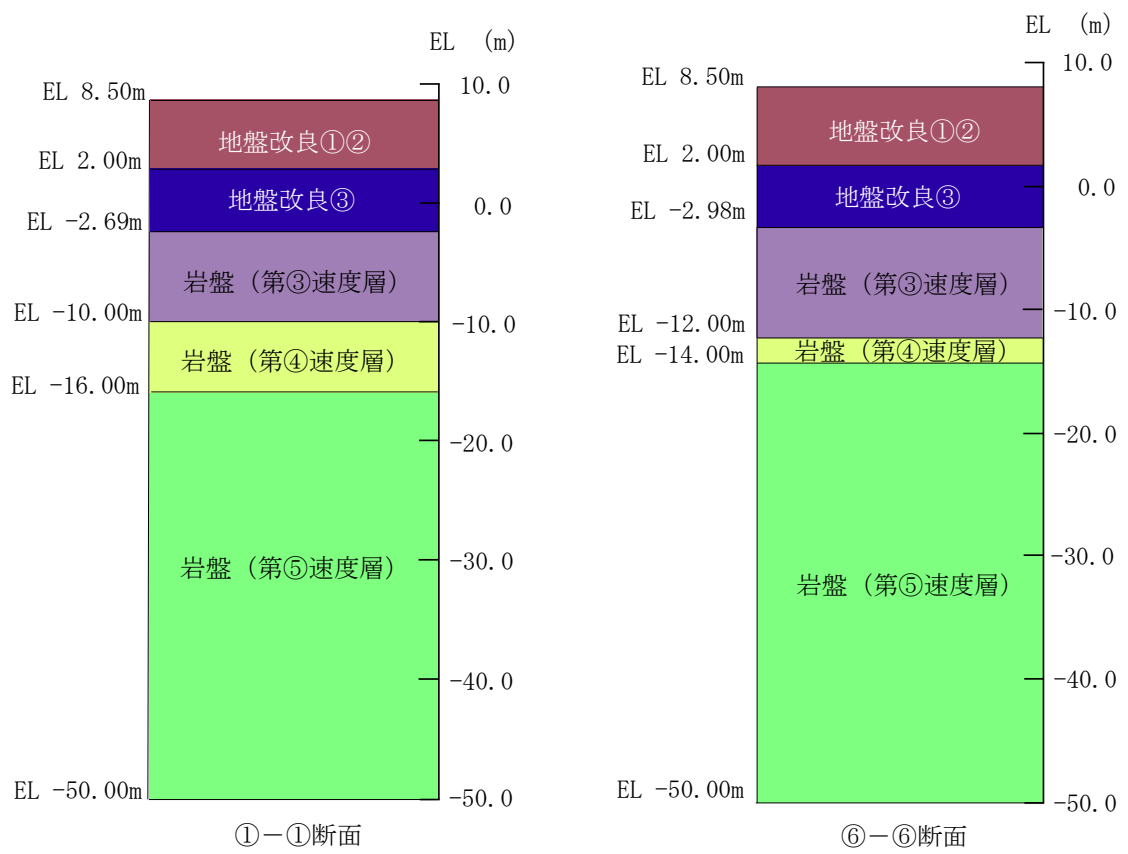


図 1.8.2-18 1次元地震応答解析モデル



c. 影響確認断面の選定

(a) 防波壁前面の施設護岸の損傷による影響確認断面の選定

防波壁（逆T擁壁）前面に位置する施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石は役割に期待していないが、これらが防波壁の変形を抑制することが想定されることから、施設護岸が損傷したことを想定し、念のためこれらが無い場合の影響検討を行う。

影響検討を行う断面は、逆T擁壁の耐震評価の厳しい⑤-⑤断面とする。影響確認断面位置を図1.8.2-19に、地質断面図を図1.8.2-20に示す。

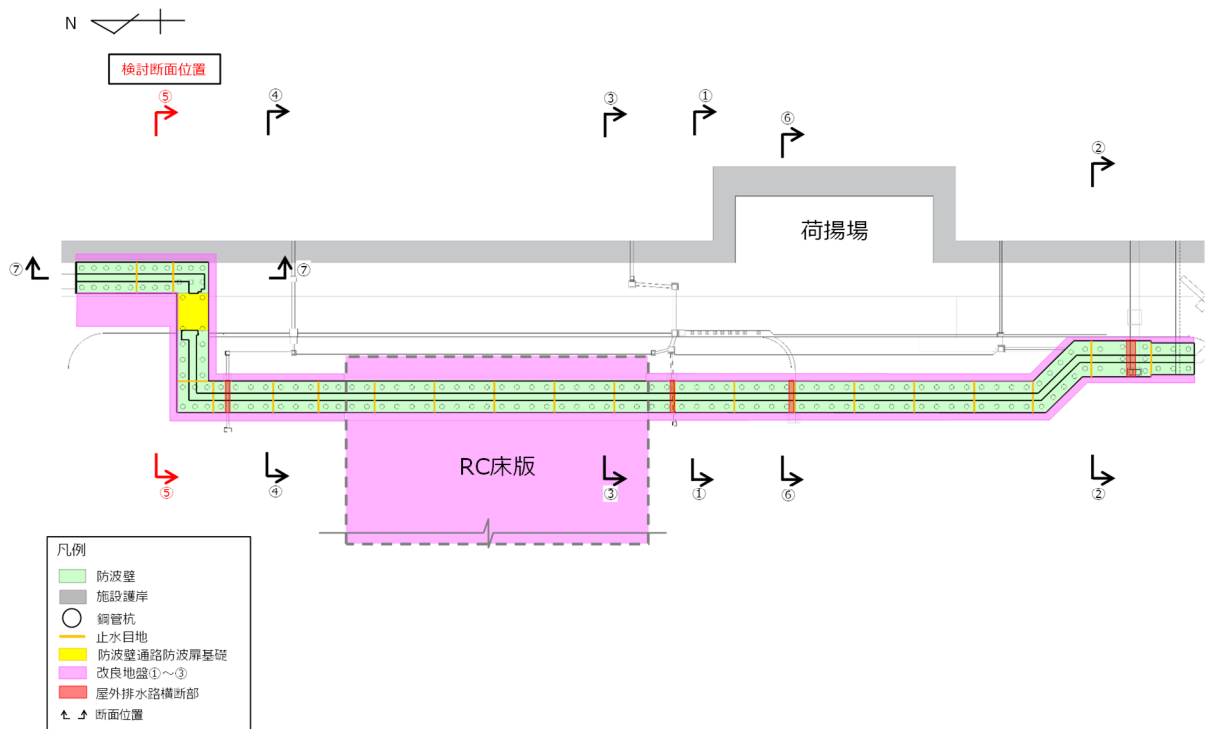


図 1.8.2-19 影響検討断面位置図

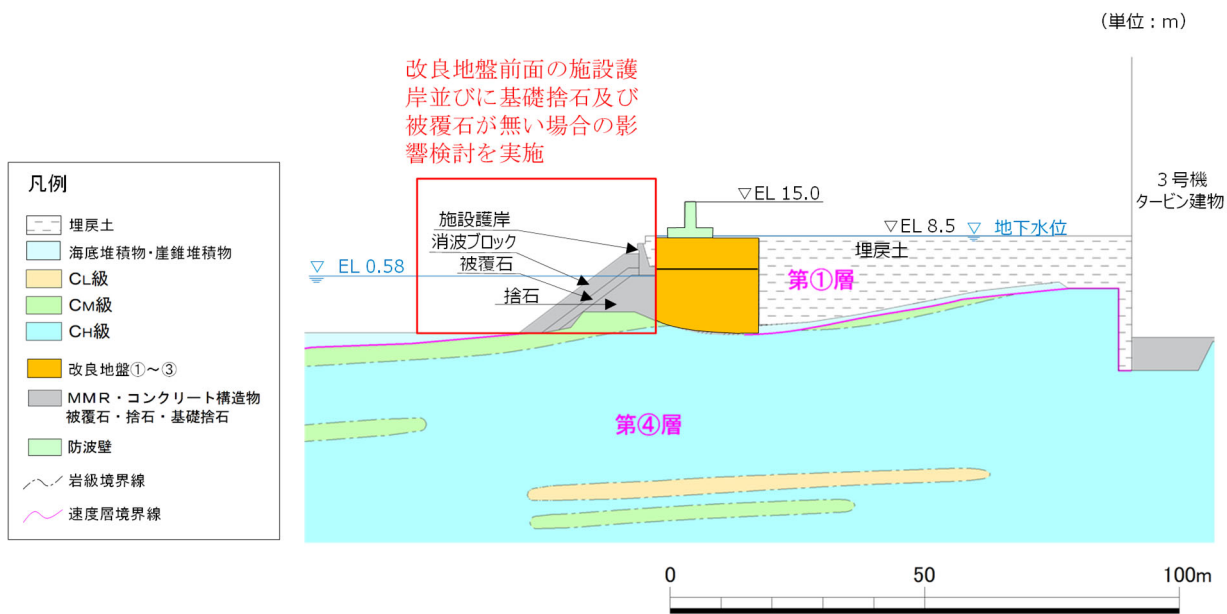


図 1.8.2-20 影響検討断面の地質断面図 (⑤-⑤断面)

(b) 鋼管杭による影響確認断面の選定

防波壁（逆 T 擁壁）直下には、鋼管杭が位置している（図 1.8.2-21）。

鋼管杭は支持地盤への根入れが浅く、鋼管杭に役割を期待しない方針とするが、防波壁（逆 T 擁壁）のフーチングへの影響を確認するため、逆 T 擁壁の耐震評価の厳しい⑤-⑤断面において、鋼管杭をモデル化した場合の影響確認を行う。影響確認断面位置を図 1.8.2-22 に、地質断面図を図 1.8.2-23 に示す。

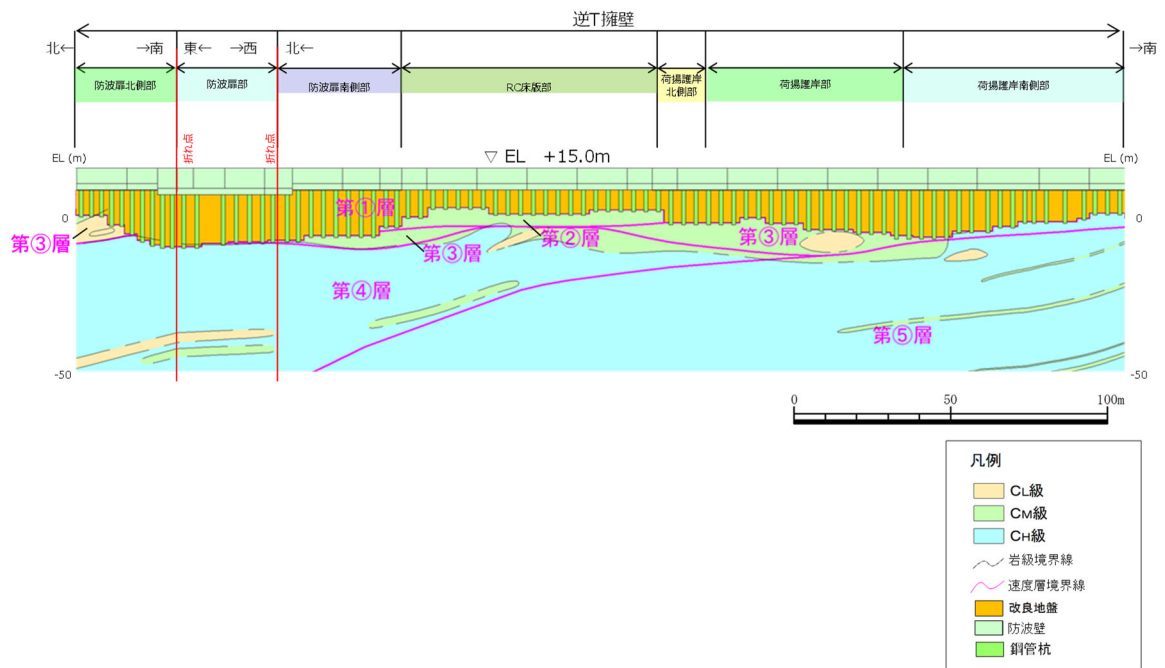


図 1.8.2-21 鋼管杭の位置図

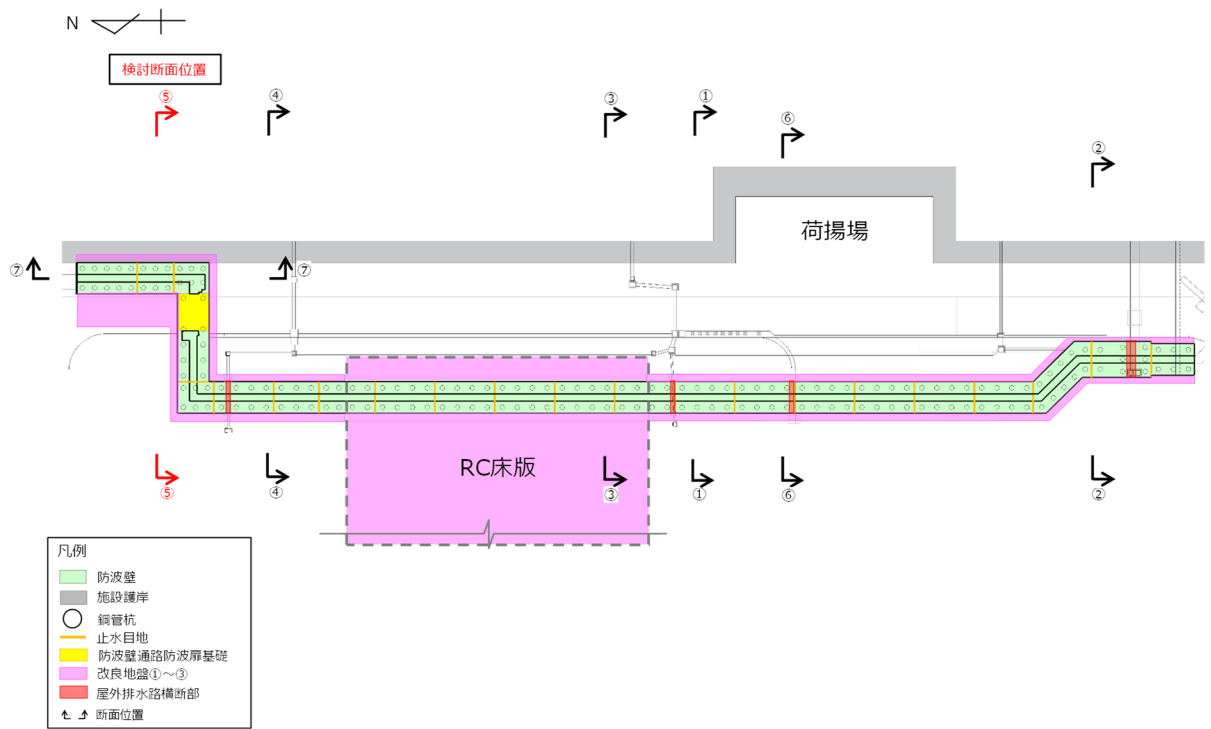


図 1.8.2-22 影響確認断面位置図

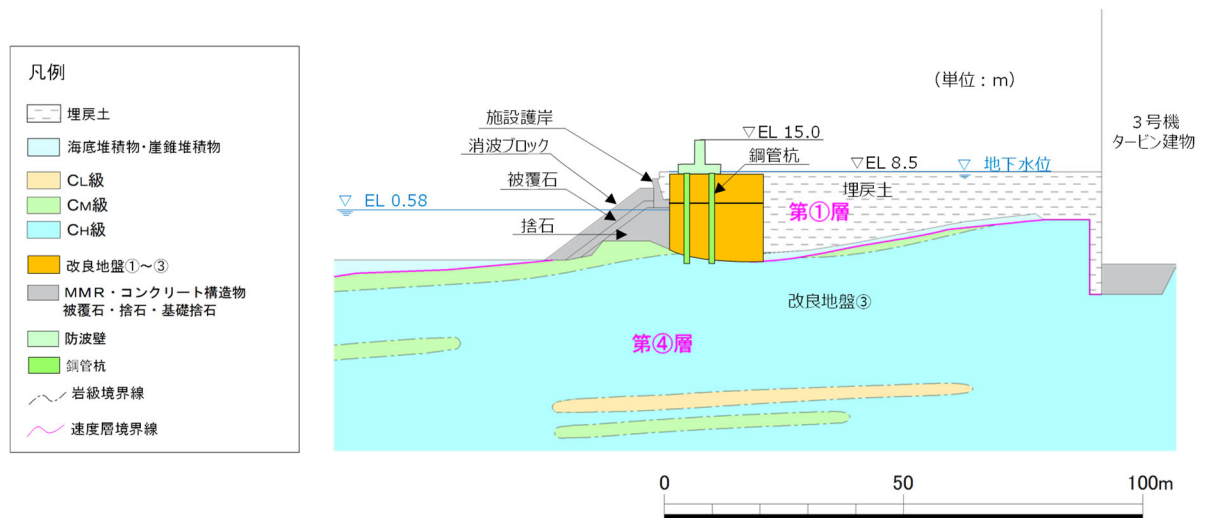


図 1.8.2-23 影響検討断面の地質断面図 (⑤-⑤断面)

(c) 改良地盤⑧による影響確認断面の選定

防波壁（逆 T 擁壁）には、液状化抑制を目的とした自主的な裕度向上対策として、流動化処理工法による改良地盤⑧が隣接している（図 1.8.2-24）。

改良地盤⑧は、埋戻土よりも剛性が高く、モデル化したとしても大きな影響はないと考えられるが、念のため、図 1.8.2-25 に示す①-①断面において、改良地盤⑧をモデル化した場合の影響確認を行う。

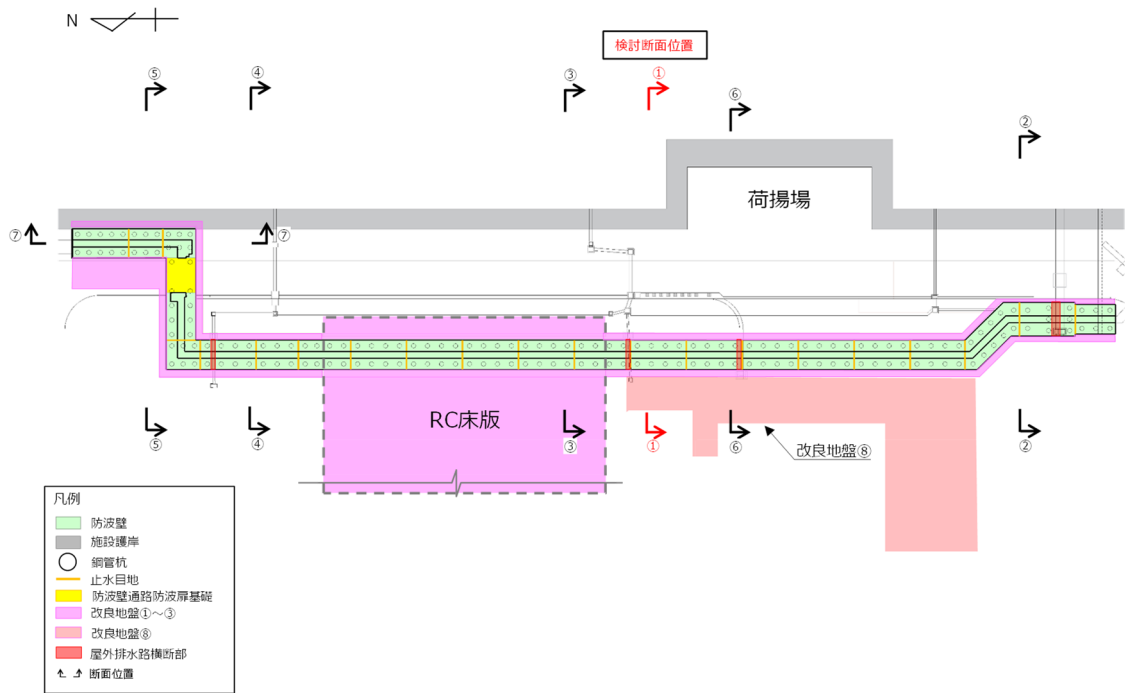


図 1.8.2-24 改良地盤⑧の位置図

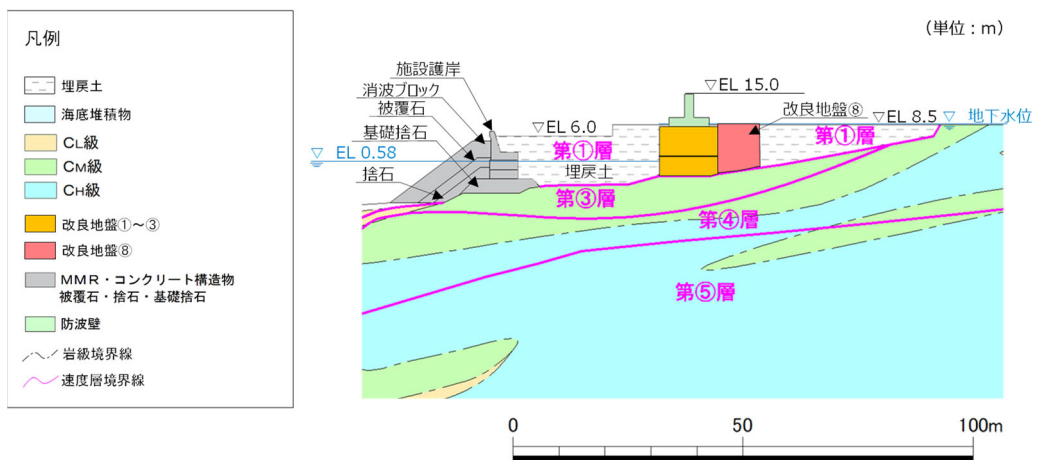


図 1.8.2-25 影響確認断面の地質断面図（①-①断面）

(d) 改良地盤①～③の品質確認結果を踏まえた影響確認断面の選定

VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」に記載のとおり，改良地盤①～③は，室内配合試験における試験結果を踏まえて解析用物性値を設定しており，実施工の改良地盤は設計値を上回るように施工されることから，構造物評価や改良地盤の破壊等の影響を確認する目的で，品質確認結果より得られた改良地盤①～③の物性値を踏まえた影響検討を実施する。

影響検討を行う断面は，逆T擁壁の耐震評価の厳しい⑤-⑤断面とする。影響確認断面位置を図1.8.2-26に，地質断面図を図1.8.2-27に示す。

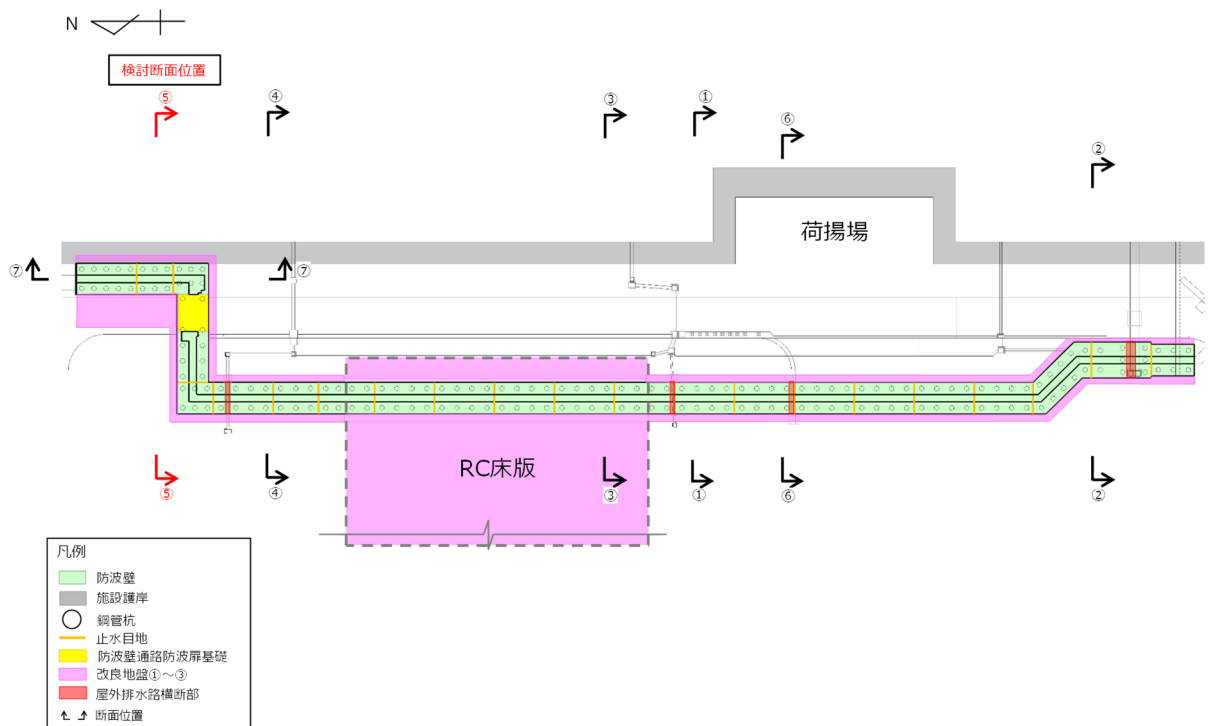


図 1.8.2-26 影響確認断面位置図

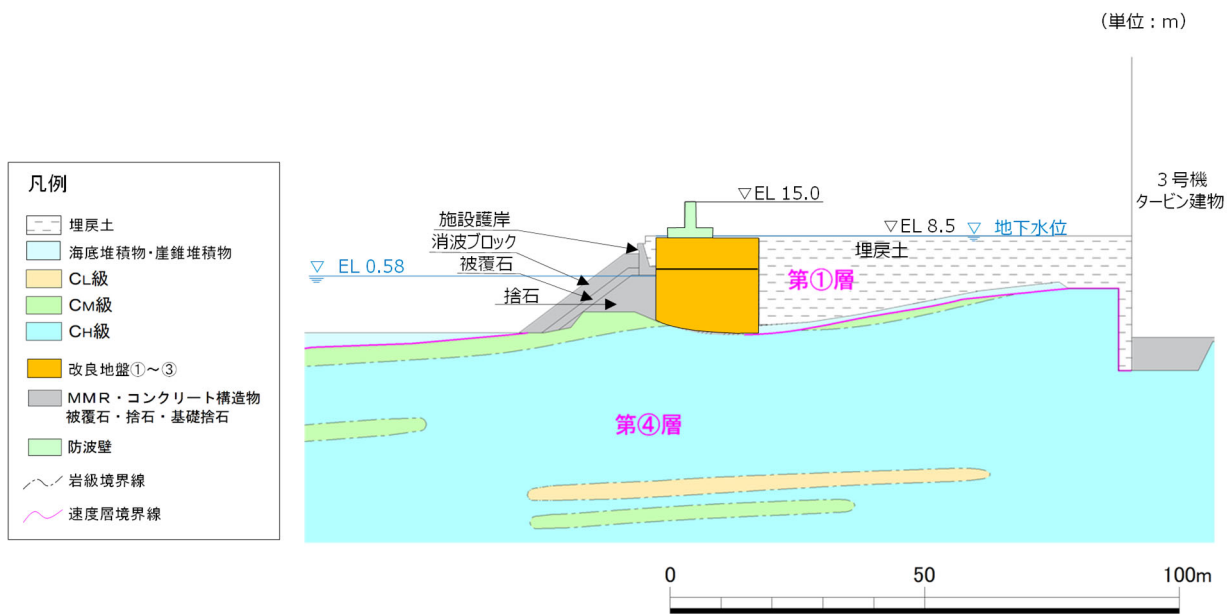


図 1.8.2-27 影響確認断面の地質断面図 (⑤-⑤断面)

## 2. 津波防護対象設備

### 2.1 防波壁に関する補足説明

#### 2.1.3 防波壁（逆T擁壁）の耐震性についての計算書に関する補足説明

## 目次

1.	概要	1
2.	基本方針	2
2.1	位置	2
2.2	構造概要	3
2.3	評価方針	10
2.4	適用規格・基準等	15
3.	耐震評価	17
3.1	評価対象断面	17
3.2	解析方法	21
3.3	荷重及び荷重の組合せ	24
3.4	入力地震動	26
3.5	解析モデル及び諸元	53
3.5.1	解析モデル	53
3.5.2	使用材料及び材料の物性値	75
3.5.3	地盤の物性値	79
3.5.4	地下水位	82
3.6	評価対象部位	82
3.6.1	施設・地盤の健全性評価	82
3.6.2	施設の変形性評価	82
3.6.3	基礎地盤の支持性能評価	82
3.7	許容限界	83
3.7.1	逆T擁壁	83
3.7.2	グラウンドアンカ	83
3.7.3	改良地盤	84
3.7.4	止水目地	84
3.7.5	基礎地盤	84
3.8	評価方法	85
3.8.1	逆T擁壁	85
3.8.2	グラウンドアンカ	87
3.8.3	改良地盤	89



3.8.4	止水目地	90
3.8.5	基礎地盤	91
4.	耐震評価結果	92
4.1	地震応答解析結果	92
4.2	逆 T 擁壁	130
4.2.1	曲げ・軸力照査	130
4.2.2	せん断力照査	134
4.2.3	グラウンドアンカによる支圧応力度に対する照査	136
4.2.4	隣接する躯体同士の支圧照査	138
4.3	グラウンドアンカ	142
4.4	改良地盤	152
4.5	止水目地	158
4.6	基礎地盤	162
5.	防波壁（逆 T 擁壁）の耐震性に関する影響検討	169
5.1	防波壁前面の施設護岸の損傷による影響検討	169
5.2	鋼管杭の影響検討	175
5.3	改良地盤⑧の影響検討	186
5.4	改良地盤①～③の品質確認結果を踏まえた影響検討	

（参考資料 1）グラウンドアンカの実態に即したモデル化，物性値及び許容限界の設定方法

（参考資料 2）鋼管杭の影響検討について

（参考資料 3）改良地盤①～③の物性値の設定方法について

## 1. 概要

本資料は、VI-2-1-9「機能維持の基本方針」に設定している構造強度及び機能維持の設計方針に基づき、防波壁（逆 T 擁壁）が基準地震動  $S_s$  に対して十分な構造強度及び止水機能を有していることを確認するものである。

防波壁（逆 T 擁壁）に要求される機能の維持を確認するに当たっては、構造部材の健全性評価では、地震応答解析に基づく施設・地盤の健全性評価及び施設の変形性評価を行う。基礎地盤の支持性能評価では、地震応答解析により基礎地盤に発生した接地圧を確認する。

## 2. 基本方針

### 2.1 位置

防波壁（逆 T 擁壁）の範囲を図 2.1-1 に示す。

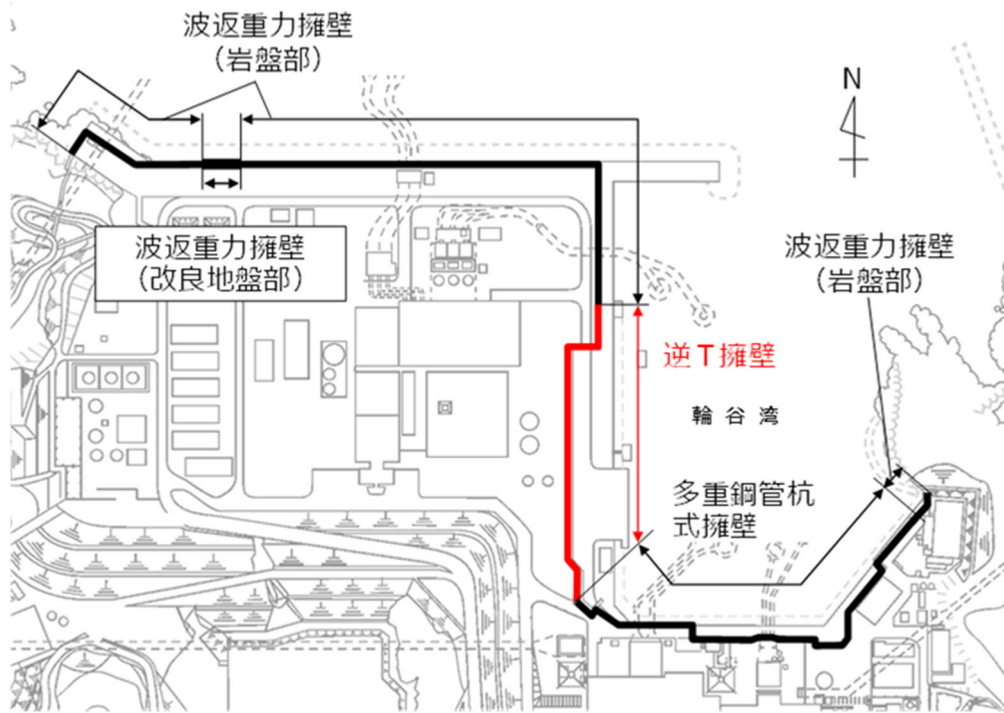


図 2.1-1 防波壁（逆 T 擁壁）の範囲

## 2.2 構造概要

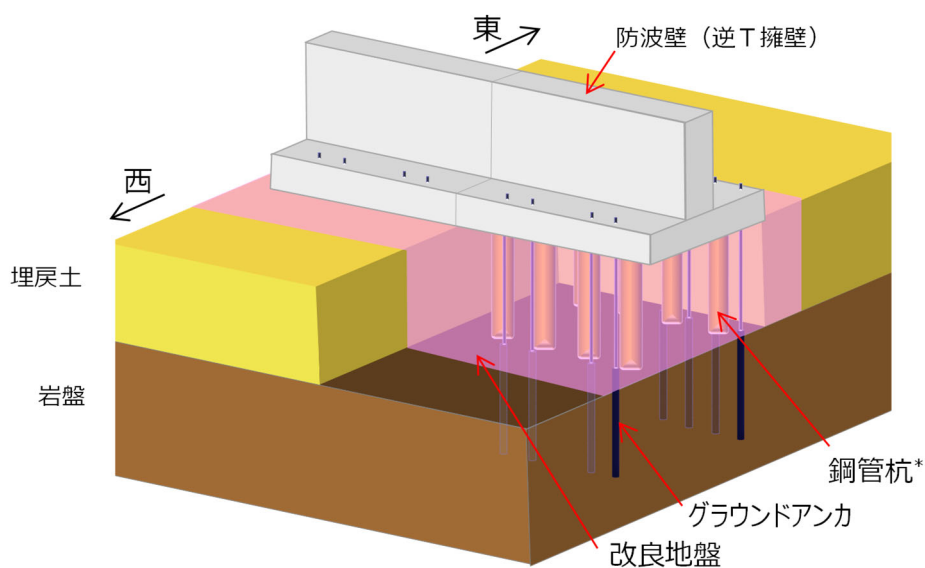
防波壁（逆 T 擁壁）の構造概要図及び構造図を図 2.2-1～図 2.2-4 に、目地材写真を図 2.2-5 に、概略配筋図を図 2.2-6 に、グラウンドアンカの配置図を図 2.2-7 に、止水目地の概念図及び配置位置図を図 2.2-9 及び図 2.2-10 に示す。

防波壁（逆 T 擁壁）は、入力津波高さ（EL 12.6m）に対して余裕を考慮した天端高さ（EL 15.0m）とする。

逆 T 擁壁は、改良地盤を介して岩盤に支持される鉄筋コンクリート造の逆 T 擁壁による直接基礎構造で構成される。約 16m を 1 ブロックの標準とした壁体を連続して設置し、ブロック間の境界には止水性を保持するための止水目地を設置する。1 ブロックにおいて海側では 8 本、陸側では 4 本グラウンドアンカを設置している。

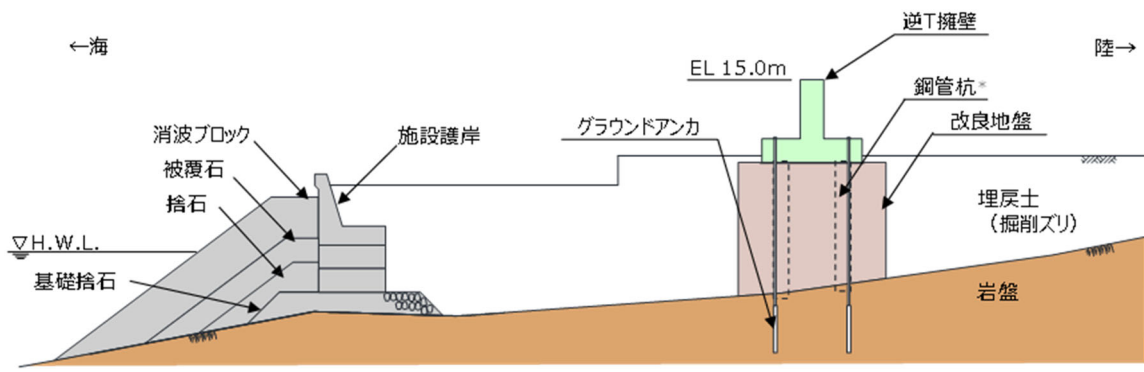
止水目地は、岩盤深さが深く、目地間の変位量が大きくなると考えられる北側ではシートジョイントを設置し、それ以外の範囲ではゴムジョイントを設置する。

なお、構造概要図には鋼管杭を示しているが、その効果を期待せずに耐震評価を行う。



注記\*：防波壁（逆T擁壁）は鋼管杭の効果期待せずに耐震評価を行う。

図 2.2-1 防波壁（逆 T 擁壁）の構造概要図



注記\*：防波壁（逆T擁壁）は，鋼管杭の効果を期待せずに耐震評価を行う。

図 2.2-2 防波壁（逆 T 擁壁）の構造概要図（断面図）

（単位：mm）

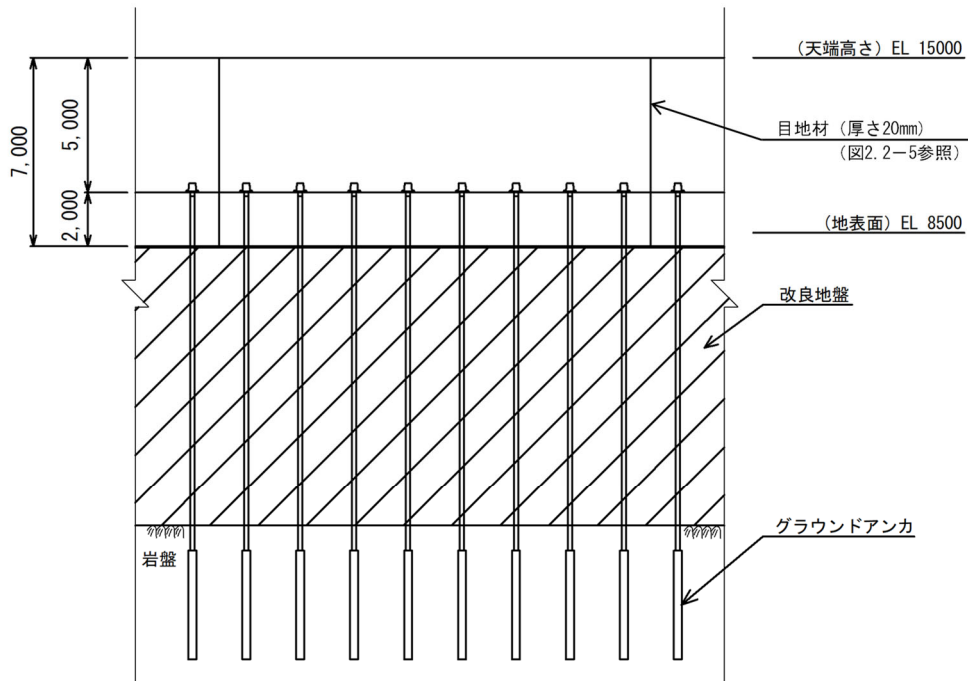


図 2.2-3 防波壁（逆 T 擁壁）の構造図（正面図）

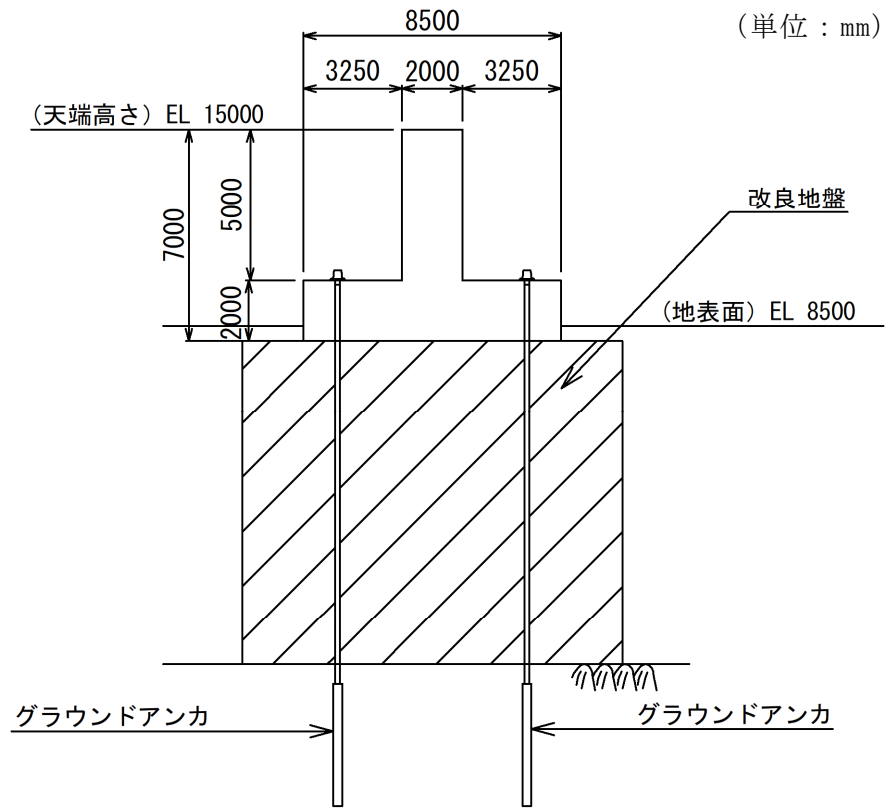


図 2.2-4 防波壁（逆 T 擁壁）の構造図（断面図）

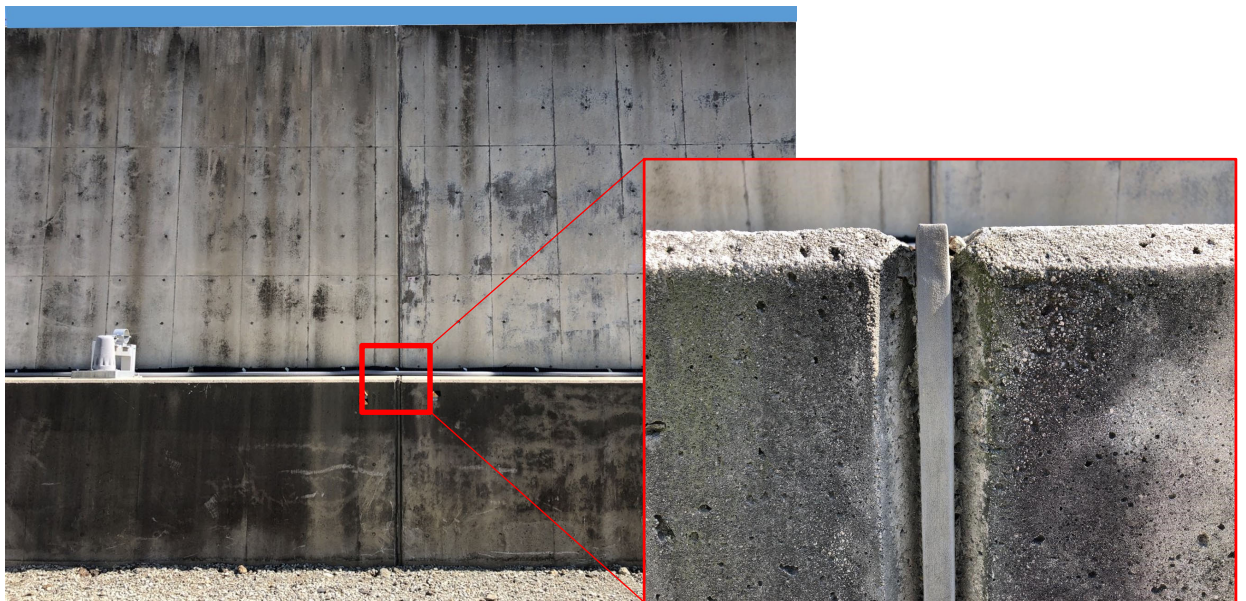


図 2.2-5 目地材写真（樹脂発泡体目地材，厚さ 20mm）

(単位：mm)

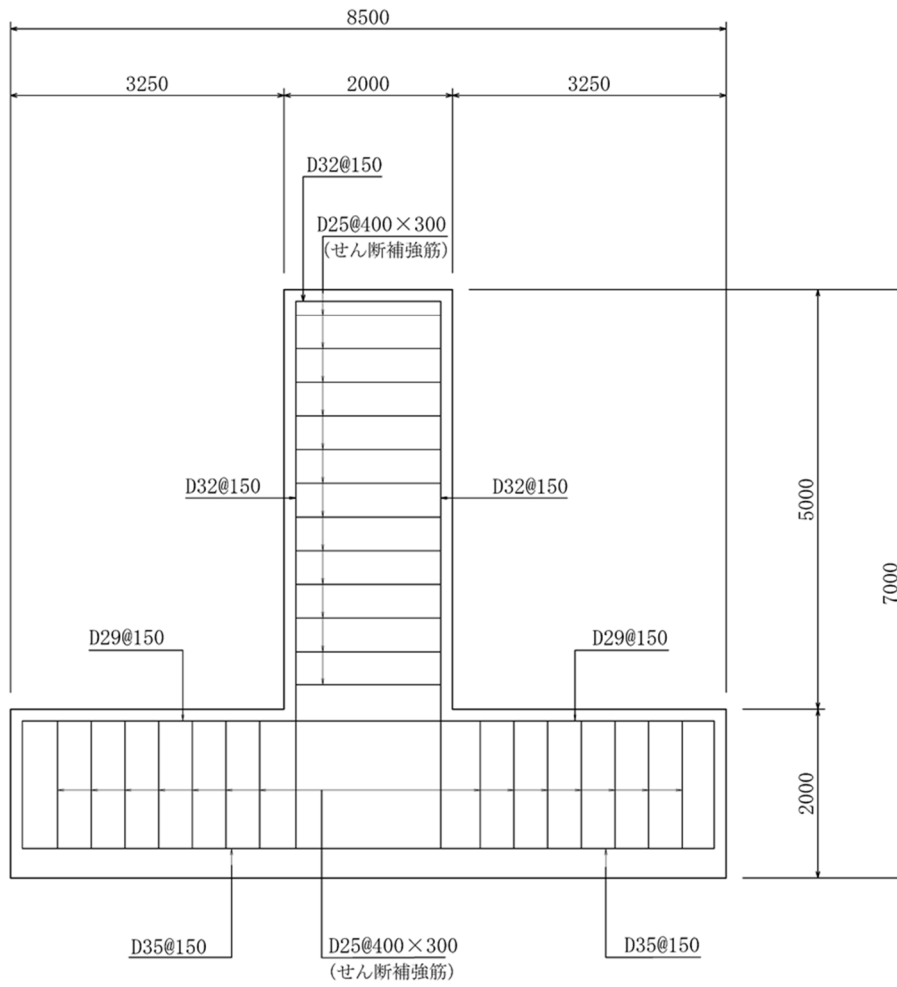
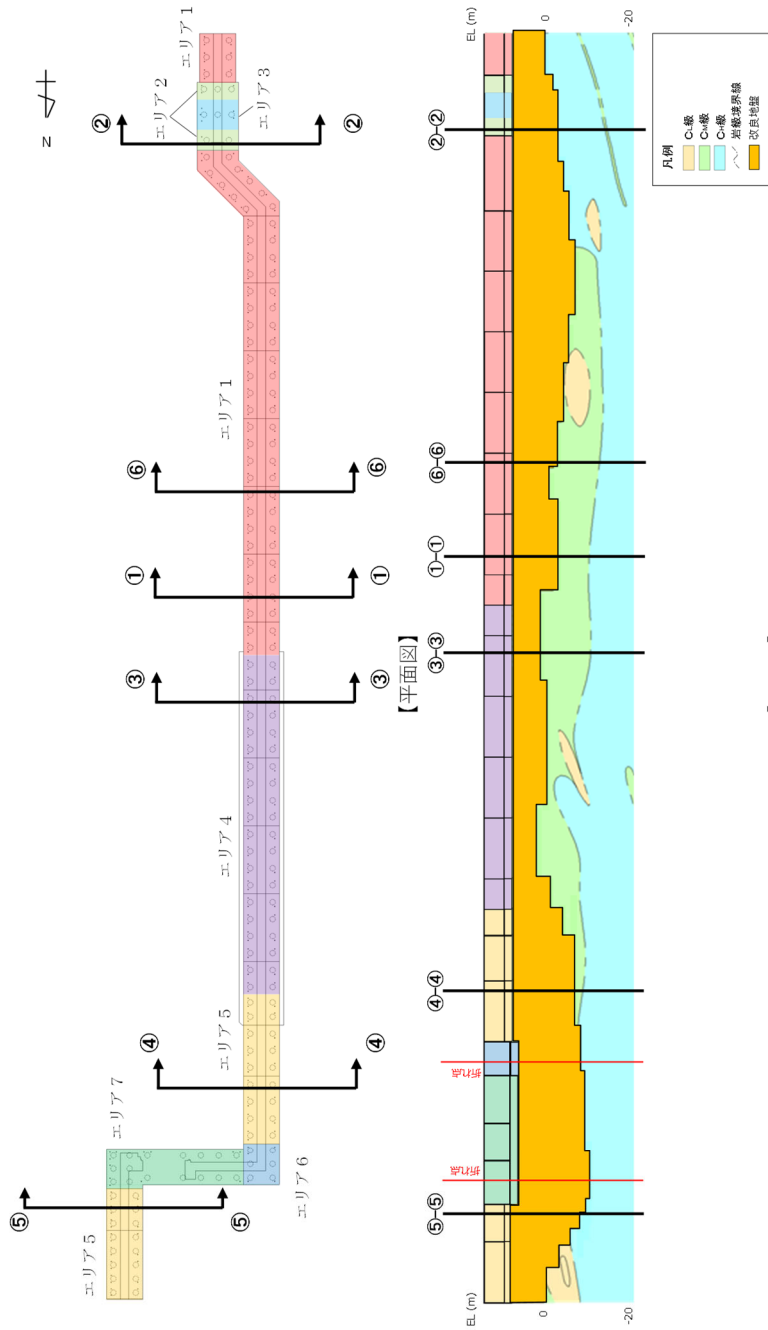


図 2.2-6 防波壁（逆 T 擁壁）の概略配筋図







アンカー種別	挿孔径 (mm)	PC鋼φ (mm)	PC鋼本数 (本)	テンドン自由長* (mm)	アンカー一体長 (テンドン拘束長) (mm)	テンドンの 極限引張り力 (kN)	テンドンの 降伏引張り力 (kN)	テンドンの 見かけの周長 (mm)	設計アンカー力 (kN)	許容アンカー力 (kN)	海側のグラウンド アンカー設置間隔 (mm)	設計アンカー力/ 許容アンカー力
エリア1	135	15.2	11	8000~18000	8500	2800	2400	138.4	1440	1764	2000	0.82
エリア2				11000~13500	10000				1700	2076	1650	0.82
エリア3				12500~13000	9000				1500	1868	1535	0.80
エリア4				7000~11500	8500				1360	1765	2000	0.77
エリア5				10000~20500	7000				1170	1453	1625 (北側) 2000 (南側)	0.81
エリア6				17000~18500	9500				1550	1972	1650	0.79
エリア7				17500~20000	10000				1650	2076	1650	0.79

注記\*：テンドン自由頂部はアンカー一体が岩盤に確実に定着するよう岩盤上面深さに合わせて長さを調整している。

図 2.1.3-8 逆 T 擁壁に設置されているグラウンドアンカーの諸元

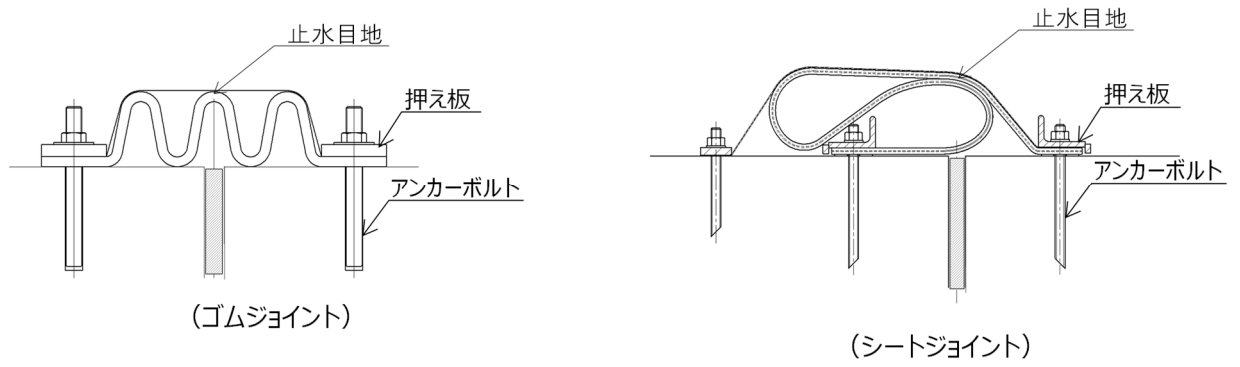


図 2.2-9 防波壁（逆 T 擁壁）の止水目地の概念図

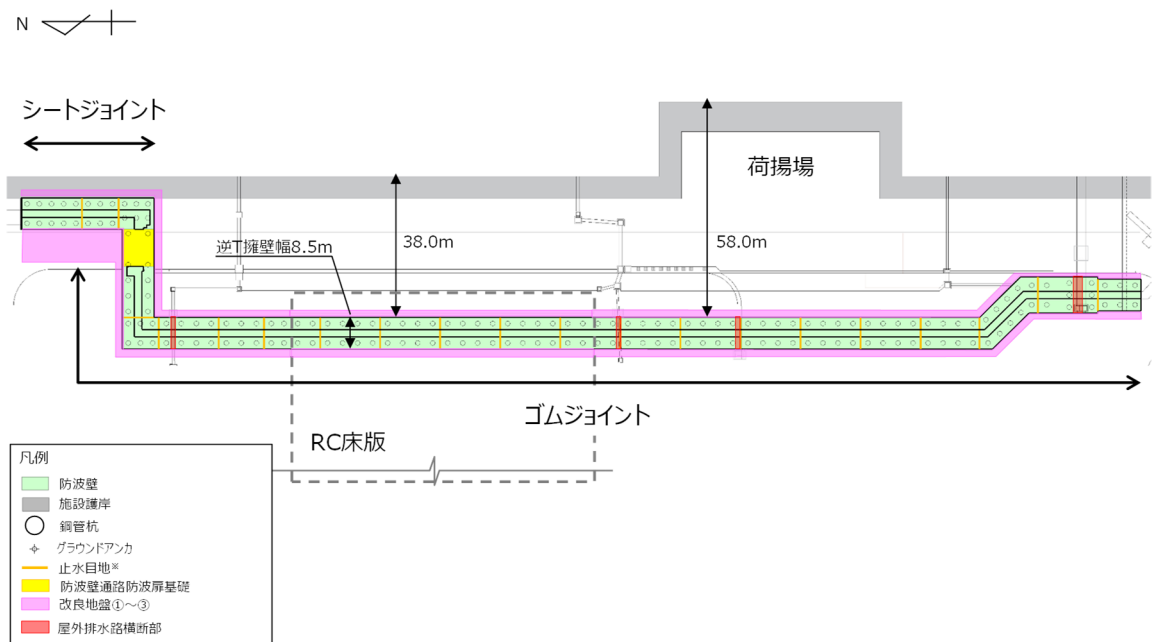


図 2.2-10 止水目地の設置位置図

## 2.3 評価方針

防波壁（逆 T 擁壁）は，S クラス施設である津波防護施設に分類される。

防波壁（逆 T 擁壁）の各部位の役割及び性能目標を表 2.3-1 及び表 2.3-2 に示す。

防波壁（逆 T 擁壁）の耐震評価は，地震応答解析の結果に基づき，設計基準対象施設として，表 2.3-3 に示すとおり，施設・地盤の健全性評価，基礎地盤の支持性能評価及び施設の変形性評価を行う。

施設・地盤の健全性評価，基礎地盤の支持性能評価及び施設の変形性評価を実施することで，構造強度を有すること及び止水性を損なわないことを確認する。

施設・地盤の健全性評価については，施設・地盤ごとに定める照査項目（発生応力，すべり安全率）が許容限界を満足することを確認する。

基礎地盤の支持性能評価においては，基礎地盤の接地圧が許容限界以下であることを確認する。

施設の変形性評価については，止水目地の変形量を算定し，有意な漏えいが生じないことを確認した許容限界を下回ることを確認する。

防波壁（逆 T 擁壁）の耐震評価フローを図 2.3-1 に示す。

表 2.3-1 防波壁（逆 T 擁壁）の各部位の役割

	部位の名称	地震時の役割	津波時の役割
施設 *1	逆 T 擁壁	・止水目地を支持する。	・止水目地を支持するとともに、遮水性を保持する。
	止水目地	・逆 T 擁壁間の変形に追従する。	・逆 T 擁壁間の変形に追従し、遮水性を保持する。
	グラウンドアンカ	・逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒を抑止する。	・逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒を抑止する。
	鋼管杭	・役割に期待しない。	・役割に期待しない。
地盤	改良地盤*2	・逆 T 擁壁を支持する。 ・基礎地盤のすべり安定性に寄与する。	・逆 T 擁壁を支持する。 ・難透水性を保持する。
	岩盤	・逆 T 擁壁を支持する。 ・基礎地盤のすべり安定性に寄与する。	・逆 T 擁壁を支持する。
	埋戻土	・役割に期待しない（解析モデルに取り込み、防波壁への相互作用を考慮する）。	・防波壁より陸側については、津波荷重に対して地盤反力として寄与する。
	施設護岸，基礎捨石	・役割に期待しない（解析モデルに取り込み、防波壁への波及的影響を考慮する）。	・役割に期待しない。
	被覆石，捨石		
	消波ブロック	・役割に期待しない。	・役割に期待しない。

注記\*1：漂流物対策工については追而とする。

\*2：RC床版については、保守的に改良地盤として扱う。

表 2.3-2 防波壁（逆 T 擁壁）の各部位の性能目標

部位		性能目標			
		鉛直支持	すべり安定性	耐震性	耐津波性 (透水性, 難透水性)
施設 *1	逆 T 擁壁	—	—	構造部材の健全性を保持するために、逆 T 擁壁がおおむね弾性状態にとどまること。	止水目地の支持機能を喪失して逆 T 擁壁間から有意な漏えいを生じないために、逆 T 擁壁がおおむね弾性状態にとどまること。
	止水目地			逆 T 擁壁間から有意な漏えいを生じないために、止水目地の変形性能を保持すること。	逆 T 擁壁から有意な漏えいを生じないために、止水目地の変形・遮水性能を保持すること。
	グラウンドアンカ			逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒抑止のために設計アンカー力を確保すること。	逆 T 擁壁及び改良地盤の滑動・転倒抑止のために設計アンカー力を確保すること。
地盤	改良地盤*2	逆 T 擁壁を鉛直支持するため、十分な支持力を保持すること。	基礎地盤のすべり安定性を確保するため、十分なすべり安全性を保持すること。	—	地盤中からの回り込みによる流入を防止（難透水性を保持）するため改良地盤がすべり破壊しないこと（内的安定を保持）。
	岩盤				—

注記\*1：漂流物対策工については追而とする。

\*2：RC 床版については、保守的に改良地盤として扱う。

表 2.3-3 防波壁(逆 T 擁壁)の評価項目

評価方針	評価項目	部位* <sup>1</sup>	評価方法	許容限界
構造強度を有すること	施設・地盤の健全性	逆 T 擁壁	発生する応力度（曲げ，軸力，せん断力，アンカーによる支圧力，隣接する躯体同士の支圧力）が許容限界以下であることを確認	短期許容応力度
		グラウンドアンカ* <sup>3</sup>	発生するアンカー力が許容限界以下であることを確認	許容アンカー力
		改良地盤①～③	すべり破壊しないこと（内的安定を保持）を確認	すべり安全率 1.2 以上
	基礎地盤の支持性	基礎地盤	発生する応力度（接地圧）が許容限界以下であることを確認	極限支持力度* <sup>2</sup>
止水性を損なわないこと	施設・地盤の健全性	逆 T 擁壁	発生する応力度（曲げ，軸力及びせん断力，アンカーによる支圧力，隣接する躯体同士の支圧力）が許容限界以下であることを確認	短期許容応力度
		グラウンドアンカ* <sup>3</sup>	発生するアンカー力が許容限界以下であることを確認	許容アンカー力
		改良地盤①～③	すべり破壊しないこと（内的安定を保持）を確認	すべり安全率 1.2 以上
	基礎地盤の支持性	基礎地盤	発生する応力度（接地圧）が許容限界以下であることを確認	極限支持力度* <sup>2</sup>
	施設の変形性	止水目地	発生変形量が許容限界以下であることを確認	有意な漏えいが生じないことを確認した変形量

注記\*1：漂流物対策工については追而とする。

\*2：妥当な安全余裕を考慮する。

\*3：グラウンドアンカを考慮した滑動・転倒に対する照査も実施する。

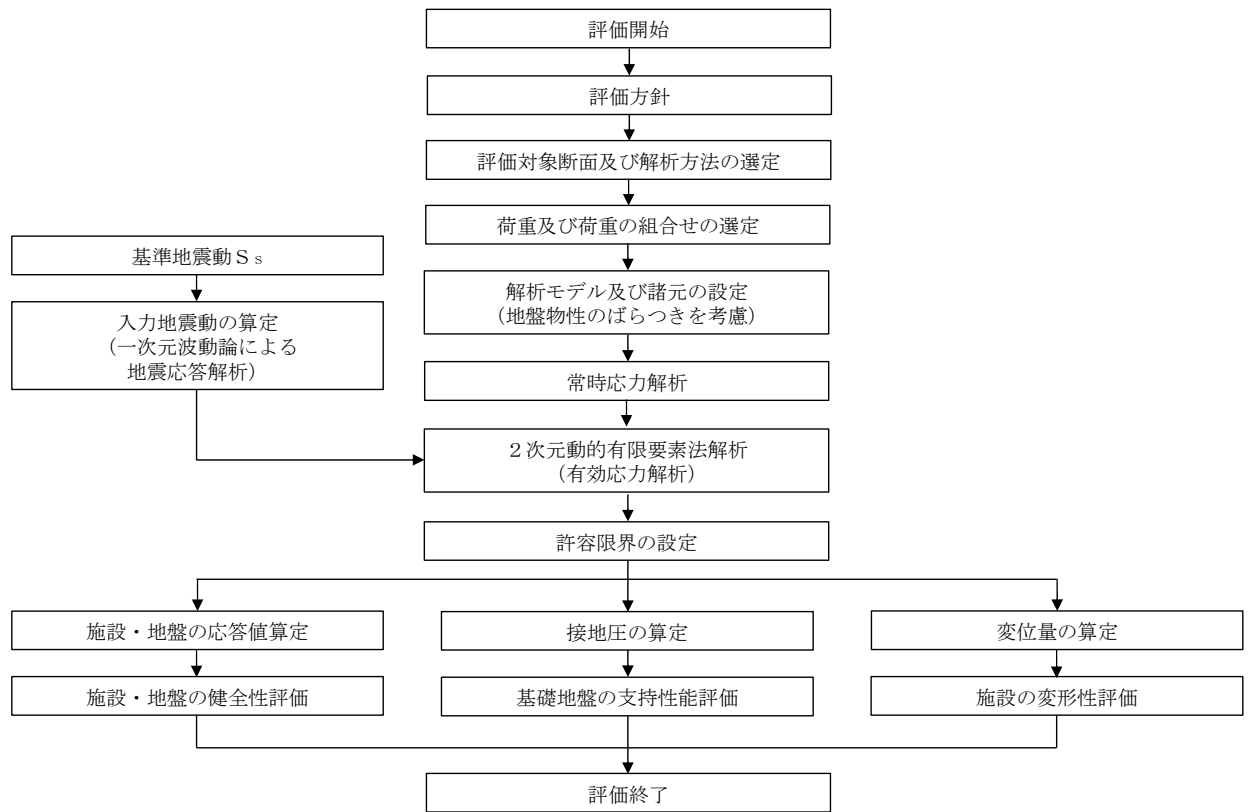


図 2.3-1 防波壁(逆 T 擁壁)の耐震評価フロー

#### 2.4 適用規格・基準等

適用する規格・基準等を以下に示す。

- ・コンクリート標準示方書[構造性能照査編](土木学会, 2002年制定)
- ・グラウンドアンカー設計・施工基準, 同解説 J G S 4101-2012 (地盤工学会)
- ・耐津波設計に係る工認審査ガイド (平成25年6月19日原管地発第1306196号)
- ・道路橋示方書 (I 共通編・IV 下部構造編)・同解説 (日本道路協会 平成14年3月)
- ・原子力発電所耐震設計技術指針 J E A G 4 6 0 1 -1987 (日本電気協会)
- ・港湾の施設の技術上の基準・同解析 ( (社) 日本港湾協会, H19年版)
- ・港湾構造物設計事例集 (沿岸技術研究センター 平成19年3月)



表 2.4-1 適用する規格，基準類

項目		適用する規格，基準類	備考
仕様材料及び材料定数		コンクリート標準示方書[構造性能照査編](土木学会，2002年制定)	—
荷重及び荷重の組合せ		コンクリート標準示方書[構造性能照査編](土木学会，2002年制定)	永久荷重+偶発荷重+従たる変動荷重の適切な組合せを検討。
許容限界	逆 T 擁壁	コンクリート標準示方書[構造性能照査編](土木学会，2002年制定)	曲げ軸力照査，せん断力照査及び支圧照査は，発生応力度が，短期許容応力度以下であることを確認。
	グラウンドアンカ	グラウンドアンカー設計・施工基準，同解説 J G S 4101-2012 (地盤工学会)	発生アンカー力が，テンドンの許容引張力，許容拘束力及び許容引抜き力以下であることを確認。
	改良地盤 ①～③	耐津波設計に係る工認審査ガイド (平成25年6月19日原管地発第1306196号) 道路橋示方書(I 共通編・IV 下部構造編)・同解説 (日本道路協会 平成14年3月)	すべり安全率が1.2以上であることを確認。 支持力照査は，接地圧が，極限支持力以下であることを確認。
	基礎地盤	道路橋示方書(I 共通編・IV 下部構造編)・同解説 (日本道路協会 平成14年3月)	支持力照査は，接地圧が極限支持力以下であることを確認。
	鋼管杭	コンクリート標準示方書[構造性能照査編](土木学会，2002年制定)	押抜きせん断照査及び支圧照査は，発生応力度が，短期許容応力度以下であることを確認。
地震応答解析		原子力発電所耐震設計技術指針 J E A G 4 6 0 1 -1987 (日本電気協会)	有限要素法による二次元モデルを用いた時刻歴非線形解析
		港湾の施設の技術上の基準・同解析((社)日本港湾協会，H19年版) 港湾構造物設計事例集 (沿岸技術研究センター 平成19年3月)	ジョイント要素の物性値の設定

### 3. 耐震評価

#### 3.1 評価対象断面

逆 T 擁壁の評価対象断面は、設置変更許可段階における構造成立性評価断面として選定した断面を基本とした上で、「1.8 浸水防護施設の設計における評価対象断面の選定について」で記載したとおり、耐震評価においては、構造的特徴、周辺地盤状況、地下水位、隣接構造物の有無、間接支持される機器・配管系の有無が耐震評価結果に及ぼす影響の観点から、耐震評価上厳しいと考えられる断面を評価対象断面として選定する。

評価対象断面選定結果を表 3.1-1 に、評価対象断面位置を図 3.1-1 及び図 3.1-2 に、評価対象断面を図 3.1-3～図 3.1-6 に示す。

評価対象断面選定の詳細については、「1.8 浸水防護施設の設計における評価対象断面の選定について」の「1.8.2 防波壁」に示す。

表 3.1-1 評価対象断面選定結果 (防波壁 (逆 T 擁壁))

検討断面	評価対象断面整理上の観点				該当する 観点	選定理由
	(1) 岩盤上面の深さ (m)	(2) 改良地盤の幅 (m)	(3) 改良地盤と施設護 岸との位置関係	(4) 初期緊張力 /許容アンカー力		
①-①断面	10.9	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.82	(2), (4)	・改良地盤の幅が狭いこと、許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が最も高いことから、評価対象断面に選定する。
②-②断面	10.5	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.82	(2), (4)	・①-①断面に比べ、改良地盤の幅及び許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が同等であり、岩盤上面の深さが浅いことから、①-①断面に代表させる。
③-③断面	6.8	33.8	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.77	—	・⑤-⑤断面に比べ、岩盤上面の深さが浅いこと、改良地盤の幅が広いこと、改良地盤と施設護岸が離れていること、許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が低いことから、⑤-⑤断面に代表させる。
④-④断面	15.0	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.81	(1), (2), (4)	・岩盤上面深さが深いこと、改良地盤の幅が狭いこと、許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が高いことから、評価対象断面に選定する。
⑤-⑤断面	18.5	19.5	改良地盤と施設護岸が 接している	0.79	(1), (3)	・岩盤上面の深さが最も深いこと、改良地盤と施設護岸が接していることから、評価対象断面に選定する。
⑥-⑥断面	11.0	12.6	改良地盤と施設護岸が 離れている	0.82	(2), (4)	・①-①断面に比べ、岩盤上面の深さが深いこと、改良地盤の幅及び許容アンカー力に占める初期緊張力の割合が同等であり、地表面最大加速度が小さいこと (表1.8.2-8参照) から、①-①断面に代表させる。

□: 番号を付与する観点

□: 観点の番号付与が多い

□: 選定した評価対象断面

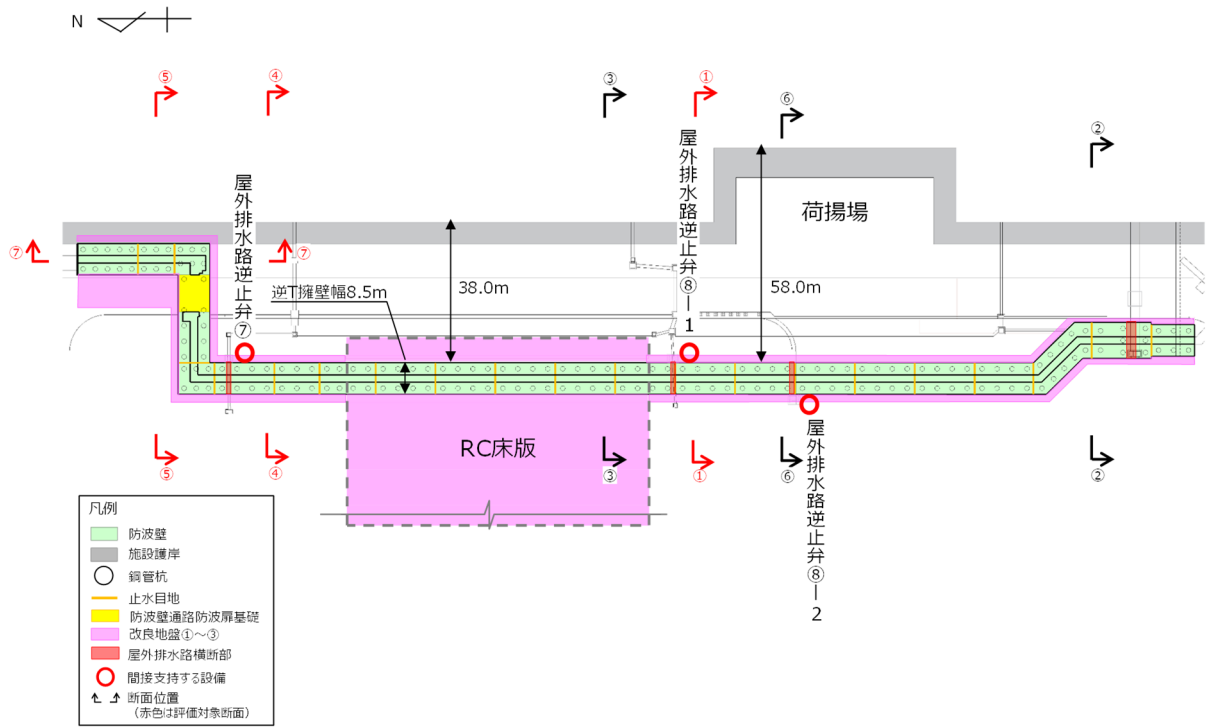


図 3.1-1 防波壁（逆 T 擁壁）平面配置図

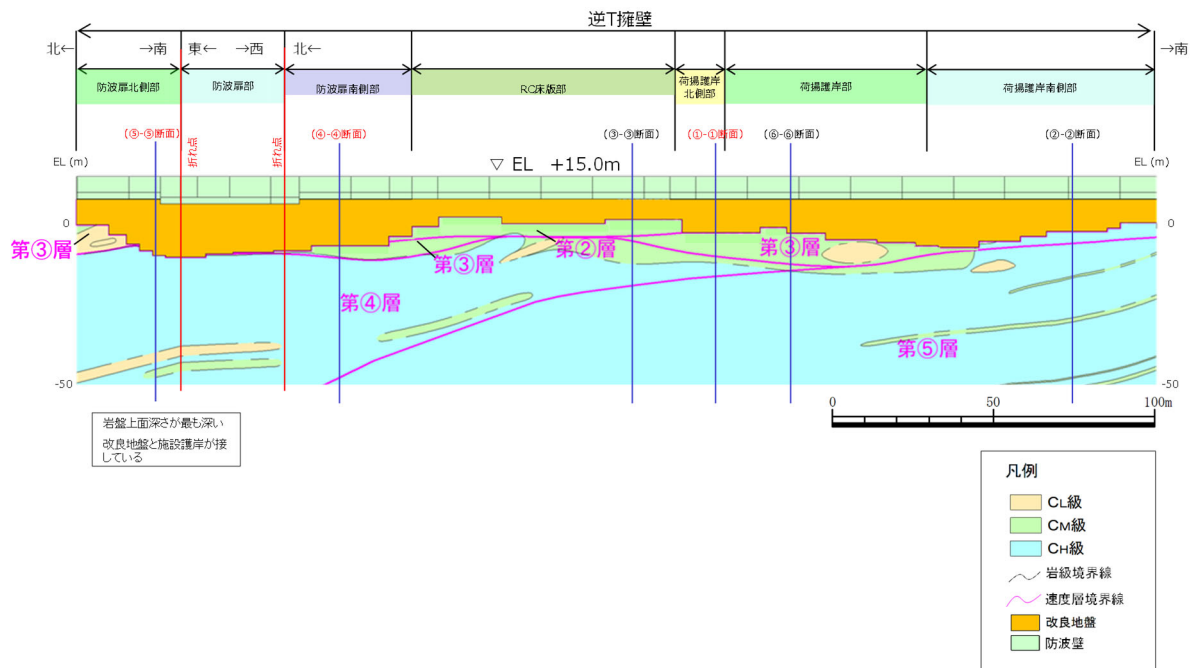


図 3.1-2 防波壁（逆 T 擁壁）縦断面図

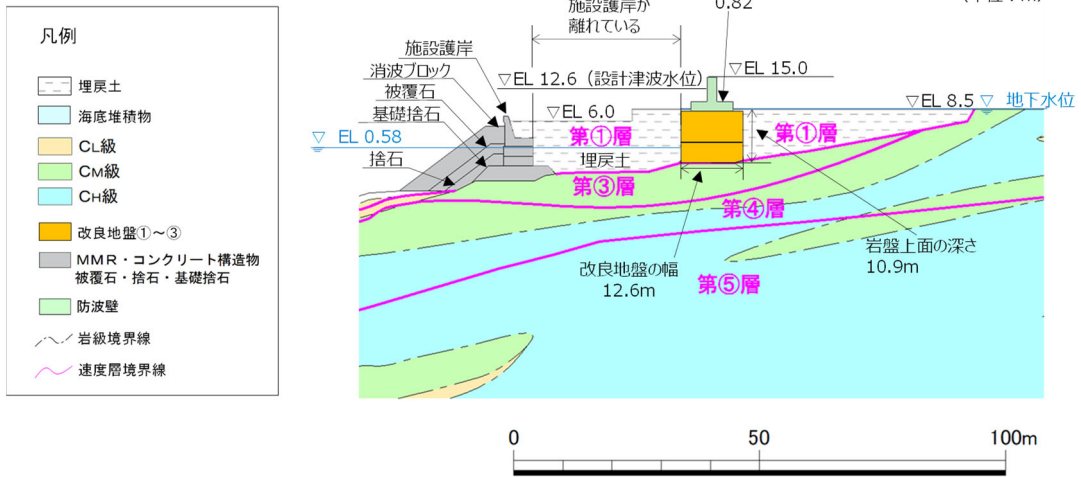


図 3.1-3 防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図（①-①断面）

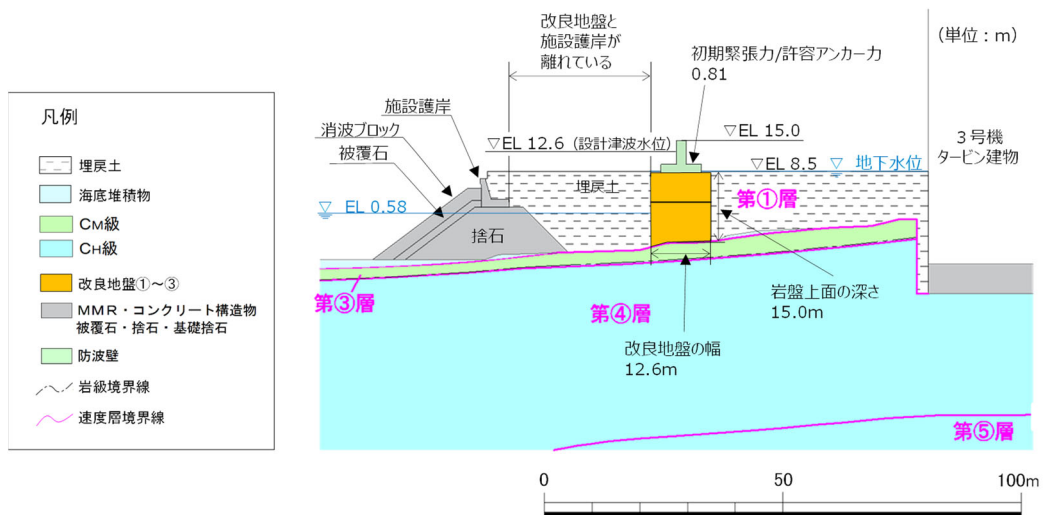


図 3.1-4 防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図（④-④断面）

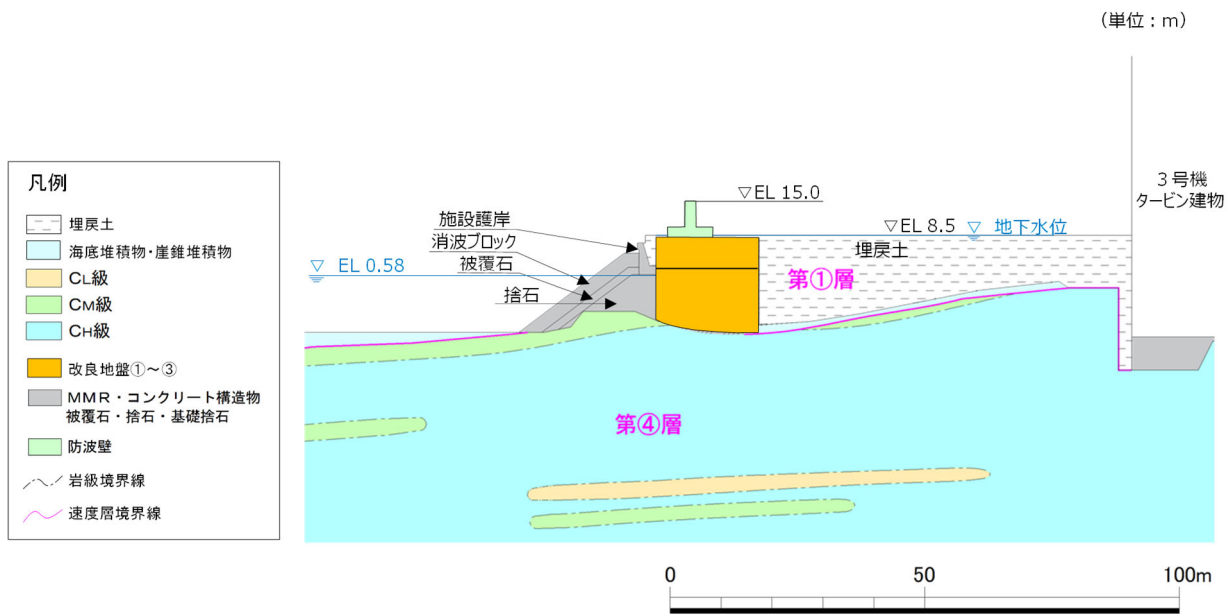


図 3.1-5 防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図（⑤-⑤断面）

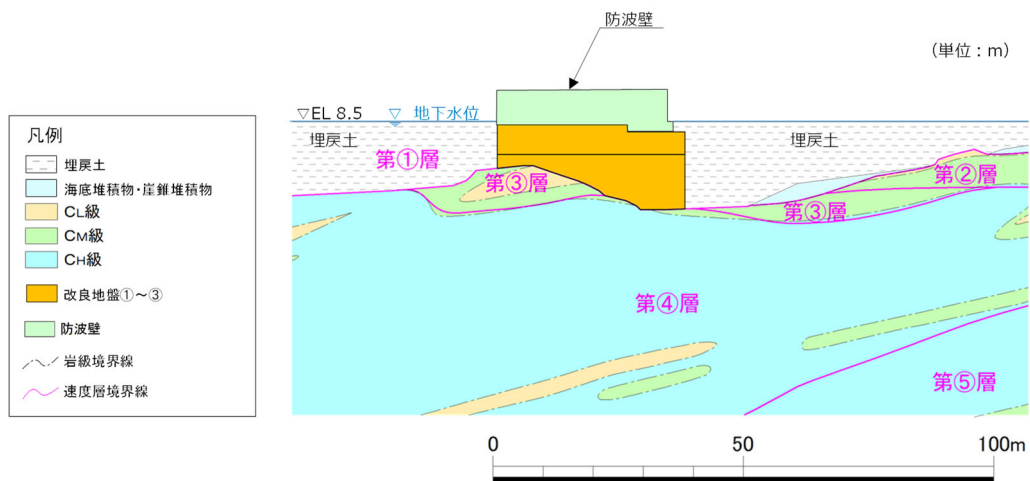


図 3.1-6 防波壁（逆 T 擁壁）の横断面図（⑦-⑦断面）

### 3.2 解析方法

防波壁（逆T擁壁）の地震応答解析は、VI-2-1-6「地震応答解析の基本方針」のうち、「2.3 屋外重要土木構造物」に示す解析方法及び解析モデルを踏まえて実施する。

地震応答解析は、構造物と地盤の相互作用を考慮できる2次元有限要素法解析を用いて、基準地震動 $S_s$ に基づき設定した水平地震動と鉛直地震動の同時加振による逐次時間積分の時刻歴応答解析により行うこととする。地震時における地盤の有効応力の変化に伴う影響を考慮するため、解析方法は有効応力解析とする。

構造部材については、線形はり要素及び非線形ばねでモデル化する。また、地盤については地盤のひずみ依存性を適切に考慮できるようモデル化する。

地震応答解析については、解析コード「FLIP」を使用する。なお、解析コードの検証及び妥当性確認等の概要については、VI-5「計算機プログラム（解析コード）の概要」に示す。

#### 3.2.1 地震応答解析手法

防波壁（逆T擁壁）の地震応答解析は、地盤と構造物の動的相互作用を考慮できる連成系の地震応答解析を用いて、基準地震動に基づき設定した水平地震動と鉛直地震動の同時加振による逐次時間積分の時刻歴応答解析にて行う。

地震応答解析手法の選定フローを図3.2.1-1に示す。

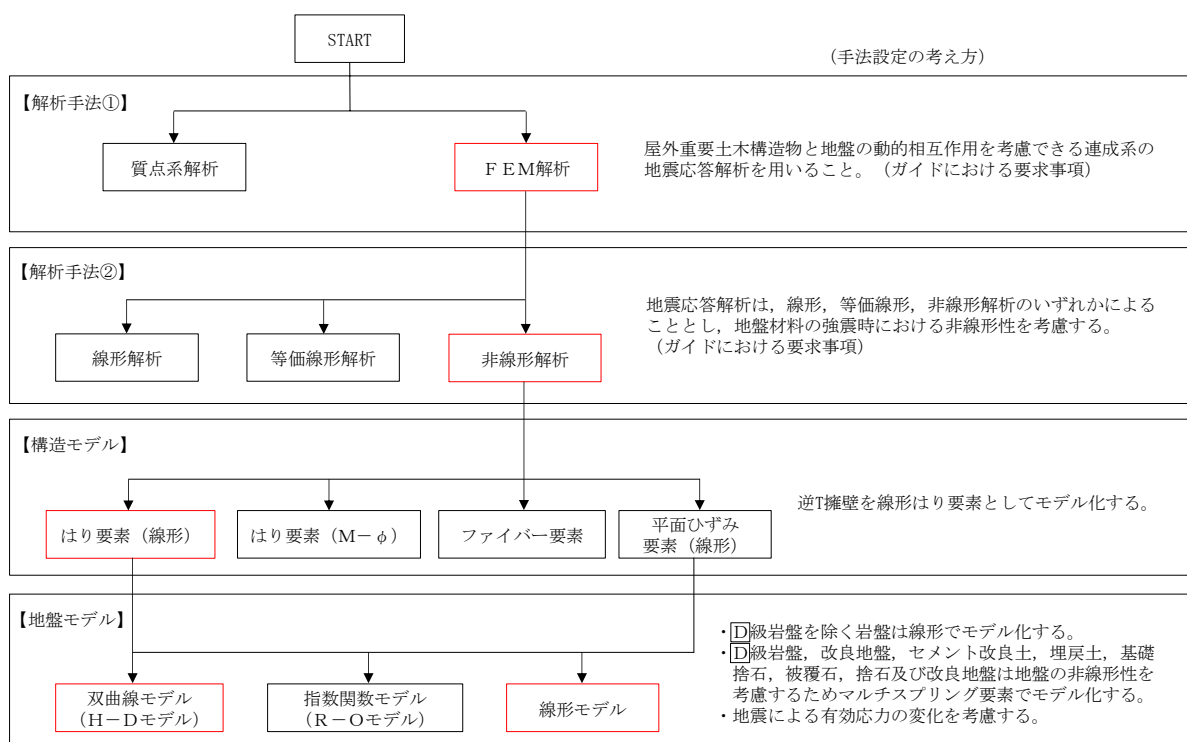


図 3.2.1-1 地震応答解析手法の選定フロー

### 3.2.2 施設

逆 T 擁壁は、鉄筋コンクリート造であり、線形はり要素（ビーム要素）でモデル化する。

グラウンドアンカは、非線形ばね及び MPC（多点拘束）でモデル化する。

漂流物対策工は、逆 T 擁壁の堅壁に設置した鉄筋コンクリート造の構造物であり、堅壁の剛性と同等であることから、重量のみを考慮する。

### 3.2.3 材料物性及び地盤物性のばらつき

防波壁（逆 T 擁壁）の地震時の応答は、周辺地盤との相互作用によることから、地盤物性のばらつきの影響を考慮する。地盤物性のばらつきについては、表 3.2.3-1 に示す解析ケースにおいて考慮する。

以下の理由から、防波壁（逆 T 擁壁）の応答に与える影響が大きいと考えられる埋戻土の物性（初期せん断弾性係数）のばらつきについて影響を確認する。

・ 広範囲に分布しており、動的変形特性にひずみ依存性があるため、地震時の繰返し载荷により剛性低下することから、剛性の違いが地盤応答に影響し、逆 T 擁壁の応答に影響する。

・ 地震時の繰返し载荷により液状化し、有効応力が低下することから、剛性の違いが改良地盤に対する主動土圧に影響し、逆 T 擁壁の応答に影響する。

詳細な解析ケースの考え方は、「3.2.5 解析ケース」に示す。

表 3.2.3-1 有効応力解析における解析ケース

解析ケース	地盤物性	
	埋戻土 ( $G_0$ : 初期せん断弾性係数)	岩盤 ( $G_d$ : 動せん断弾性係数)
ケース① (基本ケース)	平均値	平均値
ケース②	平均値 + 1 $\sigma$	平均値
ケース③	平均値 - 1 $\sigma$	平均値

### 3.2.4 減衰定数

Rayleigh 減衰を考慮することとし，剛性比例型減衰を設定する。

### 3.2.5 解析ケース

耐震評価においては，全ての基準地震動  $S_s$  に対し，解析ケース①（基本ケース）を実施する。全ての基準地震動  $S_s$  に対して実施したケース①の解析において，各照査値が最も厳しい地震動を用いて，解析ケース②及び③を実施する。耐震評価における解析ケースを表 3.2.5-1 に示す。

表 3.2.5-1 耐震評価における解析ケース

解析ケース			ケース①	ケース②	ケース③	
			基本ケース	地盤物性のばらつき (+1 $\sigma$ ) を考慮した解析ケース	地盤物性のばらつき (-1 $\sigma$ ) を考慮した解析ケース	
地盤物性			平均値	平均値+1 $\sigma$	平均値-1 $\sigma$	
地震動 位相	$S_s - D$	++*	○	基準地震動 $S_s$ (6波) に位相反転を考慮した地震動 (6波) を加えた全 12 波に対し，ケース① (基本ケース) を実施し，曲げ・軸力系の破壊，せん断破壊及び基礎地盤の支持力照査の各照査項目ごとに照査値が 0.5 を超える照査項目に対して，最も厳しい (許容限界に対する裕度が最も小さい) 地震動を用いてケース②及び③を実施する。 すべての照査項目の照査値がいずれも 0.5 以下の場合，照査値が最も厳しくなる地震動を用いてケース②及び③を実施する。		
		-+*	○			
		+ - *	○			
		--*	○			
	$S_s - F 1$	++*	○			
	$S_s - F 2$	++*	○			
	$S_s - N 1$	++*	○			
		-+*	○			
	$S_s - N 2$ (NS)	++*	○			
		-+*	○			
	$S_s - N 2$ (EW)	++*	○			
		-+*	○			

注記\*：地震動の位相について，(++) の左側は水平動，右側は鉛直動を表し，「-」は位相を反転させたケースを示す。



### 3.3 荷重及び荷重の組合せ

荷重及び荷重の組合せは、VI-2-1-9「機能維持の基本方針」に基づき設定する。

#### 3.3.1 耐震評価上考慮する状態

防波壁（逆 T 擁壁）の地震応答解析において、地震以外に考慮する状態を以下に示す。

##### (1) 運転時の状態

発電用原子炉が運転状態にあり、通常の条件下におかれている状態。ただし、運転時の異常な過渡変化時の影響を受けないことから考慮しない。

##### (2) 設計基準事故時の状態

設計基準事故時の影響を受けないことから考慮しない。

##### (3) 設計用自然条件

積雪及び風の荷重を考慮する。

##### (4) 重大事故等時の状態

重大事故等時の状態の影響を受けないことから考慮しない。

#### 3.3.2 荷重

防波壁（逆 T 擁壁）の地震応答解析において、考慮する荷重を以下に示す。

##### (1) 固定荷重（G）

固定荷重として、躯体自重、機器・配管荷重の自重を考慮する。

##### (2) 固定荷重（G a）

固定荷重として、グラウンドアンカの初期緊張力を考慮する。

##### (3) 積雪荷重（P s）

積雪荷重として、発電所最寄りの気象官署である松江地方気象台（松江市）での観測記録（1941～2018年）より、観測史上1位の月最深積雪100cm（1971年2月4日）に平均的な積雪荷重を与えるための係数0.35を考慮した35.0cmとする。積雪荷重については、松江市建築基準法施工細則により、積雪量1cmごとに20N/m<sup>2</sup>の積雪荷重が作用することを考慮し設定する。

##### (4) 風荷重（P k）

風荷重については、設計基準風速を30m/sとし、建築基準法に基づき算定する。

##### (5) 地震荷重（S s）

基準地震動S sによる荷重を考慮する。

### 3.3.3 荷重の組合せ

荷重の組合せを表 3.3.3-1 に示す。

表 3.3.3-1 荷重の組合せ

外力の状態	荷重の組合せ
地震時 (S <sub>s</sub> )	$G + G_a + P_s + P_k + S_s$

G : 固定荷重

G<sub>a</sub> : グラウンドアンカの初期緊張力

P<sub>s</sub> : 積雪荷重

P<sub>k</sub> : 風荷重

S<sub>s</sub> : 地震時荷重

### 3.4 入力地震動

入力地震動は、VI-2-1-6「地震応答解析の基本方針」のうち「2.3 屋外重要土木構造物」に示す入力地震動の設定方針を踏まえて設定する。

地震応答解析に用いる入力地震動は、解放基盤表面で定義される基準地震動  $S_s$  を一次元波動論により地震応答解析モデル下端位置で評価したものをを用いる。なお、入力地震動の設定に用いる地下構造モデルは、VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」のうち「6.1 入力地震動の設定に用いる地下構造モデル」を用いる。

図 3.4-1 に入力地震動算定の概念図を、図 3.4.1-1～図 3.4.2-2 に入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトルを示す。入力地震動の算定には、解析コード「SHAKE」を使用する。解析コードの検証及び妥当性確認の概要については、VI-5「計算機プログラム(解析コード)の概要」に示す。

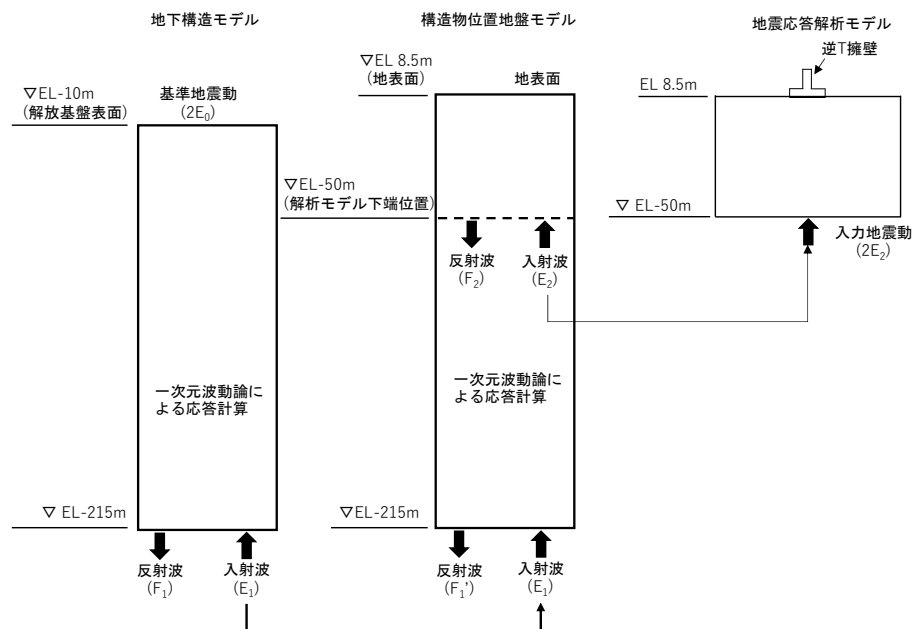
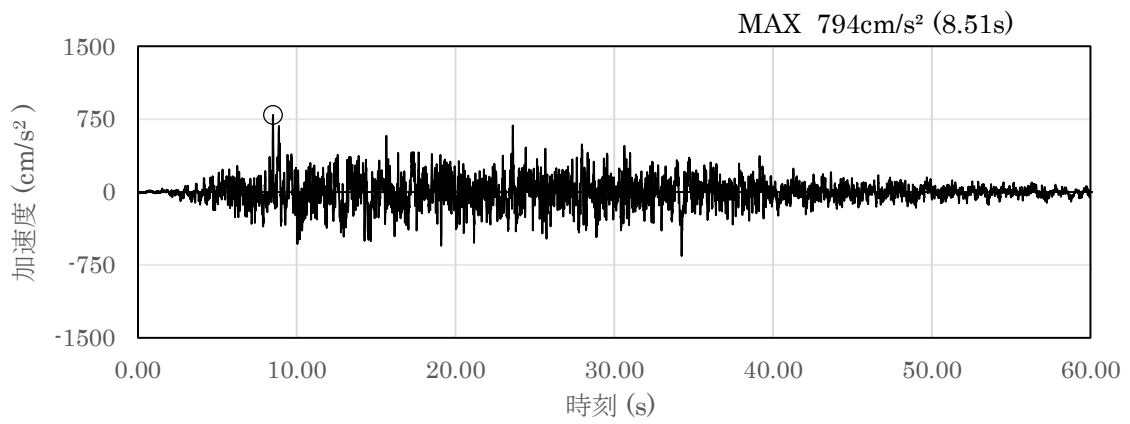
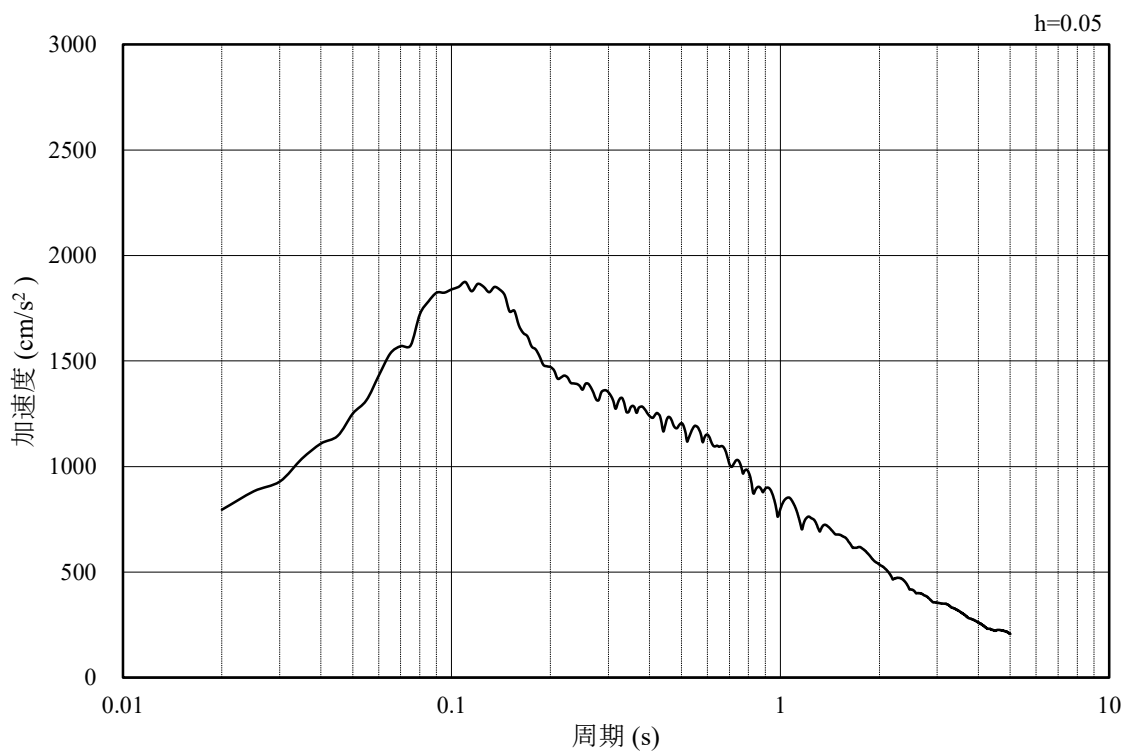


図 3.4-1 入力地震動算定の概念図

3.4.1 ①-①断面

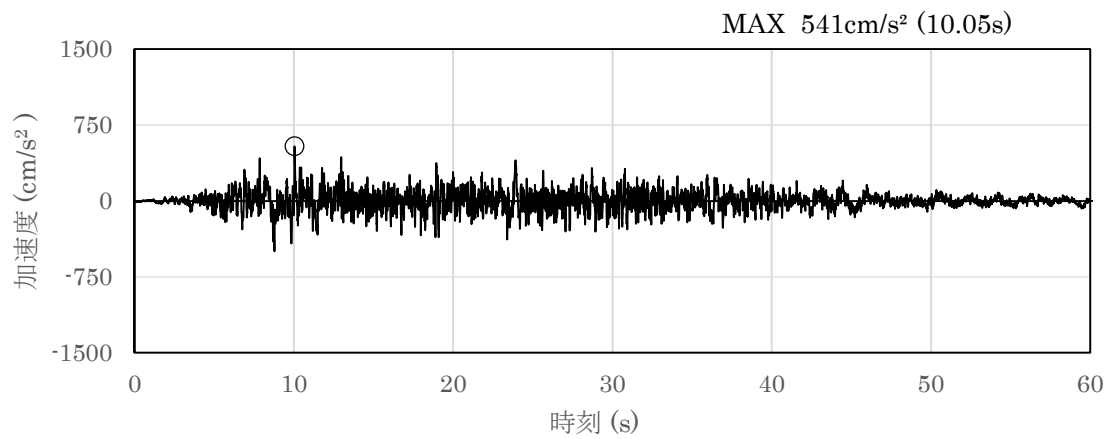


(a) 加速度時刻歴波形

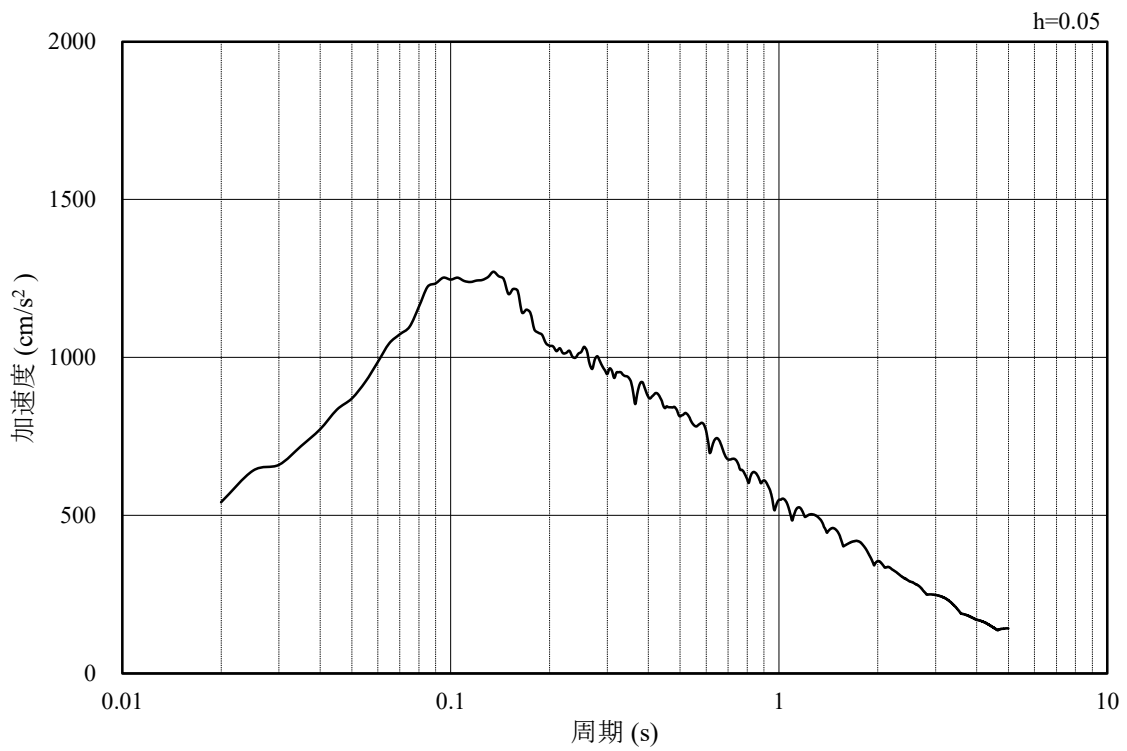


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-1 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s - D)

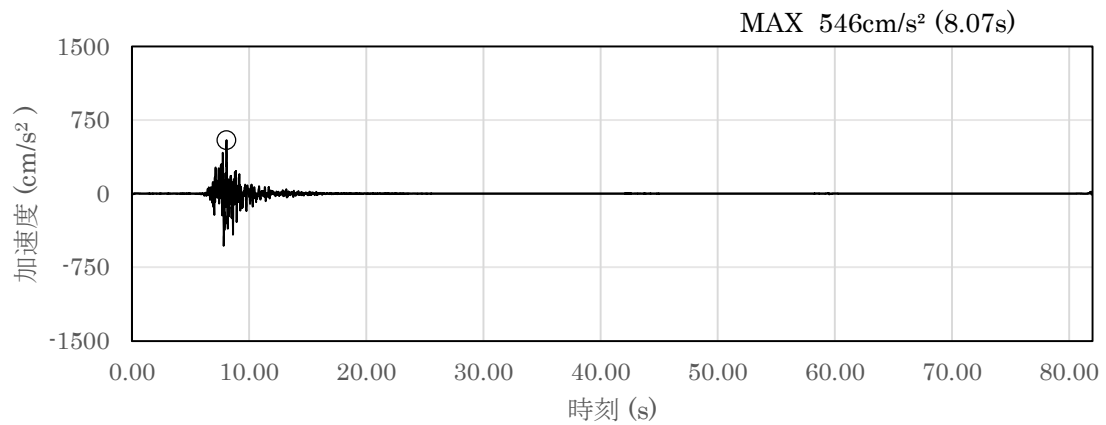


(a) 加速度時刻歴波形

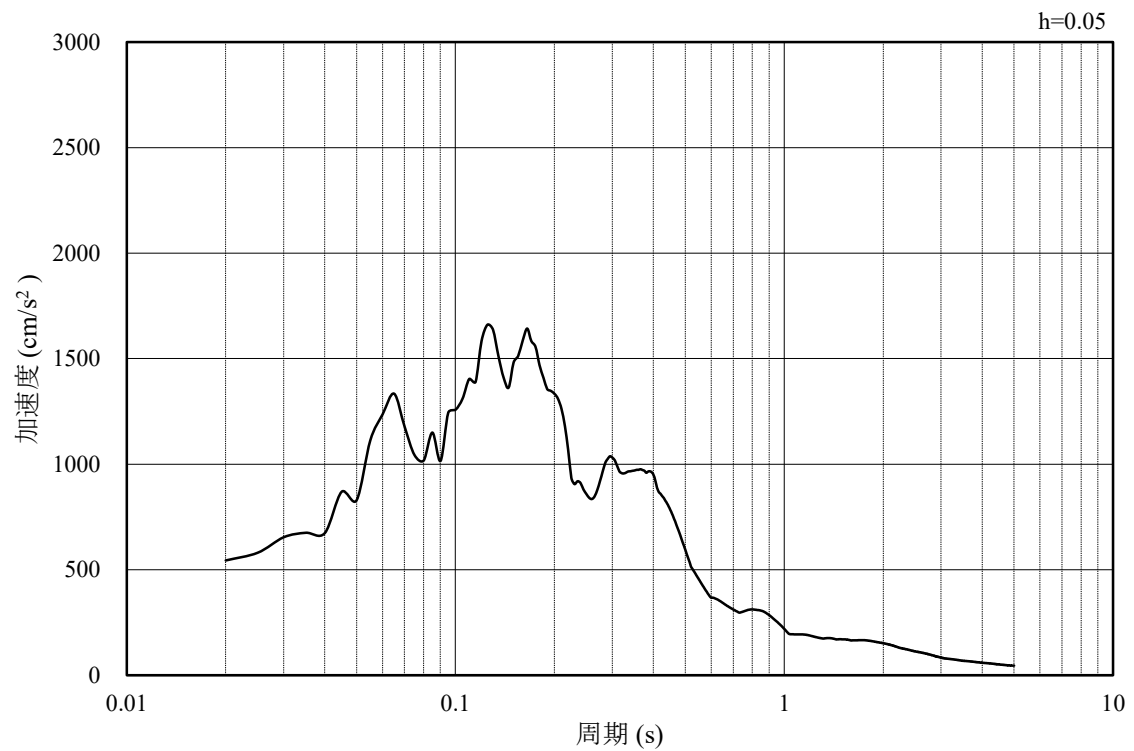


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-2 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S s - D)

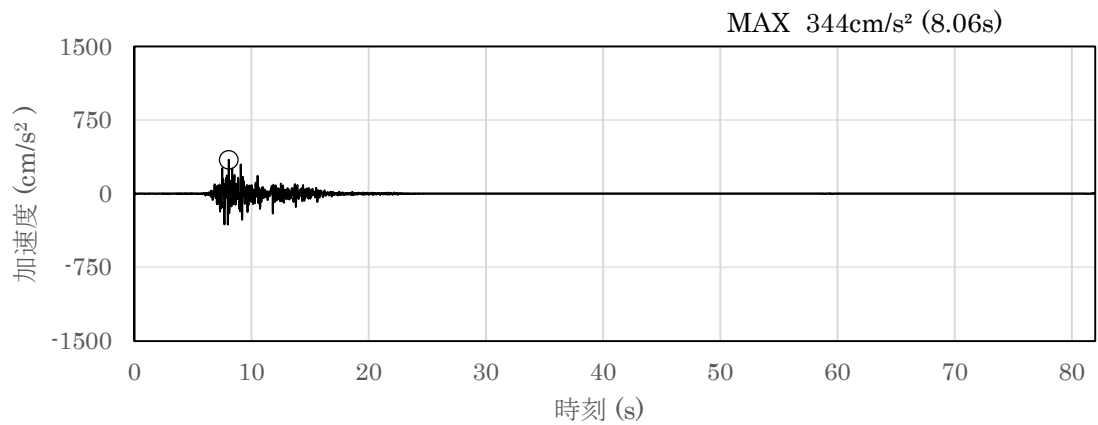


(a) 加速度時刻歴波形

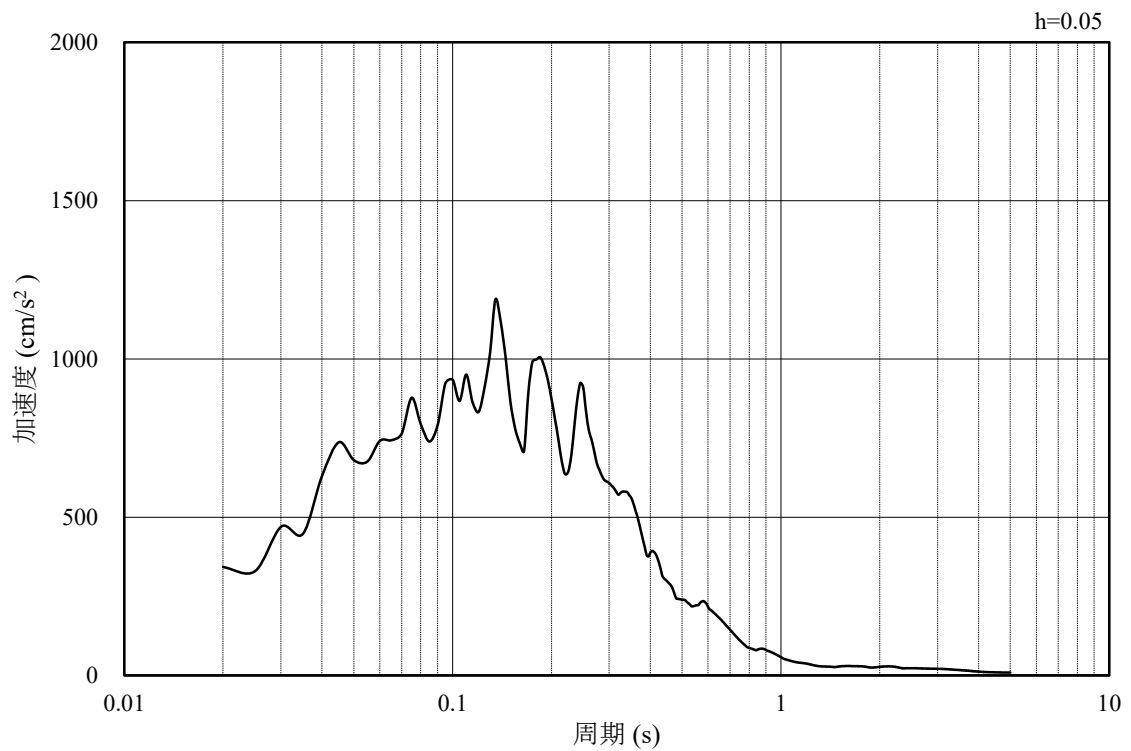


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-3 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S<sub>s</sub>-F1, EW方向)

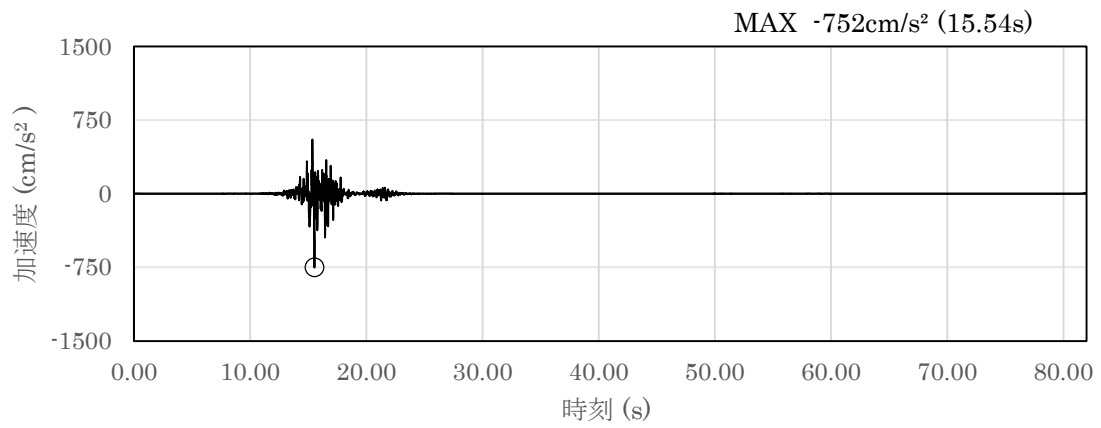


(a) 加速度時刻歴波形

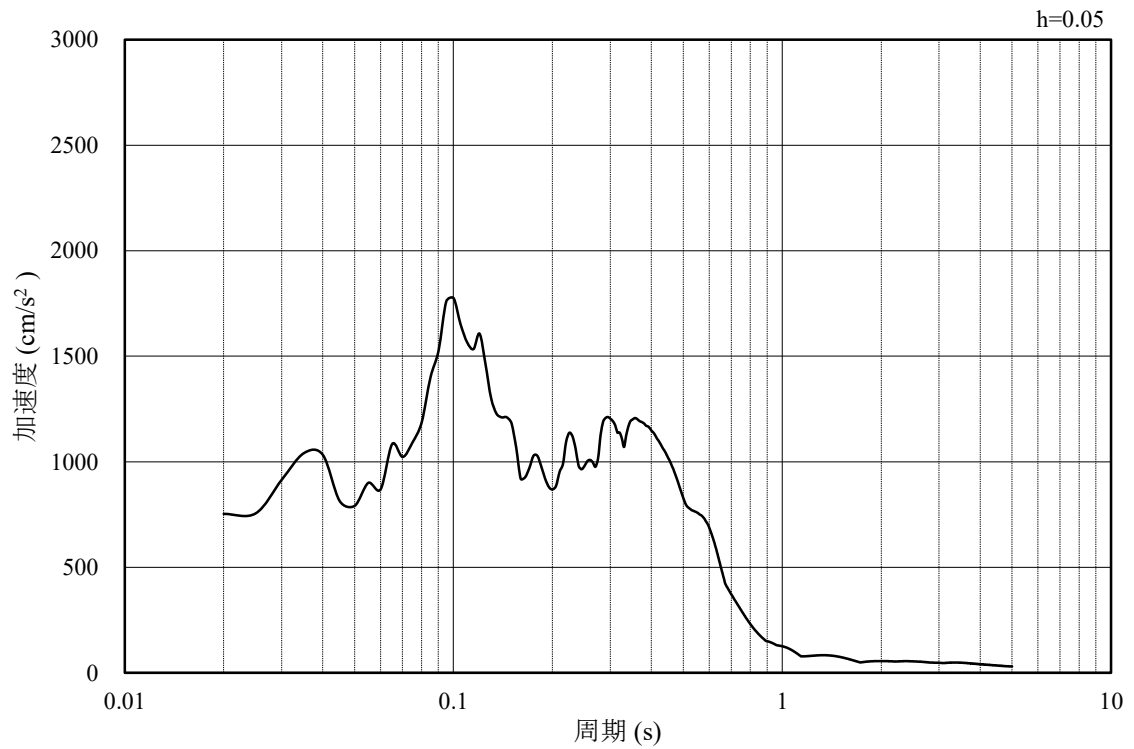


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-4 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S<sub>s</sub>-F1)



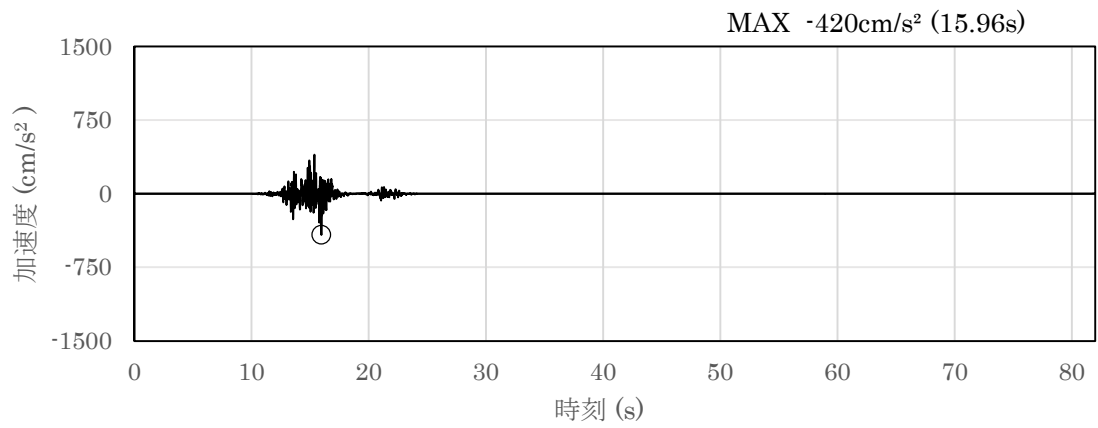
(a) 加速度時刻歴波形



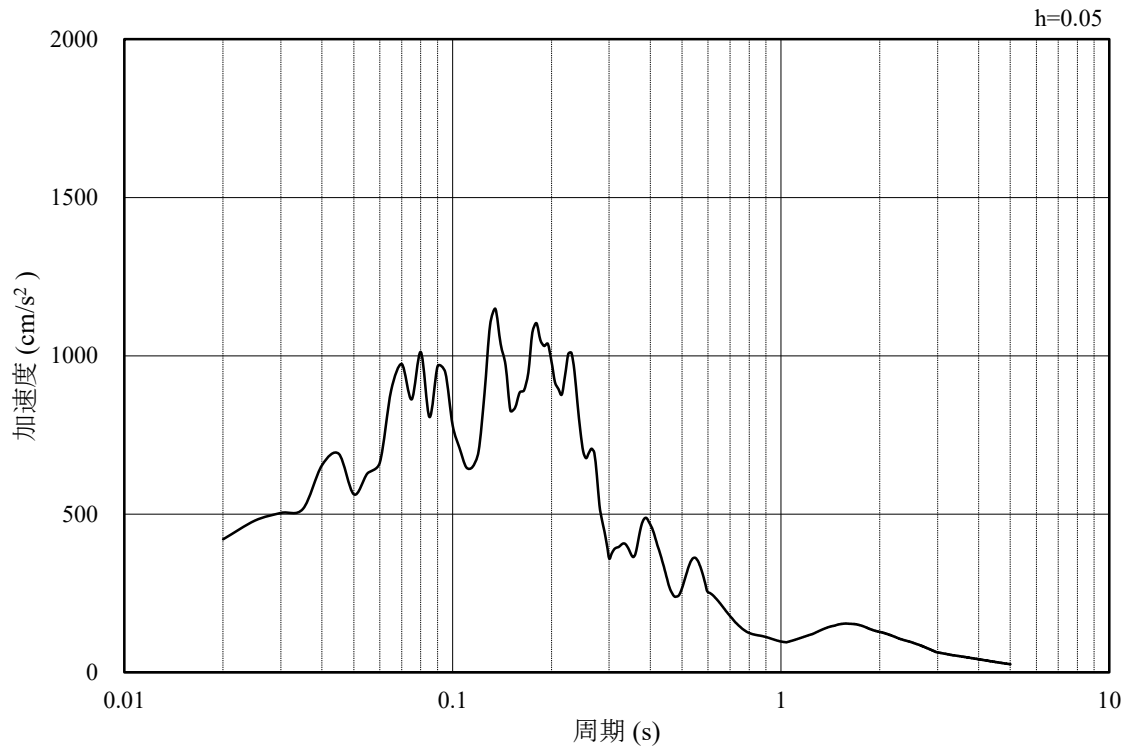
(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-5 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s - F 2 , E W方向)



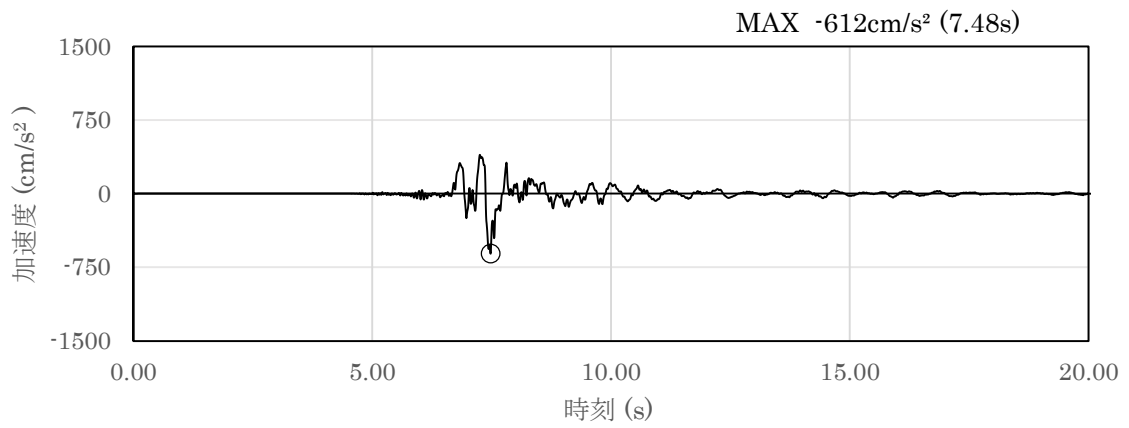


(a) 加速度時刻歴波形

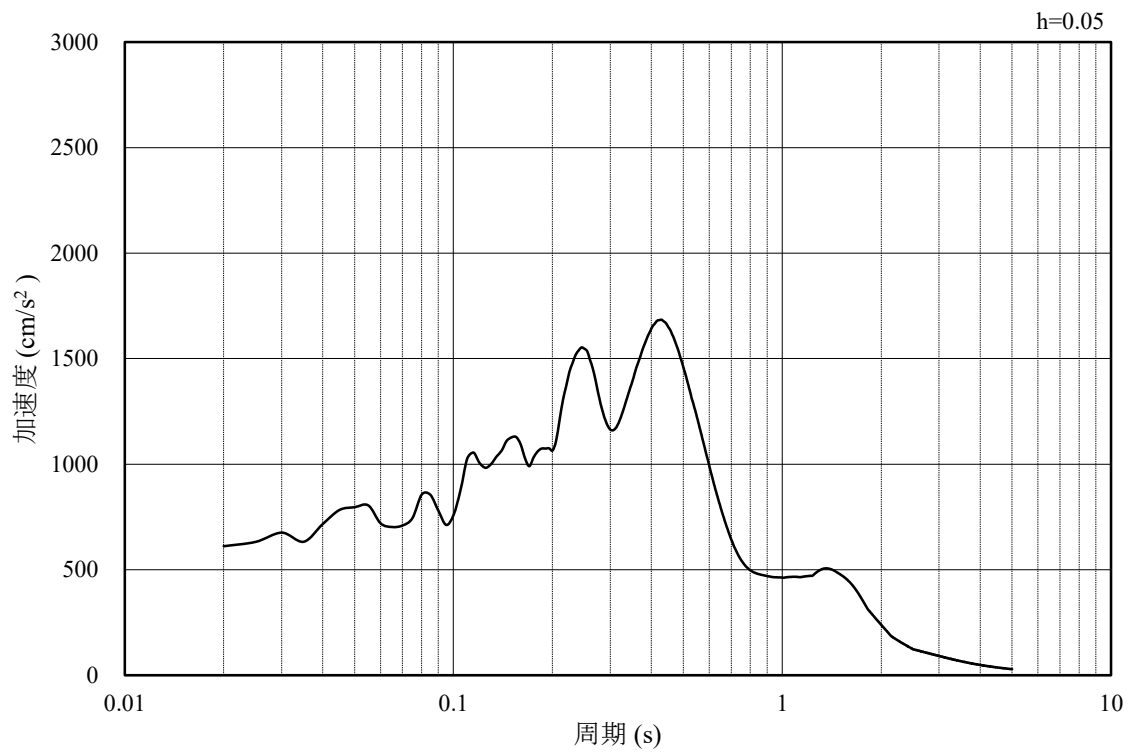


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-6 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S<sub>s</sub>-F2)

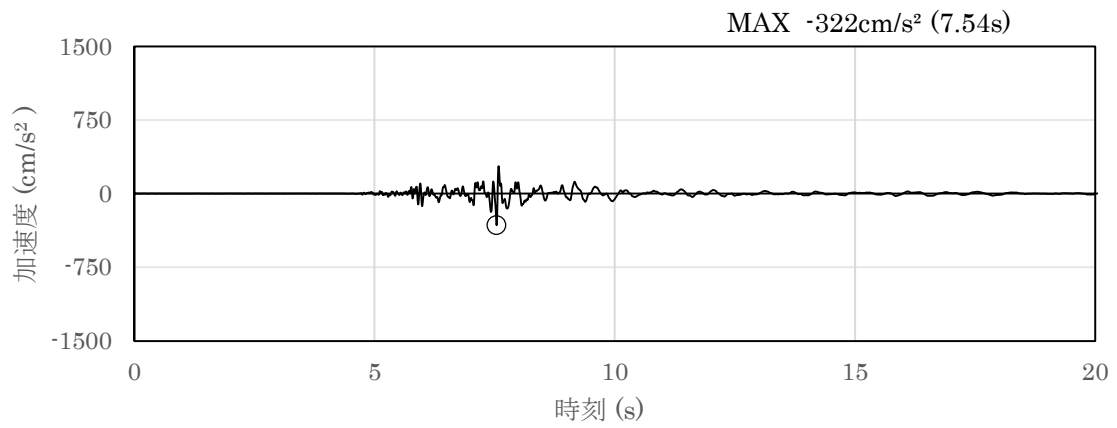


(a) 加速度時刻歴波形

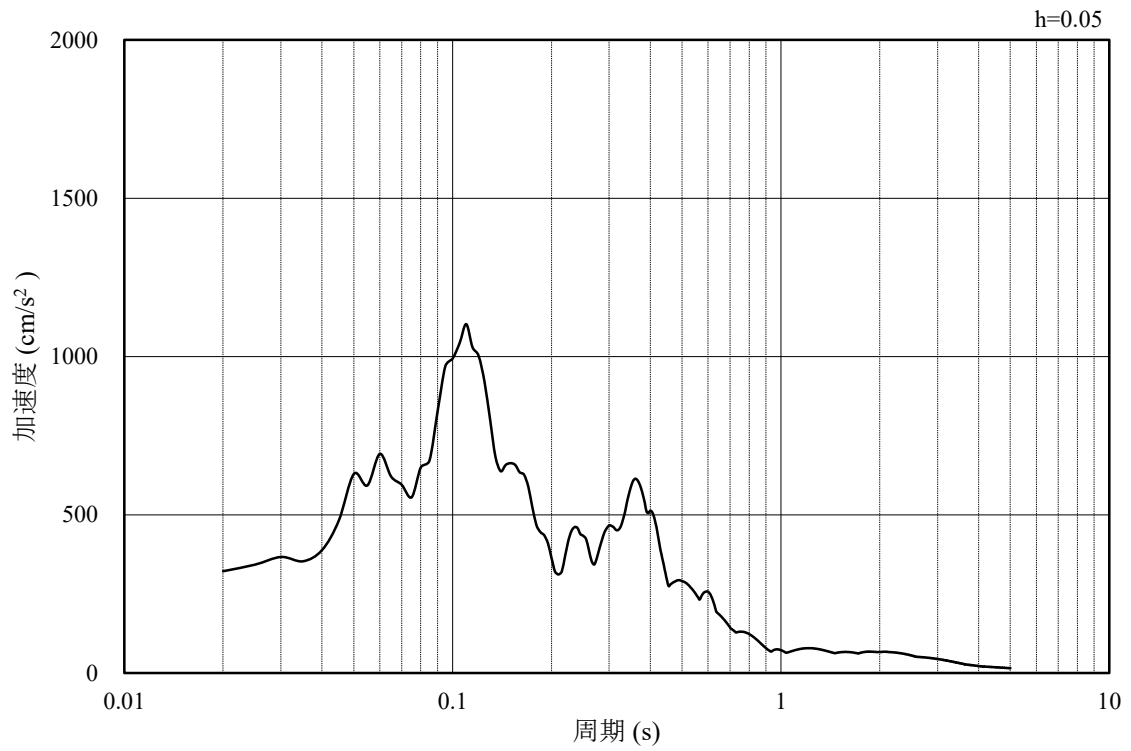


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-7 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S<sub>s</sub>-N1)

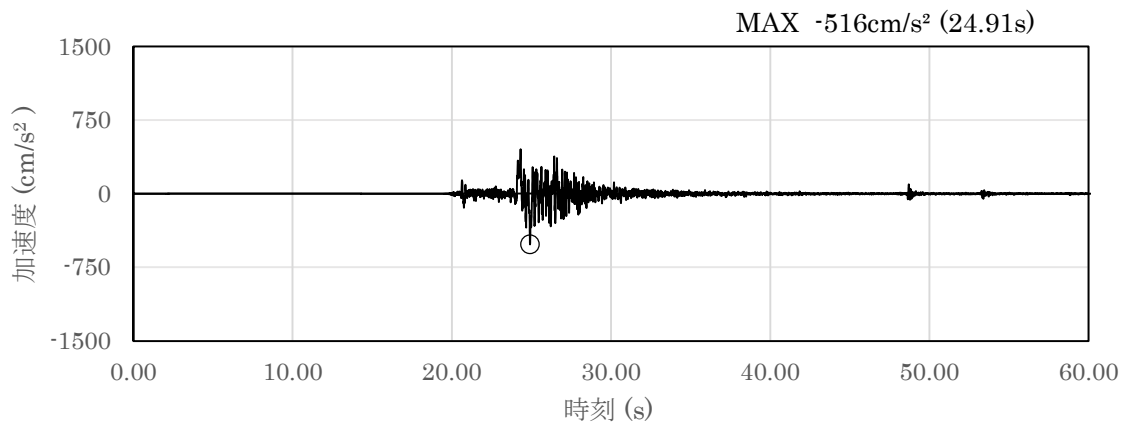


(a) 加速度時刻歴波形

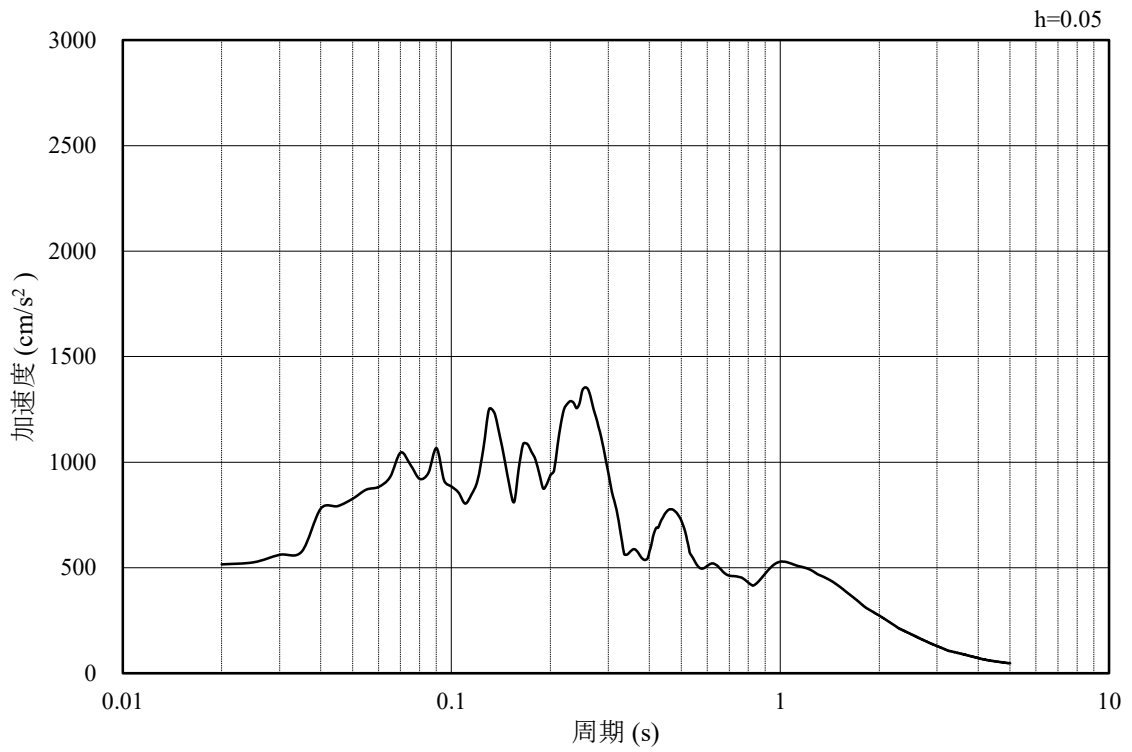


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-8 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S<sub>s</sub>-N1)

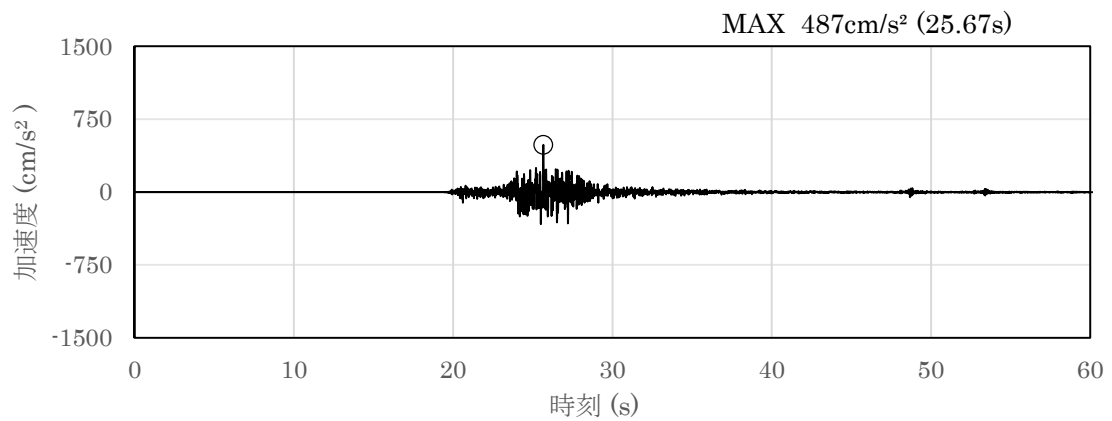


(a) 加速度時刻歴波形

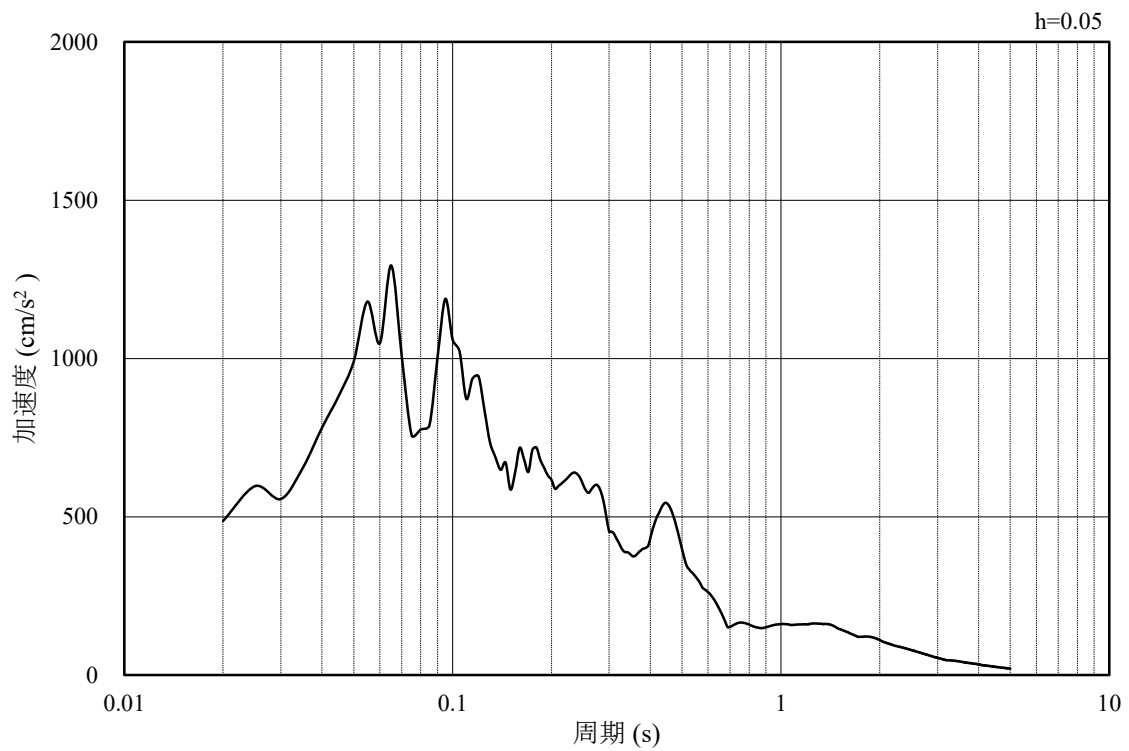


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-9 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s - N 2 , N S 方向)

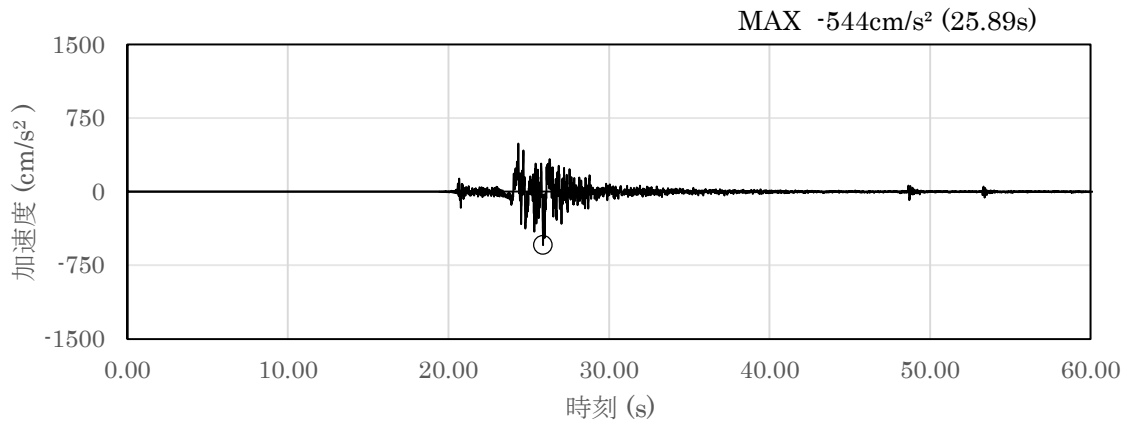


(a) 加速度時刻歴波形

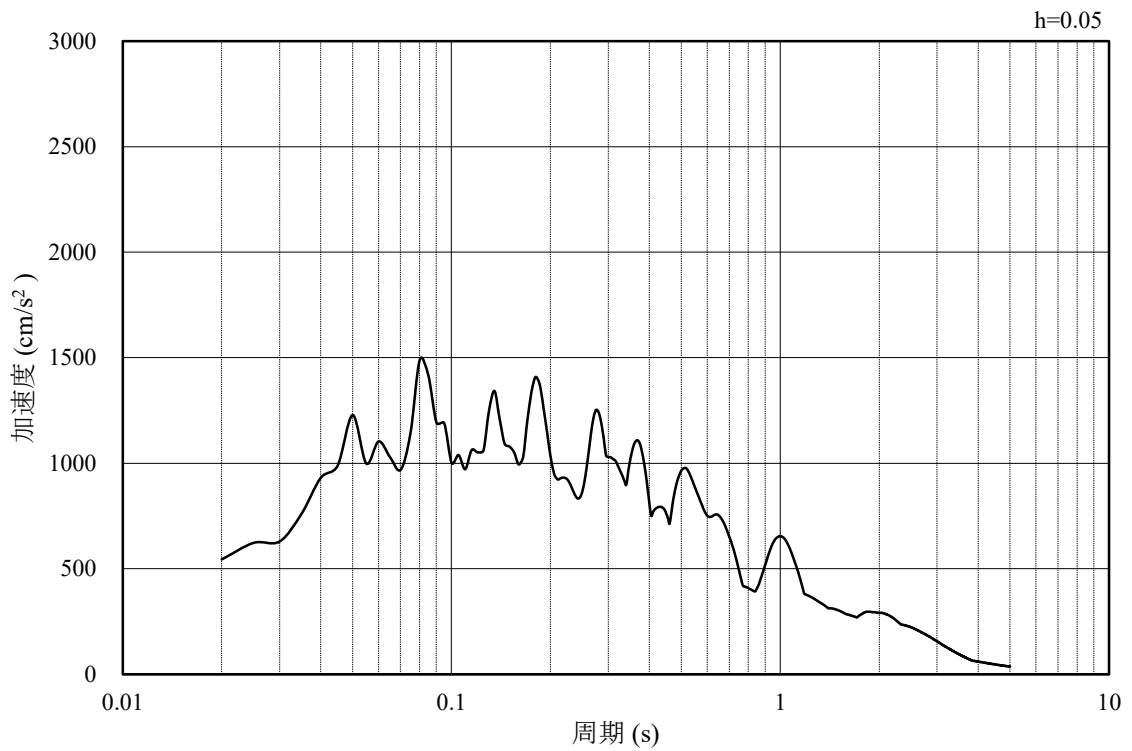


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-10 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S<sub>s</sub>-N<sub>2</sub>，NS方向)

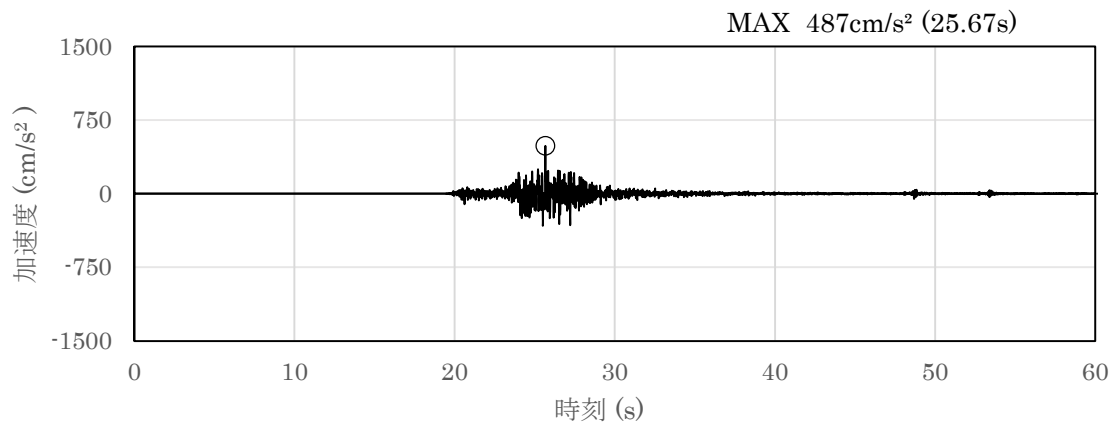


(a) 加速度時刻歴波形

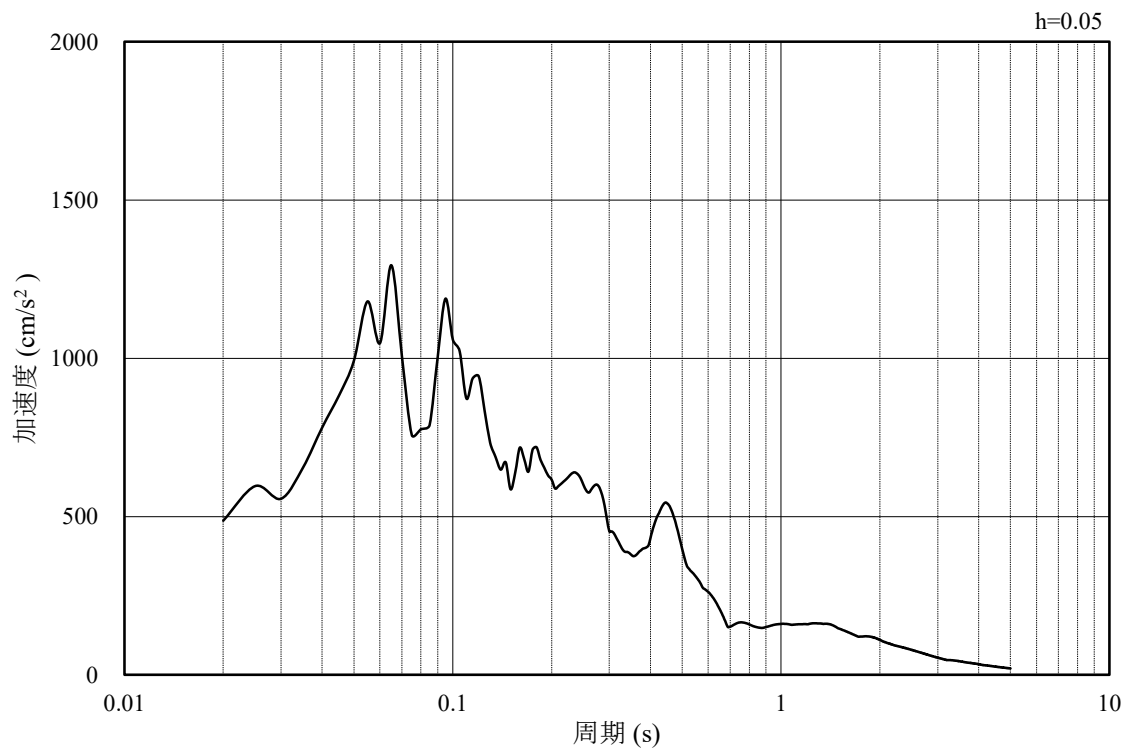


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-11 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s - N 2 , E W方向)



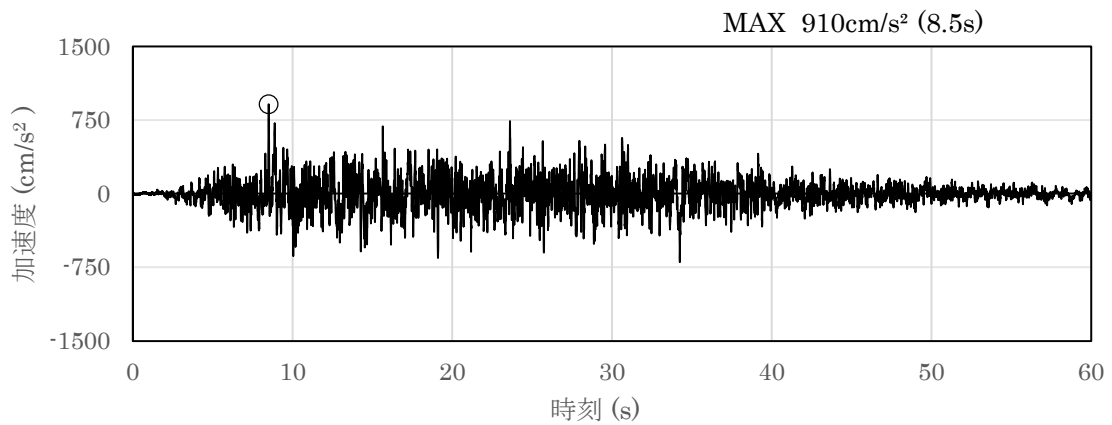
(a) 加速度時刻歴波形



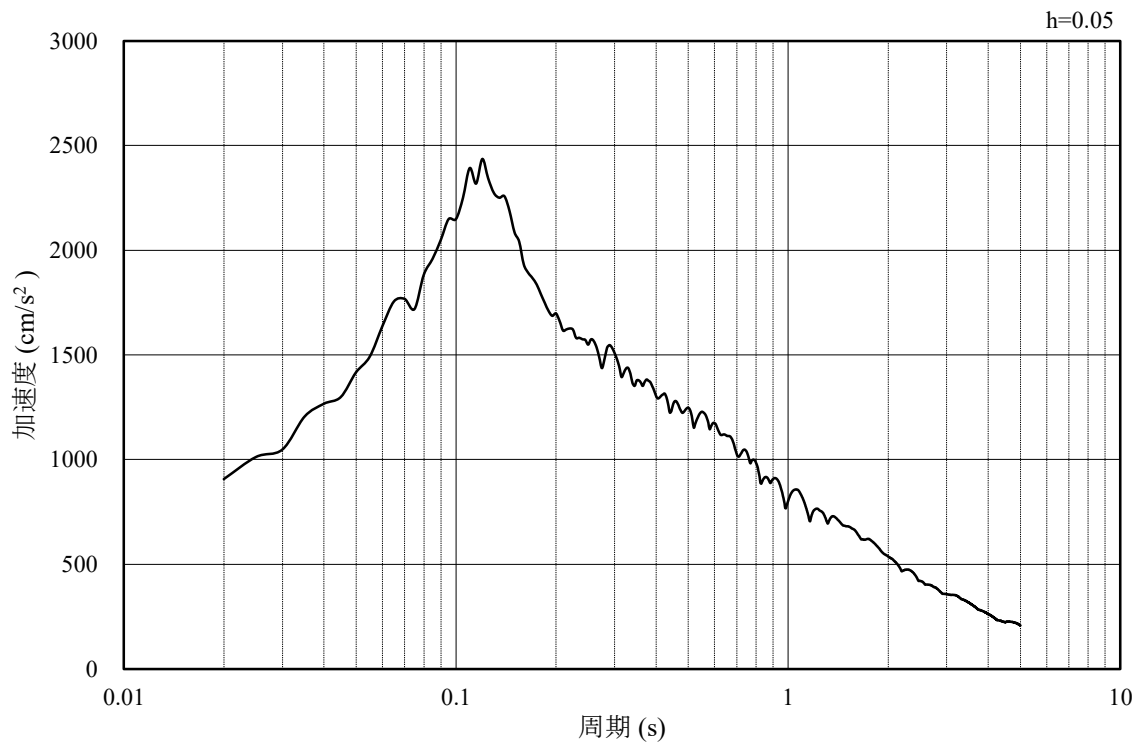
(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-12 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S<sub>s</sub>-N2, EW方向)

3.4.2 ⑤-⑤断面



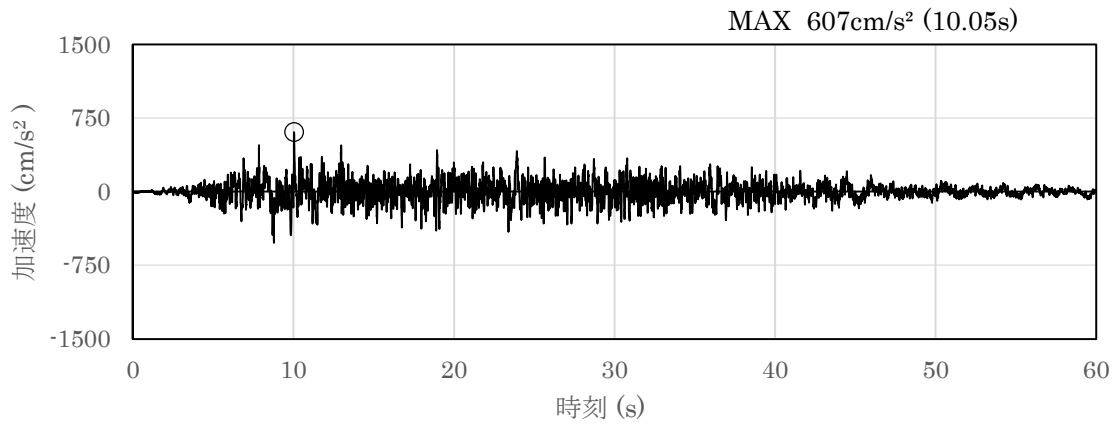
(a) 加速度時刻歴波形



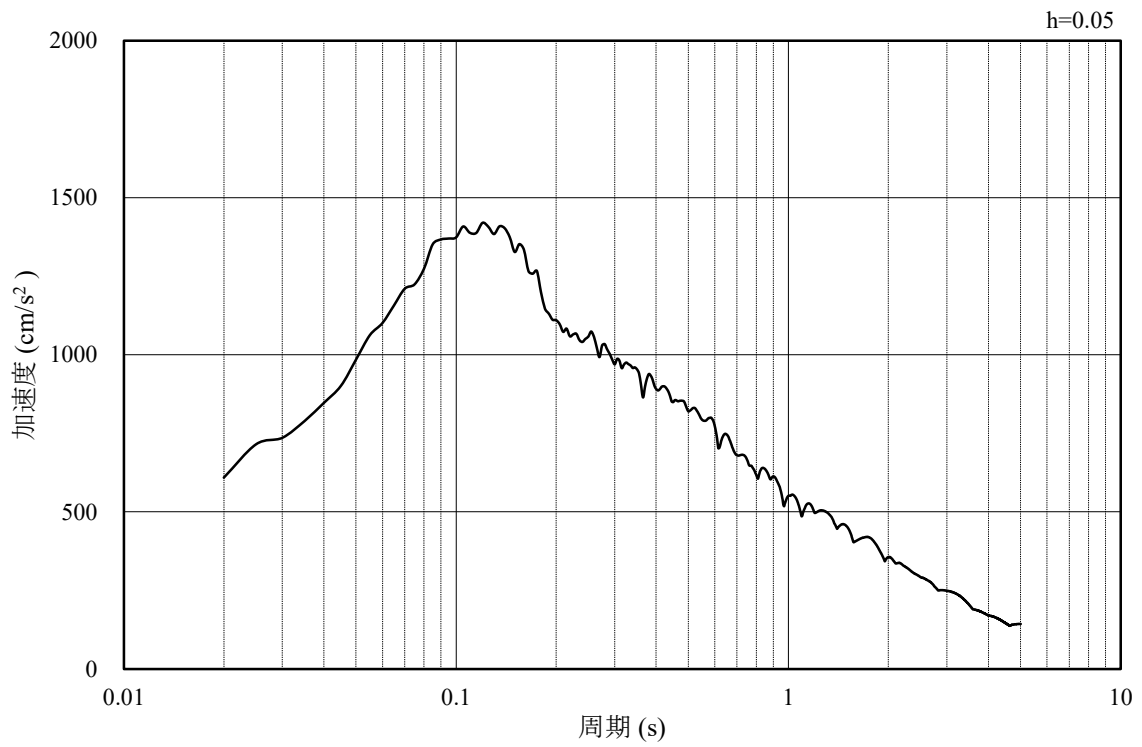
(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-13 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s-D)



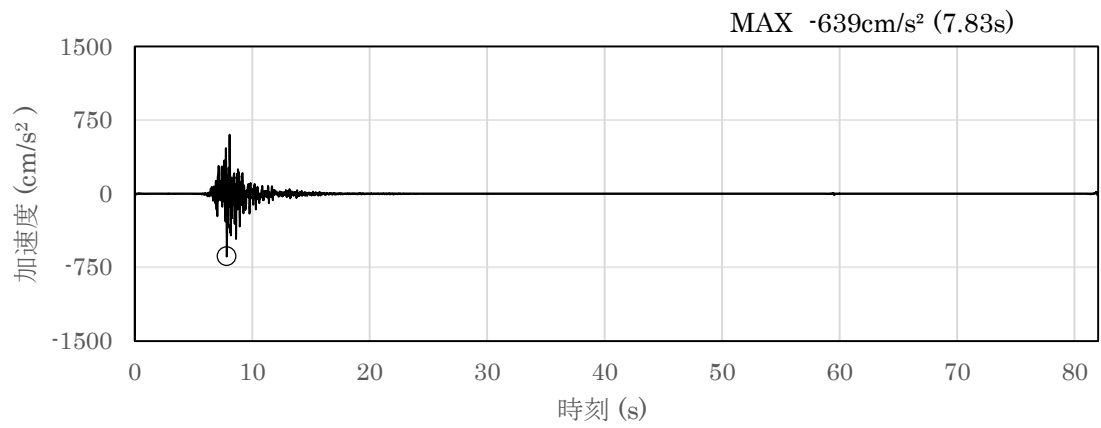


(a) 加速度時刻歴波形

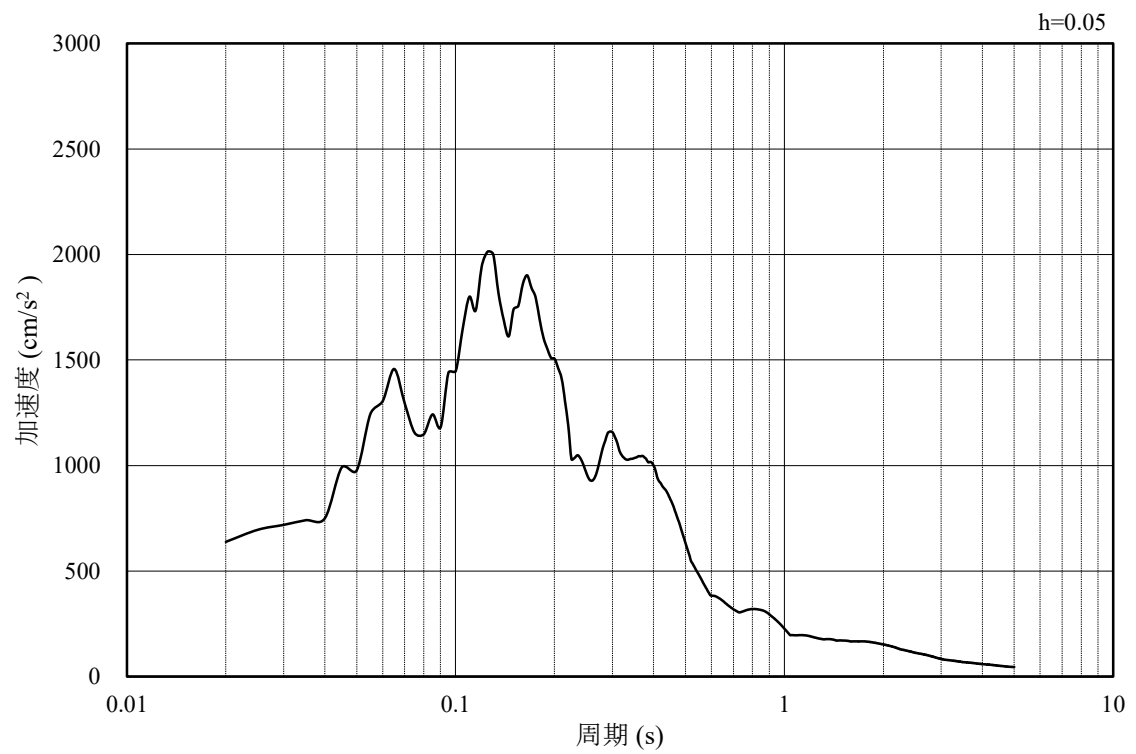


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-14 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S s-D)

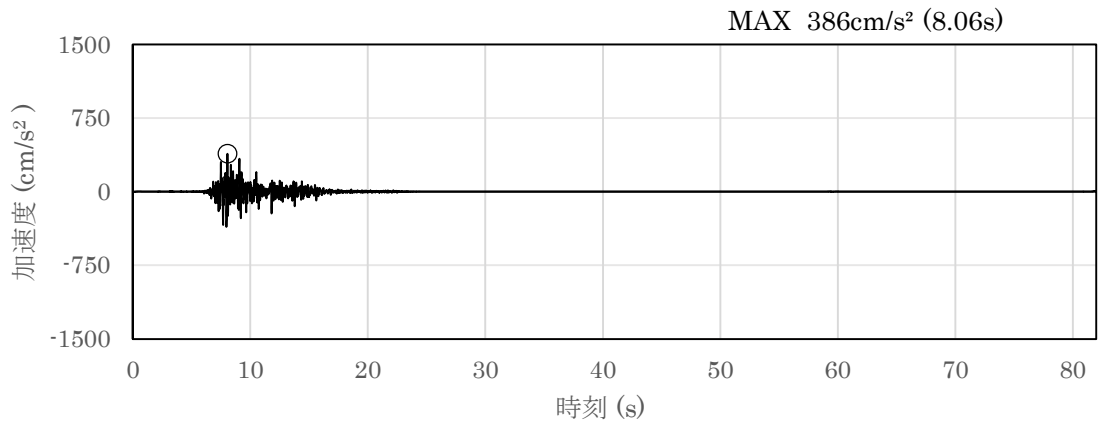


(a) 加速度時刻歴波形

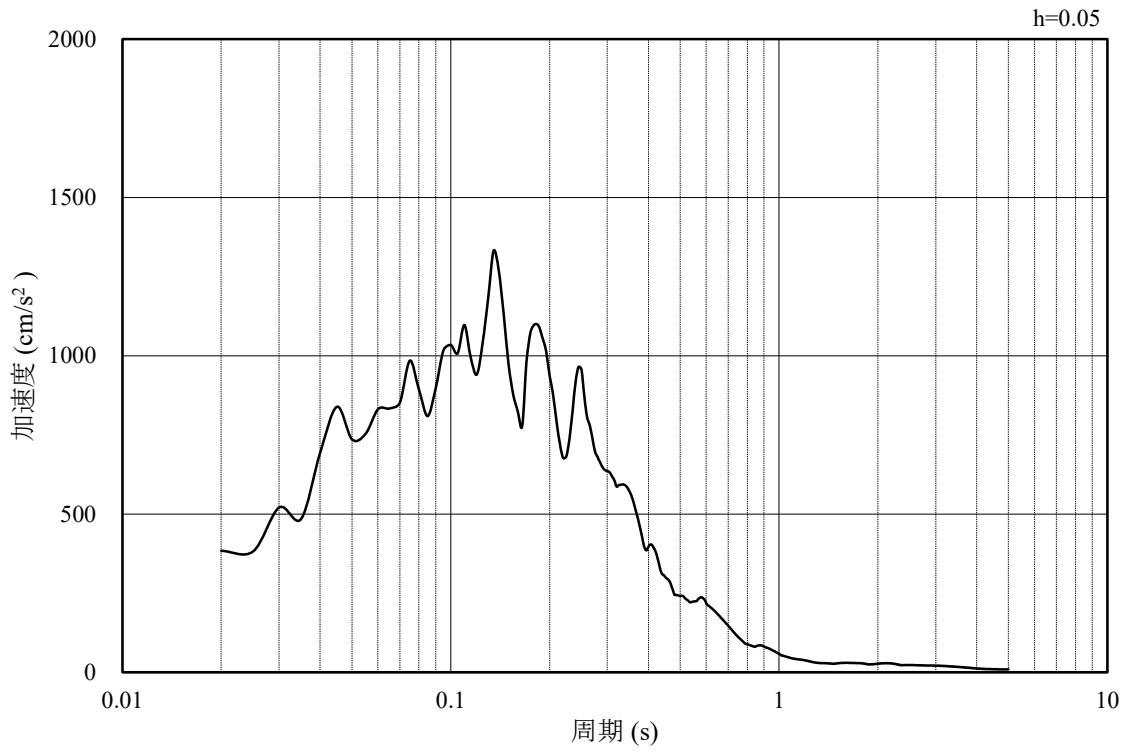


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-15 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s-F 1，EW方向)

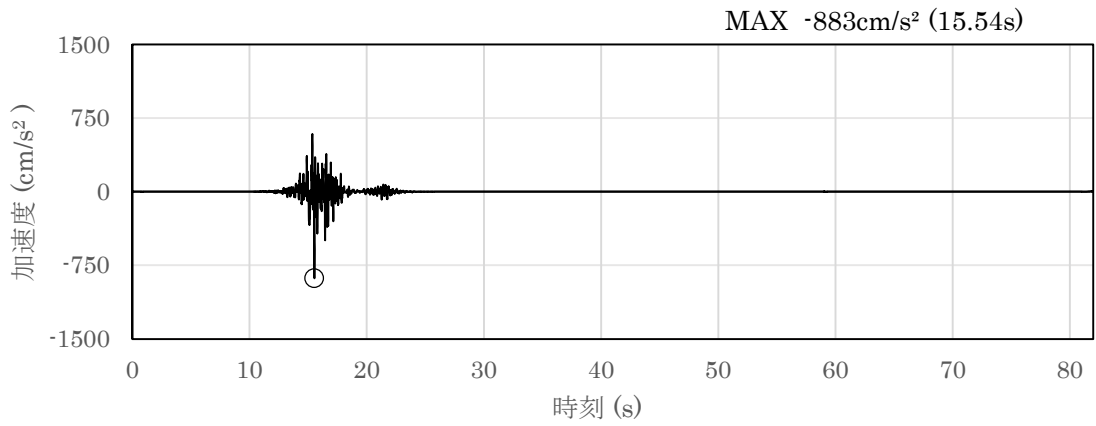


(a) 加速度時刻歴波形

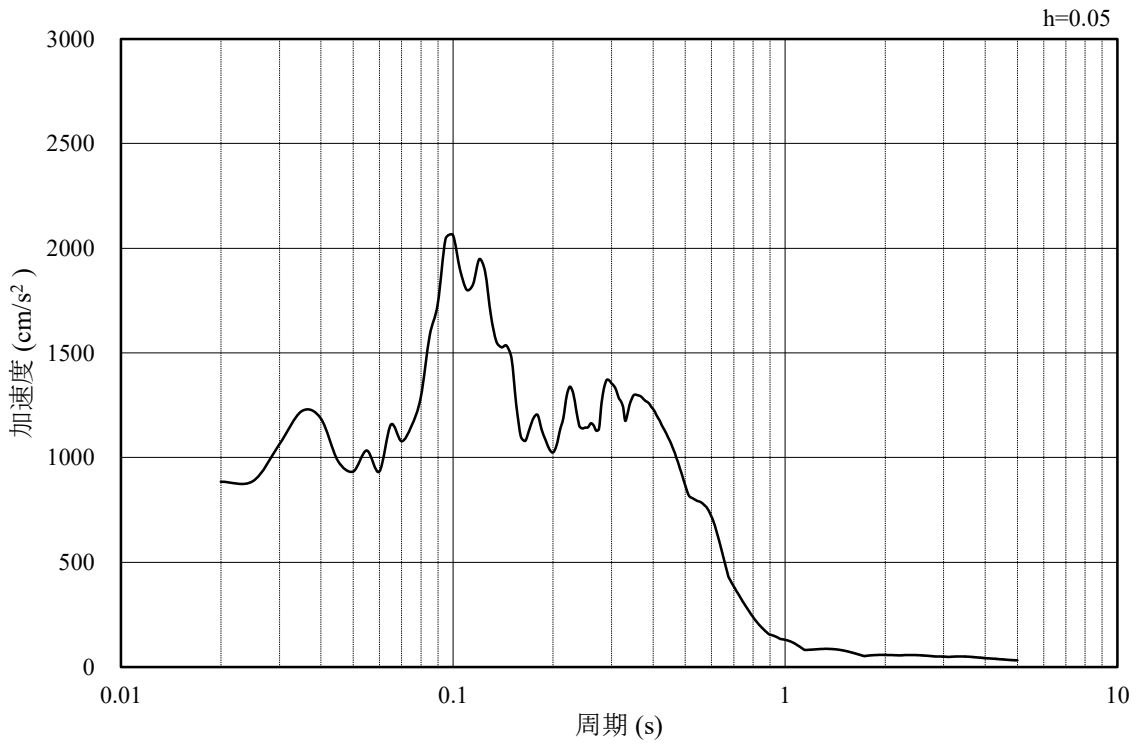


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-16 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S s-F 1)

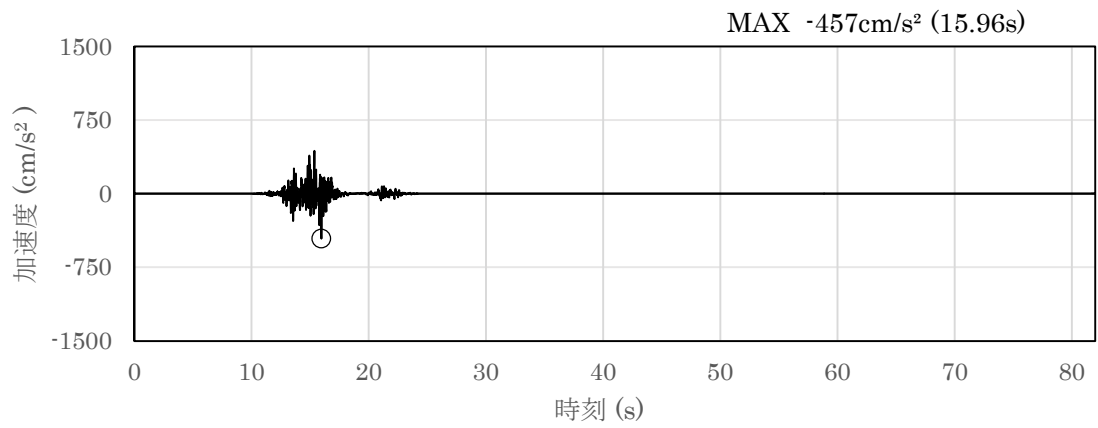


(a) 加速度時刻歴波形

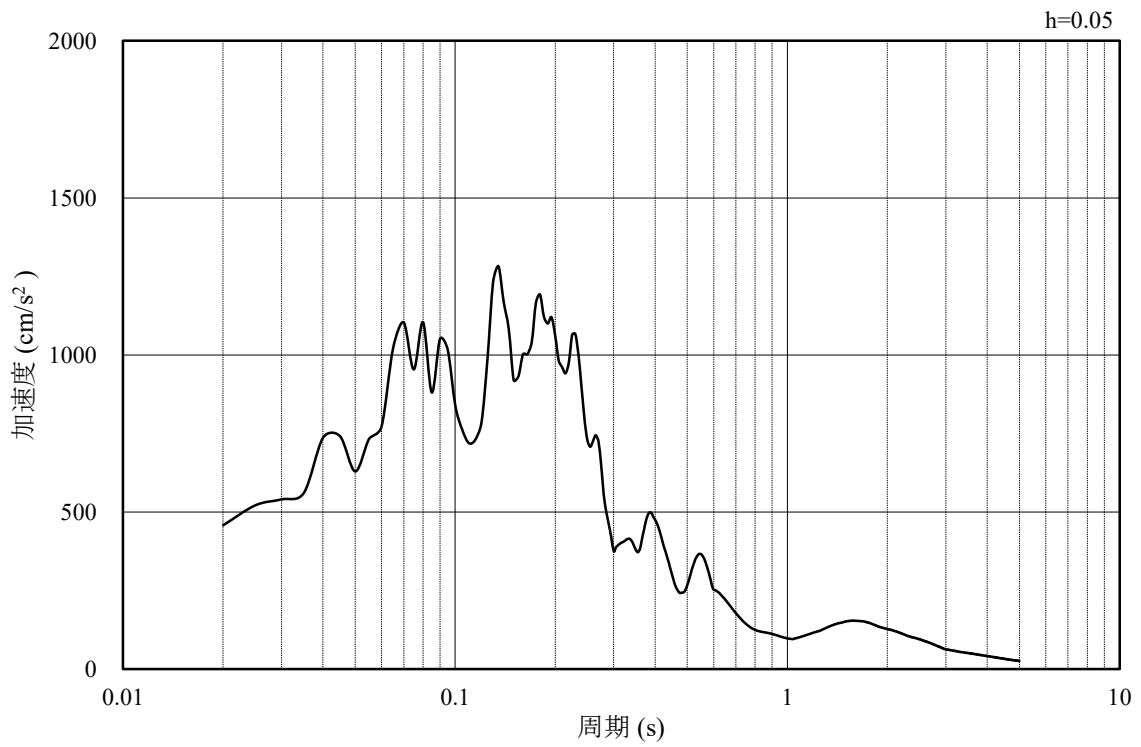


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-17 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：Ss-F2, EW方向)

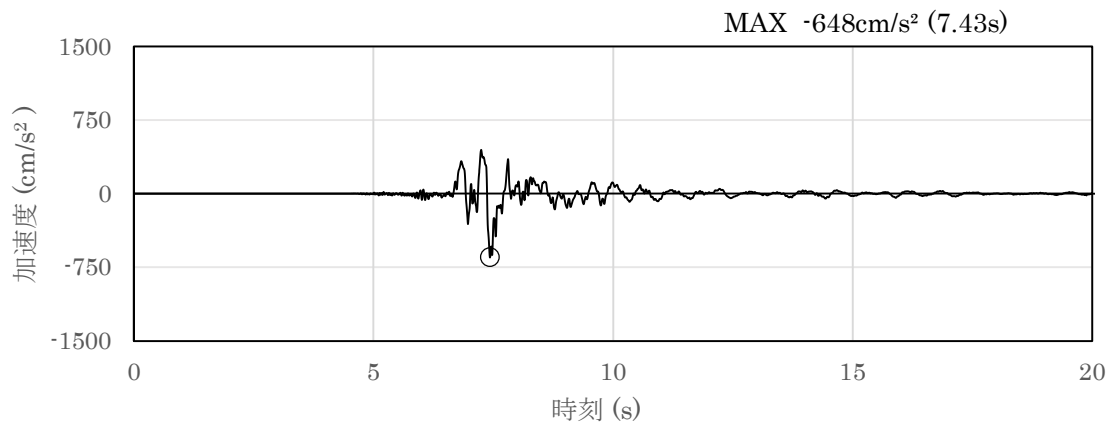


(a) 加速度時刻歴波形

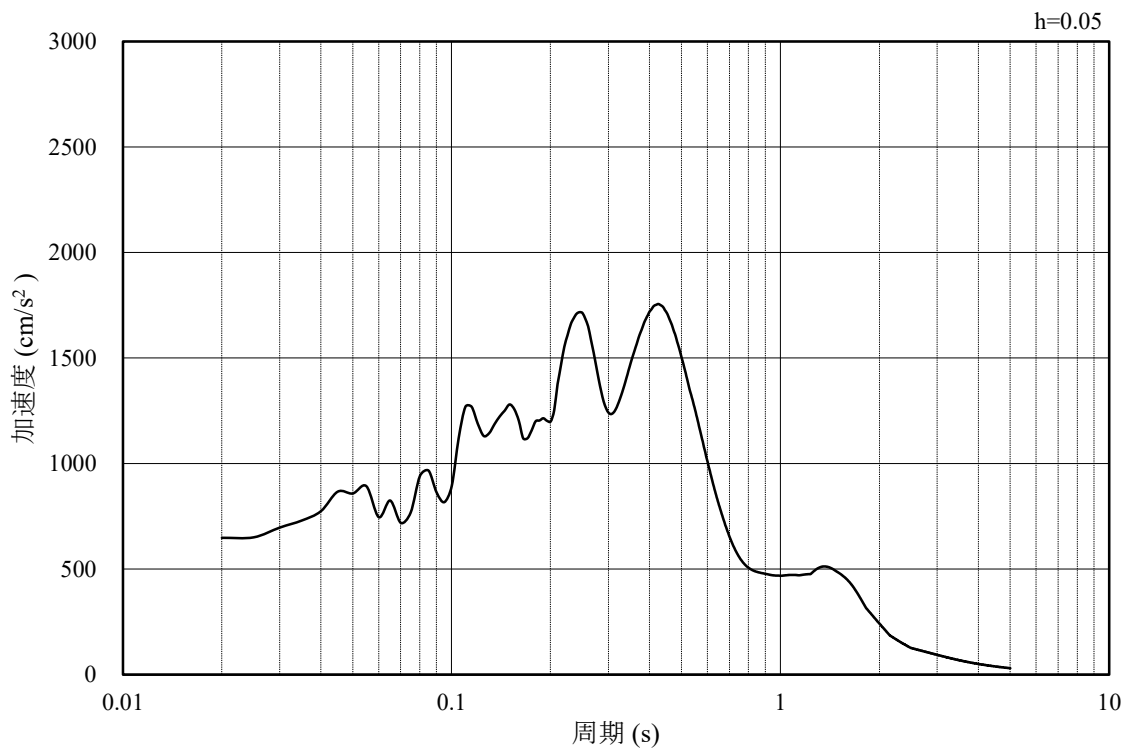


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-18 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S s-F 2)

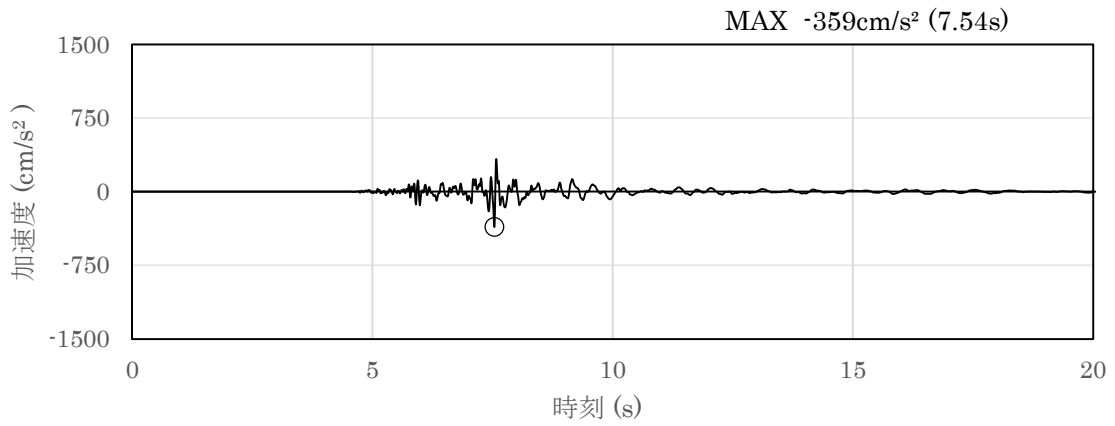


(a) 加速度時刻歴波形

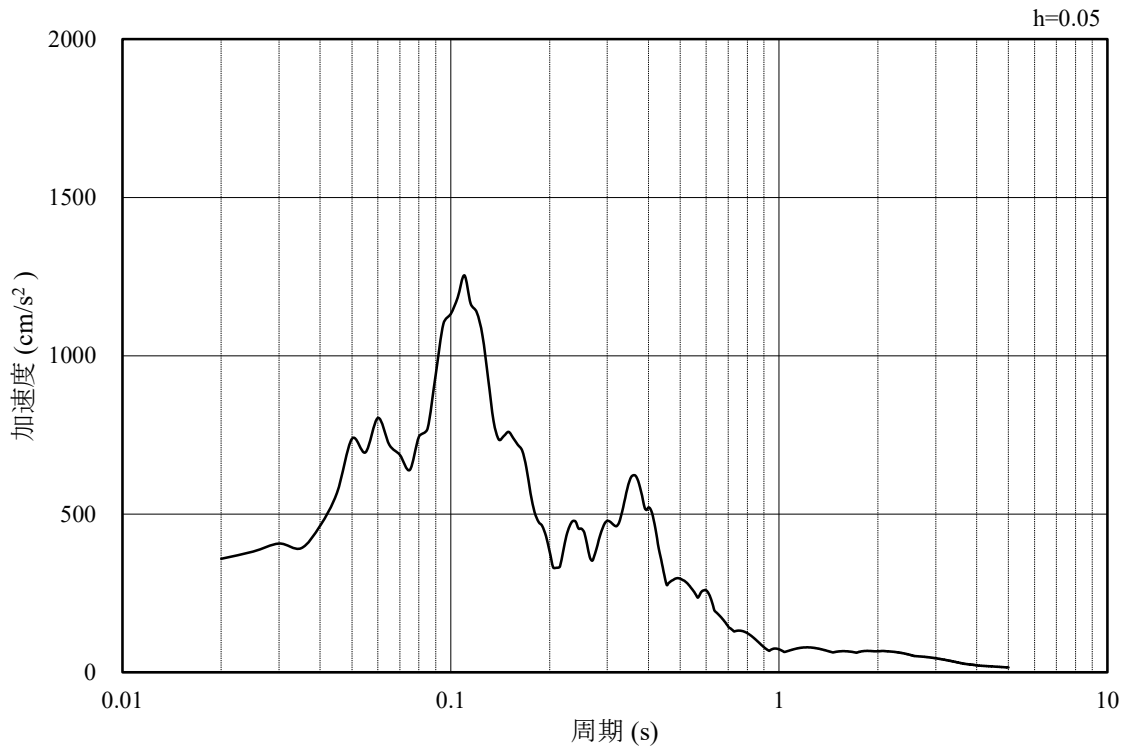


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-19 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s-N 1)

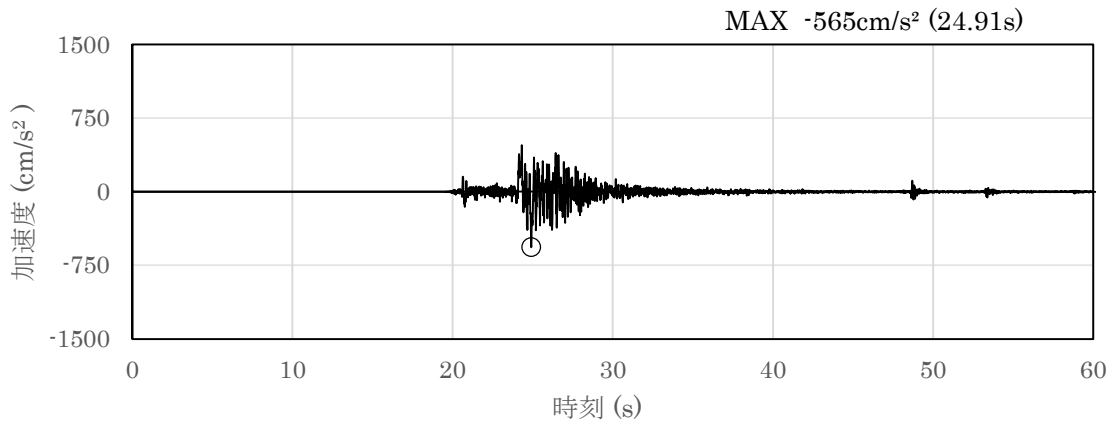


(a) 加速度時刻歴波形

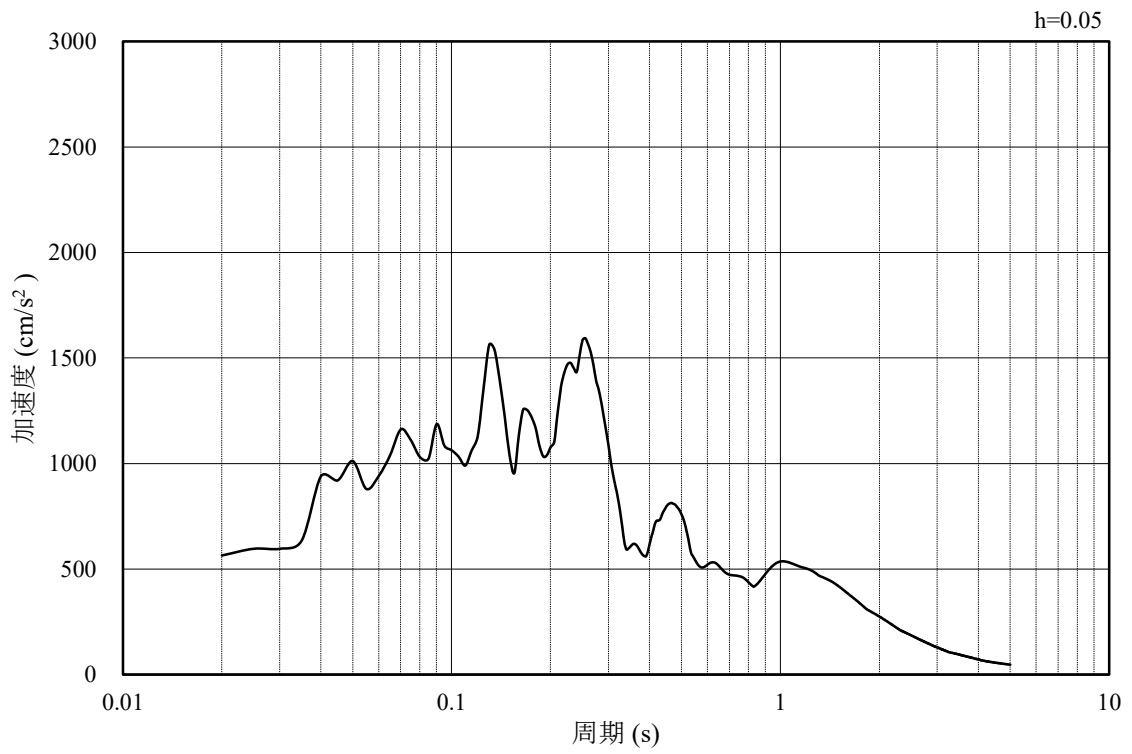


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-20 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S<sub>s</sub>-N1)



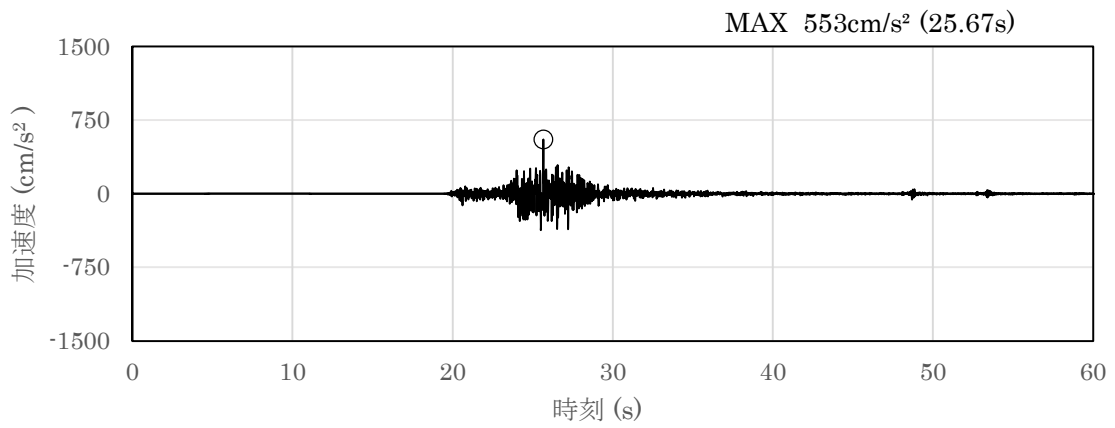
(a) 加速度時刻歴波形



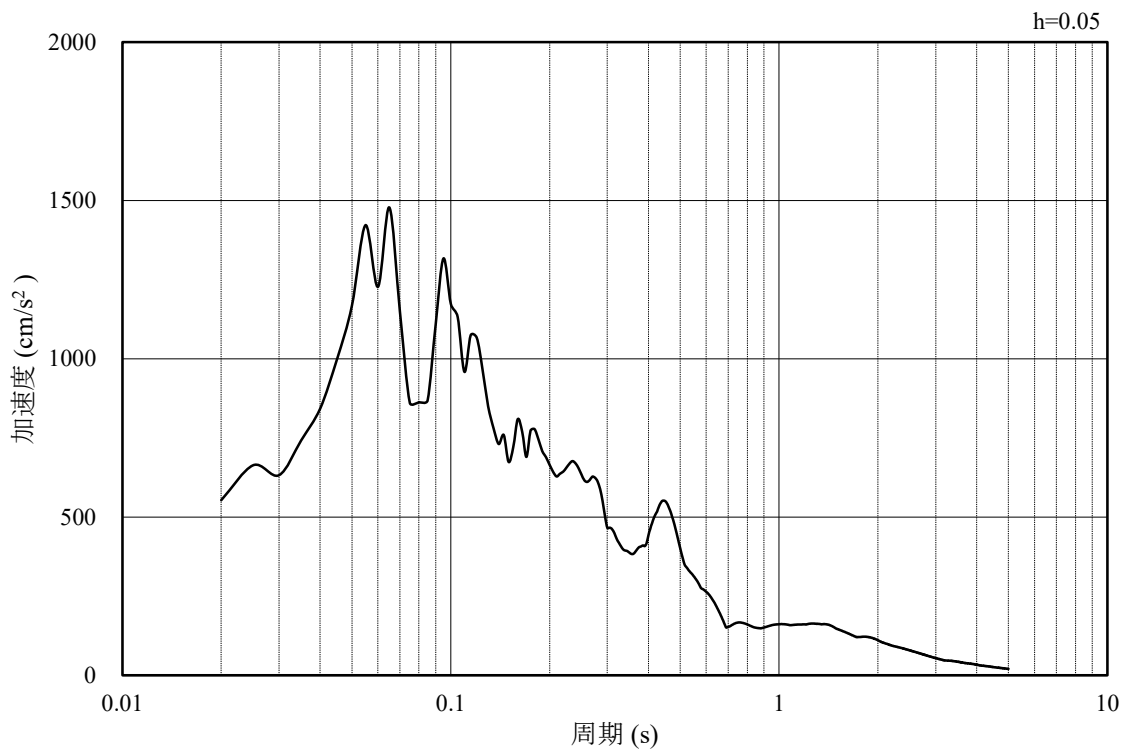
(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-21 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：Ss-N2, NS方向)



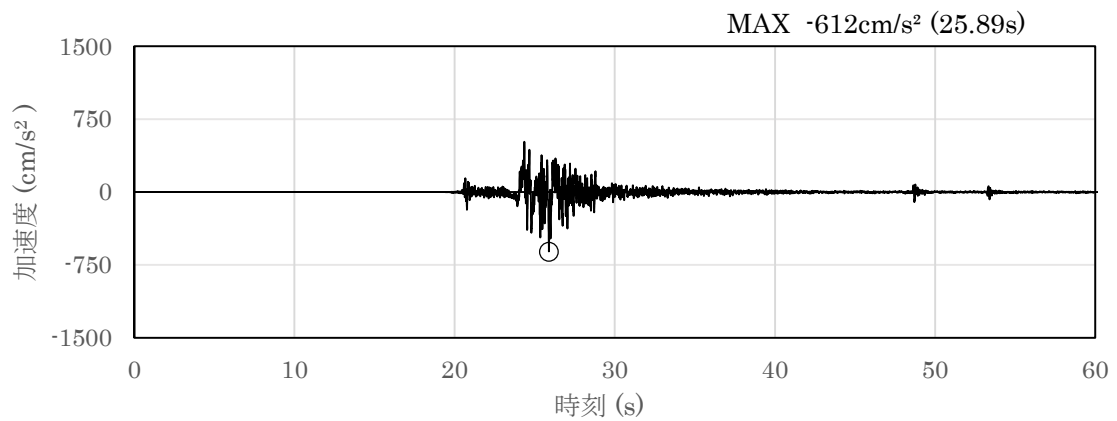


(a) 加速度時刻歴波形

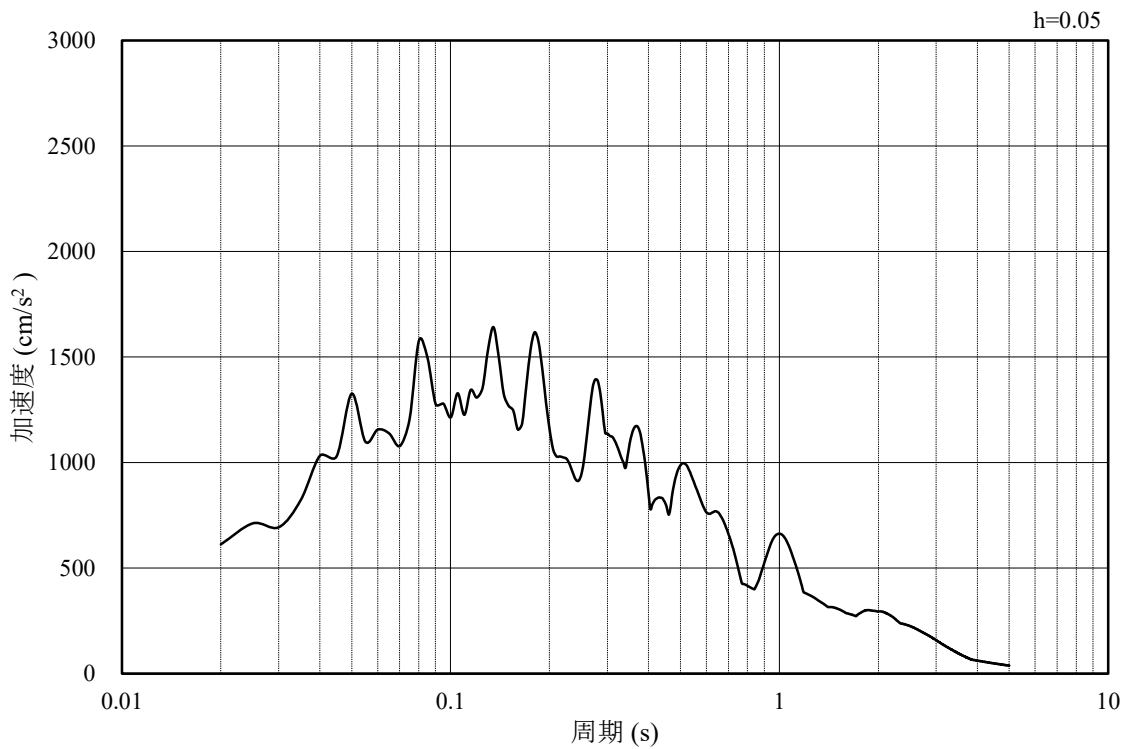


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-22 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S s-N 2, N S 方向)

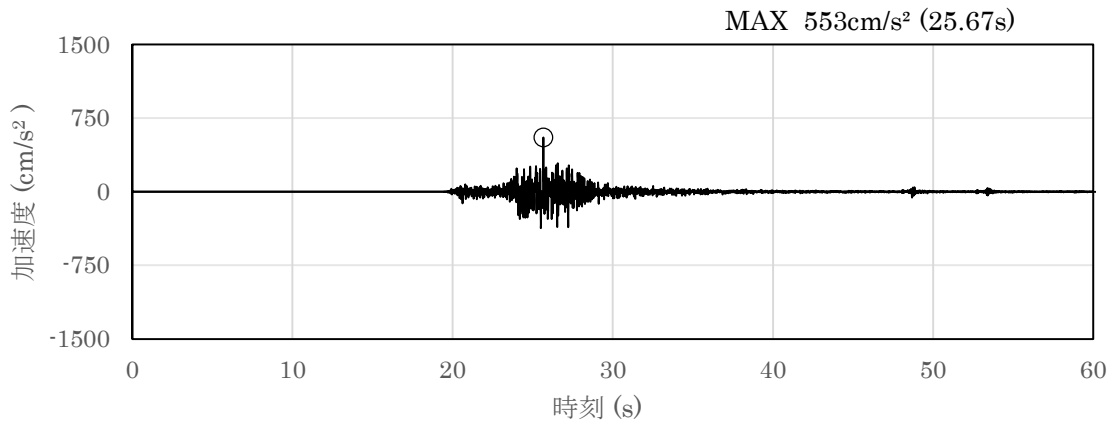


(a) 加速度時刻歴波形

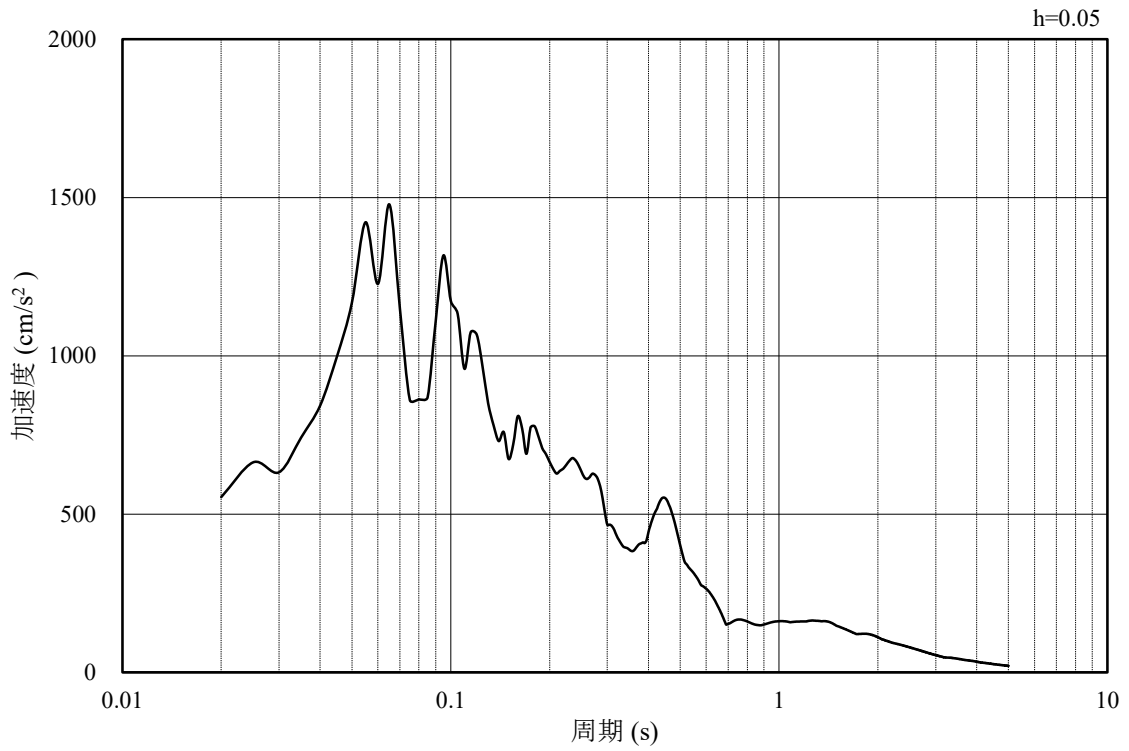


(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-23 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S<sub>s</sub>-N2，EW方向)



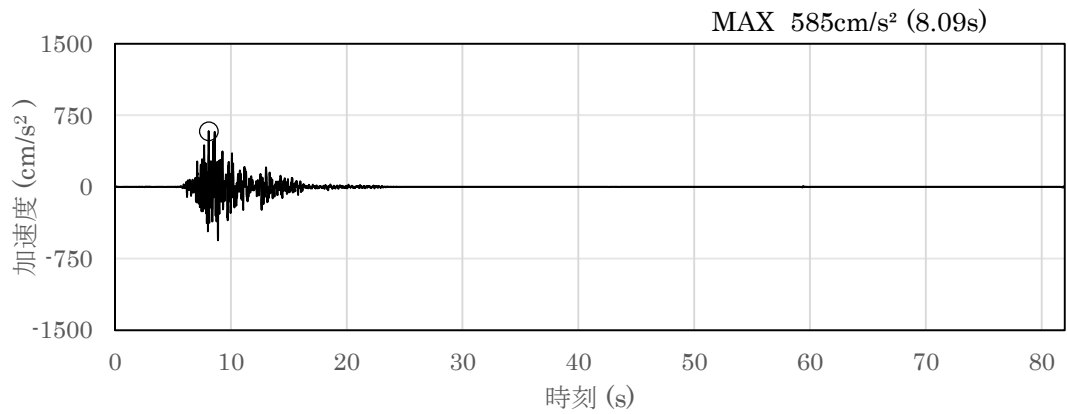
(a) 加速度時刻歴波形



(b) 加速度応答スペクトル

図 3.4.1-24 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(鉛直成分：S<sub>s</sub>-N 2，EW方向)

3.4.2 ⑦-⑦断面



(a) 加速度時刻歴波形

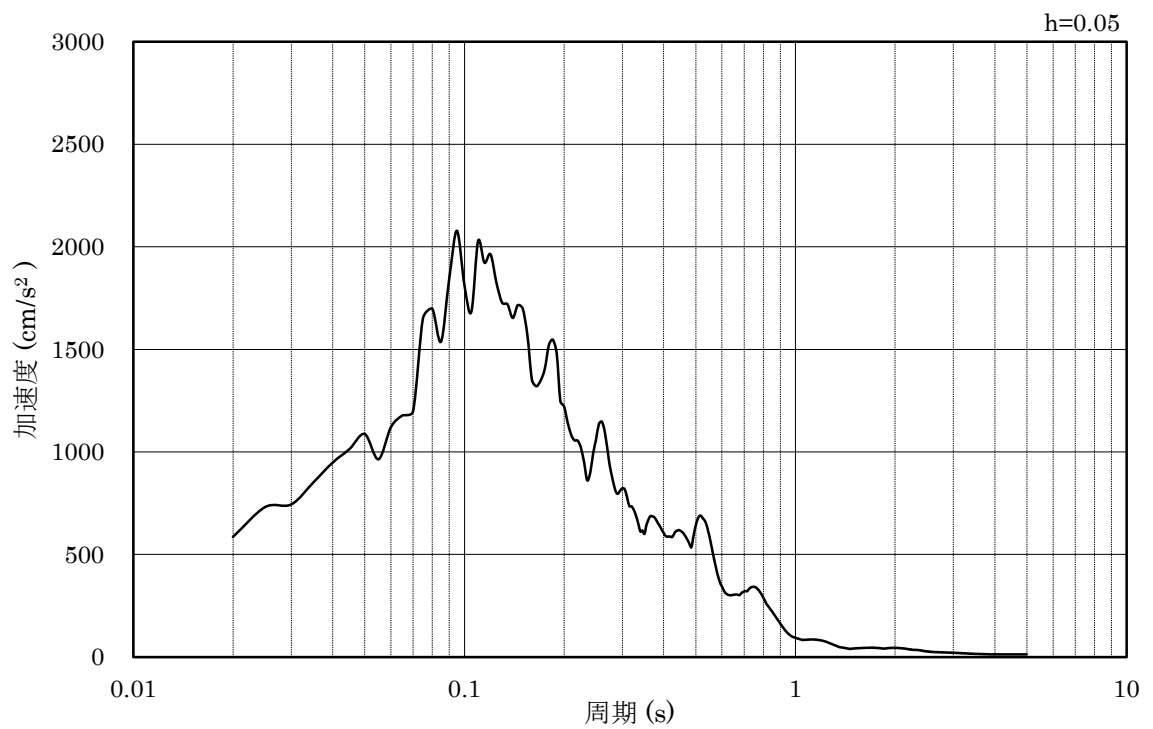
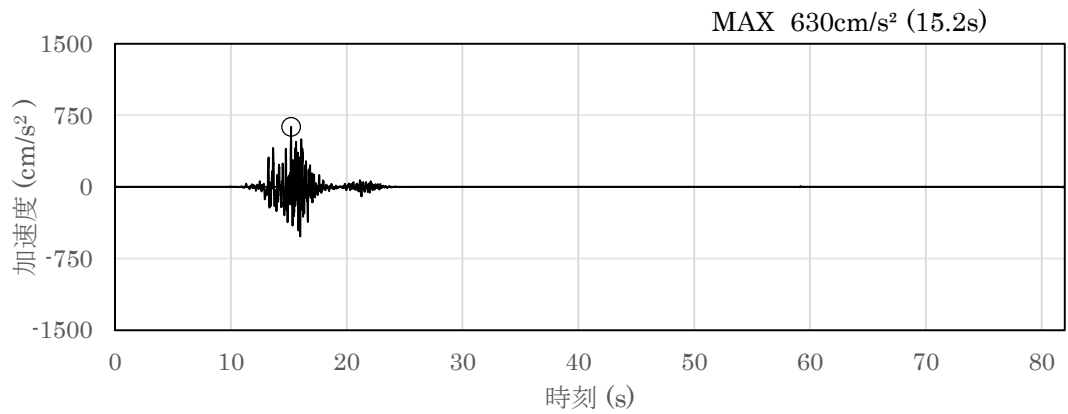


図 3.4.2-1 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s - F 1, N S 方向)



(a) 加速度時刻歴波形

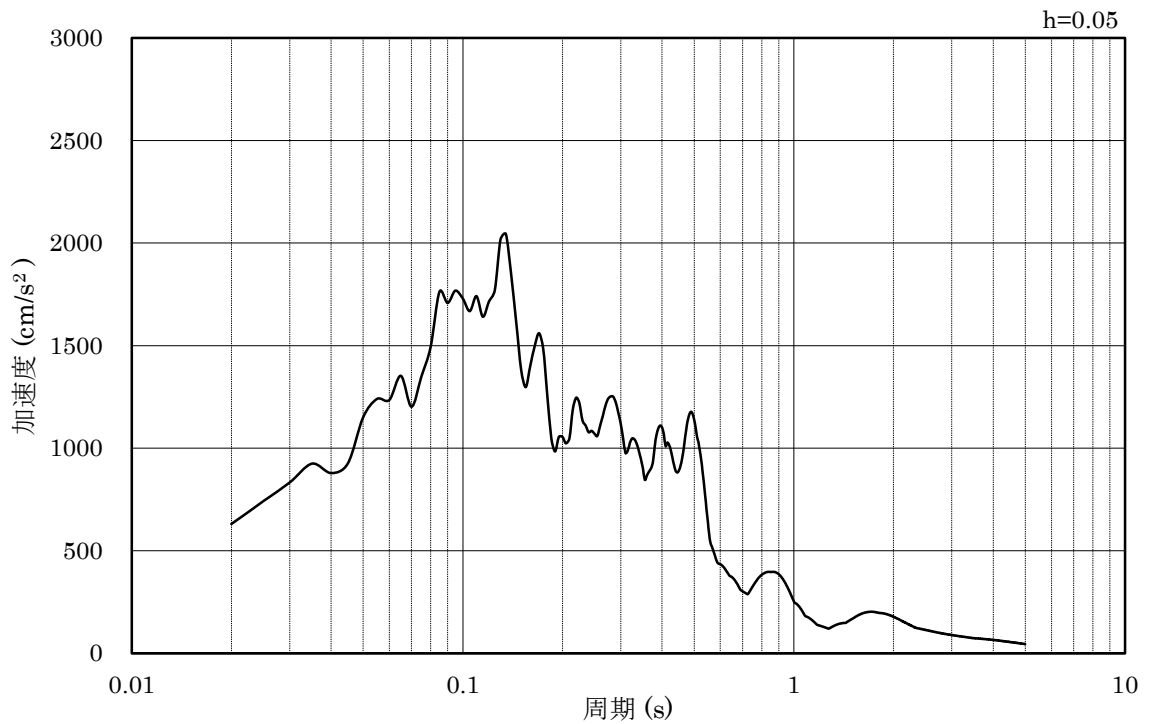


図 3.4.2-2 入力地震動の加速度時刻歴波形及び加速度応答スペクトル  
(水平成分：S s - F 2, N S 方向)

### 3.5 解析モデル及び諸元

#### 3.5.1 解析モデル

防波壁（逆T擁壁）の地震応答解析モデルを図 3.5.1-1, 図 3.5.1-3 及び図 3.5.1-5 に, 地質断面図を図 3.5.1-2, 図 3.5.1-4 及び図 3.5.1-6 に示す。

- |               |                     |                 |              |                   |
|---------------|---------------------|-----------------|--------------|-------------------|
| ■: 岩盤 (第③速度層) | ■: 海底堆積物            | ■: 基礎捨石         | —: 防波壁       | —: グラウンドアンカ(自由長部) |
| ■: 岩盤 (第④速度層) | ■: 改良地盤①② 浅層 (薬液注入) | ■: 護岸           | —: L型擁壁      | —: グラウンドアンカ(拘束長部) |
| ■: 岩盤 (第⑤速度層) | ■: 改良地盤③ 深層 (薬液注入)  | ■: 埋戻土 (施設護岸背面) | —: ジョイント要素   |                   |
| ■: 埋戻土        | ■: 被覆石              | ■: 海水           | —: 地下水面及び海水面 |                   |

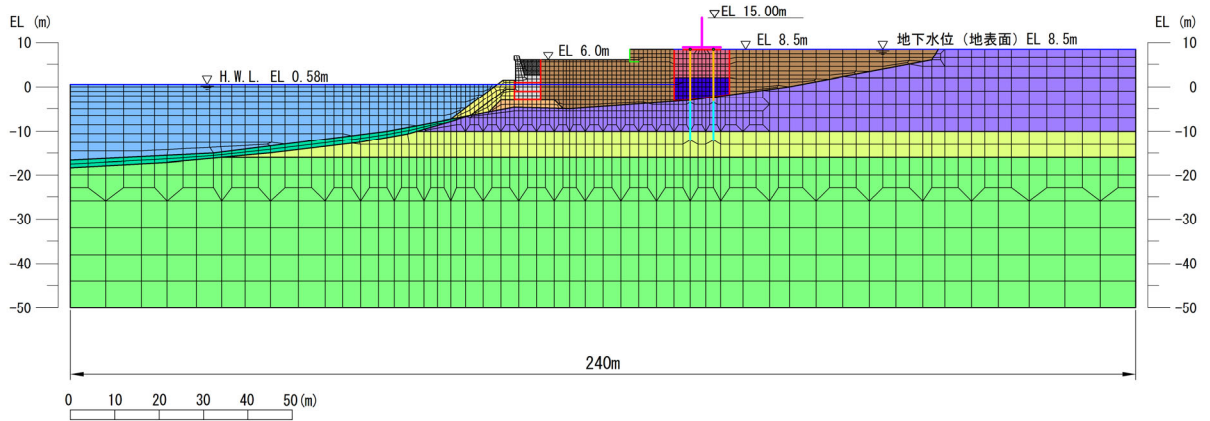


図 3.5.1-1 地震応答解析モデル (①-①断面)

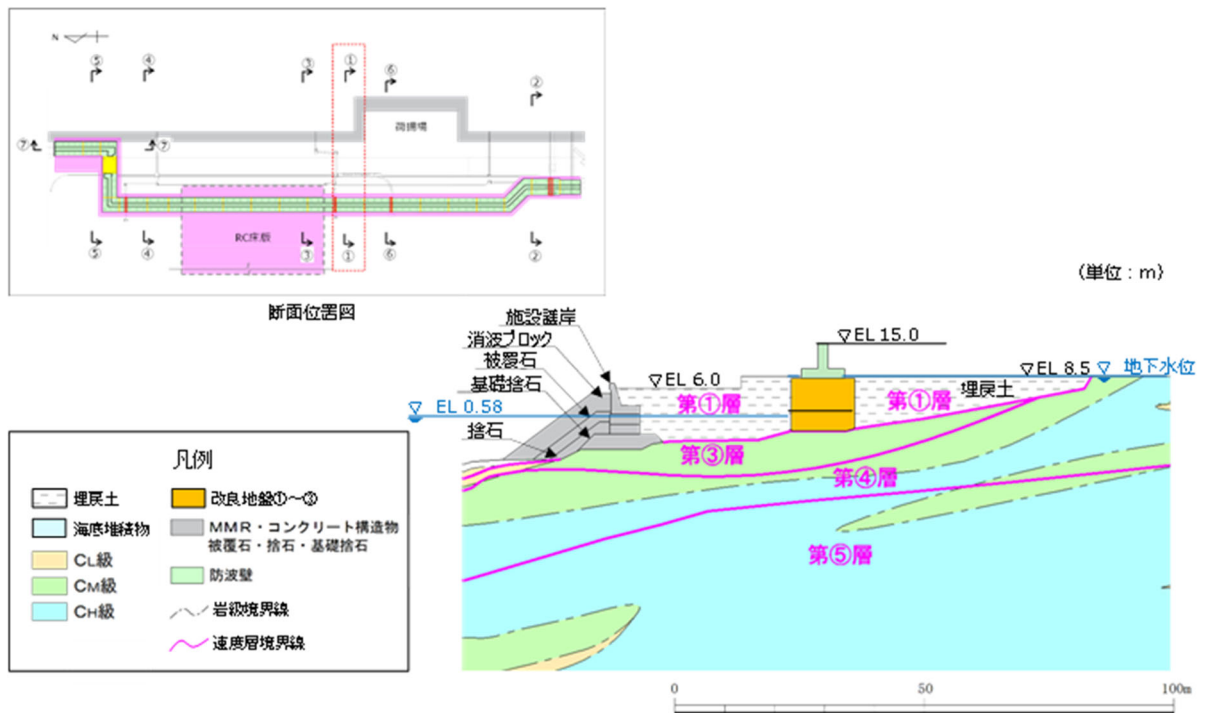


図 3.5.1-2 地質断面図 (①-①断面)

- 岩盤 (第④速度層)    ■ 改良地盤①② 浅層 (薬液注入)    ■ 基礎捨石    ■ 埋戻土 (施設護岸背面)    - 防波壁    - グラウンドアンカ (自由長部)
- 埋戻土    ■ 改良地盤③ 深層 (薬液注入)    ■ 護岸    ■ 海水    - ジョイント要素    - グラウンドアンカ (拘束長部)
- 海底堆積物    ■ 被覆石    - 地下水面及び海水面

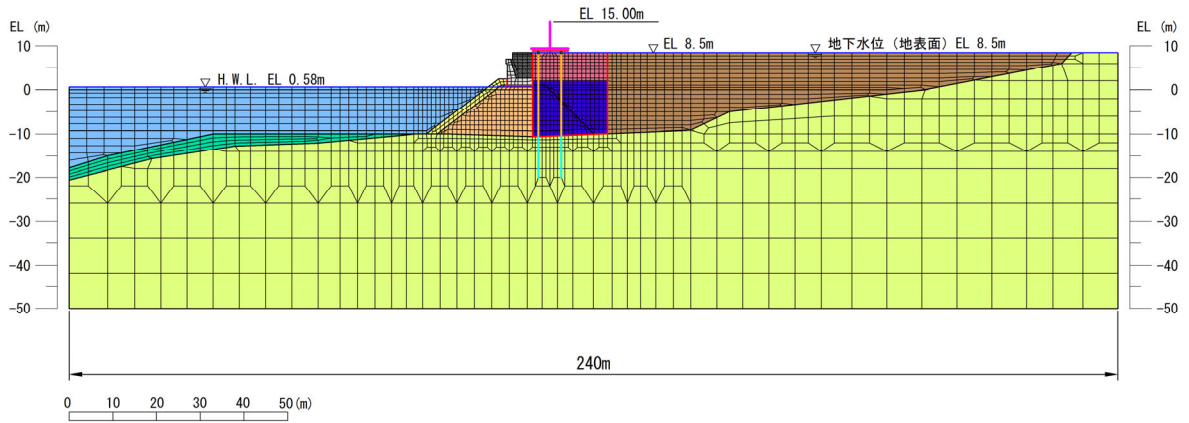


図 3.5.1-3 地震応答解析モデル (⑤-⑤断面)

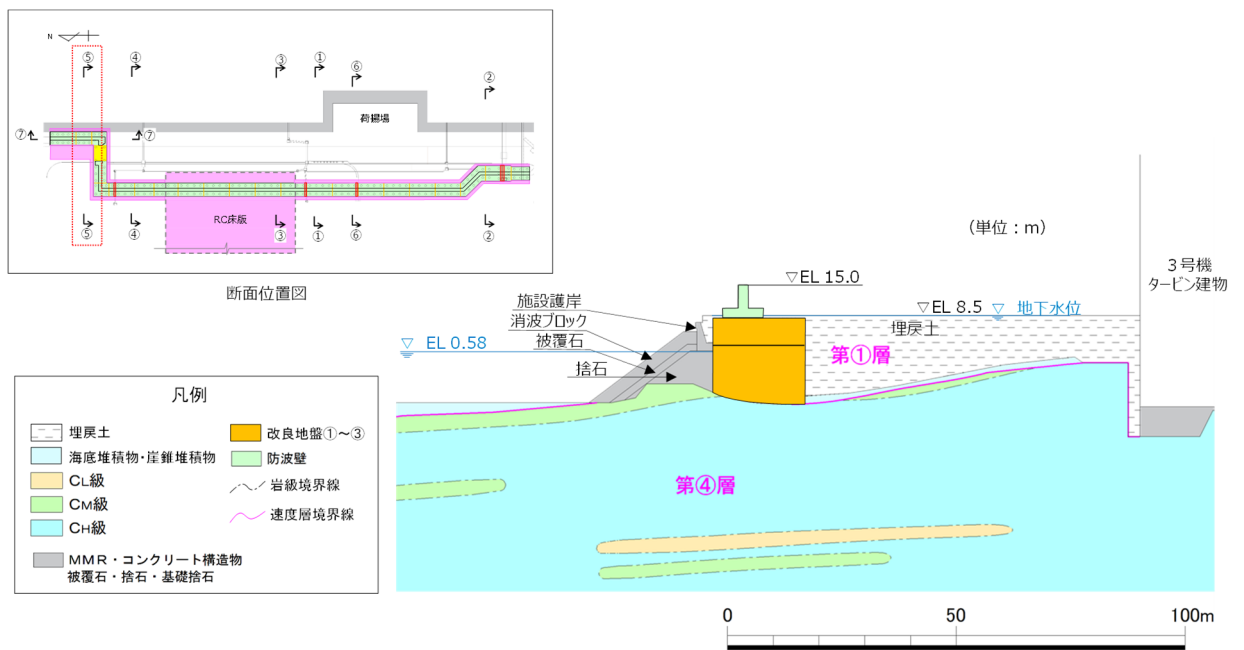


図 3.5.1-4 地質断面図 (⑤-⑤断面)

- |                |                      |             |                    |
|----------------|----------------------|-------------|--------------------|
| ■ : 岩盤 (第2速度層) | ■ : 埋戻土              | ■ : L型擁壁    | ■ : グラウドアンカ (自由長部) |
| ■ : 岩盤 (第3速度層) | ■ : 改良地盤①② (薬液注入、浅層) | ■ : ジョイント要素 | ■ : グラウドアンカ (拘束長部) |
| ■ : 岩盤 (第4速度層) | ■ : 改良地盤③ (薬液注入、深層)  | ■ : 地下水面    |                    |
| ■ : 岩盤 (第5速度層) | ■ : 防波壁              |             |                    |

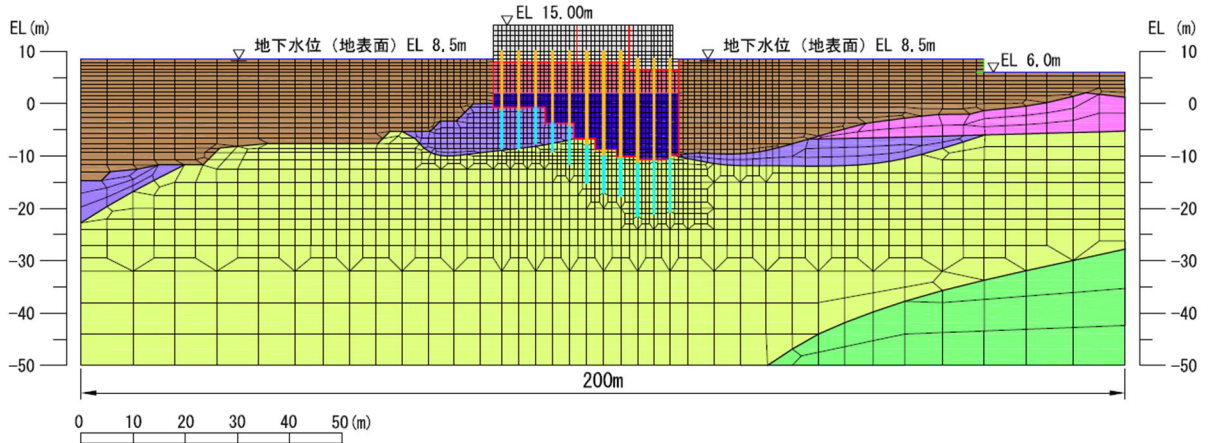


図 3.5.1-5 地震応答解析モデル (⑦-⑦断面)

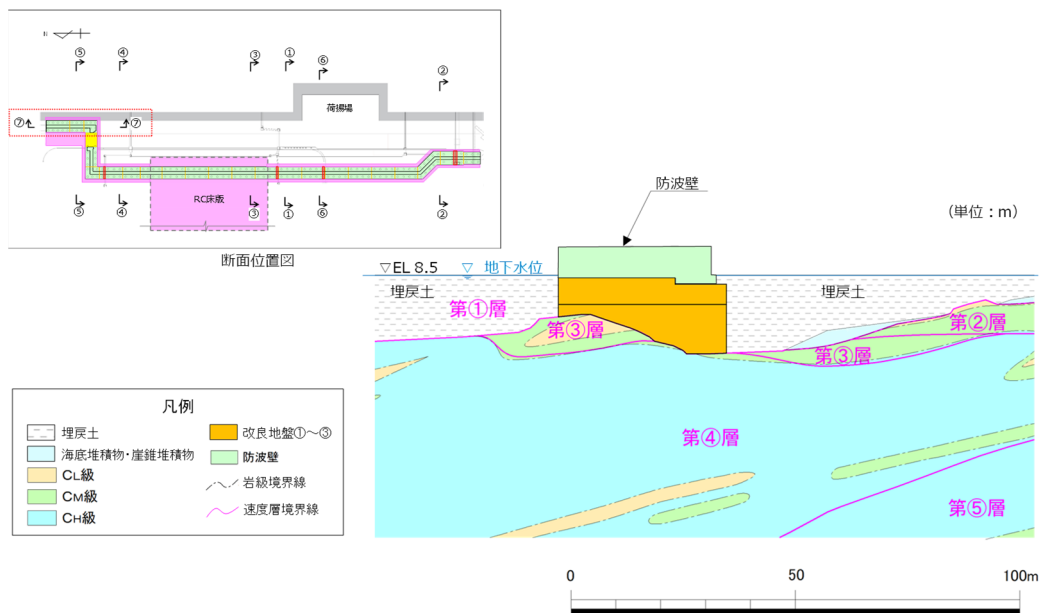


図 3.5.1-6 地質断面図 (⑦-⑦断面)



(1) 解析領域

地震応答解析モデルは、境界条件の影響が地盤及び構造物の応力状態に影響を及ぼさないよう、十分広い領域とする。具体的には、J E A G 4 6 0 1-1987を参考に、図 3.5.1-7 に示すとおりモデル幅を構造物基礎幅の 5 倍以上、構造物下端からモデル下端までの高さを構造物幅の 2 倍以上確保する。なお、対象断面によって、地層形状に合わせてモデル化領域を調整する。

地盤の要素分割については、波動をなめらかに表現するために、対象とする波長の 5 分の 1 程度を考慮し、要素高さを 1m 程度以下まで細分割して設定する。

解析モデルの下端については、EL -50m までモデル化する。

2次元地震応答解析モデルは、検討対象構造物とその周辺地盤をモデル化した不整形地盤に加え、この不整形地盤の左右に広がる地盤をモデル化した自由地盤で構成される。この自由地盤は、不整形地盤の左右端と同じ地質構成を有する一次元地盤モデルである。2次元地震応答解析における自由地盤の常時応力解析から不整形地盤の地震応答解析までのフローを図 3.5.1-8 に示す。

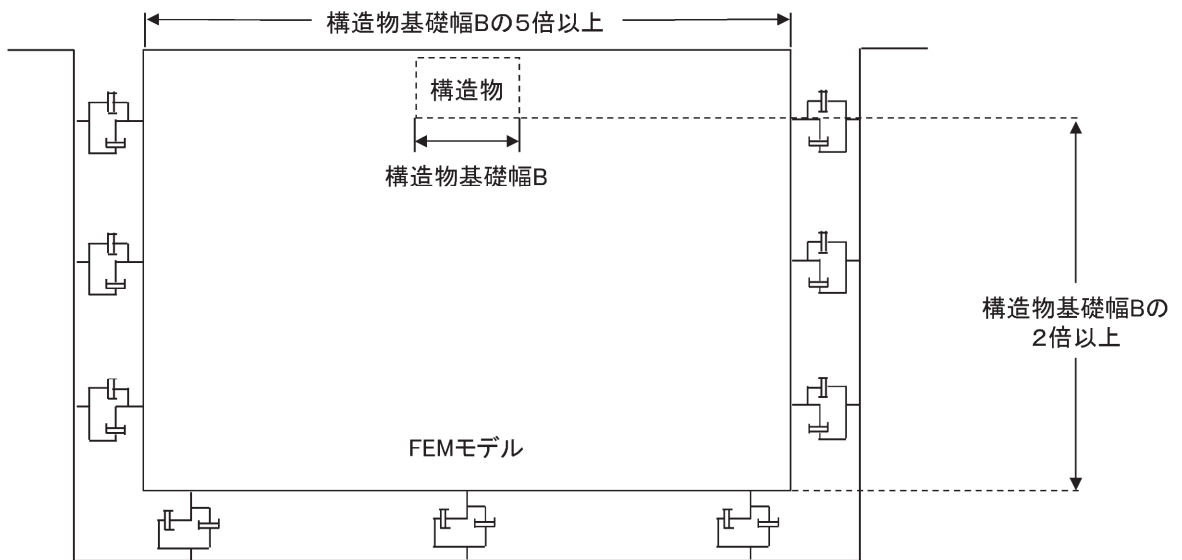


図 3.5.1-7 モデル化範囲の考え方

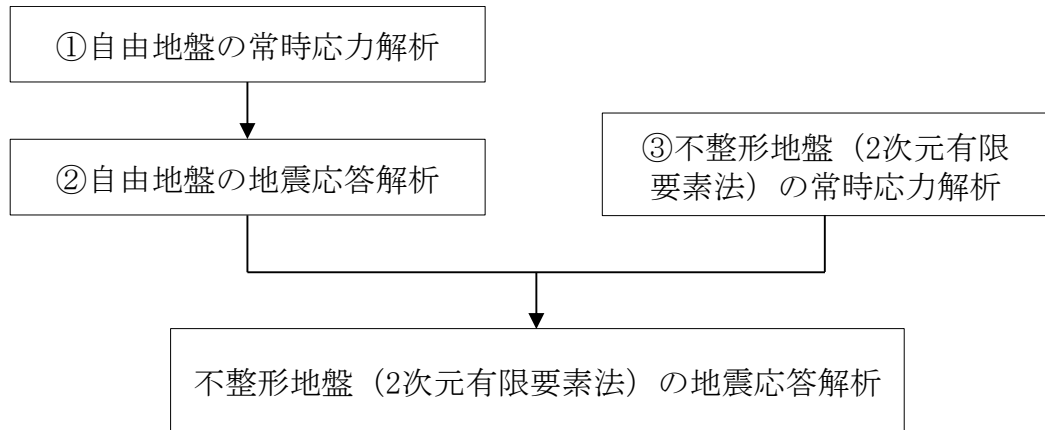


図 3.5.1-8 自由地盤の常時応力解析から不整形地盤の地震応答解析までのフロー

(2) 境界条件

a. 常時応力解析時

常時応力解析は，地盤や構造物の自重及び風荷重等の静的な荷重を載荷することによる常時の常時応力を算定するために行う。そこで，常時応力解析時の境界条件は底面固定とし，側方は自重等による地盤の鉛直方向の変形を拘束しないよう鉛直ローラーとする。境界条件の概念図を図 3.5.1-9 に示す。

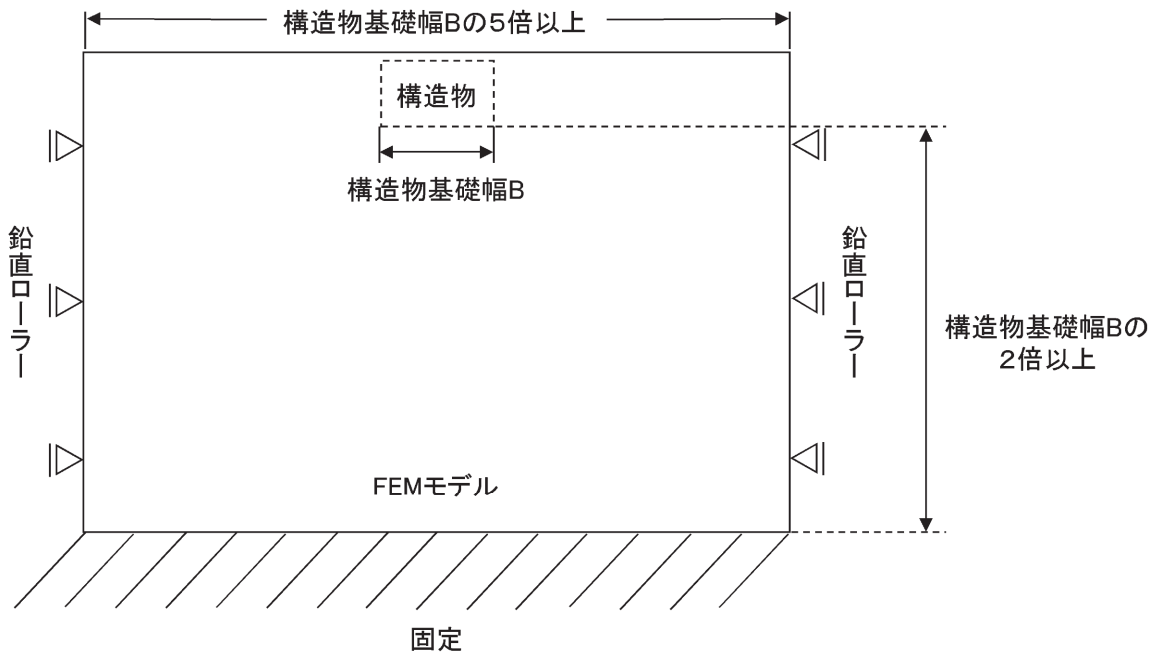


図 3.5.1-9 常時応力解析における境界条件の概念図

b. 地震応答解析時

地震応答解析時の境界条件については、有限要素解析における半無限地盤を模擬するため、粘性境界を設ける。底面の粘性境界については、地震動の下降波がモデル底面境界から反無限地盤へ通過していく状態を模擬するため、ダッシュポットを設定する。側方の粘性境界については、自由地盤の地盤振動と不整形地盤側方の地盤振動の差分が側方を通過していく状態を模擬するため、自由地盤の側方にダッシュポッドを設定する。境界条件の概念図を図 3.5.1-10 に示す。

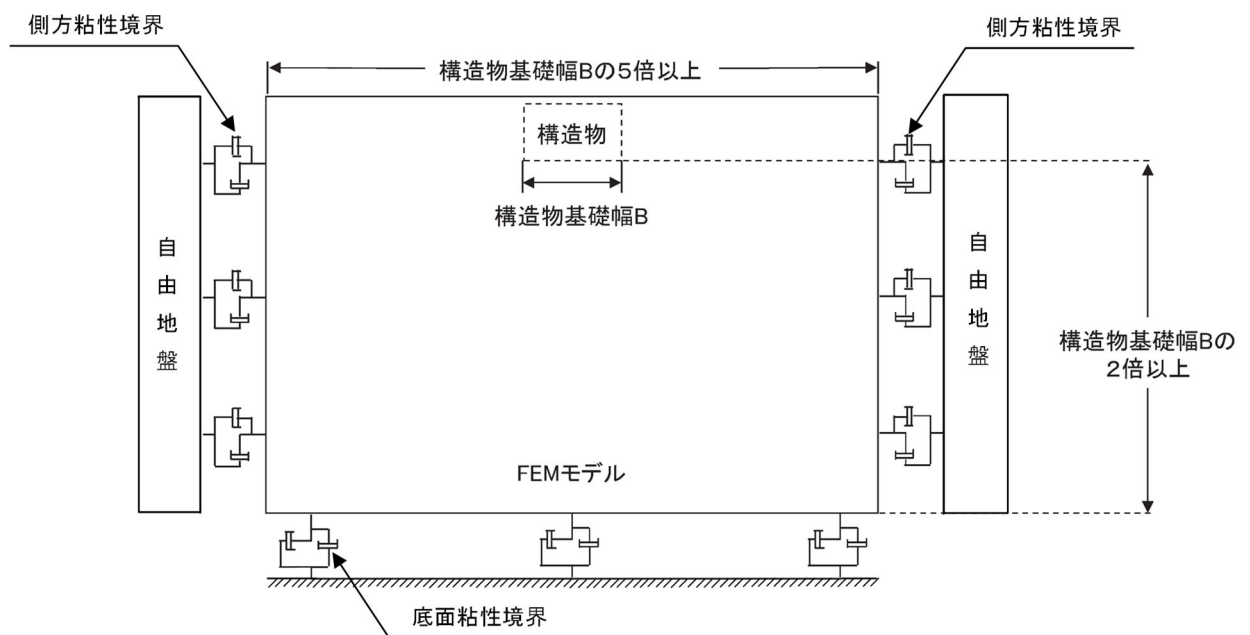


図 3.5.1-10 地震応答解析における境界条件の概念図

(3) 構造物のモデル化

逆 T 擁壁は、鉄筋コンクリート造であり、線形はり要素（ビーム要素）でモデル化する。底版は地盤に 0.5m 埋め込まれているが、埋め込み深さが浅く、土圧の影響は軽微であること及び埋め込みを考慮しない方が地震時応答加速度が厳しくなると考えられることから、地表面（EL8.5m）にモデル化する。逆 T 擁壁の堅壁と底版の交差部においては、「道路橋示方書（I 共通編・IV 下部構造編）・同解説（日本道路協会，平成 14 年 3 月）」（以下「道路橋示方書」とする。）（図 3.5.1-11 参照）に準拠し、図 3.5.1-12 に示すとおり、部材端から部材厚さの 1/4 入った断面より内側を剛域とする。

照査実施範囲は、道路橋示方書及びコンクリート標準示方書〔構造性能照査編〕（土木学会，2002 年制定）（図 3.5.1-13，図 3.5.1-14）に基づき、部材端までとする。

剛域は、一般に次により定めることとする。

- ① ハンチがない場合には、部材端から部材厚さの 1/4 入った断面より内側を剛域とする（図-解 8.3.4 (a)参照）。
- ② 部材節点部において、部材の軸線に対して 25° 以上傾斜するハンチを有する場合には、部材厚さが 1.5 倍となる断面より内部を剛域とする。ただし、ハンチの傾斜が 60° 以上の場合は、ハンチの起点から部材厚さの 1/4 入った断面より内部を剛域と考えるものとする（図-解 8.3.4 (b)参照）。

ただし、地震時保有水平耐力法による照査では、耐震設計編 10.8 に従ってモデル化するものとする。

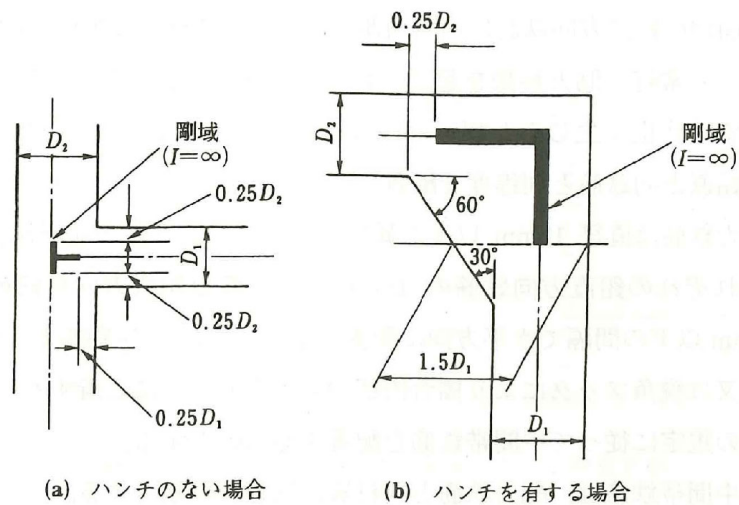


図-解 8.3.4 剛域の取り方

図 3.5.1-11 剛域の設定（道路橋示方書抜粋）

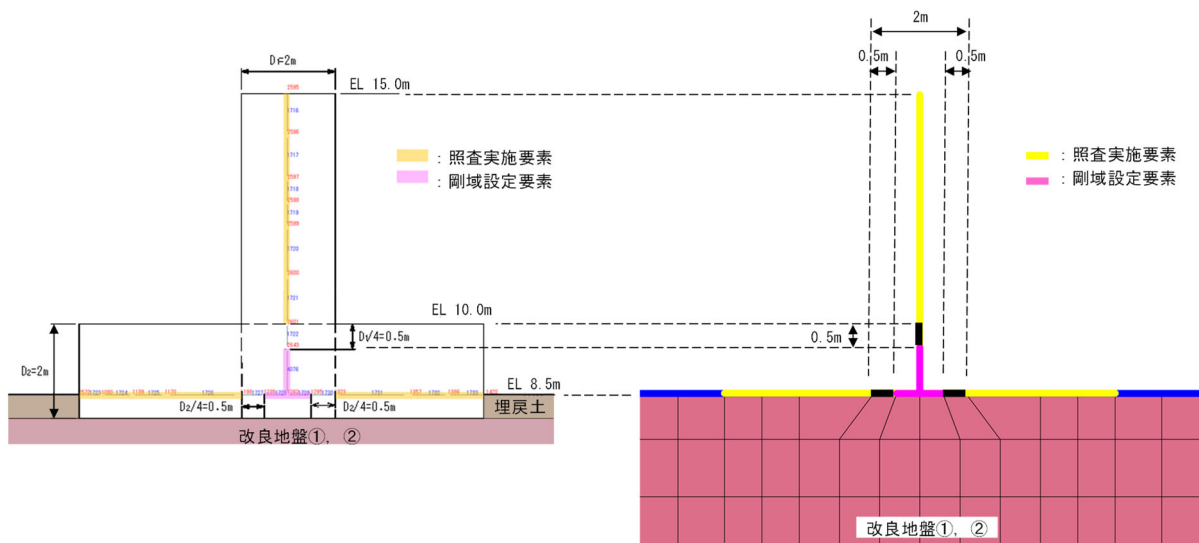


図 3.5.1-12 剛域設定の概念図及び照査範囲

5) ラーメン部材節点部の設計曲げモーメントは、図-8.3.2 のとおりとする。

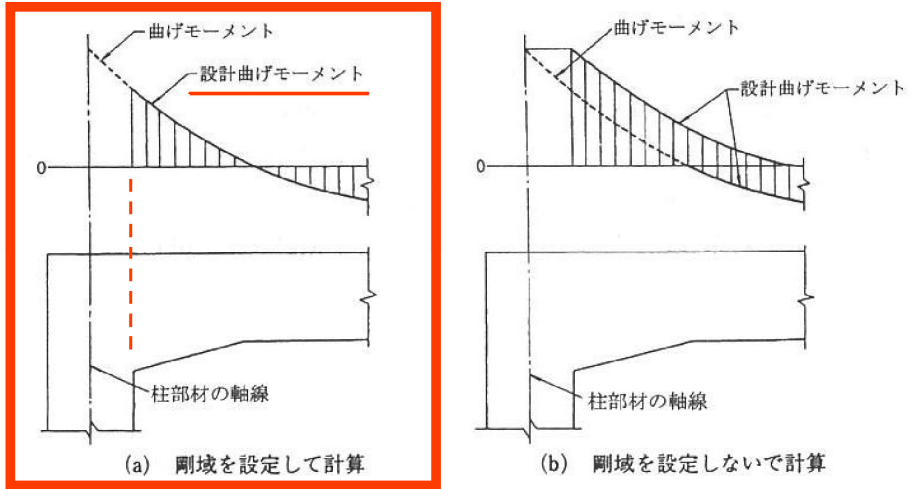


図-8.3.2 ラーメン部材節点部の設計曲げモーメント

図 3.5.1-13 照査に用いる断面力の算定位置の根拠 (道路橋示方書)

(5) 部材端の断面の検討に用いるせん断力は、柱に対してははりの上下面におけるせん断力とし、はりに対しては柱前面から柱前面断面の部材高さの 1/2 だけ離れた位置のせん断力とする。ただし、断面計算において、ハンチは 1:3 より緩やかな部分を有効とする。

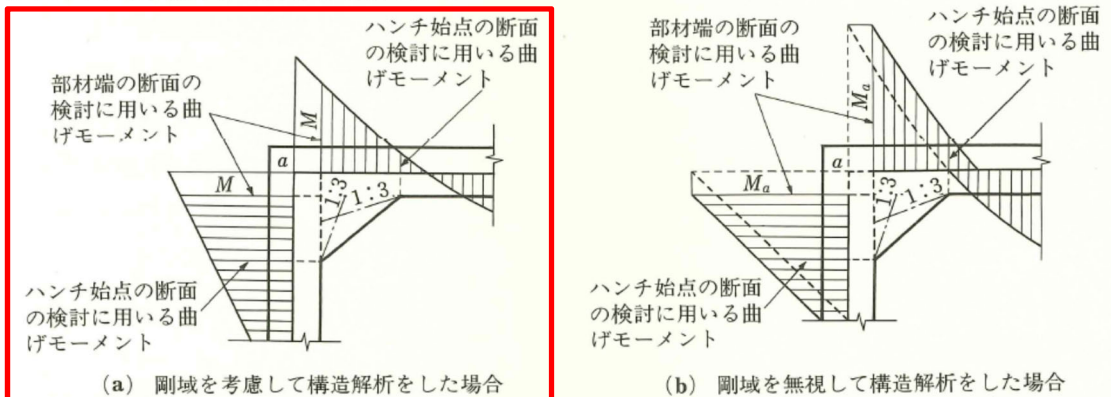


図 12.3.1 部材端の断面の検討に用いる曲げモーメント

図 3.5.1-14 照査に用いる断面力の算定位置の根拠 (コンクリート標準示方書)

グラウンドアンカは、非線形ばね及び MPC（多点拘束）でモデル化する。グラウンドアンカの各部位のモデル化方法について表 3.5.1-1 及び図 3.5.1-15 に示す。モデル化の妥当性の検証の詳細については、「（参考資料 1）グラウンドアンカの実態に即したモデル化，物性値及び許容限界の設定方法について」に示す。

表 3.5.1-1 グラウンドアンカのモデル化方法及びその考え方

部位	特徴及び役割	モデル化方法	モデル化の考え方
頭部	鋼製のアンカーヘッド、ジョイントプレート及び支圧板で構成され、慣性力等に伴う逆 T 擁壁からの力を引張力として自由長部に伝達させるための部分。	節点共有	逆 T 擁壁の底版（梁要素）の接点とばね要素の端部接点を拘束することで力が伝達できるようモデル化した。
自由長部 （=引張部）	PC 鋼線を組み立てたテンドンで構成され、テンドンの伸縮により、頭部からの引張力を拘束長部に伝達する部分。 施工時にテンドンに初期緊張力を与えることで、頭部及び拘束長部に常時、引張力が作用する。 地震時は、慣性力による逆 T 擁壁からの力が伝達し、テンドンの縮むとアンカー力は減少し、テンドンの伸びるとアンカー力は増加する。	非線形ばね	左記の自由長部の挙動（特に初期緊張力）を表現できる「非線形ばね要素」でモデル化した。
拘束長部 （アンカ一体）	グラウト注入によりテンドンが堅硬な岩盤に定着・一体化されて造成され、自由長部からの引張力を地盤との摩擦抵抗もしくは支圧抵抗によって地盤に伝達する抵抗部分。	MPC（多点拘束）	岩盤と一体挙動するように、「MPC（多点拘束）」によりモデル化し、非線形ばねとの節点とその他の節点の鉛直方向の変位が拘束され、同様の挙動をするように設定した。

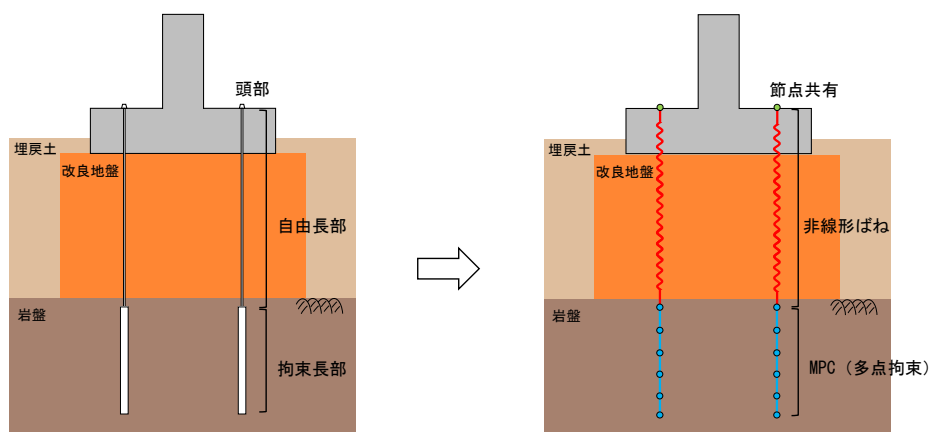
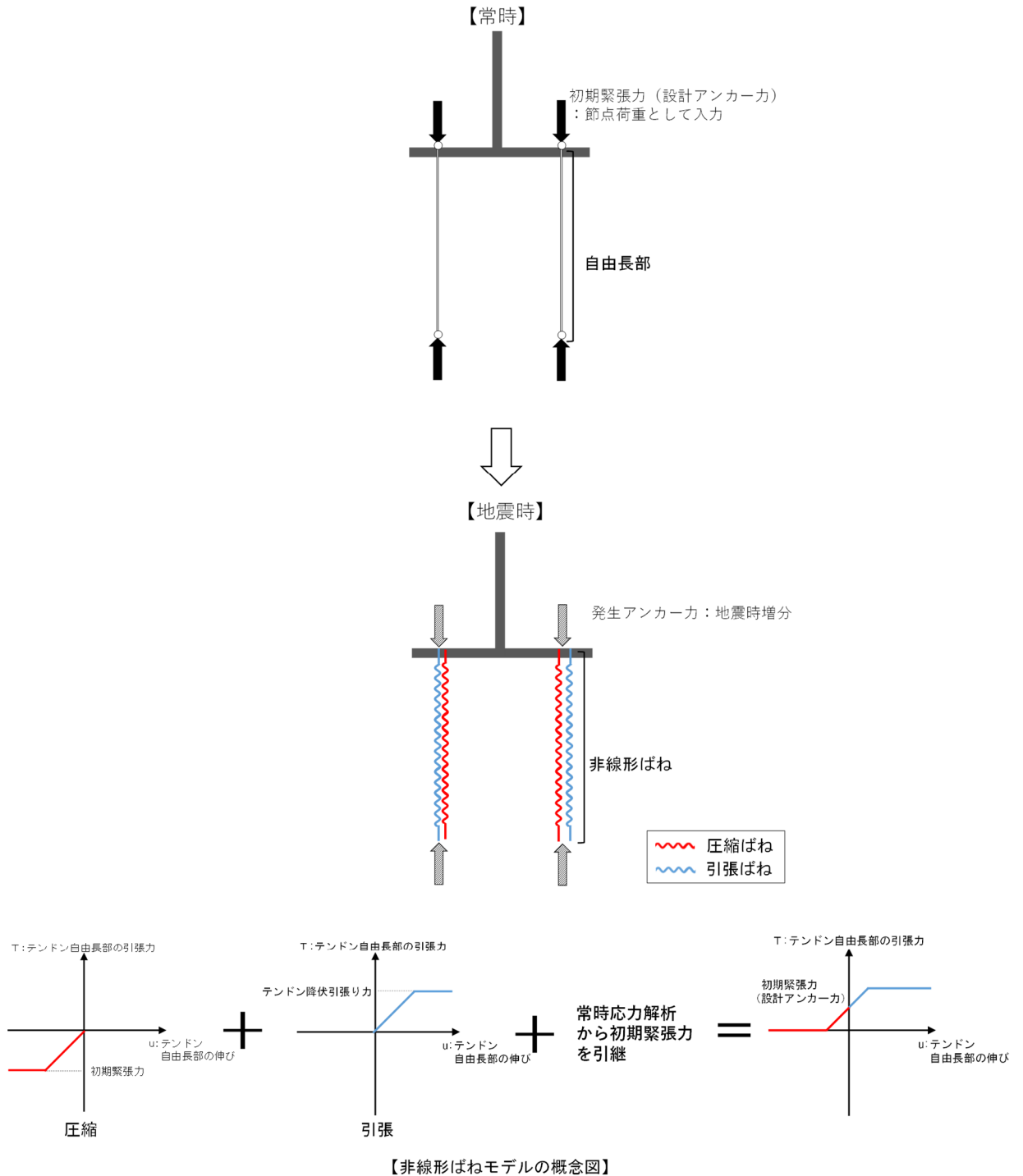


図 3.5.1-15 モデル化概念図

また、モデル化したグラウンドアンカの緊張力は以下の図 3.5.1-16 のとおり与えている。



【非線形ばねモデルの概念図】

図 3.5.1-16 モデル化したグラウンドアンカの緊張力

漂流物対策工は、逆 T 擁壁の豎壁に設置した鉄筋コンクリート造の構造物であり、豎壁の剛性と同等であることから、重量のみを考慮する。また、漂流物対策工の詳細は「2.1.8 漂流物対策工に関する補足説明」に示す。

L 型擁壁は、鉄筋コンクリート造であり、線形はり要素（ビーム要素）でモデル化する。

#### (4) 地盤のモデル化

岩盤は線形の平面ひずみ要素でモデル化する。⑤-⑤断面は、東西方向の断面であるため、速度層を水平成層でモデル化する。

埋戻土（海底堆積物及び崖錐堆積物を含む）、基礎捨石、被覆石、捨石及び改良地盤は、地盤の非線形性を考慮するためマルチスプリング要素でモデル化し、地下水位以深の要素は間隙水要素を重ねて定義する。動的変形特性には、双曲線モデル（H-D モデル）を用いる。そのうち、埋戻土は、液状化パラメータを設定することで、地震時の有効応力の変化に応じた非線形せん断応力～せん断ひずみ関係を考慮する。

施設護岸は、線形の平面ひずみ要素でモデル化する。また、施設護岸の上部に位置する埋戻土（施設護岸背面）については、「港湾の施設の技術上の基準・同解析（（社）日本港湾協会，H19 年版）」（以下「港湾基準」とする。）（図 3.5.1-17 参照）に準拠し、施設護岸の一部として、線形の平面ひずみ要素でモデル化し、剛性は施設護岸と同じ値を用い、背後の埋戻土及び改良地盤との境界にジョイント要素を設定する。

施設護岸、基礎捨石、被覆石及び捨石は、役割に期待しないが、解析モデルに取り込み、防波壁への波及的影響を考慮する。「5.1 防波壁前面の施設護岸の損傷による影響検討」において、影響検討として、施設護岸、基礎捨石、被覆石及び捨石が地震により損壊し、流出した場合の耐震評価を行う。



(3) 壁体のとり方

- ① 地震動による作用を慣性力に置き換えて安定性の照査を行う場合には、壁体を適切に設定して慣性力を評価する必要がある。この場合には、構造様式に応じて、以下に示すように壁体を設定することができる。ただし、非線形有効応力解析等の詳細法により変形量を直接評価する場合にあっては、これによる必要はない。
- ② 重力式係船岸の壁体は、図-2.2.8 に示すように壁体後趾を通る鉛直面から前の部分とすることができる。通常、壁体の背後には裏込め材料があり、この一部は壁体の上に載っている形式のものが多い。この部分の裏込めは壁体の一部として働いていると考えられるが、壁体の形状及び破壊形式により、壁体とみなせる裏込めの範囲は変化し、一概に決めることは困難である。しかし、壁体の境界面を多少変えても壁体の安定への影響は小さいため、一般的に、計算の取扱いが簡便なように壁体とみなす範囲を図のように設定することができる。

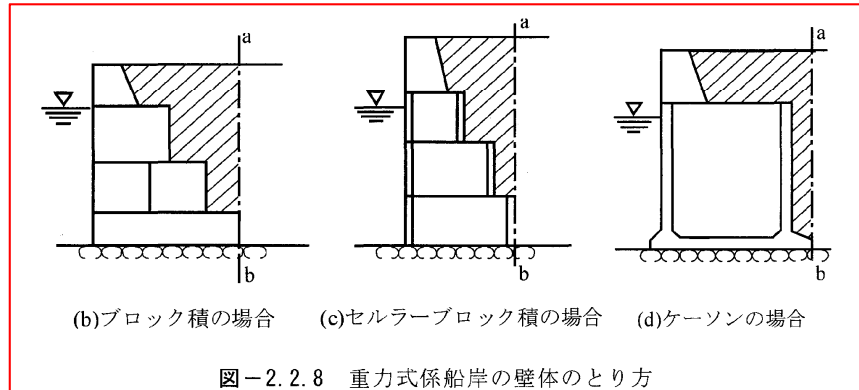


図-2.2.8 重力式係船岸の壁体のとり方

図 3.5.1-17 埋戻土（施設護岸背面）のモデル化について（港湾基準抜粋）

(5) ジョイント要素の設定

地盤と構造体の接合面の法線方向に対して地震時の引張荷重を与えると、地盤は構造体から剥離する特徴がある。また、地盤と構造体の接合面のせん断方向に対して地震時のせん断荷重を与え、せん断ひずみを増加させていくと、地盤及び構造体のせん断応力は上限に達し、それ以上はせん断応力が増加しなくなる特徴がある。

時刻歴応答解析では、地震時における実挙動を正確に把握するために、地盤と構造体の接合面にジョイント要素を設定し、地震時の地盤と構造体の接合面における剥離及びすべりを考慮する。

ジョイント要素は、地盤と構造体の接合面で法線方向及びせん断方向に対して設定する。法線方向については、常時状態以上の引張荷重が生じた場合、剛性及び応力をゼロとし、剥離を考慮する。せん断方向については、地盤と構造体の接合面におけるせん断抵抗力以上のせん断荷重が生じた場合、せん断剛性をゼロとし、すべりを考慮する。

せん断強度  $\tau_f$  は次式の Mohr-Coulomb 式により規定される。

鉛直方向のジョイント要素の粘着力  $c$  及び内部摩擦角  $\phi$  は、港湾基準（図 3.5.1-18 参照）に準拠し、 $c=0$ 、 $\phi=15^\circ$  に設定する。

水平方向のジョイント要素の粘着力  $c$  及び内部摩擦角  $\phi$  は、「港湾構造物設計事例集（沿岸技術研究センター，平成 19 年 3 月）」（以下「港湾構造物設計事例

集」とする。) (図 3.5.1-19 参照) に準拠し、静止摩擦係数  $\mu$  から、 $c=0$ 、 $\phi = \tan^{-1}(\mu)$  より設定する。静止摩擦係数  $\mu$  の値は、港湾基準 (図 3.5.1-20 参照) に準拠し、隣り合う地盤等に応じた静止摩擦係数を用いる。

ジョイント要素の粘着力及び内部摩擦角を表 3.5.1-2 に、ジョイント要素の配置を図 3.5.1-21 に示す。

$$\tau_f = c + \sigma' \tan \phi \quad (1)$$

ここで、

$\tau_f$  : せん断強度

$c$  : 粘着力

$\phi$  : 内部摩擦角

1. 3 地震時土圧

1. 3. 1 砂質土の土圧

構造物の壁面に作用する地震時土圧及び崩壊面が水平面と成す角度は、一般的に次に掲げるところによって算定する。

(1) 主働土圧及び崩壊面が水平面と成す角度

$$p_w = K_{ai} \left[ \sum \gamma h_i + \frac{\omega \cos \psi}{\cos(\psi - \beta)} \right] \cos \psi \quad (1.3.1)$$

$$\cot(\zeta_i - \beta) = -\tan(\phi_i + \delta + \psi - \beta) + \sec(\phi_i + \delta + \psi - \beta) \sqrt{\frac{\cos(\psi + \delta + \theta) \sin(\phi_i + \delta)}{\cos(\psi - \beta) \sin(\phi_i - \beta - \theta)}} \quad (1.3.2)$$

この場合において、

$$K_{ai} = \frac{\cos^2(\phi_i - \psi - \theta)}{\cos \theta \cos^2 \psi \cos(\delta + \psi + \theta) \left[ 1 + \sqrt{\frac{\sin(\phi_i + \delta) \sin(\phi_i - \beta - \theta)}{\cos(\delta + \psi + \theta) \cos(\psi - \beta)}} \right]^2}$$

(2) 受働土圧及び崩壊面が水平面と成す角度

$$p_{pi} = K_{pi} \left[ \sum \gamma h_i + \frac{\omega \cos \psi}{\cos(\psi - \beta)} \right] \cos \psi \quad (1.3.3)$$

$$\cot(\zeta_i - \beta) = \tan(\phi_i - \delta - \psi + \beta) + \sec(\phi_i - \delta - \psi + \beta) \sqrt{\frac{\cos(\psi + \delta - \theta) \sin(\phi_i - \delta)}{\cos(\psi - \beta) \sin(\phi_i + \beta - \theta)}} \quad (1.3.4)$$

この場合において、

$$K_{pi} = \frac{\cos^2(\phi_i + \psi - \theta)}{\cos \theta \cos^2 \psi \cos(\delta + \psi - \theta) \left[ 1 - \sqrt{\frac{\sin(\phi_i - \delta) \sin(\phi_i + \beta - \theta)}{\cos(\delta + \psi - \theta) \cos(\psi - \beta)}} \right]^2}$$

ここに、 $p_{ai}$ 、 $p_{pi}$ 、 $K_{ai}$ 、 $K_{pi}$ 、 $\zeta_i$ 、 $\omega$ 、 $\gamma_i$ 、 $h_i$ 、 $\psi$ 、 $\beta$ 、 $\delta$  及び  $\phi_i$  は、1. 2 永続状態における土圧に準じて、1. 2. 1 砂質土の土圧の式(1.2.1)～(1.2.4)と同じ数値を表すものとする。また、 $\theta$  は次の数値を表すものとする。

$\theta$  : 次の(a)又は(b)で表される地震合成角 (°)

(a)  $\theta = \tan^{-1} k$

(b)  $\theta = \tan^{-1} k'$

ここで、 $k$  及び  $k'$  は、それぞれ次の数値を表すものとする。

$k$  : 震度

$k'$  : 見掛けの震度

(3) 見掛けの震度は、1. 3. 3 見掛けの震度による。

(4) 地震時土圧は、物部<sup>1)</sup>・岡部<sup>2)</sup>が提案した理論に基づいたものである。

(5) 壁面摩擦角  
一般に、±15°以下とする。裏込材のせん断抵抗角 $\psi$ の1/2程度を目安とすることができる。

(6) 残留水位以下の土圧

一般的に、残留水位以上においては空気中における震度を用いて土圧分布を求め、残留水位以下においては各境界面において1. 3. 3 見掛けの震度を用いて土圧分布を求める。

(7) 土圧係数等

土圧係数と崩壊角の算定図を図-1.3.1に示す。

(8) 上記土圧式は、土と間隙水が一体となって運動すると仮定しており、液状化した土には適用できない。その場合には別途、動的有効応力解析又は模型実験などで、地盤と構造物の地震時安定性を評価すべきである。

図 3.5.1-18 ジョイント要素 (鉛直方向) の物性値の設定根拠 (港湾基準抜粋)

よって、

$$\phi^{sp}_f = \tan^{-1}(0.838) = 40(^{\circ})$$

③ケーソン  
 図-1.54 にケーソン周辺のモデル化を示す。ケーソンのモデル化は、ケーソン本体、上部コンクリート、フーチング、ケーソン拡張部（陸側フーチング上部地盤）に分けてモデル化した。陸側フーチング上部の裏込石および裏埋土地盤は、剛性をケーソン本体と同じ値を用いて、単位体積重量は裏込石および裏埋土地盤の値を用いる<sup>8)</sup>。表-1.63 にケーソンの入力パラメータを示す。

④ジョイント要素  
 ケーソン要素と基礎捨石および裏込石との間に生じる滑動と剥離はジョイント要素によりモデル化する<sup>8)</sup>。ジョイント要素は、圧縮側では垂直方向接線剛性  $K_n$  に応じた応力を負担する。せん断方向（滑り方向）は、せん断応力がせん断強度に達するまではせん断方向接線剛性  $K_s$  に応じた力を負担する。せん断強度  $\tau_f$  は垂直方向の有効拘束

圧  $\sigma_n'$  に基づき式(1.62)より求める。剥離状態ではせん断強度は0となる。

$$\tau_f = C_f + \sigma_n' \tan \phi_f \quad (1.62)$$

よって、本事例のジョイント要素のせん断強度に関する定数は以下のとおり設定できる。まず、ケーソン底面と捨石の間の摩擦係数は摩擦増大マットが敷設されていないので  $\mu=0.6$  と設定して、摩擦角  $\phi_f$  は  $\tan^{-1}(0.6)=31^{\circ}$  を用いる。また、ケーソン背面と裏込石の間の摩擦角は  $\phi_f=15^{\circ}$  を用いる。

・ジョイント要素のレーレー減衰の与え方  
 FLIP 研究会では、ジョイント要素のレーレー減衰の与え方に関する検討が実施された<sup>20)</sup>。従来の解析では、レーレー減衰行列の組立の際に、ジョイント要素の初期接線剛性  $K_s$  や  $K_n$  に全体系の剛性比例係数  $\beta$  を乗じたものを取り込んでいた（従来型）。 $K_s$  や  $K_n$  の値は物理的な根拠に基づいて設定するのではなく、周囲の土の変形よりも大きな変形がジョイント要素の線形部分で生じることのないように、比較的大きな値が指定される。この

図 3.5.1-19 ジョイント要素（水平方向）の物性値の設定根拠（港湾構造物設計事例集抜粋）

9 摩擦係数

(1) 施設の滑動に対する摩擦抵抗力の算定に用いる材料の摩擦係数は、静止摩擦係数とすることができ。この場合において、材料の摩擦係数は、対象となる施設の特性及び材料の特性等を勘案して適切に設定することが望ましい。

(2) 港湾の施設の性能照査に用いる静止摩擦係数の特性値は、一般に表-9.1 に掲げる数値を用いてもよい。同一条件のもとで繰り返し摩擦係数を実測する場合、一般にばらつきが多いことに注意が必要である。表-9.1 で示した値は、以前からなかなかに経験的に用いられてきたものであり、ここに明記していない場合については、実験を行って定めることが望ましい。

(3) 表-9.1 に示した値は、施設の滑動に対する安定性の照査に用いる場合の値であり、杭の支持力計算に用いる杭周面と土との間の摩擦係数、傾斜堤の安定性の照査に用いる摩擦係数、斜路によるケーソンの進水計算に用いる摩擦係数、土圧計算に用いる壁面摩擦角等に対しては適用できない。なお、表-9.1 に示した値は、静的な作用が生じるときの静止摩擦係数であるが、地震動作用時のような動的な作用が生じる場合においては、適切な資料が皆無であるため、本数値を用いているのが実情である。

コンクリートとコンクリート	0.5
コンクリートと岩盤	0.5
水中コンクリートと岩盤	0.7~0.8
コンクリートと捨石	0.6
捨石と捨石	0.8
木材と木材	0.2(湿)~0.5(乾)
摩擦増大マットと捨石	0.75

注 1) 水中コンクリートと岩盤の場合、標準的な条件のもとでは、0.8 とすることができる。ただし、基岩がぜい弱若しくは亀裂が多い場合、基岩を覆っている砂の移動が激しい場所等では、それらの条件に応じて 0.7 程度まで低減させることができる。

注 2) セルラブロックの性能照査における摩擦係数は、第 4 編第 5 章 2. 2 重力式係船岸を参照することができる。

図 3.5.1-20 ジョイント要素（水平方向）の物性値設定に用いる静止摩擦係数（港湾基準抜粋）

表 3.5.1-2 ジョイント要素の粘着力と内部摩擦力

		接合条件		粘着力 $c$ ( $N/mm^2$ )	内部摩 擦角 $\phi$ ( $^{\circ}$ )	備考
		材料 1	材料 2			
鉛直方向	境界 1	改良地盤①・②	埋戻土	0	15.0	構造物の壁面摩擦角の設定方法を準用し、 $c=0$ 、 $\phi=15^{\circ}$ と設定。
			施設護岸			
			埋戻土(施設護岸背面)			
			逆 T 擁壁			
		改良地盤③	埋戻土			
			施設護岸			
			基礎捨石			
	埋戻土	埋戻土(施設護岸背面)				
		逆 T 擁壁				
	被覆石	施設護岸				
境界 2	逆 T 擁壁目地部		0	0	目地部であるため、保守的にゼロと設定。	
水平方向	境界 3	逆 T 擁壁	改良地盤①・②	0	26.57	剛性の高い岩盤等の境界であるため、「コンクリートとコンクリート」及び「コンクリートと岩盤」の静止摩擦係数 ( $\mu=0.50$ ) より、 $\phi=\tan^{-1}(\mu)\doteq 26.57$
		岩盤	改良地盤③			
		施設護岸上部工	セルラーブロック			
		セルラーブロック	セルラーブロック			
	境界 4	セルラーブロック	基礎捨石	0	34.99	
境界 5	施設護岸上部工	基礎捨石	0	30.96	施設護岸上部工(コンクリート)と基礎捨石が接する境界であるため、コンクリートと捨石の摩擦係数 ( $\mu=0.60$ ) より、 $\phi=\tan^{-1}(\mu)\doteq 30.96$	

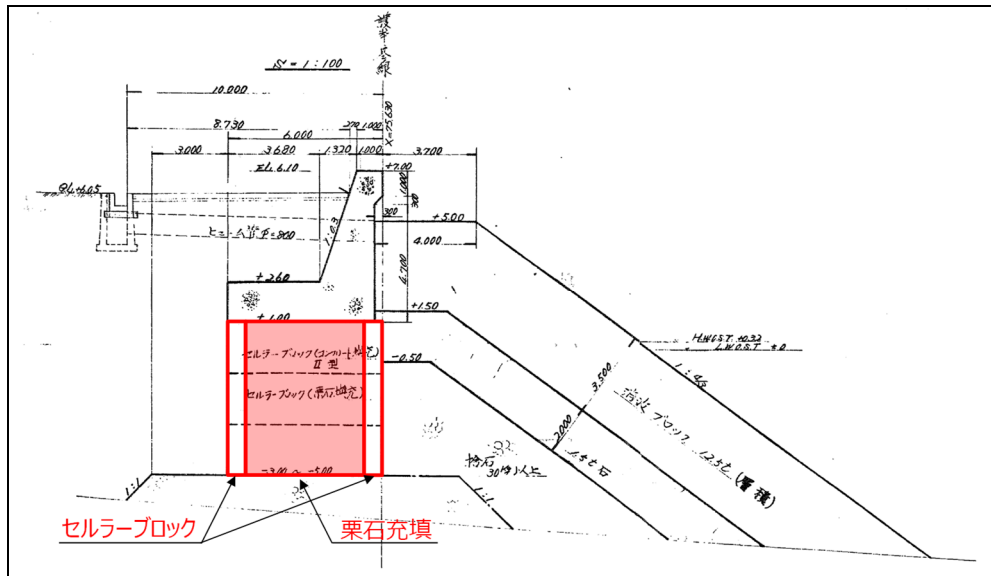


図 3.5.1-21 施設護岸断面図 (①-①断面)

(8) セルラーブロックの性能照査

- ① 壁体が底版のないセルラーブロックで構成されている重力式係船岸は、他の重力式係船岸と異なり、中詰めにより壁体との一体性を保持する構造となっている。このため、他の重力式係船岸の安定検討に加えて、転倒に対して中詰めの抜け出しを十分考慮した検討を行うべきである。
- ② セルラーブロックの安定照査式  
セルラーブロックの中詰めの抜け出しを考慮した転倒に対する検討は、次式によって行うことができる。

$$aW_d - bP_B + cP_V + M_{f_d} \geq \gamma_a (dP_H + eP_{w_d} + gP_{dw_d} + hP_{F_d}) \quad (2.2.19)$$

ここに、

- $W$ : 壁体を構成する材料の重量 (kN/m)
- $P_B$ : 壁体に作用する浮力 (kN/m)
- $P_V$ : 壁体に作用する鉛直土圧合力 (kN/m)
- $M_{f_d}$ : 中詰めによる壁面摩擦によって生じる抵抗モーメント (kN·m/m)
- $P_H$ : 壁体に作用する水平土圧合力 (kN/m)
- $P_{w_d}$ : 壁体に作用する残留水圧合力 (kN/m)
- $P_{dw_d}$ : 堤体に作用する動水圧合力 (kN/m) (地震動作用時の場合のみ)
- $P_F$ : 堤体に作用する慣性力 (kN/m) (地震動作用時の場合のみ)
- $a$ : 壁体重量合力の作用線から堤体前趾までの距離 (m)
- $b$ : 浮力の作用線から壁体前趾までの距離 (m)
- $c$ : 鉛直土圧合力の作用線から壁体前趾までの距離 (m)
- $d$ : 水平土圧合力の作用線から壁体底面までの距離 (m)
- $e$ : 残留水圧合力の作用線から壁体底面までの距離 (m)
- $g$ : 重力加速度 ( $m/s^2$ )
- $h$ : 動水圧合力の作用線から堤体底面までの距離 (m) (地震動作用時の場合のみ)
- $\gamma_a$ : 構造解析係数

式中の設計用値は、式(2.2.9)及び以下の式(2.2.20)により算出することができる。

$$M_{f_d} = \gamma_{M_f} M_{f_i} \quad (2.2.20)$$

なお、ケーソンが海側と陸側の両側に長方形断面のフーチングを有する場合、浮力の設計用値  $P_{B_d}$  は、式(2.2.12)に準じてよい。また、式中の壁体の重量の設計用値  $W_d$  は、鉄筋コンクリートの重量  $W_{RC}$ 、無筋コンクリートの重量  $W_{NC}$  を用いて、次式により算定することができる。

$$W_d = \sum \gamma_w W \quad (2.2.21)$$

③ 部分係数の値

セルラーブロックの性能照査に用いる標準的な部分係数の値は、表-2.2.2の転倒に関する部分係数を用いることができる。ただし、中詰めによる壁面摩擦によって生じる抵抗モーメント  $M_f$  の部分係数  $\gamma_{M_f}$  については、中詰め砂の重量  $W_{SAND}$  の部分係数  $\gamma_{W_{SAND}}$  と同じ値を用いてよい。

- ④ (耐力の設計用値) / (作用効果の設計用値) < 1 の場合は、作用による転倒モーメントが中詰めに除く全鉛直力及び中詰めによる壁面摩擦によって生じる抵抗モーメントより大きいことになり、中詰めに置いてセルラーブロックが抜け出すことになる。このような場合はセルラーブロックの重量を増すか、隔壁を設けるなどの対処が必要である。
- ⑤ 中詰めによる壁面摩擦力  $F_1, F_2$  によって生じる抵抗モーメントの特性値  $M_f$  は次のようにして求め

る。図-2.2.14において、A点に対するモーメントは  $\ell_1 F_1 + \ell_2 F_2$  となる。ここで、 $F_1 = P_1 f$ 、 $F_2 = P_2 f$  であり、 $f$  の値としては中詰め材料と壁面との摩擦係数をとる。(  $P_1, P_2$  はそれぞれ中詰土圧である。) 壁面に作用する中詰土圧の考え方については、本編第2章1.4セルラーブロックに準じることができる。なお、これと同様にセルラーブロックの隔壁に生じる摩擦抵抗も考慮することが望ましい。

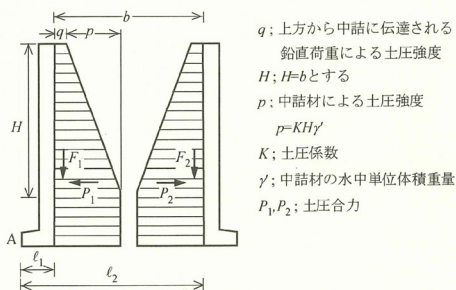
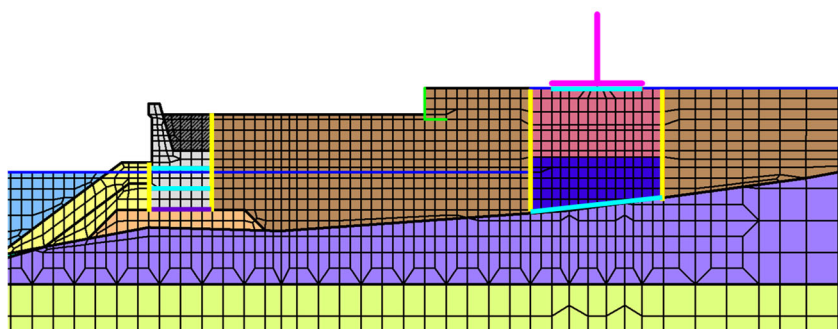


図-2.2.14 壁面摩擦抵抗の求め方

- ⑥ 底版のないセルラーブロックの滑動の性能照査に用いる摩擦係数の特性値は、厳密には鉄筋コンクリート部底版の受ける反力については0.6、中詰め石底部の受ける反力については0.8を用いて計算すべきであるが、便宜的に0.7としてもよい。

図 3.5.1-22 境界4の物性値の設定根拠 (港湾基準抜粋)

- : 岩盤 (第③速度層)
- : 岩盤 (第④速度層)
- : 埋戻土
- : 改良地盤①② 浅層 (薬液注入)
- : 改良地盤③ 深層 (薬液注入)
- : 被覆石
- : 基礎捨石
- : 護岸
- : 埋戻土 (施設護岸背面)
- : 海水
- : 防波壁
- : L型擁壁
- : 地下水面及び海水面
- : ジョイント要素(境界1)
- : ジョイント要素(境界3)
- : ジョイント要素(境界4)

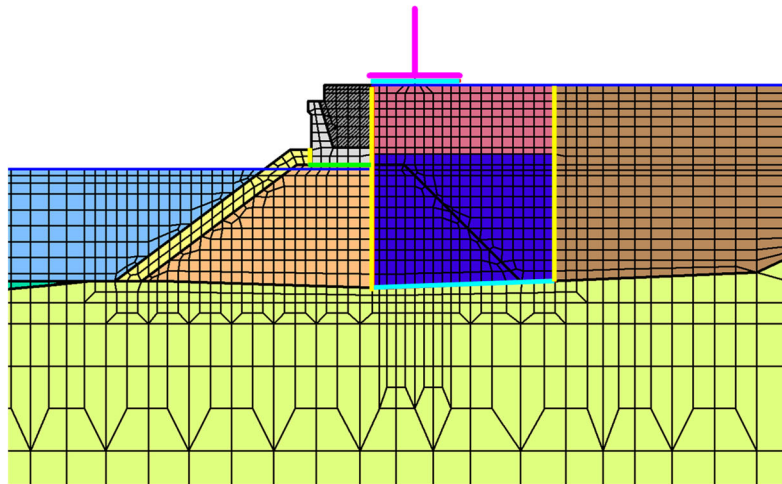


項目		粘着力 $c$ ( $N/mm^2$ )	内部摩擦角 $\phi$ ( $^{\circ}$ )
鉛直方向	境界 1	0	15.0
水平方向	境界 3	0	26.57
	境界 4	0	34.99

図 3.5.1-23(1) ①-①断面におけるジョイント要素の配置図



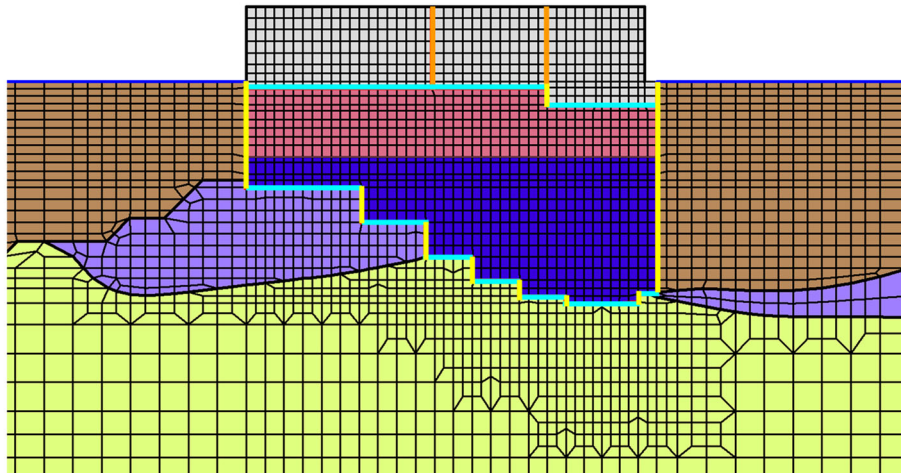
- : 岩盤 (第④速度層)
- : 埋戻土
- : 海底堆積物
- : 基礎捨石
- : 護岸
- : 埋戻土 (施設護岸背面)
- : 海水
- : 改良地盤①② 浅層 (薬液注入)
- : 改良地盤③ 深層 (薬液注入)
- : 被覆石
- : 防波壁
- : 地下水面及び海水面
- : ジョイント要素(境界1)
- : ジョイント要素(境界3)
- : ジョイント要素(境界5)



項目		粘着力 $c$ ( $N/mm^2$ )	内部摩擦角 $\phi$ ( $^{\circ}$ )
鉛直方向	境界 1	0	15.0
水平方向	境界 3	0	26.57
	境界 5	0	30.96

図 3.5.1-23(2) ⑤-⑤断面におけるジョイント要素の配置図

- : 岩盤 (第③速度層)      ■ : 改良地盤①② (薬液注入, 浅層)      — : ジョイント要素(境界1)
- : 岩盤 (第④速度層)      ■ : 改良地盤③ (薬液注入, 深層)      — : ジョイント要素(境界2)
- : 埋戻土      — : 地下水面      — : ジョイント要素(境界3)
- : 防波壁



項目		粘着力 $c$ ( $N/mm^2$ )	内部摩擦角 $\phi$ ( $^{\circ}$ )
鉛直方向	境界 1	0	15.0
	境界 2	0	0
水平方向	境界 3	0	26.57

図 3.5.1-23(3) ⑦-⑦断面におけるジョイント要素の配置図

ジョイント要素のばね定数は、港湾構造物設計事例集を参考に、数値解析上、不安定な挙動を起こさない程度に周囲材料の剛性よりも十分に大きな値を設定する。表 3.5.1-3 にジョイント要素のばね定数を示す。

また、ジョイント要素の力学特性を図 3.5.1-24 に示す。

表 3.5.1-3 ジョイント要素のばね定数

項目	せん断剛性 $k_s$ ( $\text{kN/m}^3$ )	圧縮剛性 $k_n$ ( $\text{kN/m}^3$ )
境界 1, 3, 4, 5	$1.0 \times 10^6$	$1.0 \times 10^6$
境界 2	0 *	$1.0 \times 10^6$

注記\*：目地部であるため、せん断剛性を保守的にゼロに設定。

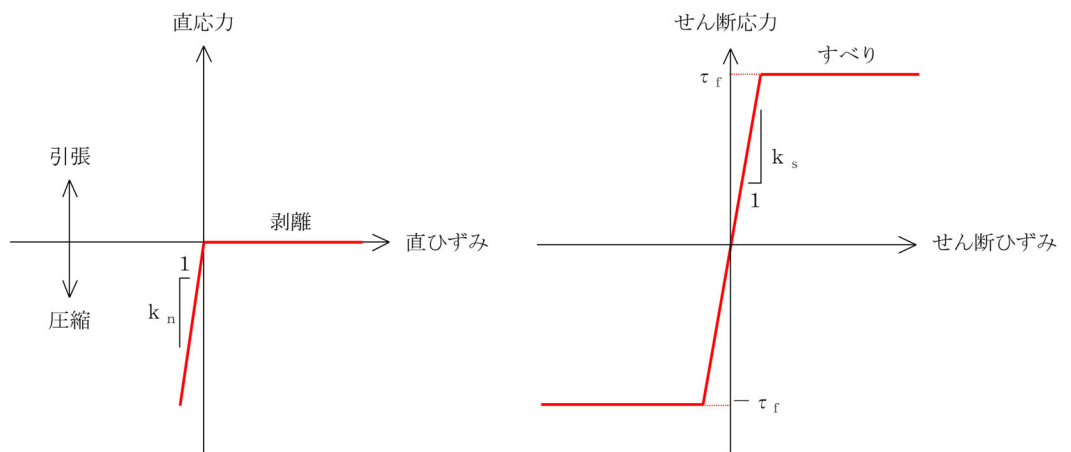


図 3.5.1-24 ジョイント要素の力学特性

### 3.5.2 使用材料及び材料の物性値

耐震評価に用いる材料定数は、適用基準類を基に設定する。使用材料を表 3.5.2-1 に、材料の物性値を表 3.5.2-2 及び表 3.5.2-3 に示す。また、グラウンドアンカにおける非線形ばねモデルの概念図を図 3.5.2-1 に示す。

なお、岩盤上面深さが 17.9m と深く、逆 T 擁壁の地震応答加速度等が厳しくなると考えられる⑤-⑤断面のモデル化にあたっては、更なる保守性を考慮するため、図 3.5.2-2 のとおり、岩盤上面深さが 18.5m とさらに深い⑤'-⑤'断面位置での地質断面図及びアンカー仕様を用いている。

表 3.5.2-1 使用材料

材料		諸元
逆 T 擁壁	鉄筋	SD345
	コンクリート	設計基準強度：24N/mm <sup>2</sup>
グラウンドアンカ		アンカー長：22.0m～30.0m, 極限引張り力：2800kN, 降伏引張り力：2400kN

表 3.5.2-2 材料の物性値（逆 T 擁壁）

材料		単位体積重量 (kN/m <sup>3</sup> )	ヤング係数 (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比
逆 T 擁壁	鉄筋コンクリート	24.0*	2.5×10 <sup>4</sup> *	0.2*

注記\*：コンクリート標準示方書〔構造性能照査編〕（土木学会，2002年制定）

表 3.5.2-3 材料の物性値 (グラウンドアンカ)

		引張剛性 k (kN/m)	テンドン降伏 引張り力 (kN)	設計アンカー力 (kN)	初期変位量 (mm)
①-①断面	陸側(アンカー1本)	20493	2400(アンカー1本) 4800(アンカー2本)	1440	70
	海側(アンカー2本)	40986		2880	
⑤-⑤断面	陸側(アンカー1本)	14064		1650	117
	海側(アンカー2本)	28128		3300	
⑦-⑦断面	77(アンカー3本)	44331	2400(アンカー1本) 7200(アンカー3本)	4950	112
	78(アンカー1本)	14412		1650	114
	79(アンカー3本)	42192		4950	117
	80(アンカー3本)	41198		3510	85
	81(アンカー3本)	42192		3510	83
	82(アンカー3本)	46700		3510	75
	83(アンカー3本)	57439		3510	61
	84(アンカー3本)	68729		3510	51
	85(アンカー3本)	77916		3510	45
	86(アンカー3本)	71541		3510	49
	87(アンカー3本)	71541		3510	49

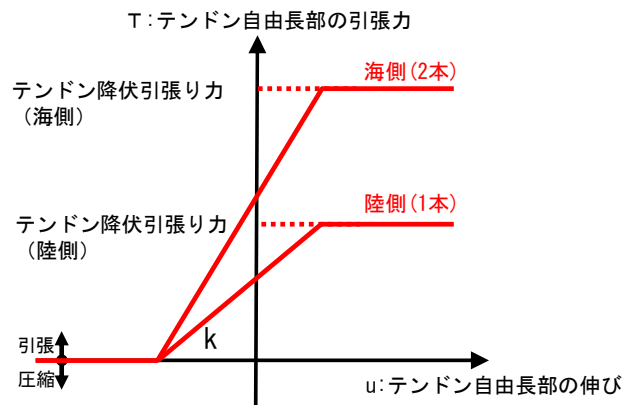
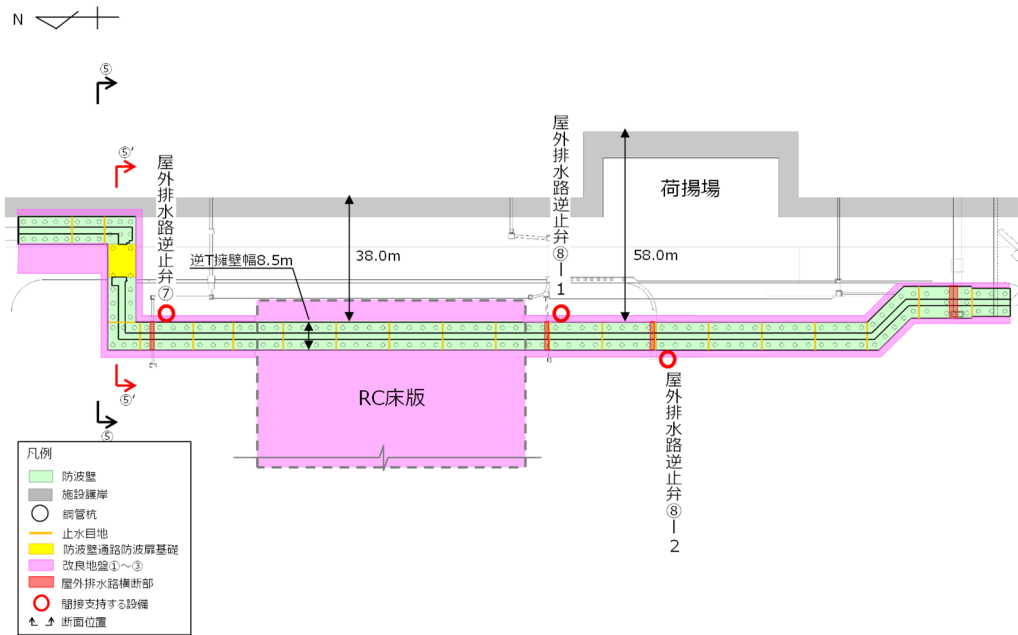
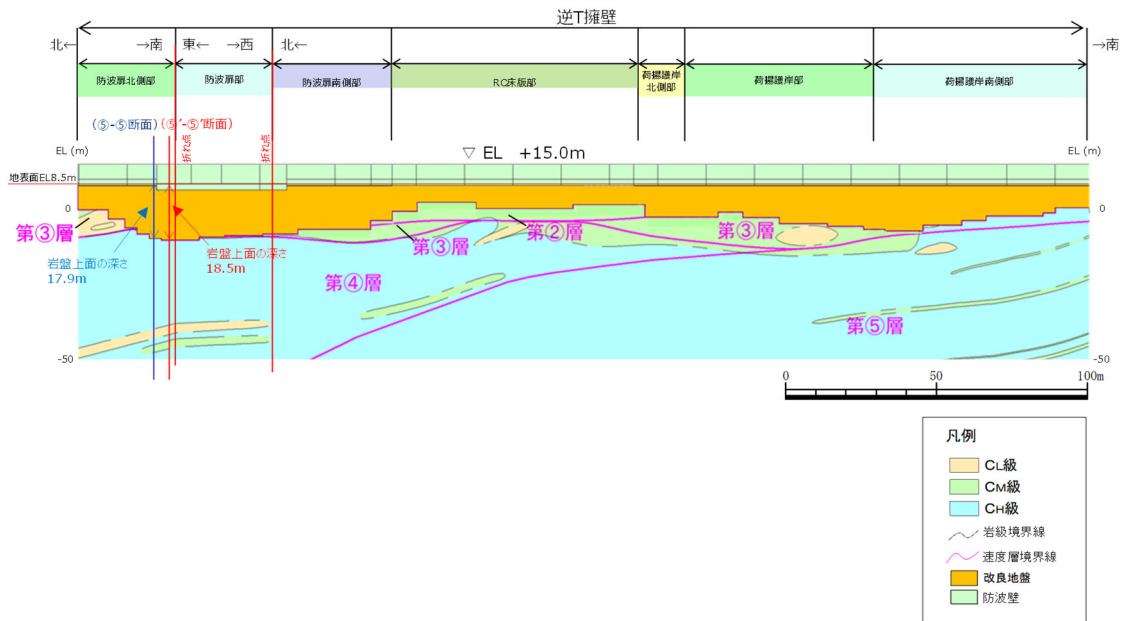


図 3.5.2-1 グラウンドアンカの非線形ばねモデルの概念図

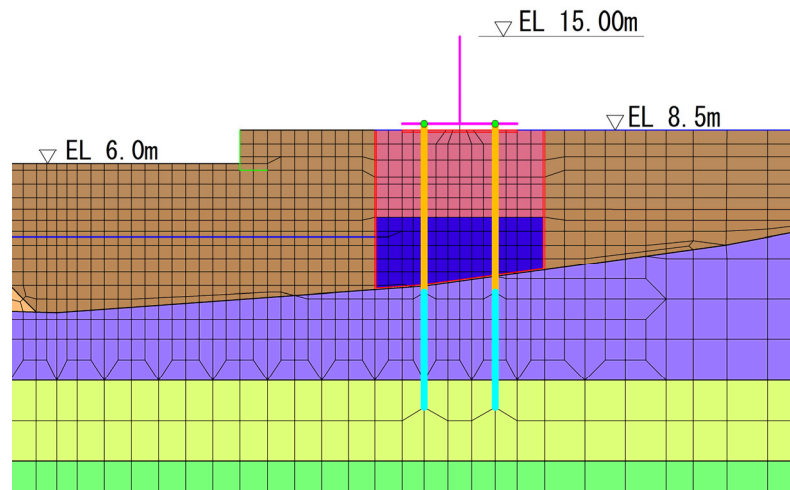


【平面位置図】

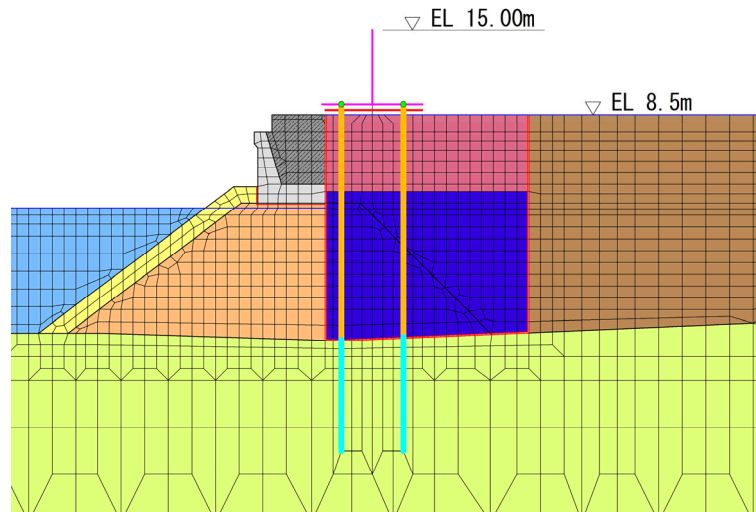


【断面位置図】

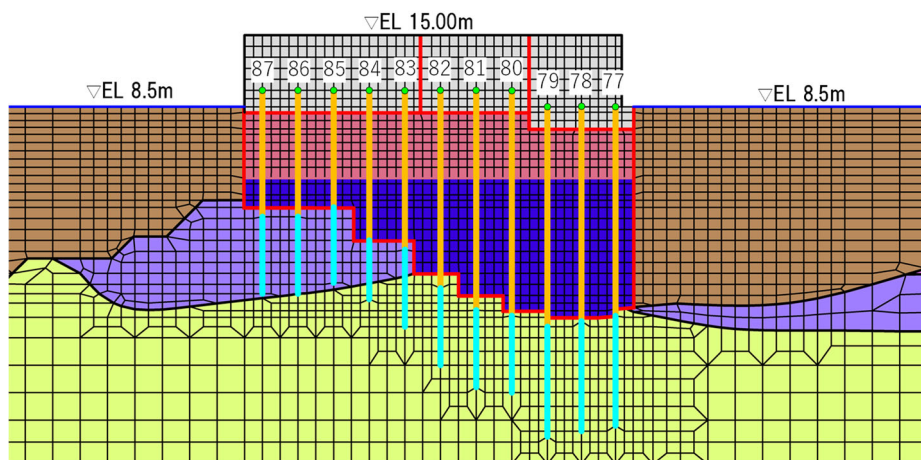
図 3.5.1-2 ⑤-⑤断面及び⑤'-⑤'断面の位置図



【①-①断面】



【⑤-⑤断面】



【⑦-⑦断面】

図 3.5.1-3 各解析モデルにおけるグラウンドアンカ位置

### 3.5.3 地盤の物性値

地盤の物性値は、VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」にて設定している物性値を用いる。地盤の物性値を表 3.5.3-1～表 3.5.3-5 に示す。

表 3.5.3-1 地盤の解析用物性値（有効応力解析，液状化検討対象層）

		埋戻土	
物理特性	密度 $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	2.11 【2.00】	
	間隙率 $n$	0.45	
変形特性	動せん断弾性係数 $G_{ma}$ (kN/m <sup>2</sup> )	154600	
	基準平均有効拘束圧 $\sigma_{ma}'$ (kN/m <sup>2</sup> )	98.00	
	ポアソン比 $\nu$	0.33	
	減衰定数の上限値 $h_{max}$	0.095	
強度特性	粘着力 $c'$ (kN/m <sup>2</sup> )	0	
	内部摩擦角 $\phi'$ (°)	40.17	
液状化特性	変相角 $\phi_p$ (°)	28	
	液状化パラメータ	S1	0.005
		w1	4.080
		P1	0.500
		P2	0.990
		C1	2.006

注：括弧内【】の数字は地下水位以浅の数値を示す。

動せん断弾性係数，内部摩擦角及び液状化パラメータは代表的な数値を示す。

注 1：括弧内【】の数字は地下水位以浅の数値を示す。

動せん断弾性係数，内部摩擦角及び液状化パラメータは代表的な数字を示す。

注 2：海底堆積物は，埋戻土の物性を流用し，液状化影響を考慮する。



表 3.5.3-2 地盤の解析用物性値（有効応力解析，非液状化層）

		基礎捨石及び被覆石
物理特性	密度 $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	2.04 【1.84】
	間隙率 n	0.45
変形特性	動せん断弾性係数 $G_{ma}$ (kN/m <sup>2</sup> )	180000
	基準平均有効拘束圧 $\sigma_{ma}'$ (kN/m <sup>2</sup> )	98
	ポアソン比 $\nu$	0.33
	減衰定数の上限値 $h_{max}$	0.24
強度特性	粘着力 $c'$ (kN/m <sup>2</sup> )	20
	内部摩擦角 $\phi'$ (°)	35.00

注：括弧内【】の数字は地下水位以浅の数値を示す。  
 動せん断弾性係数及び基準平均有効拘束圧は代表的な数値を示す。

表 3.5.3-3 地盤の解析用物性値（有効応力解析，改良地盤）

対象施設		防波壁	
		逆T擁壁	
種別（工法，地盤種別）		改良地盤①，② （薬液注入）	改良地盤③ （薬液注入）
物理特性	密度 $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	2.11	2.11
	間隙率 n	0.45	0.45
変形特性	動せん断弾性係数 $G_{ma}$ (kN/m <sup>2</sup> )	771300	956500
	基準平均有効拘束圧 $\sigma_{ma}'$ (kN/m <sup>2</sup> )	98.00	98.00
	ポアソン比 $\nu$	0.33	0.33
	減衰定数の上限値 $h_{max}$	0.095	0.095
強度特性	粘着力 $c'$ (kN/m <sup>2</sup> )	628	1140
	内部摩擦角 $\phi'$	38.00	40.54

注：動せん断弾性係数は代表的な数値を示す。

表 3.5.3-4 改良地盤①～③の残留強度及び引張強度

地盤	残留強度*		引張強度* $\sigma_t$ (N/mm <sup>2</sup> )
	$c'$ (N/mm <sup>2</sup> )	$\phi'$ (°)	
改良地盤①・②	0.091	46.08	0.258
改良地盤③	0.205	42.71	0.495

注記\*：残留強度及び引張強度の設定は「(参考資料3) 改良地盤①～③の物性値の設定方法について」に従い設定する。

表 3.5.3-5 地盤の解析用物性値 (有効応力解析, 3号機エリア)

		岩盤②速度層	岩盤③速度層	岩盤④速度層	岩盤⑤速度層
P波速度	$V_p$ (m/s)	1710	2270	3240	3860
S波速度	$V_s$ (m/s)	620	960	1520	1900
単位体積重量	$\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	23.3	23.4	24.5	25.2
動ポアソン比	$\nu_d$	0.42	0.39	0.36	0.34
減衰定数	$h$	0.030	0.030	0.030	0.030
弾性係数	$E$ (kN/m <sup>2</sup> )	2601000	6118000	15690000	24860000

### 3.5.4 地下水位

設計用地地下水位は、VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」に従い設定する。設計用地地下水位を表 3.5.4-1 に示す。

表 3.5.4-1 設計用地下水位

施設名称	設計用地下水位
防波壁（逆 T 擁壁）	防波壁より陸側：EL 8.5m* 防波壁より海側：EL 0.58m

注記\*：地表面が EL 8.5m よりも低い地点については、地下水位を地表面とする。

### 3.6 評価対象部位

評価対象部位は、防波壁（逆 T 擁壁）の構造上の特徴を踏まえ設定する。

#### 3.6.1 施設・地盤の健全性評価

施設・地盤の健全性評価に係る評価対象部位は、逆 T 擁壁、グラウンドアンカ及び改良地盤①～③とする。

#### 3.6.2 施設の変形性評価

施設の変形性評価に係る評価対象部位は、構造物間に設置する止水目地とする。

#### 3.6.3 基礎地盤の支持性能評価

基礎地盤の支持性能評価に係る評価対象部位は、逆 T 擁壁を支持する基礎地盤（逆 T 擁壁直下の改良地盤及び改良地盤直下の岩盤）とする。

### 3.7 許容限界

許容限界は、VI-2-1-9「機能維持の基本方針」に基づき設定する。

#### 3.7.1 逆T擁壁

逆T擁壁の許容限界は、「コンクリート標準示方書〔構造性能照査編〕（土木学会，2002年制定）」に基づき，短期許容応力度とする。

表 3.7.1-1 逆T擁壁の許容限界

種別	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		短期許容応力度* (N/mm <sup>2</sup> )
コンクリート ( $f'_{ck}=24\text{N/mm}^2$ )	許容曲げ圧縮応力度 $\sigma_{ca}$	9	13.5
	許容せん断応力度 $\tau_{a1}$	0.45	0.67
	支圧応力度 $\sigma_{ba}$ (グラウンドアンカ)	12	18
	支圧応力度 $\sigma_{ca}$ (隣接躯体)	7.2	10.8
鉄筋 (SD345)	許容曲げ引張応力度 $\sigma_{sa}$	196	294

注記\*：短期許容応力度は，コンクリート標準示方書より許容応力度に対して1.5倍の割増を考慮する。

#### 3.7.2 グラウンドアンカ

グラウンドアンカの許容限界は，「グラウンドアンカー設計・施工基準，同解説 JGS4101-2012（地盤工学会）」に基づき，テンドンの許容引張力  $T_{as}$ ，テンドンの許容拘束力  $T_{ab}$  及びテンドンの許容引抜力  $T_{ag}$  を表 3.7.2-1 とおり設定し，この中で最小であるテンドンの許容拘束力  $T_{ab}$  を許容限界として採用する。

許容限界の設定方法の詳細は，「（参考資料1）グラウンドアンカの実態に即したモデル化，物性値及び許容限界の設定方法」に示す。

表 3.7.2-1 グラウンドアンカの許容限界

項目	許容値 (kN)	
	①-①断面	⑤-⑤断面
テンドンの許容引張力 $T_{as}$	2160	2160
テンドンの許容拘束力 $T_{ab}$	<u>1764</u> (採用)	<u>2076</u> (採用)
テンドンの許容引抜力 $T_{ag}$	1802	2120

### 3.7.3 改良地盤

改良地盤の許容限界は、「耐津波設計に係る工認審査ガイド」を準用し、表 3.7.3-1 に示すすべり安全率を設定する。

表 3.7.3-1 改良地盤の許容限界

評価項目	許容限界
すべり安全率	1.2 以上

### 3.7.4 止水目地

止水目地の許容限界は、メーカー規格、漏水試験及び変形試験により、有意な漏えいが生じないことを確認した変形量とする。評価対象断面である①-①断面におけるゴムジョイントの許容限界及び⑤-⑤断面におけるシートジョイントの許容限界を表 3.7.4-1 に示す。

表 3.7.4-1 止水目地の変形量の許容限界

評価項目	許容限界 (mm)	
	①-①断面	⑤-⑤断面
変形量	ゴムジョイント：449	シートジョイント：1960

### 3.7.5 基礎地盤

基礎地盤に発生する接地圧に対する許容限界は、VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」に基づき、支持力試験及び道路橋示方書（I 共通編・IV 下部構造編）・同解析（日本道路協会、平成 14 年 3 月）により設定する。基礎地盤の許容限界を表 3.7.5-1 に示す。

表 3.7.5-1 基礎地盤の許容限界

評価項目	基礎地盤		許容限界 (N/mm <sup>2</sup> )
極限支持力	岩盤	C <sub>H</sub> 級	9.8
		C <sub>M</sub> 級	
		C <sub>L</sub> 級	3.9
	改良地盤		1.4

### 3.8 評価方法

防波壁（逆 T 擁壁）の耐震評価は，地震応答解析に基づいて算定した発生応力が「3.5 許容限界」で設定した許容限界を満足することを確認する。

#### 3.8.1 逆 T 擁壁

##### (1) 曲げ軸力照査及びせん断力照査

逆 T 擁壁の評価は，コンクリートの曲げ圧縮応力及び部材に作用するせん断応力が許容限界以下であることを確認する。

逆 T 擁壁の応力度算定には，解析コード「EMR G I N G」を使用する。なお，解析コードの検証，妥当性確認等の概要については，VI-5「計算機プログラム（解析コード）の概要」に示す。

##### (2) グラウンドアンカによる支圧照査

グラウンドアンカによる支圧照査は，発生アンカー力を用いて次式により算定される支圧応力度が許容限界以下であることを確認する。

$$\sigma_b = T/S \quad \dots \dots \dots (3.1)$$

ここで，

$\sigma_b$  : グラウンドアンカにより発生する支圧応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

T : 発生アンカー力 (引張) (N)

S : 支圧板の面積 (mm<sup>2</sup>) (≒142800mm<sup>2</sup>)

(3) 隣接する躯体同士の支圧照査

隣接する躯体同士の支圧応力度に対する照査は、躯体に発生する慣性力を用いて、次式により算定される隣接する躯体に作用する支圧応力度が、許容限界以下であることを確認する。

$$\sigma_{cv} = F/S \quad \dots \dots \dots (3.2)$$

ここで、

$\sigma_{cv}$  : 隣接する躯体の支圧応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

F : 逆 T 擁壁に発生する慣性力 (N)

(= 「逆 T 擁壁の質量(kg)」 × 「地震時加速度(m/s<sup>2</sup>)」)

S : 衝突する面の面積 (逆 T 擁壁側面の面積) (mm<sup>2</sup>)

### 3.8.2 グラウンドアンカ

グラウンドアンカの耐震評価は、地震応答解析に基づいて算定した発生アンカー力が許容限界以下であることを確認する。

なお、当該照査により確保されることを確認した設計アンカー力を用い、逆T擁壁の滑動、転倒に対する耐力を確認するとともに、グラウンドアンカによる変形抑制効果等を確認するため、逆T擁壁底面の傾斜を確認する。

滑動、転倒に対する耐力の確認は以下のとおり実施する。

#### (1) 逆T擁壁の滑動の照査

逆T擁壁の滑動の照査においては、地震時における逆T擁壁の滑動に対する耐力（摩擦抵抗力）と逆T擁壁に発生する作用力（地震時荷重等）の比が1以上であることを確認する。

滑動の照査にあたっては、逆T擁壁と改良地盤の境界部の摩擦係数は、港湾基準に示されるコンクリート同士の摩擦係数 $\mu = 0.5$ を設定する。

安全率=耐力/作用力

耐力（摩擦抵抗）：（自重、積雪荷重＋地震時荷重（鉛直方向））×静止摩擦係数  
作用力：地震時荷重（水平方向）＋風荷重

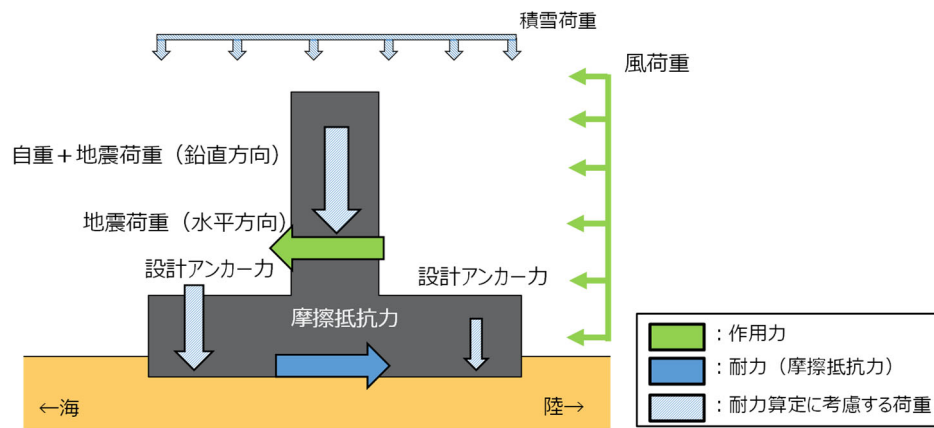


図 3.8.2-1 滑動の照査における荷重イメージ



(2) 逆 T 擁壁の転倒の照査

逆 T 擁壁の転倒の照査においては、地震時における逆 T 擁壁の転倒に対する耐力（自重、積雪荷重及び地震時荷重（鉛直方向）によるモーメント）と逆 T 擁壁に発生する作用力（地震時荷重（水平方向）及び風荷重によるモーメント）の比が 1 以上であることを確認する。

安全率=耐力／作用力

耐力：耐力算定に考慮する荷重（自重、積雪荷重及び地震時荷重（鉛直方向））のモーメントの総和

作用力：作用力算定に考慮する荷重（地震時荷重（水平方向）及び風荷重）のモーメントの総和

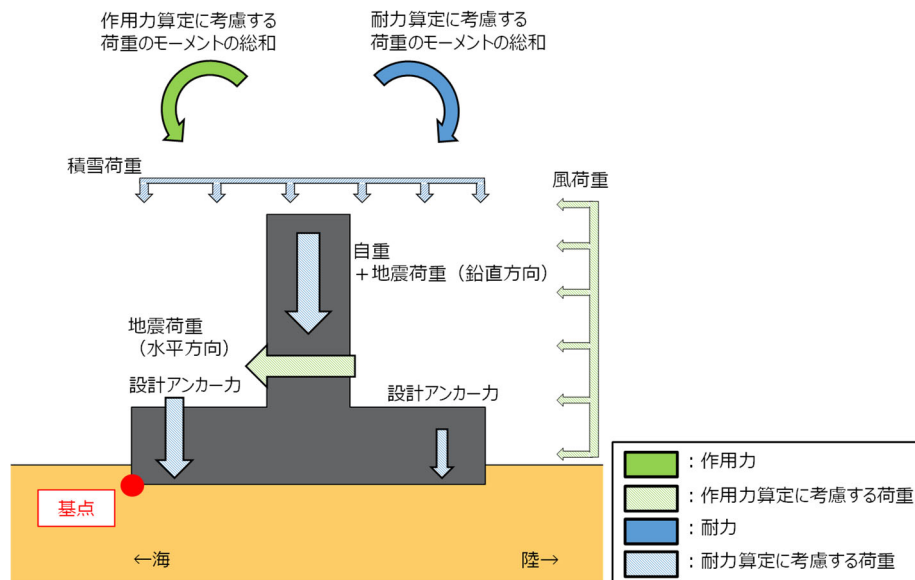


図 3.8.2-2 転倒の照査における荷重イメージ

### 3.8.3 改良地盤

改良地盤の評価は、改良地盤を通るすべり面のすべり安全率が1.2以上であることを確認する。すべり安全率は、想定したすべり面上の応力状態をもとに、すべり面上のせん断抵抗力の和をせん断力の和で除した値を時々刻々求め、最小すべり安全率を算定する。

また、VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」に示すとおり、改良地盤の解析用物性値のうちせん断強度は、室内配合試験結果よりも保守的な強度を設定していることから、強度特性のばらつきを考慮した評価（平均値 $-1\sigma$ ）は実施しない。

### 3.8.4 止水目地

止水目地の地震時の評価について、法線直角方向及び法線方向ともに、地震荷重による最大変位が許容限界以下であることを確認する。

x 方向（法線直角方向）及び z 方向（深度方向）の変位は、図 3.8.4-1 に示すとおり、逆 T 擁壁天端における地震時の変位量とし、保守的に各ブロックの位相が逆になったことを考慮し、時刻歴最大の変位量を 2 倍したものを算定する。

y 方向（法線方向）の変位は、隣接する逆 T 擁壁の天端間の相対変位とする。

x 方向（法線直角方向）の変位  $\delta_x$  :  $\delta_x = |\delta_x(T)| \times 2$

y 方向（法線方向）の変位  $\delta_y$  :  $\delta_y = |\delta_y(T)|$

z 方向（深度方向）の変位  $\delta_z$  :  $\delta_z = |\delta_z(T)| \times 2$

ここで、

$\delta_x(T)$  : x 方向の最大変位

$\delta_y(T)$  : y 方向の最大相対変位

$\delta_z(T)$  : z 方向の最大変位

法線直角方向、法線方向及び深度方向の変位量を用い、下式のとおり合成方向（3 方向合成）の変位量を求め、止水目地の地震荷重による最大変位とする。

$$\text{最大変位 } \delta : \delta = \sqrt{\delta_x^2 + \delta_y^2 + \delta_z^2}$$

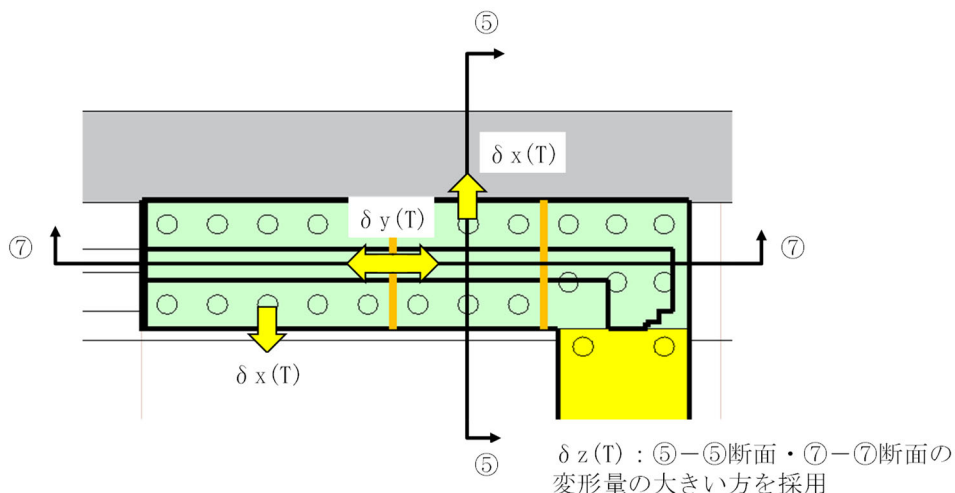


図 3.8.4-1 地震時の変位の概念図

「1.8 津波防護施設の設計における評価対象断面の選定 1.8.2 防波壁 (2) 防波壁 (逆 T 擁壁)」に記載のとおり、⑤-⑤断面は、①-①断面より止水目地の変形量が大きくなると考えられることから、⑤-⑤断面に直交する法線方向の断面として⑦-⑦断面を選定している。

したがって、表 3.8.4-1 のとおり、①-①断面の法線方向の変形量についても、保守的に⑦-⑦断面の変形量を用いて算定する。

表 3.8.4-1 止水目地の変形量の算定方法

	$\delta_x, \delta_z$	$\delta_y$
①-①断面	①-①断面の逆 T 擁壁天端の最大変位 $\delta_x(T)$ の 2 倍	⑦-⑦断面の隣接する逆 T 擁壁の天端間の相対変位 $\delta_y(T)$
⑤-⑤断面	⑤-⑤断面の逆 T 擁壁天端の最大変位 $\delta_z(T)$ の 2 倍	

### 3.8.5 基礎地盤

基礎地盤の支持性能評価においては、底版直下の改良地盤及び改良地盤直下の岩盤に生じる接地圧の最大値が許容限界以下であることを確認する。

#### 4. 耐震評価結果

##### 4.1 地震応答解析結果

地震応答解析結果として「断面力分布図」，「最大せん断ひずみ分布」，「最大過剰間隙水圧分布」を記載する。なお，断面力分布について，逆 T 擁壁は単位奥行あたりの断面力を図示する。

耐震評価においては，表 4.1-1 に示すとおり，全ての基準地震動  $S_s$  に対して実施するケース①において，曲げ・軸力系の破壊に対する照査，せん断破壊に対する照査，グラウンドアンカに対する照査及び基礎地盤の支持性能に対する照査の各照査項目のうち，照査値が 0.5 を超える照査項目に対して，最も厳しい（許容限界に対する裕度が最も小さい）地震動を用いて追加解析ケース②，③を実施する。

表 4.1-1 照査値が 0.5 を超える最も厳しい地震動（①-①断面，⑤-⑤断面）

断面	評価項目			
	逆 T 擁壁		グラウンドアンカ	基礎地盤
	曲げ・軸力系	せん断		
①-①断面	$S_s - N 2$ (EW) (-+) 0.616 (曲げ引張)	$S_s - D$ (+-) 0.702	$S_s - N 1$ (++) 0.859	0.5 以下
⑤-⑤断面	$S_s - N 1$ (++) 0.675 (曲げ引張)	$S_s - D$ (--) 0.792	$S_s - N 1$ (++) 0.849	0.5 以下

#### 4.1.1 解析ケースと照査値

##### (1) 逆 T 擁壁の曲げ・軸力系の破壊に対する照査

表 4.1.1-1～表 4.1.1-4 に逆 T 擁壁における曲げ・軸力系の破壊に対する照査の実施ケースと照査値を示す。

表 4.1.1-1 逆 T 擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査  
における実施ケースと照査値 (①-①断面)

地震動		解析ケース		逆 T 擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査		
		①	②	③		
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.312				
	(-+)	0.289				
	(+-)	0.326	0.319	0.326		
	(--)	0.289				
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.282				
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.252				
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.230	0.230	0.230		
	(-+)	0.208				
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.260				
	(-+)	0.238				
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.252				
	(-+)	0.289	0.289	0.289		

表 4.1.1-2 逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査実施ケースと照査値 (①-①断面)

地震動 \ 解析ケース		逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.582		
	(-+)	0.576		
	(+-)	0.557	0.554	0.560
	(--)	0.565		
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.555		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.471		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.377	0.375	0.379
	(-+)	0.393		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.514		
	(-+)	0.512		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.547		
	(-+)	0.616	0.616	0.618

0.616 : 曲げ・軸力系の破壊に対する照査のうち、照査値 0.5 を超える最も厳しい照査値。

表 4.1.1-3 逆 T 擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査  
 における実施ケースと照査値 (⑤-⑤断面)

地震動 \ 解析ケース		逆 T 擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.326		
	(-+)	0.282		
	(+-)	0.319		
	(--)	0.297	0.297	0.297
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.252		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.245		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.326	0.326	0.326
	(-+)	0.252		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.275		
	(-+)	0.238		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.223		
	(-+)	0.260		



表 4.1.1-4 逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査  
 における実施ケースと照査値 (⑤-⑤断面)

地震動 \ 解析ケース		逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.630		
	(-+)	0.598		
	(+-)	0.615		
	(--)	0.598	0.601	0.604
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.541		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.512		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.675	0.674	0.674
	(-+)	0.620		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.493		
	(-+)	0.535		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.459		
	(-+)	0.561		

0.675 : 曲げ・軸力系の破壊に対する照査のうち、照査値  
 0.5 を超える最も厳しい照査値。

(2) 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査

表 4.1.1-5 及び表 4.1.1-6 に逆 T 擁壁におけるせん断破壊に対する照査の実施ケースと照査値を示す。

表 4.1.1-5 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査  
における実施ケースと照査値 (①-①断面)

地震動 \ 解析ケース		逆 T 擁壁のせん断力照査 (①-①断面)		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.627		
	(-+)	0.642		
	(+-)	0.702	0.702	0.702
	(--)	0.642		
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.568		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.538		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.538	0.538	0.538
	(-+)	0.493		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.538		
	(-+)	0.508		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.538		
	(-+)	0.553	0.553	0.553

0.702 : せん断破壊に対する照査のうち、照査値 0.5 を超える最も厳しい照査値。

表 4.1.1-6 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査  
 における実施ケースと照査値 (⑤-⑤断面)

地震動 \ 解析ケース		逆 T 擁壁のせん断力照査 (⑤-⑤断面)		
		①	②	③
S s - D	(++)	0.732		
	(-+)	0.717		
	(+-)	0.777		
	(--)	0.792	0.777	0.777
S s - F1 (E W)	(++)	0.523		
S s - F2 (E W)	(++)	0.672		
S s - N1	(++)	0.672	0.657	0.657
	(-+)	0.568		
S s - N2 (N S)	(++)	0.538		
	(-+)	0.568		
S s - N2 (E W)	(++)	0.538		
	(-+)	0.553		

0.792 : せん断破壊に対する照査のうち、照査値 0.5 を  
 超える最も厳しい照査値。

(3) 逆 T 擁壁のグラウンドアンカによる支圧に対する照査

表 4.1.1-7 及び表 4.1.1-8 に逆 T 擁壁におけるグラウンドアンカの支圧に対する照査の実施ケースと照査値を示す。

表 4.1.1-7 グラウンドアンカによる支圧照査  
 における実施ケースと照査値 (①-①断面)

地震動 \ 解析ケース		グラウンドアンカによる支圧照査		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.584		
	(-+)	0.584		
	(+-)	0.584	0.584	0.584
	(--)	0.578		
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.573		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.573		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.589	0.589	0.589
	(-+)	0.573		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.578		
	(-+)	0.573	0.573	0.573
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.584		
	(-+)	0.573		

表 4.1.1-8 グラウンドアンカによる支圧照査  
 における実施ケースと照査値 (⑤-⑤断面)

地震動 \ 解析ケース		グラウンドアンカによる支圧照査		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.678		
	(-+)	0.678		
	(+-)	0.673		
	(--)	0.673	0.673	0.673
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.662		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.667		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.684	0.684	0.684
	(-+)	0.662		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.673		
	(-+)	0.662		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.678		
	(-+)	0.662		

(4) グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査

表 4.1.1-9 及び表 4.1.1-10 にグラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査の実施ケースと照査値を示す。

表 4.1.1-9 グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査  
 における実施ケースと照査値 (①-①断面)

地震動		解析ケース	グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査		
			①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)		0.850		
	(-+)		0.847		
	(+-)		0.847	0.847	0.847
	(--)		0.842		
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)		0.832		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)		0.836		
S <sub>s</sub> -N1	(++)		0.859	0.859	0.859
	(-+)		0.838		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)		0.840		
	(-+)		0.838		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)		0.847		
	(-+)		0.836	0.835	0.836

0.859 : グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査のうち、照査値 0.5 を超える最も厳しい照査値。

表 4.1.1-10 グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査  
 における実施ケースと照査値 (⑤-⑤断面)

地震動		解析ケース	グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査		
			①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)		0.837		
	(-+)		0.841		
	(+-)		0.833		
	(--)		0.835	0.835	0.835
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)		0.821		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)		0.826		
S <sub>s</sub> -N1	(++)		0.849	0.849	0.849
	(-+)		0.822		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)		0.836		
	(-+)		0.821		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)		0.837		
	(-+)		0.818		

0.849: グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査のうち、照査値  
 0.5 を超える最も厳しい地震動。

(5) 改良地盤のすべりに対する照査

表 4.1.1-11 及び表 4.1.1-12 に改良地盤のすべりに対する照査の実施ケースと照査値を示す。

表 4.1.1-11 改良地盤のすべりに対する照査  
における実施ケースと照査値 (①-①断面)

地震動 \ 解析ケース		改良地盤のすべりに対する照査		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	3.99		
	(-+)	4.05		
	(+-)	3.94	3.95	3.95
	(--)	3.99		
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	4.02		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	4.41		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	3.42	3.42	3.43
	(-+)	3.49		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	4.30		
	(-+)	4.49		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	4.06		
	(-+)	4.20	4.19	4.20



表 4.1.1-12 改良地盤のすべりに対する照査  
 における実施ケースと照査値 (⑤-⑤断面)

地震動 \ 解析ケース		改良地盤のすべりに対する照査 (⑤-⑤断面)		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	3.37		
	(-+)	3.15		
	(+-)	3.46		
	(--)	3.26	3.26	3.26
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	4.94		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	4.28		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	3.12	3.12	3.12
	(-+)	3.21		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	4.25		
	(-+)	4.26		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	3.89		
	(-+)	3.90		

(6) 基礎地盤の支持性能に対する照査

表 4.1.1-13～表 4.1.1-16 に基礎地盤の支持性能に対する照査の実施ケースと照査値を示す。

表 4.1.1-13 基礎地盤の支持性能に対する照査の実施ケースと照査値

(①-①断面, 改良地盤)

地震動 \ 解析ケース		基礎地盤の支持性能に対する照査 (①-①断面, 改良地盤①~③)		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.358		
	(-+)	0.358		
	(+-)	0.358	0.358	0.358
	(--)	0.358		
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.358		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.358		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.358	0.358	0.358
	(-+)	0.358		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.358		
	(-+)	0.358		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.358		
	(-+)	0.358	0.358	0.358

表 4.1.1-14 基礎地盤の支持性能に対する照査の実施ケースと照査値

(①-①断面, 岩盤)

地震動 \ 解析ケース		基礎地盤の支持性能に対する照査 (①-①断面, 岩盤)		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.113		
	(-+)	0.113		
	(+-)	0.123	0.123	0.123
	(--)	0.123		
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.113		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.103		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.103	0.103	0.103
	(-+)	0.113		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.103		
	(-+)	0.103		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.092		
	(-+)	0.103	0.103	0.103

表 4.1.1-15 基礎地盤の支持性能に対する照査の実施ケースと照査値  
 (⑤-⑤断面, 改良地盤)

地震動 \ 解析ケース		基礎地盤の支持性能に対する照査 (⑤-⑤断面, 改良地盤①~③)		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.429		
	(-+)	0.429		
	(+-)	0.429		
	(--)	0.429	0.429	0.429
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.429		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.429		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.358	0.358	0.358
	(-+)	0.429		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.429		
	(-+)	0.429		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.429		
	(-+)	0.429		

表 4.1.1-16 基礎地盤の支持性能に対する照査の実施ケースと照査値  
(⑤-⑤断面, 岩盤)

地震動 \ 解析ケース		基礎地盤の支持性能に対する照査 (⑤-⑤断面, 岩盤)		
		①	②	③
S <sub>s</sub> -D	(++)	0.385		
	(-+)	0.385		
	(+-)	0.385		
	(--)	0.385	0.385	0.385
S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.385		
S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.359		
S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.385	0.385	0.385
	(-+)	0.385		
S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.359		
	(-+)	0.359		
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.359		
	(-+)	0.385		

#### 4.1.2 断面力分布（逆 T 擁壁の曲げ・軸力系に対する照査）

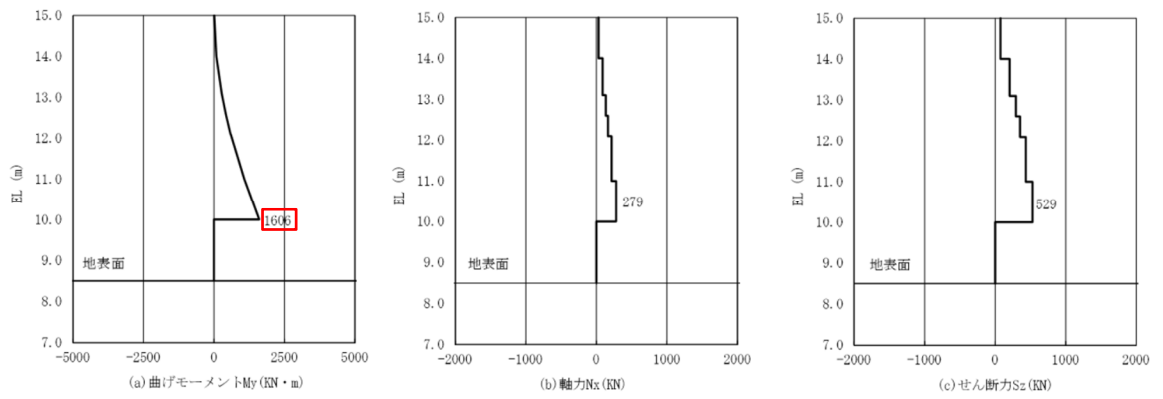
逆 T 擁壁の曲げ・軸力系に対する照査において各解析ケースのうち最も厳しい照査値となる結果を表 4.1.2-1 及び 4.1.2-2 に示す。また、該当する解析ケースの断面力図を図 4.1.2-1 及び 4.1.2-2 に示す。

表 4.1.2-1 逆 T 擁壁の曲げ・軸力系の破壊に対する照査  
 における最大照査値 (①-①断面)

地震動	解析 ケース	発生断面力		曲げ圧縮 応力度 $\sigma_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)			
S <sub>s</sub> -N2 (EW) 方向 (-+)	③	1606	326	181.4	294	0.618

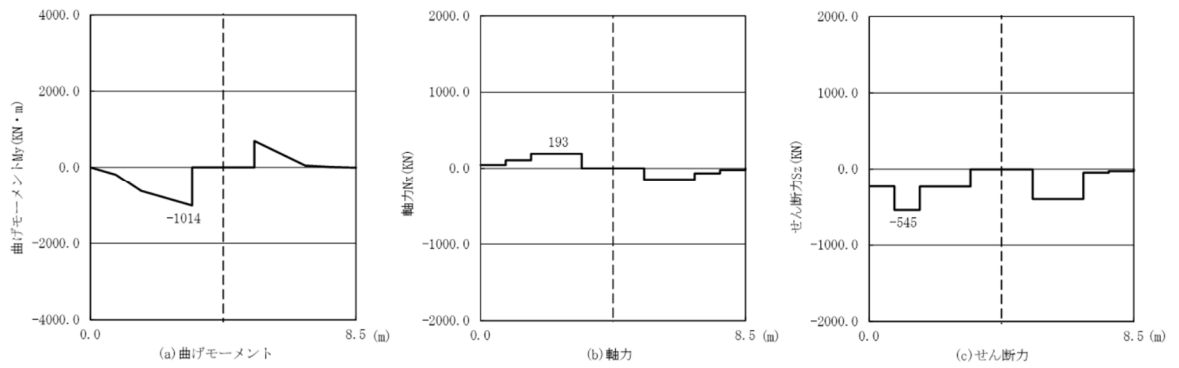
表 4.1.2-2 逆 T 擁壁の曲げ・軸力系の破壊に対する照査  
 における最大照査値 (⑤-⑤断面)

地震動	解析 ケース	発生断面力		曲げ圧縮 応力度 $\sigma_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)			
S <sub>s</sub> -N1 (++)	①	-1924	153	198.4	294	0.675



(- : 引張, + : 圧縮)

(縦壁)



(- : 引張, + : 圧縮)

注：逆 T 擁壁(底版)西端をゼロとする。

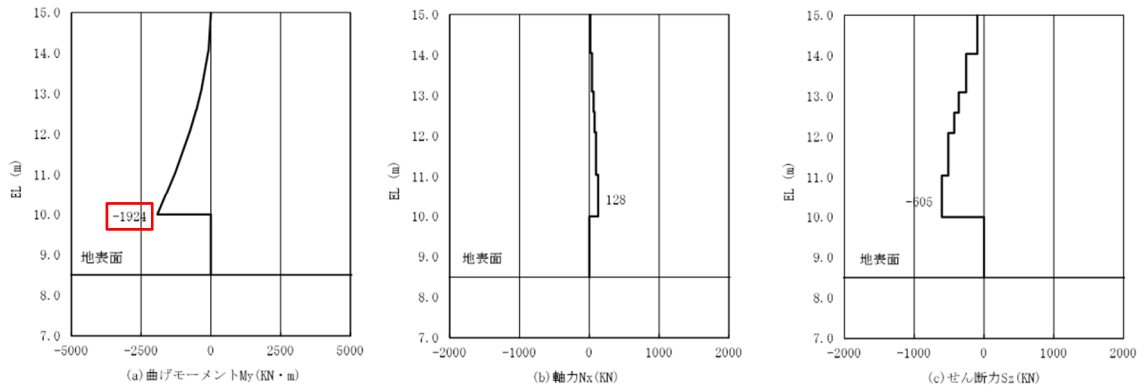
(底版)

図 4.1.2-1 逆 T 擁壁の曲げ・軸力系に対する照査における  
最大照査値の評価時刻での断面力

(①-①断面, S s - N 2 E W 方向 (-+), t=25.96s)

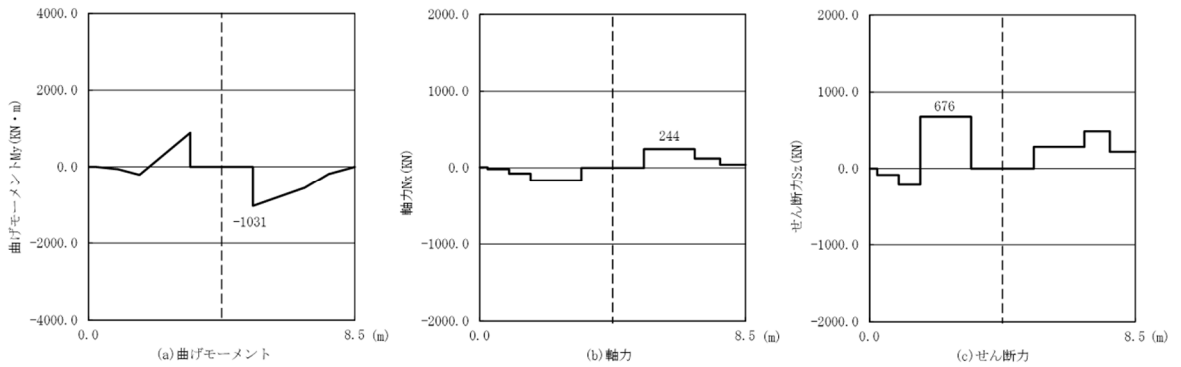
解析ケース③：地盤物性のばらつきを考慮した解析ケース (平均値 - 1σ)





(- : 引張, + : 圧縮)

(豎壁)



(- : 引張, + : 圧縮)

注：逆 T 擁壁(底版)西端をゼロとする。

(底版)

図 4.1.2-2 逆 T 擁壁の曲げ・軸力系に対する照査における  
最大照査値の評価時刻での断面力

(⑤-⑤断面,  $S_s - N_1$  (++) ,  $t = 7.58s$ )

解析ケース①：基本ケース

#### 4.1.3 断面力分布（逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査）

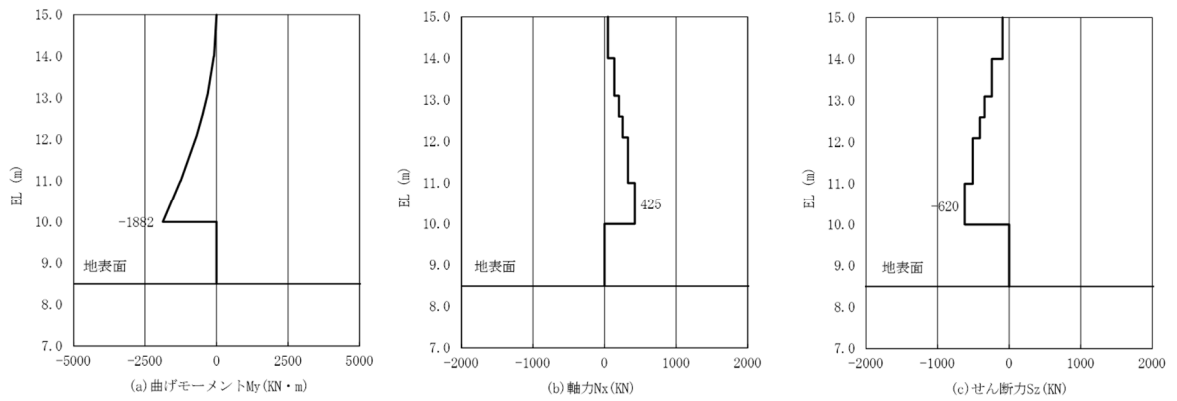
逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査において各解析ケースのうち最も厳しい照査値となる結果を表 4.1.3-1 及び 4.1.3-2 に示す。また、該当する解析ケースの断面力図を図 4.1.3-1 及び 4.1.3-2 に示す。

表 4.1.3-1 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査における最大照査値（①-①断面）

地震動	解析 ケース	発生断面力	せん断 応力度 $\tau_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\tau_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\tau_s / \tau_{sa}$
		せん断力 (kN)			
S <sub>s</sub> -D (+-)	③	697	0.47	0.67	0.702

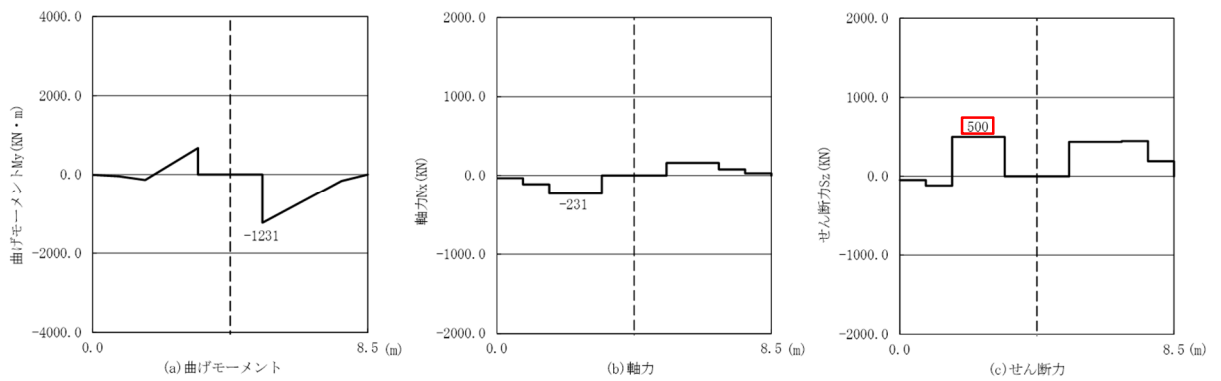
表 4.1.3-2 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査における最大照査値（⑤-⑤断面）

地震動	解析 ケース	発生断面力	せん断 応力度 $\tau_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\tau_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\tau_s / \tau_{sa}$
		せん断力 (kN)			
S <sub>s</sub> -D (--)	①	-786	0.53	0.67	0.792



(- : 引張, + : 圧縮)

( 壁 )



(- : 引張, + : 圧縮)

注 : 逆 T 擁壁 (底版) 西端をゼロとする。

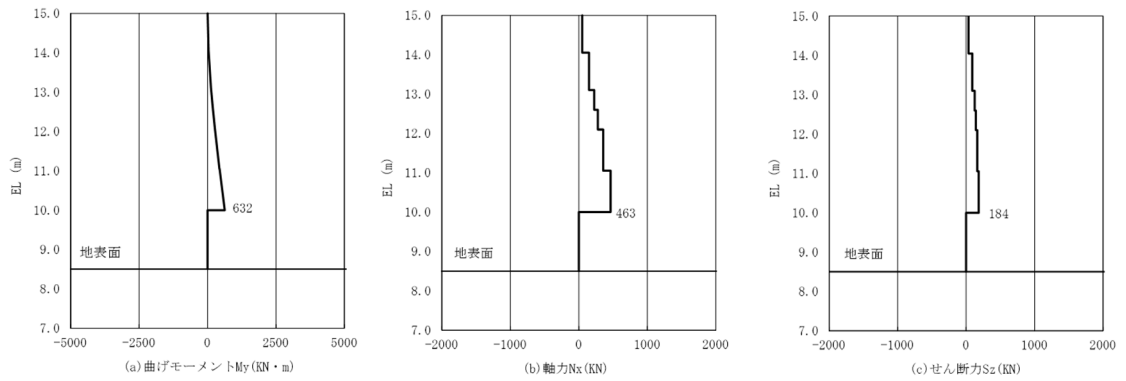
( 底版 )

図 4.1.3-1 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査における

最大照査値の評価時刻での断面力

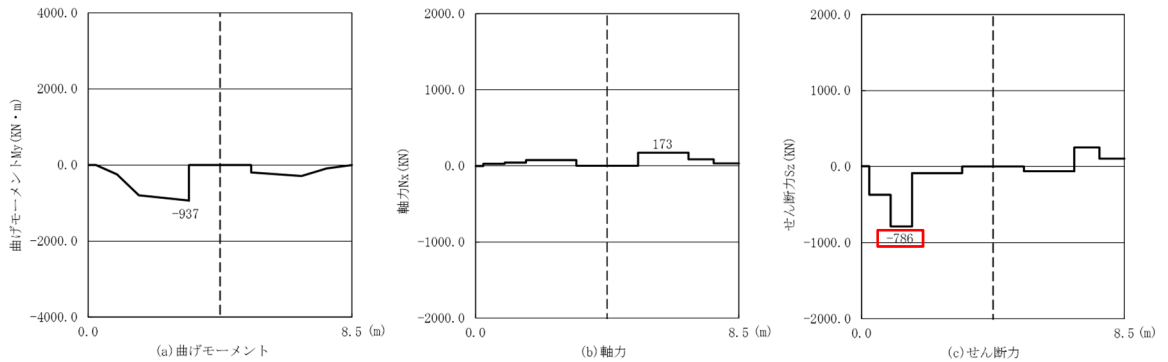
( ①-①断面,  $S_s - D (+)$ ,  $t = 19.18s$  )

解析ケース③ : 地盤物性のばらつきを考慮した解析ケース (平均値  $-1\sigma$ )



(- : 引張, + : 圧縮)

( 豎壁 )



(- : 引張, + : 圧縮)

注 : 逆 T 擁壁 (底版) 西端をゼロとする。

( 底版 )

図 4.1.3-2 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査における

最大照査値の評価時刻での断面力

( ⑤ - ⑤ 断面,  $S_s - D$  ( - - ),  $t = 28.12s$  )

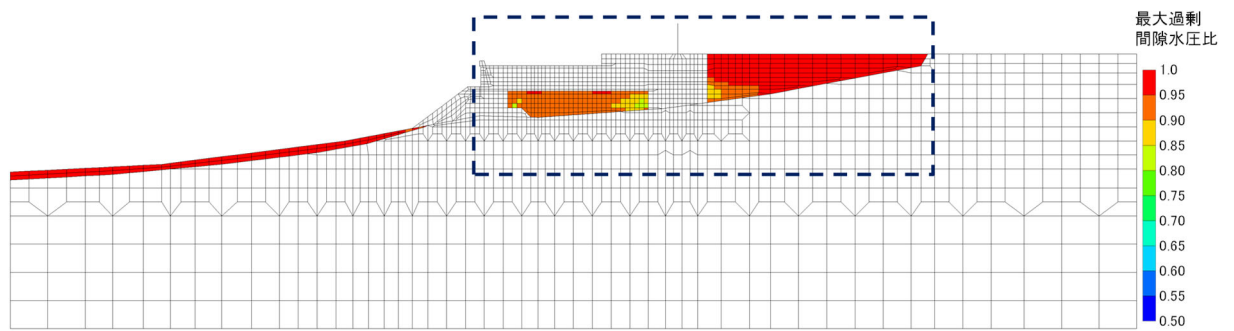
解析ケース ① : 基本ケース

#### 4.1.4 過剰間隙水圧分布

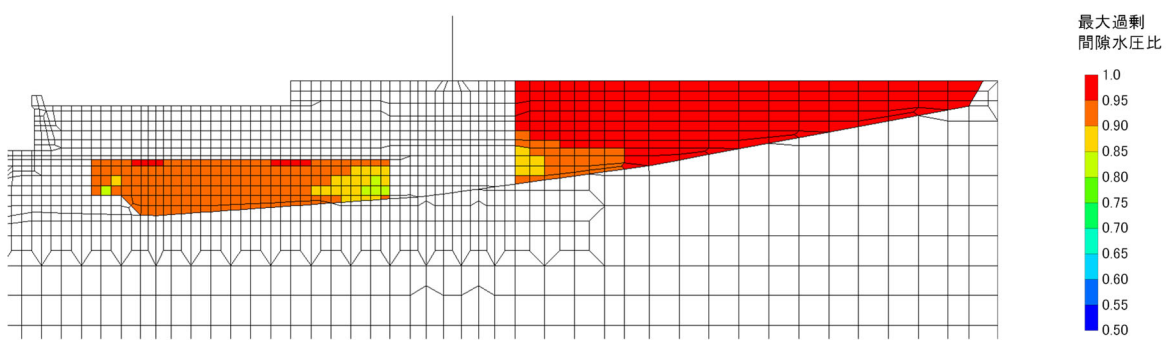
地盤の液化化対象層に発生した過剰間隙水圧比を確認するため、各施設の照査値のうち0.5を超える照査値で最大の照査値を示す解析ケースについて、地震応答解析の全時刻における過剰間隙水圧比の最大値分布図を図4.1.4-1～4.1.4-6に示す。最大照査値及び最小すべり安全率を示す解析ケースの一覧を表4.1.4-1に示す。

表 4.1.4-1 最大照査値を示す解析ケースの一覧（①-①断面，⑤-⑤断面）

断面	評価項目			
	逆 T 擁壁		グラウンドアンカ	基礎地盤
	曲げ・軸力系	せん断		
①-①断面	S <sub>s</sub> -N2 (EW) (-+) 解析ケース③ 0.616 (曲げ引張)	S <sub>s</sub> -D (+-) 解析ケース③ 0.702	S <sub>s</sub> -N1 (++) 解析ケース① 0.859	0.5 以下
⑤-⑤断面	S <sub>s</sub> -N1 (++) 解析ケース① 0.675 (曲げ引張)	S <sub>s</sub> -D (--) 解析ケース① 0.792	S <sub>s</sub> -N1 (++) 解析ケース③ 0.849	0.5 以下

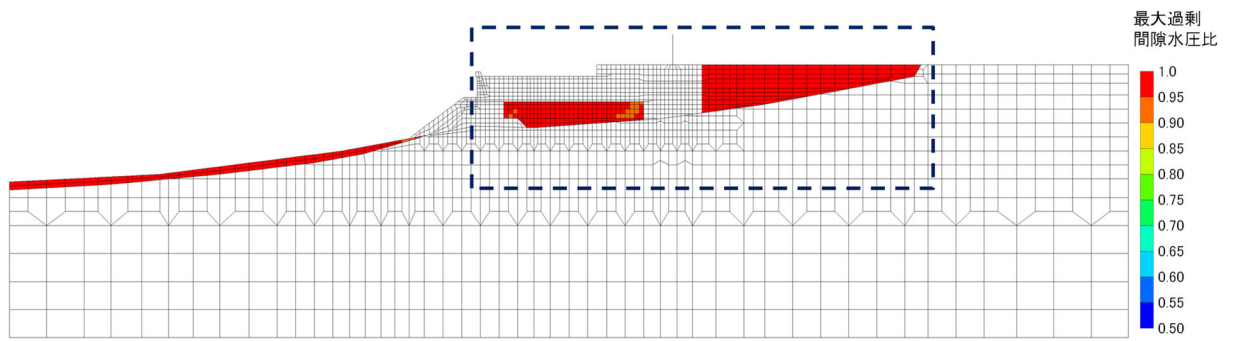


全体図

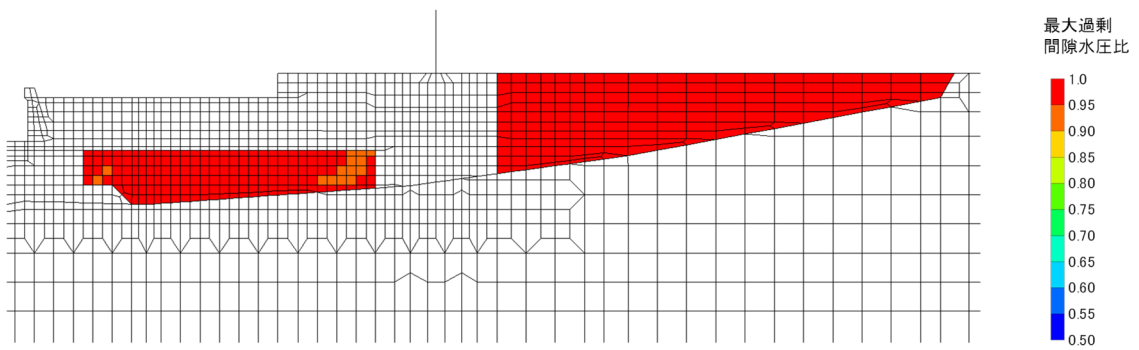


構造物周辺拡大図

図 4.1.4-1 ①-①断面の過剰間隙水圧比最大値分布  
(解析ケース③,  $S_s - N2EW (-+)$ )

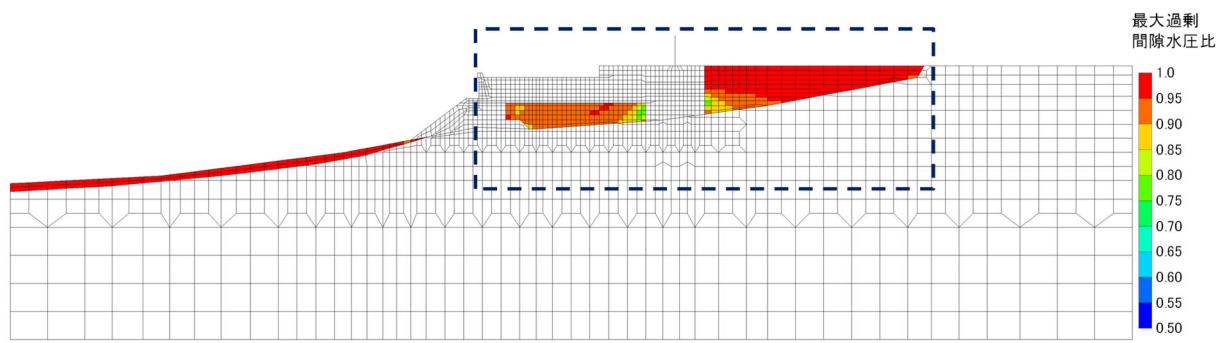


全体図

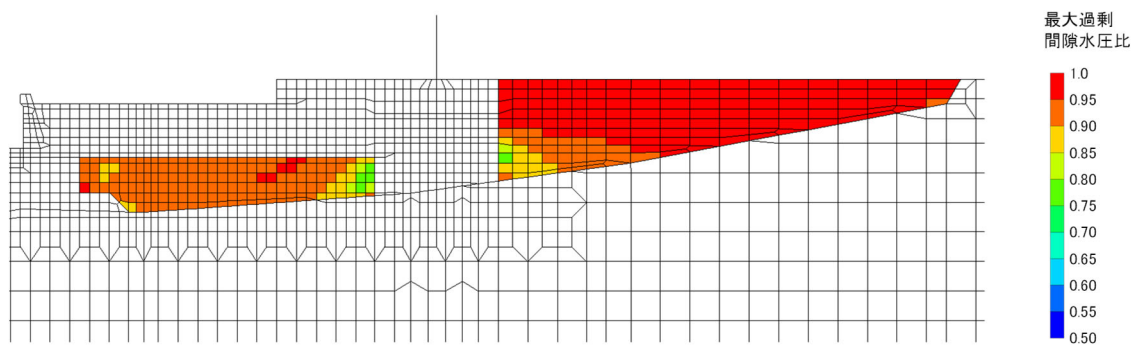


構造物周辺拡大図

図 4.1.4-2 ①-①断面の過剰間隙水圧比最大値分布  
(解析ケース③,  $S_s - D (+)$ )



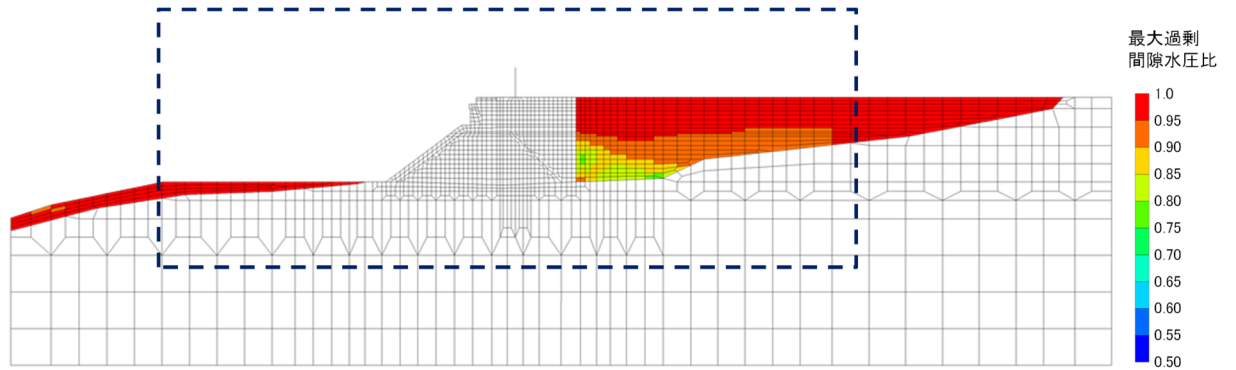
全体図



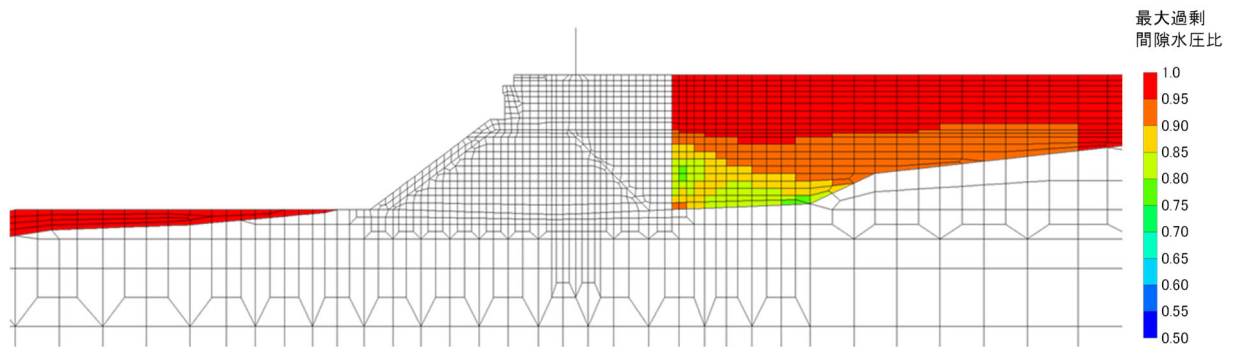
構造物周辺拡大図

図 4.1.4-3 ①-①断面の過剰間隙水圧比最大値分布  
(解析ケース①, S<sub>s</sub>-N1 (++) )



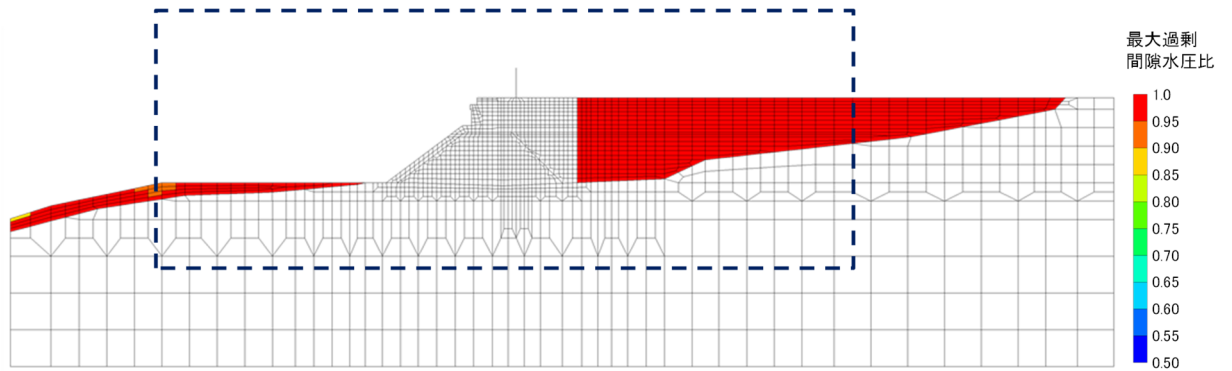


全体図

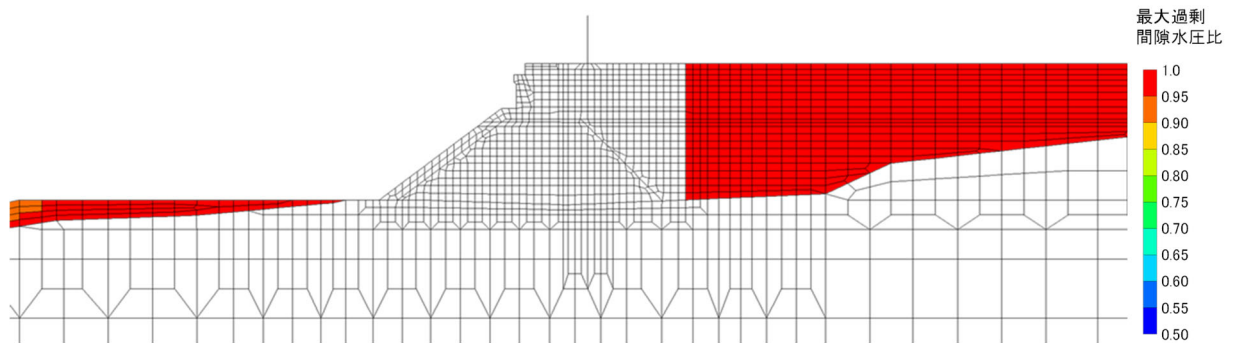


構造物周辺拡大図

図 4.1.4-4 ⑤-⑤断面の過剰間隙水圧比最大値分布  
(解析ケース①, S<sub>s</sub>-N1(++) )

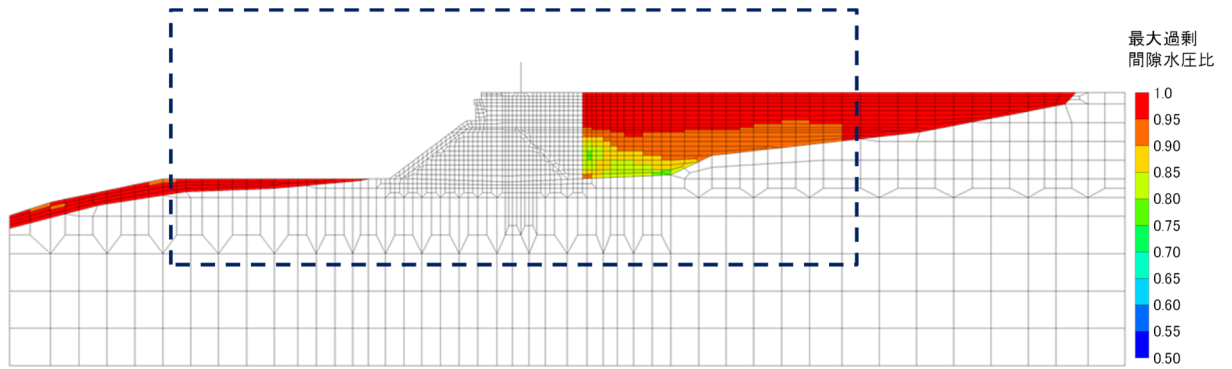


全体図

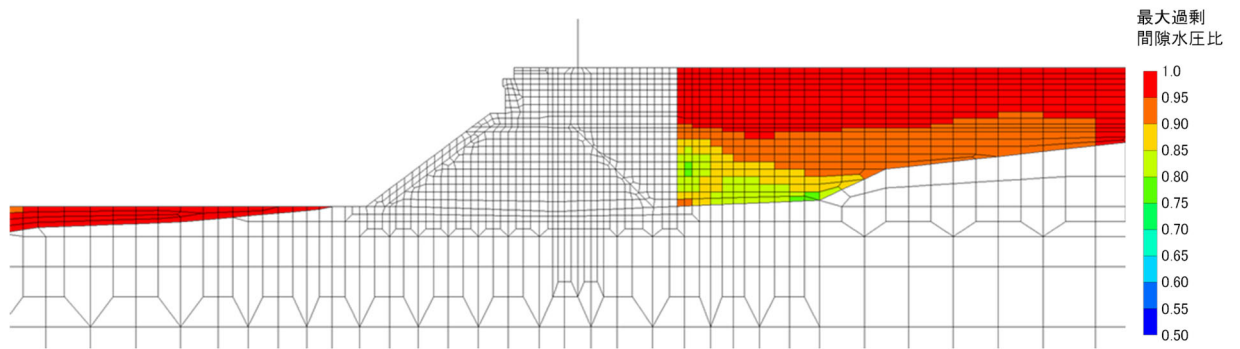


構造物周辺拡大図

図 4.1.4-5 ⑤-⑤断面の過剰間隙水圧比最大値分布  
(解析ケース①,  $S_s - D$  (---))



全体図



構造物周辺拡大図

図 4.1.4-6 ⑤-⑤断面の過剰間隙水圧比最大値分布  
(解析ケース③, S<sub>s</sub>-N1(++) )

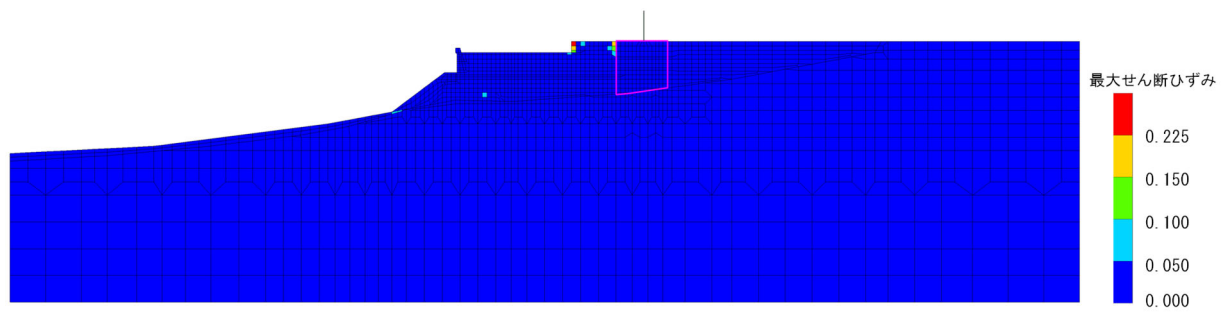
#### 4.1.5 最大せん断ひずみ分布

地盤の最大せん断ひずみ分布を確認するため、各施設の照査値のうち0.5を超える照査値で最大の照査値を示す解析ケースについて、地震応答解析の全時刻における最大せん断ひずみ分布図を図4.1.5-1～6に示す。最大照査値及び最小すべり安全率を示す解析ケースの一覧を表4.1.5-1に示す。

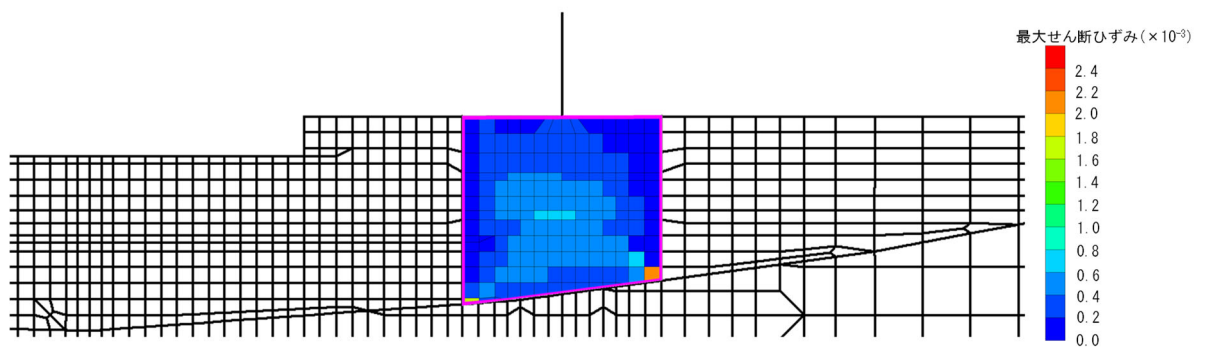
VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」に基づき、改良地盤内の最大せん断ひずみ分布を確認した結果、ひずみ依存特性の試験値範囲であるせん断ひずみ $1.0 \times 10^{-3}$ を超える要素が認められるが、せん断ひずみ $1.4 \sim 1.6 \times 10^{-3}$ とわずかにを超える要素が大半であることから、VI-2-1-3「地盤の支持性能に係る基本方針」に記載のひずみ依存特性を用いて問題ないと考えられる。

表 4.1.5-1 最大照査値を示す解析ケースの一覧（⑤-⑤断面）

断面	評価項目			
	逆 T 擁壁		グラウンドアンカ	基礎地盤
	曲げ・軸力系	せん断		
①-①断面	S s - N 2 (E W) (-+) 解析ケース③ 0.616 (曲げ引張)	S s - D (+-) 解析ケース③ 0.702	S s - N 1 (++) 解析ケース① 0.859	0.5 以下
⑤-⑤断面	S s - N 1 (++) 解析ケース① 0.675 (曲げ引張)	S s - D (--) 解析ケース① 0.792	S s - N 1 (++) 解析ケース③ 0.849	0.5 以下

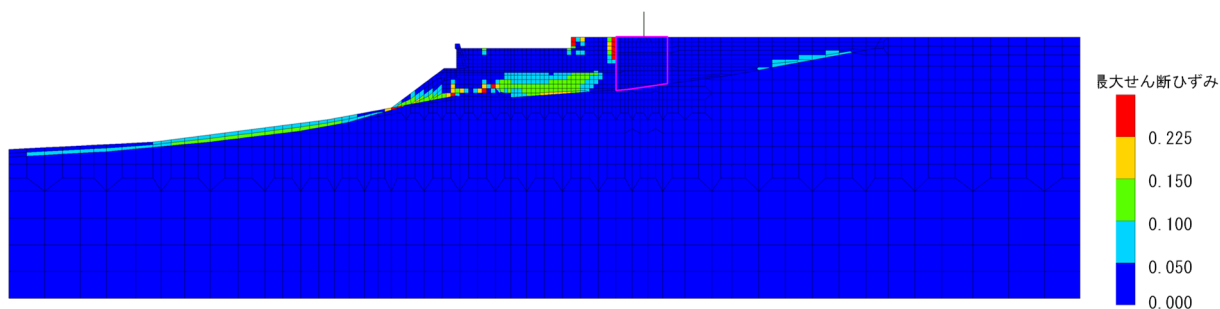


全体図

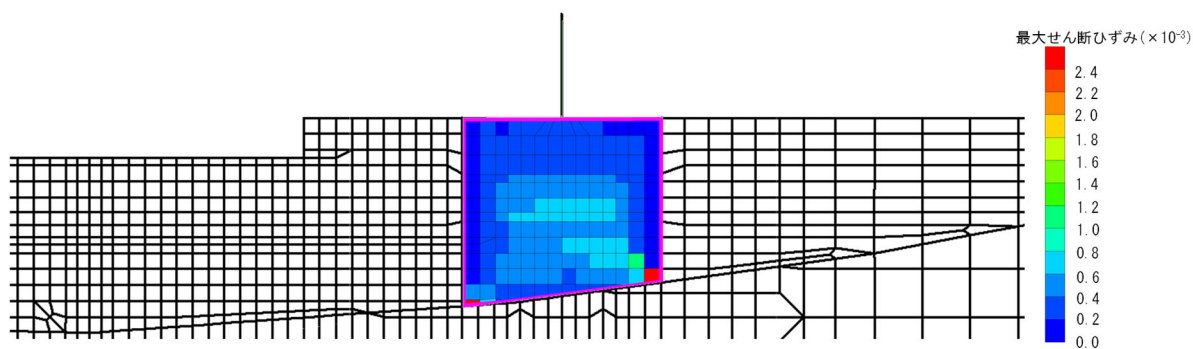


構造物周辺拡大図

図 4.1.5-1 ①-①断面の最大せん断ひずみ分布  
(解析ケース③,  $S_s - N2EW (-+)$ )

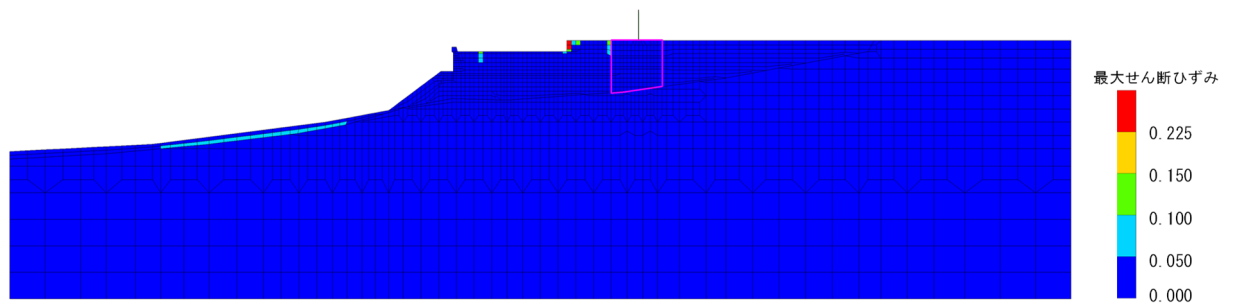


全体図

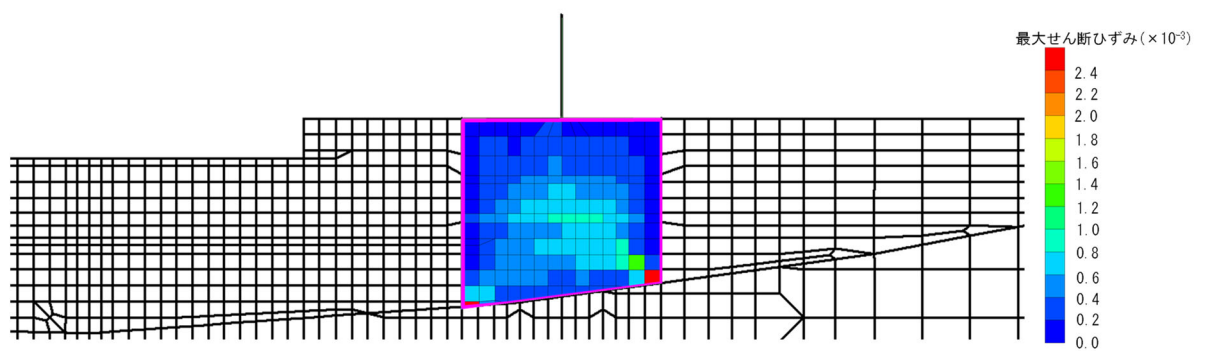


構造物周辺拡大図

図 4.1.5-2 ①-①断面の最大せん断ひずみ分布  
(解析ケース③,  $S_s - D (+)$ )

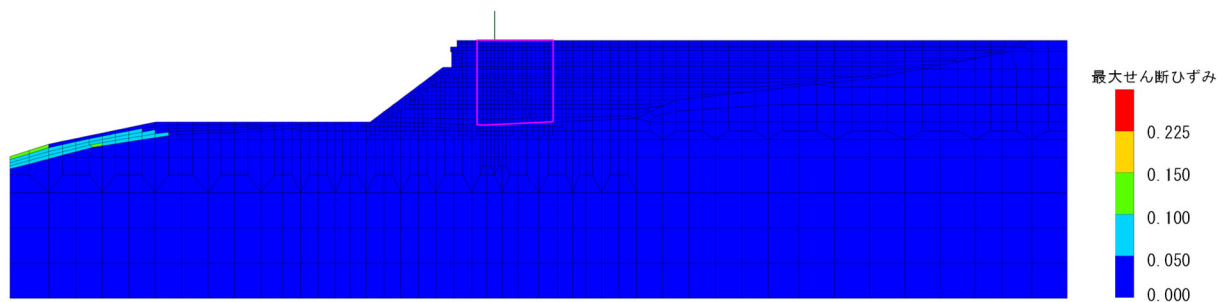


全体図

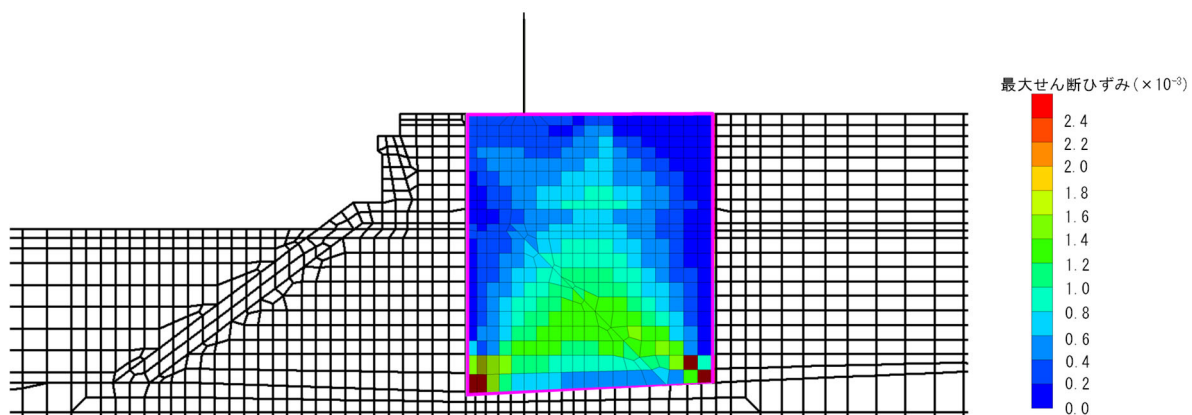


構造物周辺拡大図

図 4.1.5-3 ①-①断面の最大せん断ひずみ分布  
(解析ケース①,  $S_s - N1$  (++) )



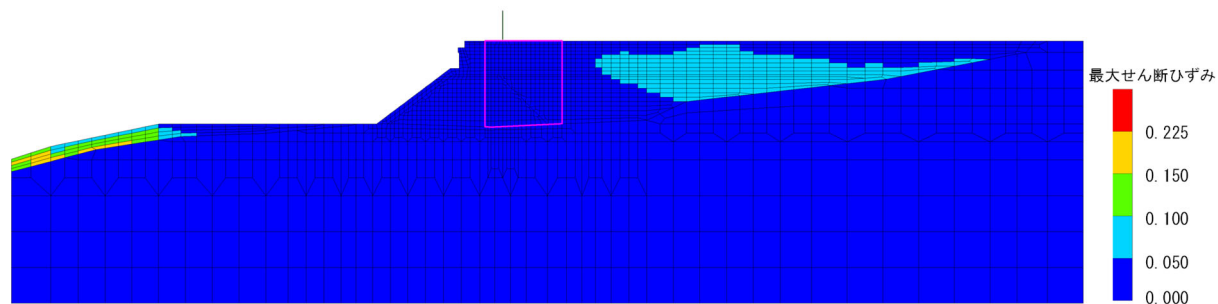
全体図



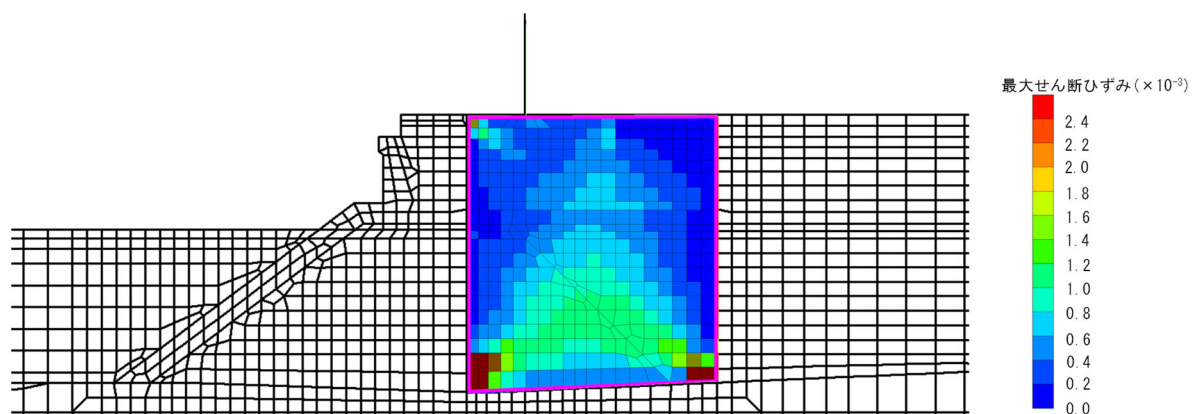
構造物周辺拡大図

図 4.1.5-4 ⑤-⑤断面の最大せん断ひずみ分布  
(解析ケース①, S s - N 1 (++) )



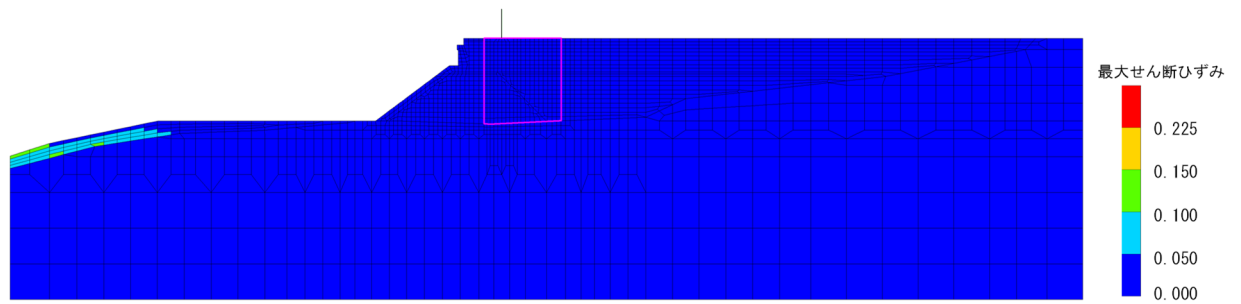


全体図

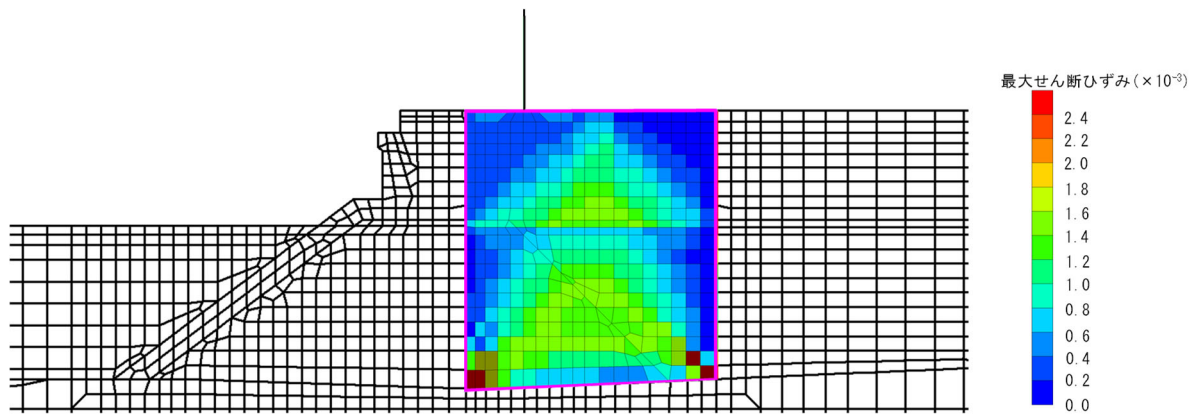


構造物周辺拡大図

図 4.1.5-5 ⑤-⑤断面の最大せん断ひずみ分布  
(解析ケース①, S<sub>s</sub>-D (—))



全体図



構造物周辺拡大図

図 4.1.5-6 ⑤-⑤断面の最大せん断ひずみ分布  
(解析ケース③, S s - N 1 (++) )

## 4.2 逆T擁壁

### 4.2.1 曲げ・軸力照査

逆T擁壁のコンクリートの曲げ圧縮に対する照査結果を表4.2.1-1及び表4.2.1-3に、鉄筋の曲げ引張に対する照査結果を表4.2.1-2及び表4.2.1-4に示す。この結果から、逆T擁壁の主部材の発生応力が許容限界以下であることを確認した。

表 4.2.1-1 逆T擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査  
における最大照査値 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)	曲げ圧縮 応力度 $\sigma_c$ (kN)	短期許容 応力度 $\sigma_{ca}$ (kN)	照査値 $\sigma_c / \sigma_{ca}$
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	-1825	344	4.2	13.5	0.312
		(-+)	1578	405	3.9	13.5	0.289
		(+-)	-1874	496	4.4	13.5	0.326
		(--)	1583	441	3.9	13.5	0.289
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	1563	446	3.8	13.5	0.282
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	1379	445	3.4	13.5	0.252
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1343	437	3.1	13.5	0.230
		(-+)	1151	373	2.8	13.5	0.208
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	1449	413	3.5	13.5	0.260
		(-+)	1306	238	3.2	13.5	0.238
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	1388	246	3.4	13.5	0.252
		(-+)	1604	327	3.9	13.5	0.289
②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	-1866	496	4.3	13.5	0.319
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1338	437	3.1	13.5	0.230
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	1605	327	3.9	13.5	0.289
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	-1882	495	4.4	13.5	0.326
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1348	436	3.1	13.5	0.230
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	1606	326	3.9	13.5	0.289

表 4.2.1-2 逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査における最大照査値 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)	曲げ引張 応力度 $\sigma_s$ (kN)	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (kN)	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	-1825	344	171.1	294	0.582
		(-+)	1578	405	169.2	294	0.576
		(+-)	-1874	496	163.6	294	0.557
		(--)	1583	441	166.1	294	0.565
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	1563	446	162.9	294	0.555
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	1379	445	138.3	294	0.471
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1343	437	110.6	294	0.377
		(-+)	1151	373	115.3	294	0.393
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	1449	413	151.1	294	0.514
		(-+)	1306	238	150.3	294	0.512
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	1388	246	160.6	294	0.547	
	(-+)	1604	327	180.9	294	0.616	
②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	-1866	496	162.8	294	0.554
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1338	437	110.0	294	0.375
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	1605	327	181.1	294	0.616
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	-1882	495	164.5	294	0.560
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1348	436	111.2	294	0.379
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	1606	326	181.4	294	0.618

表 4.2.1-3 逆 T 擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査  
 における最大照査値 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)	曲げ圧縮 応力度 $\sigma_c$ (kN)	短期許容 応力度 $\sigma_{ca}$ (kN)	照査値 $\sigma_c / \sigma_{ca}$
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	-1902	278	4.4	13.5	0.326
		(-+)	-1649	338	3.8	13.5	0.282
		(+-)	1770	547	4.3	13.5	0.319
		(--)	1641	519	4.0	13.5	0.297
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	1397	503	3.4	13.5	0.252
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	1356	496	3.3	13.5	0.245
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1924	153	4.4	13.5	0.326
		(-+)	1378	273	3.4	13.5	0.252
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	1499	537	3.7	13.5	0.275
		(-+)	1304	417	3.2	13.5	0.238
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	1234	294	3.0	13.5	0.223
		(-+)	1422	402	3.5	13.5	0.260
②	S <sub>s</sub> -D	(--)	1639	519	4.0	13.5	0.297
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1921	153	4.4	13.5	0.326
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	1642	519	4.0	13.5	0.297
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1921	152	4.4	13.5	0.326

表 4.2.1-4 逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査における最大照査値 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)	曲げ引張 応力度 $\sigma_s$ (kN)	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (kN)	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	-1902	278	185.1	294	0.630
		(-+)	1067	-276	175.6	294	0.598
		(+-)	1068	-320	180.6	294	0.615
		(--)	1073	-269	175.7	294	0.598
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	931	-294	159.0	294	0.541
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	870	-292	150.5	294	0.512
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1924	153	198.4	294	0.675
		(-+)	1130	-257	182.1	294	0.620
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	1499	537	144.8	294	0.493
		(-+)	931	-278	157.2	294	0.535
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	1234	294	134.7	294	0.459
		(-+)	988	-275	164.7	294	0.561
②	S <sub>s</sub> -D	(--)	1080	-269	176.6	294	0.601
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1921	153	198.0	294	0.674
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	1074	-284	177.4	294	0.604
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	-1921	152	198.1	294	0.674

#### 4.2.2 せん断力照査

逆 T 擁壁のせん断力に対する照査結果を表 4.2.2-1 及び 4.2.2-2 に示す。この結果から、逆 T 擁壁の主部材の発生応力が許容限界以下であることを確認した。

表 4.2.2-1 逆 T 擁壁のせん断力照査における最大照査値 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		せん断力 (kN)	せん断 応力度 $\tau$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\tau_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\tau / \tau_{sa}$
①	S s - D	(++)	623	0.42	0.67	0.627
		(-+)	629	0.43	0.67	0.642
		(+-)	695	0.47	0.67	0.702
		(--)	634	0.43	0.67	0.642
	S s - F1 (EW)	(++)	-567	0.38	0.67	0.568
	S s - F2 (EW)	(++)	-539	0.36	0.67	0.538
	S s - N1	(++)	527	0.36	0.67	0.538
		(-+)	-490	0.33	0.67	0.493
	S s - N2 (NS)	(++)	540	0.36	0.67	0.538
		(-+)	-510	0.34	0.67	0.508
	S s - N2 (EW)	(++)	539	0.36	0.67	0.538
		(-+)	-545	0.37	0.67	0.553
②	S s - D	(+-)	694	0.47	0.67	0.702
	S s - N1	(++)	525	0.36	0.67	0.538
	S s - N2 (EW)	(-+)	-545	0.37	0.67	0.553
③	S s - D	(+-)	697	0.47	0.67	0.702
	S s - N1	(++)	528	0.36	0.67	0.538
	S s - N2 (EW)	(-+)	-545	0.37	0.67	0.553

表 4.2.2-2 逆 T 擁壁のせん断力照査における最大照査値 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		せん断力 (kN)	せん断 応力度 $\tau$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\tau_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\tau / \tau_{sa}$
①	S s - D	(++)	-726	0.49	0.67	0.732
		(-+)	-721	0.48	0.67	0.717
		(+-)	-772	0.52	0.67	0.777
		(--)	-786	0.53	0.67	0.792
	S s - F1 (EW)	(++)	-534	0.35	0.67	0.523
	S s - F2 (EW)	(++)	-676	0.45	0.67	0.672
	S s - N1	(++)	676	0.45	0.67	0.672
		(-+)	-584	0.38	0.67	0.568
	S s - N2 (NS)	(++)	-538	0.36	0.67	0.538
		(-+)	-572	0.38	0.67	0.568
	S s - N2 (EW)	(++)	548	0.36	0.67	0.538
		(-+)	-554	0.37	0.67	0.553
②	S s - D	(--)	-784	0.52	0.67	0.777
	S s - N1	(++)	675	0.44	0.67	0.657
③	S s - D	(--)	-785	0.52	0.67	0.777
	S s - N1	(++)	676	0.44	0.67	0.657



#### 4.2.3 グラウンドアンカによる支圧応力度に対する照査

逆T擁壁のグラウンドアンカによる支圧応力度に対する照査値を表4.2.3-1及び表4.2.3-2に示す。この結果から、逆T擁壁の主部材の発生応力が許容限界以下であることを確認した。

表 4.2.3-1 グラウンドアンカによる支圧応力度に対する  
照査における最大照査値 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		支圧 応力度 $\sigma_b$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{ba}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_b / \sigma_{ba}$
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	10.5	18.0	0.584
		(-+)	10.5	18.0	0.584
		(+-)	10.5	18.0	0.584
		(--)	10.4	18.0	0.578
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	10.3	18.0	0.573
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	10.3	18.0	0.573
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	10.6	18.0	0.589
		(-+)	10.3	18.0	0.573
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	10.4	18.0	0.578
		(-+)	10.3	18.0	0.573
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	10.5	18.0	0.584
		(-+)	10.3	18.0	0.573
②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	10.5	18.0	0.584
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	10.6	18.0	0.589
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	10.3	18.0	0.573
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	10.5	18.0	0.584
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	10.6	18.0	0.589
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	10.3	18.0	0.573

表 4.2.3-2 グラウンドアンカによる支圧応力度に対する  
照査における最大照査値 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		支圧 応力度 $\sigma_b$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{ba}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_b / \sigma_{ba}$
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	12.2	18.0	0.678
		(-+)	12.2	18.0	0.678
		(+-)	12.1	18.0	0.673
		(--)	12.1	18.0	0.673
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	11.9	18.0	0.662
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	12.0	18.0	0.667
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	12.3	18.0	0.684
		(-+)	11.9	18.0	0.662
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	12.1	18.0	0.673
		(-+)	11.9	18.0	0.662
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	12.2	18.0	0.678
		(-+)	11.9	18.0	0.662
②	S <sub>s</sub> -D	(--)	12.1	18.0	0.673
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	12.3	18.0	0.684
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	12.1	18.0	0.673
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	12.3	18.0	0.684

#### 4.2.4 隣接する躯体同士の支圧照査

逆 T 擁壁の隣接する躯体同士の支圧応力度に対する照査においては、躯体同士の境界の天端に発生する慣性力により照査を行う。図 4.2.4-1 に躯体同士の天端における節点の節点番号を示す。

また、隣接する躯体同士の接触面積を表 4.2.4-1 に示す。

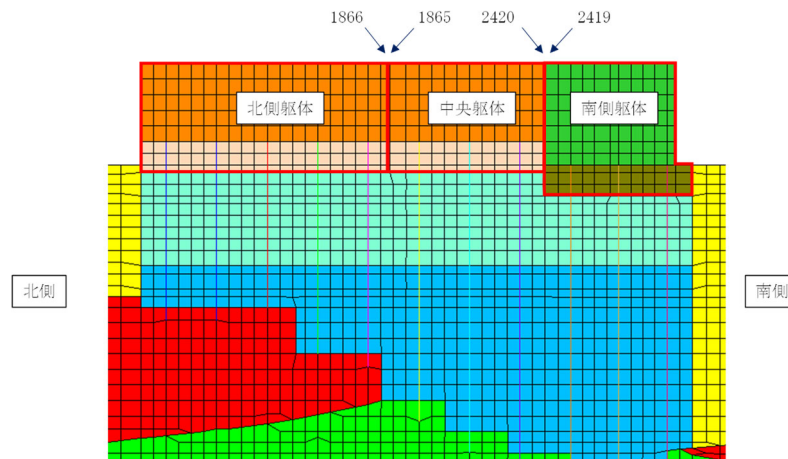


図 4.2.4-1 躯体同士の境界における天端の節点の節点番号

表 4.2.4-1 天端の加速度が最大となる時刻の隣接する躯体同士の接触面積

	接触面積 (m <sup>2</sup> )
北側躯体－中央躯体間	27.00
中央躯体－南側躯体間	17.25

逆 T 擁壁の隣接する躯体同士の支圧応力度に対する照査値を表 4.2.4-2 に示す。この結果から、逆 T 擁壁の主部材の発生応力が許容限界以下であることを確認した。

また、隣接する躯体同士の挙動を確認するため、照査値が最大となる S<sub>s</sub>-D (—) の解析ケース①における南側躯体及び中央躯体間の天端の変位を確認した結果、図 4.2.4-2 のとおり、それぞれの躯体は同位相で変位しており、逆位相による躯体同士の衝突は発生していないことから、片方の躯体の応答加速度を考慮しない表 4.2.4-2 の評価は保守的であることを確認した。

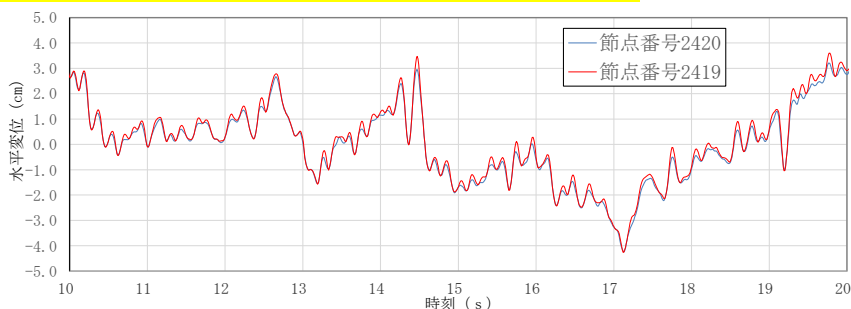


図 4.2.4-2 南側躯体及び中央躯体間の天端の変位 (南側正)

表 4.2.4-2(1) 隣接する躯体同士を支圧応力度に対する照査結果(1)

解析 ケース	地震動		節点 番号	慣性力 の向き	慣性力 F (kN)	支圧 応力度 $\sigma_b$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{ba}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_b / \sigma_{ba}$
①	S s - D	(++)	1866	南側	17368	0.643	10.80	0.060
			1865	北側	17477	0.647	10.80	0.060
				南側	9927	0.575	10.80	0.054
			2420	北側	20994	0.778	10.80	0.073
				南側	9918	0.575	10.80	0.054
			2419	北側	17737	1.028	10.80	0.096
		(-+)	1866	南側	18277	0.677	10.80	0.063
			1865	北側	19754	0.732	10.80	0.068
				南側	9547	0.553	10.80	0.052
			2420	北側	20827	0.771	10.80	0.072
				南側	9656	0.560	10.80	0.052
			2419	北側	23396	1.356	10.80	0.126
		(+-)	1866	南側	17227	0.638	10.80	0.060
			1865	北側	20701	0.767	10.80	0.072
				南側	9122	0.529	10.80	0.049
			2420	北側	20833	0.772	10.80	0.072
				南側	9101	0.528	10.80	0.049
			2419	北側	20574	1.193	10.80	0.111
		(--)	1866	南側	16518	0.612	10.80	0.057
			1865	北側	21271	0.788	10.80	0.073
				南側	9970	0.578	10.80	0.054
			2420	北側	23130	0.857	10.80	0.080
				南側	9954	0.577	10.80	0.054
			2419	北側	23716	1.375	10.80	0.128

表 4.2.4-2(2) 隣接する躯体同士の支圧応力度に対する照査結果(2)

解析 ケース	地震動		節点 番号	慣性力 の向き	慣性力 F (kN)	支圧	短期許容	照査値 $\sigma_b / \sigma_{ba}$
						応力度 $\sigma_b$ (N/mm <sup>2</sup> )	応力度 $\sigma_{ba}$ (N/mm <sup>2</sup> )	
①	S <sub>s</sub> -F1 (NS)	(++)	1866	南側	13932	0.516	10.80	0.048
			1865	北側	17207	0.637	10.80	0.059
				南側	6934	0.402	10.80	0.038
			2420	北側	17759	0.658	10.80	0.061
				南側	7001	0.406	10.80	0.038
			2419	北側	18918	1.097	10.80	0.102
	S <sub>s</sub> -F2 (NS)	(++)	1866	南側	16935	0.627	10.80	0.059
			1865	北側	13191	0.489	10.80	0.046
				南側	7903	0.458	10.80	0.043
			2420	北側	13003	0.482	10.80	0.045
				南側	7822	0.453	10.80	0.042
			2419	北側	17517	1.015	10.80	0.094
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	1866	南側	12245	0.454	10.80	0.043
			1865	北側	10665	0.395	10.80	0.037
				南側	9344	0.542	10.80	0.051
			2420	北側	9674	0.358	10.80	0.034
				南側	9351	0.542	10.80	0.051
			2419	北側	11535	0.669	10.80	0.062
		(-+)	1866	南側	13133	0.486	10.80	0.045
			1865	北側	14184	0.525	10.80	0.049
				南側	8555	0.496	10.80	0.046
			2420	北側	15235	0.564	10.80	0.053
				南側	8855	0.513	10.80	0.048
			2419	北側	16079	0.932	10.80	0.087

表 4.2.4-2(3) 隣接する躯体同士の支圧応力度に対する照査結果(3)

解析 ケース	地震動		節点 番号	慣性力 の向き	慣性力 F (kN)	支圧	短期許容	照査値 $\sigma_b / \sigma_{ba}$
						応力度 $\sigma_b$ (N/mm <sup>2</sup> )	応力度 $\sigma_{ba}$ (N/mm <sup>2</sup> )	
①	S <sub>s</sub> -N <sub>2</sub> (NS)	(++)	1866	南側	11740	0.435	10.80	0.041
			1865	北側	12112	0.449	10.80	0.042
				南側	6697	0.388	10.80	0.036
			2420	北側	10042	0.372	10.80	0.035
				南側	6672	0.387	10.80	0.036
		2419	北側	12555	0.728	10.80	0.068	
		(-+)	1866	南側	11931	0.442	10.80	0.041
			1865	北側	12345	0.457	10.80	0.043
				南側	6607	0.383	10.80	0.036
			2420	北側	11336	0.420	10.80	0.039
	南側			6609	0.383	10.80	0.036	
	2419	北側	11403	0.661	10.80	0.062		
	S <sub>s</sub> -N <sub>2</sub> (EW)	(++)	1866	南側	13102	0.485	10.80	0.045
			1865	北側	11233	0.416	10.80	0.039
				南側	10272	0.595	10.80	0.056
			2420	北側	11341	0.420	10.80	0.039
				南側	10012	0.580	10.80	0.054
		2419	北側	14600	0.846	10.80	0.079	
		(-+)	1866	南側	13854	0.513	10.80	0.048
			1865	北側	14385	0.533	10.80	0.050
南側				7878	0.457	10.80	0.043	
2420			北側	12568	0.465	10.80	0.044	
	南側		7896	0.458	10.80	0.043		
2419	北側	21959	1.273	10.80	0.118			

### 4.3 グラウンドアンカ

#### (1) グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査

グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査結果を表 4.3-1 及び表 4.3-2 に示す。この結果から、グラウンドアンカの発生アンカー力が許容限界以下であることを確認した。

表 4.3-1 グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査  
における照査値 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		発生時 刻 (s)	発生アン カー力 T(KN)	テンドンの 許容拘束力 T <sub>ab</sub> (kN)	照査値 T/T <sub>ab</sub>	
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	14.58	1498	1764	0.850	
		(-+)	8.59	1493	1764	0.847	
		(+-)	14.63	1494	1764	0.847	
		(--)	8.98	1484	1764	0.842	
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	7.93	1467	1764	0.832	
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	16.63	1473	1764	0.836	
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.56	1514	1764	0.859	
		(-+)	7.33	1477	1764	0.838	
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	25.02	1480	1764	0.840	
		(-+)	25.53	1477	1764	0.838	
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	25.98	1494	1764	0.847	
		(-+)	25.97	1473	1764	0.836	
	②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	14.63	1493	1764	0.847
		S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.56	1514	1764	0.859
S <sub>s</sub> -N2 (EW)		(-+)	25.97	1472	1764	0.835	
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	14.63	1494	1764	0.847	
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.56	1514	1764	0.859	
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	25.97	1473	1764	0.836	

表 4.3-2 グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査  
 における照査値 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		発生時 刻 (s)	発生アン カー力 T(KN)	テンドンの 許容拘束力 T <sub>ab</sub> (kN)	照査値 T/T <sub>ab</sub>	
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	34.36	1737	2076	0.837	
		(-+)	8.92	1745	2076	0.841	
		(+-)	34.37	1728	2076	0.833	
		(--)	8.90	1733	2076	0.835	
	S <sub>s</sub> -F1(EW)	(++)	7.72	1704	2076	0.821	
	S <sub>s</sub> -F2(EW)	(++)	16.68	1714	2076	0.826	
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.57	1762	2076	0.849	
		(-+)	7.36	1706	2076	0.822	
	S <sub>s</sub> -N2(NS)	(++)	25.03	1735	2076	0.836	
		(-+)	26.73	1704	2076	0.821	
	S <sub>s</sub> -N2(EW)	(++)	24.91	1737	2076	0.837	
		(-+)	25.90	1698	2076	0.818	
	②	S <sub>s</sub> -D	(--)	8.90	1733	2076	0.835
		S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.57	1762	2076	0.849
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	8.90	1733	2076	0.835	
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.57	1762	2076	0.849	



(2) 逆 T 擁壁の滑動・転倒に対する耐力の確認

グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査により確保されることを確認した設計アンカー力を用い、逆 T 擁壁の滑動、転倒に対する耐力を確認する。

逆 T 擁壁の滑動、転倒に対する照査は逆 T 擁壁に作用する鉛直力、水平力により、それぞれの照査項目に対する耐力、作用力を算定し、安全率により照査を行う。逆 T 擁壁に作用する鉛直力を表 4.3-3～表 4.3-5 に、水平力を表 4.3-6 及び表 4.3-7 に、逆 T 擁壁に作用する荷重イメージを図 4.3-1 に示す。

表 4.3-3 逆 T 擁壁の躯体重量 (1m 当たり) (①-①断面, ⑤-⑤断面)

		幅 (m)		高さ (m)		単位体積 重量 (kN/m <sup>3</sup> )		重量 (kN/m)
逆 T 擁壁	縦壁	2.0	×	5.0	×	24.0	=	240.0
	底版	8.5	×	2.0	×	24.0	=	408.0
積雪荷重		8.5	×			0.7	=	6.0
漂流物対策工荷重								250.0
合計								904.0

表 4.3-4(1) グラウンドアンカの緊張力 (1m 当たり) (①-①断面)

	設計アンカー力 (kN)		アンカー間隔 (m)		緊張力 (kN)
海側	2880 (1440×2)	÷	4.0	=	720.0
陸側	1440	÷	4.0	=	360.0

表 4.3-4(2) グラウンドアンカの緊張力 (1m 当たり) (⑤-⑤断面)

	設計アンカー力 (kN)		アンカー間隔 (m)		緊張力 (kN)
海側	3300 (1650×2)	÷	3.25	=	1015.4
陸側	1650	÷	3.25	=	507.7

表 4.3-5(1) 逆 T 擁壁に作用する慣性力 (鉛直方向) (①-①断面)

照査用震度 (a/g)		躯体重量 (kN)		慣性力 (kN・m)
0.04	×	904.0	=	36.2

表 4.3-5(2) 逆 T 擁壁に作用する慣性力 (鉛直方向) (⑤-⑤断面)

照査用震度 (a/g)		躯体重量 (kN)		慣性力 (kN・m)
0.20	×	904.0	=	180.8

表 4.3-6(1) 逆 T 擁壁に作用する風荷重 (①-①断面)

	高さ (m)		風荷重 (kN/m <sup>3</sup> )		緊張力 (kN)
縦壁	5.0	×	2.117	=	10.6
底版	1.5	×	2.117	=	3.2

表 4.3-6(2) 逆 T 擁壁に作用する風荷重 (⑤-⑤断面)

	高さ (m)		風荷重 (kN/m <sup>3</sup> )		緊張力 (kN)
縦壁	5.0	×	1.805	=	9.0
底版	1.5	×	1.805	=	2.7

表 4.3-7(1) 逆 T 擁壁に作用する慣性力 (水平方向) (①-①断面)

照査用震度 (a/g)		躯体重量 (kN)		慣性力 (kN・m)
0.30	×	904.0	=	271.2

表 4.3-7(2) 逆 T 擁壁に作用する慣性力 (水平方向) (⑤-⑤断面)

照査用震度 (a/g)		躯体重量 (kN)		慣性力 (kN・m)
0.22	×	904.0	=	198.9

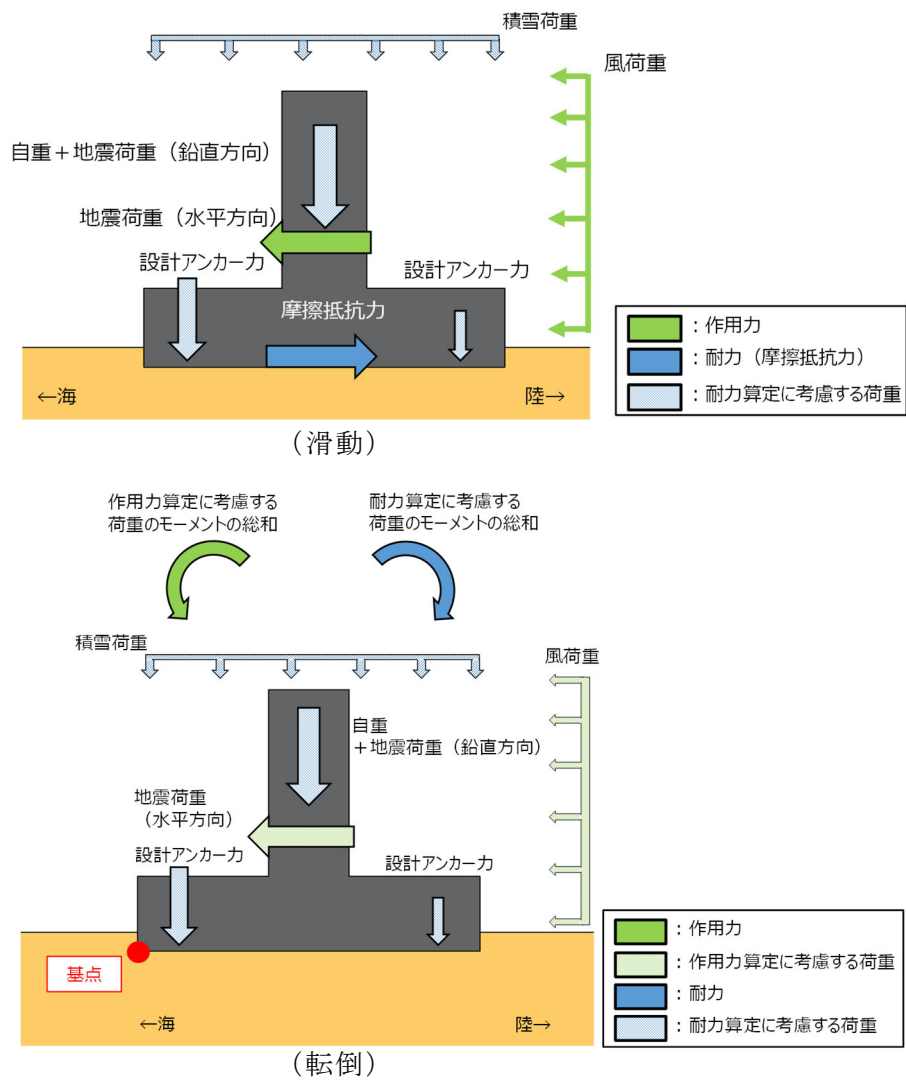


図 4.3-1 逆 T 擁壁に作用する荷重イメージ

a. 滑動に対する照査

滑動に対する照査では、水平力の合計を滑動に対する作用力とし、鉛直力の合計に、港湾基準に示されるコンクリート同士の摩擦係数 0.5 を乗じたものを、滑動に対する耐力とする。

表 4.3-8 に逆 T 擁壁の滑動に対する照査結果を示す。この結果から、安全率 1.0 以上であることを確認した。

表 4.3-8(1) 逆 T 擁壁の滑動に対する照査結果(①-①断面)

滑動に対する耐力 (kN/m)	2020.1(鉛直力の合計)×0.5 (摩擦係数)
滑動に対する作用力 (kN/m)	284.9(水平力の合計)
安全率	3.544

表 4.3-8(2) 逆 T 擁壁の滑動に対する照査結果(⑤-⑤断面)

滑動に対する耐力 (kN/m)	2607.8(鉛直力の合計)×0.5 (摩擦係数)
滑動に対する作用力 (kN/m)	210.6(水平力の合計)
安全率	6.191

b. 転倒に対する照査

転倒に対する照査では、表 4.3-9 に示す各鉛直力によるモーメントの合計を転倒に対する耐力とし、表 4.3-10 に示す各水平力によるモーメントの合計を転倒に対する作用力とする。

表 4.3-11 に逆 T 擁壁の転倒に対する照査結果を示す。この結果から、安全率 1.0 以上であることを確認した。

表 4.3-9(1) 逆 T 擁壁の転倒に対する耐力(①-①断面)

	鉛直力 (kN)		アーム長 (m)		モーメント (kN・m)
躯体重量	904.0	×	4.250	=	3841.8
グラウンドアンカによる緊張力(海側)	720.0	×	7.375	=	5310.0
グラウンドアンカによる緊張力(陸側)	360.0	×	1.125	=	405.0
慣性力	36.2	×	4.250	=	153.7
合計					9710.5

表 4.3-9(2) 逆 T 擁壁の転倒に対する耐力(⑤-⑤断面)

	鉛直力 (kN)		アーム長 (m)		モーメント (kN・m)
躯体重量	904.0	×	4.250	=	3841.8
グラウンドアンカによる緊張力(海側)	1015.4	×	1.125	=	1142.3
グラウンドアンカによる緊張力(陸側)	507.7	×	7.375	=	3744.2
慣性力	180.8	×	4.250	=	768.4
合計					9496.7

表 4.3-10(1) 逆 T 擁壁の転倒に対する作用力 (①-①断面)

	鉛直力 (kN)		アーム長 (m)		モーメント (kN・m)
風荷重 (縦壁)	10.6	×	4.500	=	47.6
風荷重 (底版)	3.2	×	1.250	=	4.0
慣性力	271.2	×	2.296	=	622.7
合計					674.3

表 4.3-10(2) 逆 T 擁壁の転倒に対する作用力 (⑤-⑤断面)

	鉛直力 (kN)		アーム長 (m)		モーメント (kN・m)
風荷重 (縦壁)	9.0	×	4.500	=	40.6
風荷重 (底版)	2.7	×	1.250	=	3.4
慣性力	198.9	×	2.296	=	456.7
合計					500.7

表 4.3-11(1) 逆 T 擁壁の転倒に対する照査結果 (①-①断面)

転倒に対する耐力 (kN・m)	9710.5
転倒に対する作用力 (kN・m)	674.3
安全率	14.400

表 4.3-11(2) 逆 T 擁壁の転倒に対する照査結果 (⑤-⑤断面)

転倒に対する耐力 (kN・m)	9496.7
転倒に対する作用力 (kN・m)	500.7
安全率	18.968

(3) 逆 T 擁壁の底版の最大傾斜

グラウンドアンカによる変形抑制効果等を確認するため、逆 T 擁壁の底版の最大傾斜を算出した結果を表 4.3-11 及び表 4.3-12 に示す。

表 4.3-11 逆 T 擁壁の底版の最大傾斜 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		最大傾斜
①	S s - D	(++)	1/1299
		(-+)	1/1343
		(+-)	1/1262
		(--)	1/1366
	S s - F 1 (E W)	(++)	1/1453
	S s - F 2 (E W)	(++)	1/1743
	S s - N 1	(++)	1/1671
		(-+)	1/1553
	S s - N 2 (N S)	(++)	1/1758
		(-+)	1/1823
	S s - N 2 (E W)	(++)	1/1455
		(-+)	1/1430
②	S s - D	(+-)	1/1265
	S s - N 1	(++)	1/1671
	S s - N 2 (E W)	(-+)	1/1428
③	S s - D	(+-)	1/1258
	S s - N 1	(++)	1/1672
	S s - N 2 (E W)	(-+)	1/1431

表 4.3-12 逆 T 擁壁の底版の最大傾斜 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		最大傾斜
①	S s - D	(++)	1/889
		(-+)	1/965
		(+-)	1/899
		(--)	1/894
	S s - F 1 (E W)	(++)	1/1030
	S s - F 2 (E W)	(++)	1/1076
	S s - N 1	(++)	1/845
		(-+)	1/699
	S s - N 2 (N S)	(++)	1/1103
		(-+)	1/1005
	S s - N 2 (E W)	(++)	1/1049
		(-+)	1/914
②	S s - D	(--)	1/894
	S s - N 1	(++)	1/846
③	S s - D	(--)	1/894
	S s - N 1	(++)	1/845



#### 4.4 改良地盤

##### (1) 評価結果

改良地盤のすべり安全率による評価結果を表 4.4-1 及び表 4.4-2 に示す。これらの結果から、改良地盤のすべり安全率が 1.2 以上であることを確認した。

表 4.4-1 改良地盤のすべり安全率評価結果 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		発生時刻 (s)	最小すべり安全率
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	14.58	3.99
		(-+)	14.63	4.05
		(+-)	14.59	3.94
		(--)	8.59	3.99
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	7.94	4.02
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	15.62	4.41
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.56	3.42
		(-+)	7.56	3.49
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	24.97	4.30
		(-+)	25.00	4.49
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	25.96	4.06
		(-+)	25.98	4.20
②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	14.59	3.95
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.56	3.42
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	25.98	4.19
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	14.59	3.95
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.56	3.43
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	25.98	4.20

表 4.4-2 改良地盤のすべり安全率評価結果 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		発生時刻 (s)	最小すべり安全率
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	9.00	3.37
		(-+)	8.99	3.15
		(+-)	8.97	3.46
		(--)	8.97	3.26
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	8.69	4.94
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	15.62	4.28
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.61	3.12
		(-+)	7.62	3.21
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	25.07	4.25
		(-+)	25.07	4.26
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	26.05	3.89
		(-+)	26.05	3.90
②	S <sub>s</sub> -D	(--)	8.97	3.26
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.61	3.12
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	8.97	3.26
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	7.61	3.12

(2) 局所破壊が津波防護機能へ及ぼす影響について

局所的な破壊が津波防護機能へ及ぼす影響を確認するため、①-①断面、⑤-⑤断面について、最小すべり安全率発生時刻において破壊が生じた要素に着目した改良地盤の健全性評価を実施する。

a. 局所安全係数分布図と検討すべり線の重ね合わせ

①-①断面及び⑤-⑤断面について、改良地盤の最小すべり安全率時刻における局所安全係数分布に検討すべり線を重ね合わせた図を図 4.4-1 に示す。

これにより、検討すべり線は、引張強度に達した要素をおおむね通過していることが確認できることから、引張強度に達した要素を考慮し改良地盤の健全性を確保していることを確認した。

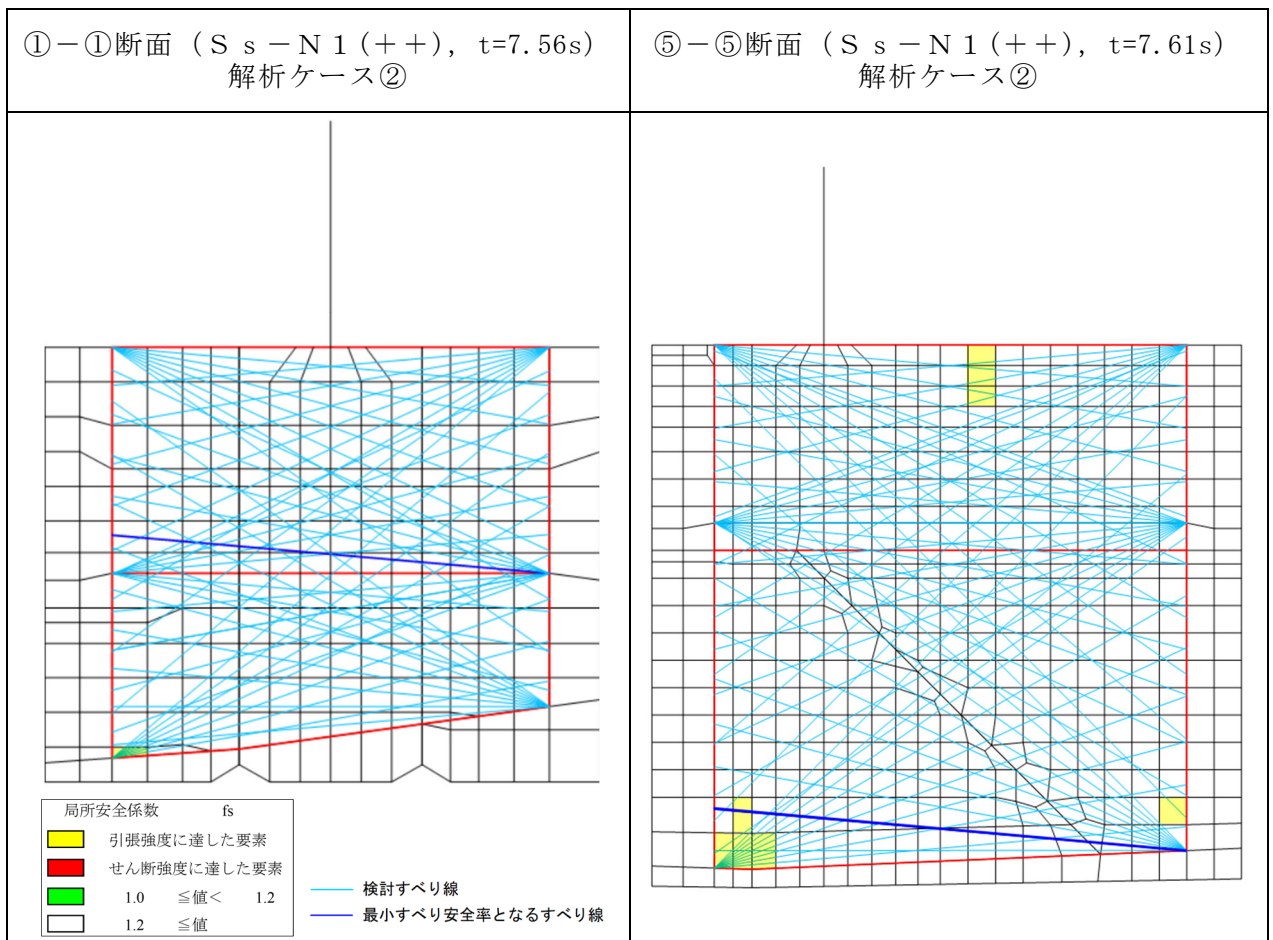


図 4.4-1 改良地盤の最小すべり安全率時刻における局所安全係数分布と検討すべり線の重ね合わせ (①-①, ⑤-⑤断面)

b. 応力状態に着目した追加すべり検討

改良地盤に局所的な引張破壊が生じている断面（①-①，⑤-⑤断面）について，引張破壊している要素の応力状態に着目し，引張強度に達した要素を基点とした，クラック方向のすべり線を追加しすべり安全率照査を行う。図 4.4-2 及び図 4.4-3 に①-①断面及び⑤-⑤断面について，改良地盤の最小すべり安全率時刻における主応力図及び追加すべり線を示す。ここで，クラック方向は，引張強度に達した要素に生じている引張応力の直交方向とする。

図 4.4-2 及び図 4.4-3 に示した追加すべり線における最小すべり安全率を表 4.4-3 に示す。この結果より，引張強度に達した要素を基点とした，クラック方向のすべり線を追加した場合において，改良地盤のすべり安全率は，当初のすべり線でのすべり安全率と比較し同程度又は同等以上であり，許容限界である 1.2 以上であるため，健全であることを確認した。

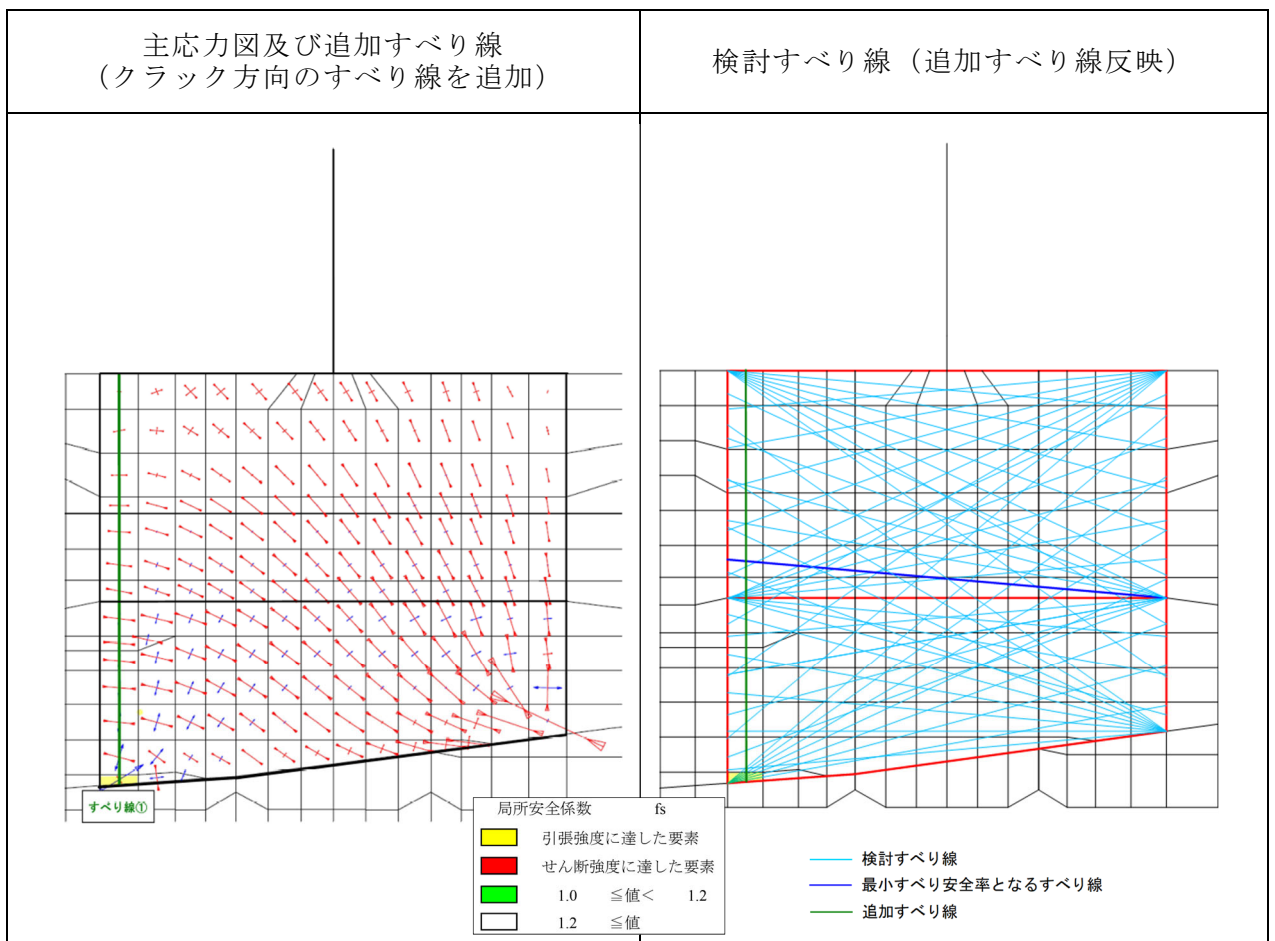


図 4.4-2 改良地盤の最小すべり安全率時刻における主応力図及び追加すべり線

(①-①断面， $S_s - N1 (+ +)$ ， $t=7.56s$ )

解析ケース②

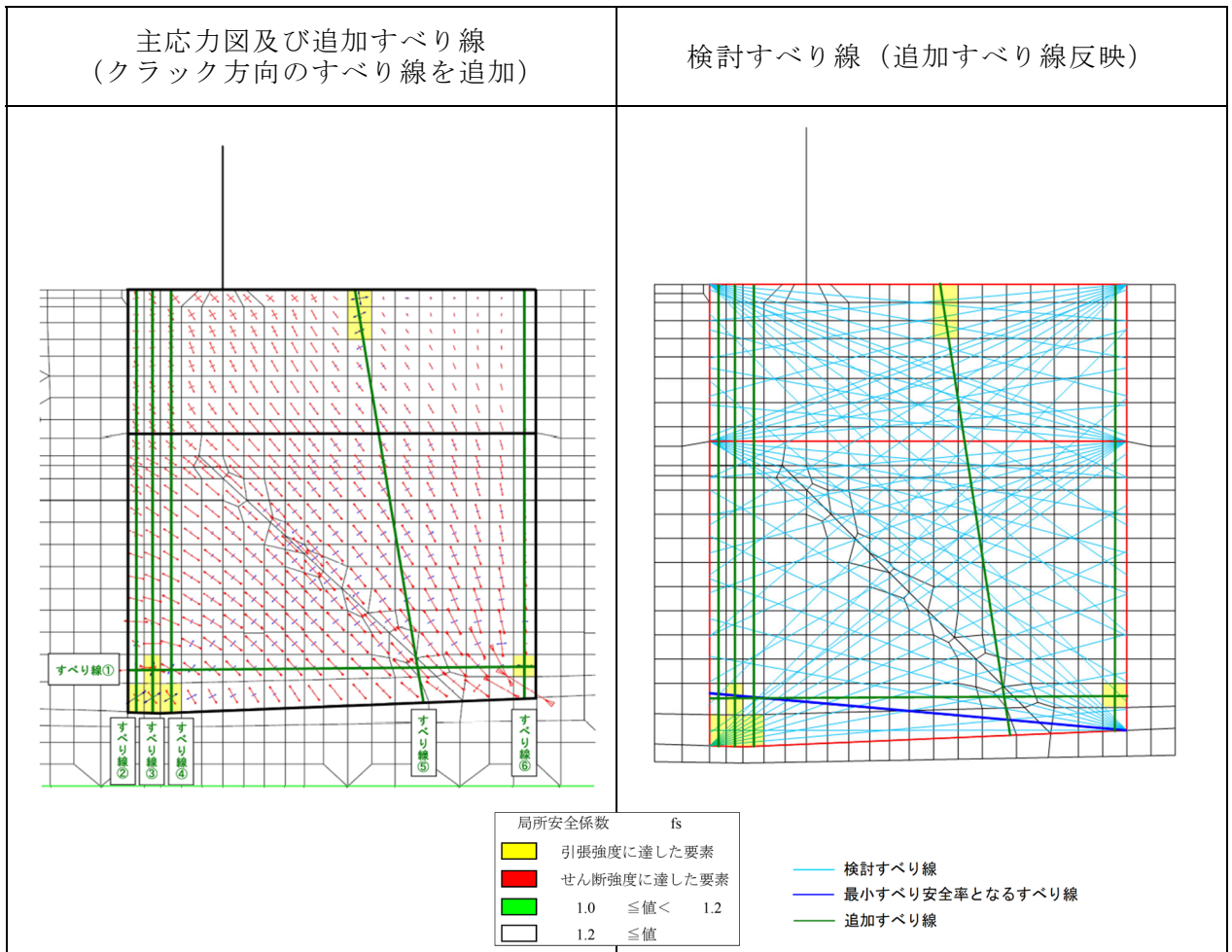


図 4.4-3 改良地盤の最小すべり安全率時刻における主応力図及び追加すべり線

(⑤-⑤断面,  $S_s - N1 (+ +)$ ,  $t=7.61s$ )

解析ケース②

表 4.4-3 追加すべり線における最小すべり安全率

断面	追加すべり線	最小すべり安全率	(参考)追加すべり線を除く最小すべり安全率
①-①断面	すべり線①	15.94	3.42
⑤-⑤断面	すべり線⑤	3.05	3.12

c. まとめ

「a. 局所安全係数分布図と検討すべり線の重ね合わせ」及び「b. 応力状態に着目した追加すべり検討」より、改良地盤に発生している局所的な破壊が津波防護機能へ影響を及ぼさないことを確認した。

(3) 内的安定評価のまとめ

(1)及び(2)より、改良地盤のすべり安全率が許容限界である 1.2 以上であること、及び改良地盤に発生している局所的な破壊が津波防護機能へ影響を及ぼさないことを確認した。

#### 4.5 止水目地

地震時の止水目地の変位量に対する照査結果を表 4.5-1~4.5-3 に示す。  
この結果から、変位量が許容限界以下であることを確認した。

表 4.5-1 地震時の止水目地の変位量 (①-①断面)

解析 ケース	地震動		防波壁天端変位量	
			横断方向 $\delta x$ (cm)	鉛直方向 $\delta z$ (cm)
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	4.197	1.071
		(-+)	4.160	1.075
		(+-)	4.231	1.065
		(--)	4.061	1.027
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	2.406	0.278
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	2.193	0.362
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	3.296	0.323
		(-+)	3.249	0.314
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	2.607	0.410
		(-+)	2.574	0.336
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	2.611	0.343
		(-+)	2.575	0.333
②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	4.230	1.065
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	3.289	0.322
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	2.577	0.333
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	4.221	1.065
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	3.303	0.323
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	2.574	0.333

  : 止水目地の変位量に対する照査に使用する変位量。

表 4.5-2 地震時の止水目地の変位量 (⑤-⑤断面)

解析 ケース	地震動		防波壁天端変位量		
			横断方向 $\delta x$ (cm)	鉛直方向 $\delta z$ (cm)	
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	6.471	1.268	
		(-+)	7.844	1.344	
		(+-)	6.495	1.386	
		(--)	7.250	1.297	
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	3.148	0.490	
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	3.217	0.581	
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	5.649	0.563	
		(-+)	6.267	0.653	
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	3.730	0.579	
		(-+)	3.583	0.494	
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	4.633	0.518	
		(-+)	5.145	0.522	
	②	S <sub>s</sub> -D	(--)	7.253	1.297
		S <sub>s</sub> -N1	(++)	5.647	0.562
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	7.250	1.297	
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	5.650	0.563	

  : 止水目地の変位量に対する照査に使用する変位量。



表 4.5-3 地震時の止水目地の変位量 (⑦-⑦断面)

解析 ケース	地震動		防波壁天端変位量	
			横断方向 $\delta y$ (cm)	鉛直方向 $\delta z$ (cm)
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	0.315	0.170
		(-+)	0.332	0.167
		(+-)	0.266	0.162
		(--)	0.282	0.159
	S <sub>s</sub> -F1 (NS)	(++)	0.140	0.120
	S <sub>s</sub> -F2 (NS)	(++)	0.231	0.115
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.237	0.144
		(-+)	0.227	0.199
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.156	0.129
		(-+)	0.183	0.112
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.266	0.108
		(-+)	0.138	0.147

0.332 : 止水目地の変位量に対する照査に使用する変位量。

表 4.5-4(1) 止水目地設置箇所地震時変位量 (①-①断面)

方向	地震動	解析 ケース	地震時 変位量 (mm)	許容限界 (mm)
$\delta x$ : ①-①断面 (横断方向)	S s - D (+-)	①	42.31	-
$\delta y$ : ⑦-⑦断面* (縦断方向)	S s - D (-+)	①	3.32	-
$\delta z$ : ①-①断面 (横断方向)	S s - D (-+)	①	10.75	-
合成方向 (3方向合成)	-	-	87.37	449 (ゴムジョイント)

注記\*: 保守的に⑤-⑤断面位置の縦断方向の断面である⑦-⑦断面を用いる。

表 4.5-4(2) 止水目地設置箇所地震時変位量 (⑤-⑤断面)

方向	地震動	解析 ケース	地震時 変位量 (mm)	許容限界 (mm)
$\delta x$ : ⑤-⑤断面 (横断方向)	S s - D (-+)	①	156.88	-
$\delta y$ : ⑦-⑦断面 (縦断方向)	S s - D (-+)	①	3.32	-
$\delta z$ : ⑤-⑤断面 (横断方向)	S s - D (+-)	①	27.72	-
合成方向 (3方向合成)	-	-	159.35	1960 (シートジョイント)

#### 4.6 基礎地盤

基礎地盤の支持性能評価結果を表 4.6-1~4.6-4 に、支持地盤の接地圧分布図を図 4.6-1 及び図 4.6-2 に示す。この結果から、防波壁（逆 T 擁壁）の基礎地盤に生じる最大接地圧が極限支持力以下であることを確認した。

表 4.6-1 基礎地盤の支持性能評価結果（①-①断面，改良地盤）

解析 ケース	地震動		最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	0.5	1.4	0.358
		(-+)	0.5	1.4	0.358
		(+-)	0.5	1.4	0.358
		(--)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.5	1.4	0.358
		(-+)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.5	1.4	0.358
		(-+)	0.5	1.4	0.358
S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.5	1.4	0.358	
	(-+)	0.5	1.4	0.358	
②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	0.5	1.4	0.358
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.5	1.4	0.358
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	0.5	1.4	0.358

表 4.6-2 基礎地盤の支持性能評価結果 (①-①断面, 岩盤)

解析 ケース	地震動		最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	1.1	9.8	0.113
		(-+)	1.1	9.8	0.113
		(+-)	1.2	9.8	0.123
		(--)	1.2	9.8	0.123
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	1.1	9.8	0.113
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	1.0	9.8	0.103
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	1.0	9.8	0.103
		(-+)	1.1	9.8	0.113
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	1.0	9.8	0.103
		(-+)	1.0	9.8	0.103
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.9	9.8	0.092
		(-+)	1.0	9.8	0.103
②	S <sub>s</sub> -D	(+-)	1.2	9.8	0.123
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	1.0	9.8	0.103
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	1.0	9.8	0.103
③	S <sub>s</sub> -D	(+-)	1.2	9.8	0.123
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	1.0	9.8	0.103
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(-+)	1.0	9.8	0.103

表 4.6-3 基礎地盤の支持性能評価結果 (⑤-⑤断面, 改良地盤)

解析 ケース	地震動		最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	0.6	1.4	0.429
		(-+)	0.6	1.4	0.429
		(+-)	0.6	1.4	0.429
		(--)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.5	1.4	0.358
		(-+)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	0.6	1.4	0.429
		(-+)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	0.6	1.4	0.429
		(-+)	0.6	1.4	0.429
②	S <sub>s</sub> -D	(--)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.5	1.4	0.358
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	0.5	1.4	0.358

表 4.6-4 基礎地盤の支持性能評価結果 (⑤-⑤断面, 岩盤)

解析 ケース	地震動		最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
①	S <sub>s</sub> -D	(++)	1.5	3.9	0.385
		(-+)	1.5	3.9	0.385
		(+-)	1.5	3.9	0.385
		(--)	1.5	3.9	0.385
	S <sub>s</sub> -F1 (EW)	(++)	1.5	3.9	0.385
	S <sub>s</sub> -F2 (EW)	(++)	1.4	3.9	0.359
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	1.5	3.9	0.385
		(-+)	1.5	3.9	0.385
	S <sub>s</sub> -N2 (NS)	(++)	1.4	3.9	0.359
		(-+)	1.4	3.9	0.359
	S <sub>s</sub> -N2 (EW)	(++)	1.4	3.9	0.359
		(-+)	1.5	3.9	0.385
②	S <sub>s</sub> -D	(--)	0.6	1.4	0.429
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	1.5	3.9	0.385
③	S <sub>s</sub> -D	(--)	1.5	3.9	0.385
	S <sub>s</sub> -N1	(++)	1.5	3.9	0.385

基礎地盤の支持性能評価において、各解析ケースのうち最も厳しい照査値となる結果を表 4.6-5 及び 4.6-5 に示す。また、該当する解析ケースの支持地盤の接地圧分布図を図 4.6-1 及び 4.6-2 に示す。

表 4.6-5(1) 基礎地盤の支持性能評価結果 (①-①断面, 改良地盤)

地震動	解析ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
S <sub>s</sub> -D (--)	①	0.5	1.4	0.358

表 4.6-5(2) 基礎地盤の支持性能評価結果 (①-①断面, 岩盤)

地震動	解析ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
S <sub>s</sub> -D (--)	③	1.2	9.8	0.123

表 4.6-6(1) 基礎地盤の支持性能評価結果 (⑤-⑤断面, 改良地盤)

地震動	解析ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
S <sub>s</sub> -N 2 E W 方向 (-+)	①	0.6	1.4	0.429

表 4.6-6(2) 基礎地盤の支持性能評価結果 (⑤-⑤断面, 岩盤)

地震動	解析ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
S <sub>s</sub> -N 1 (-+)	①	1.5	3.9	0.385

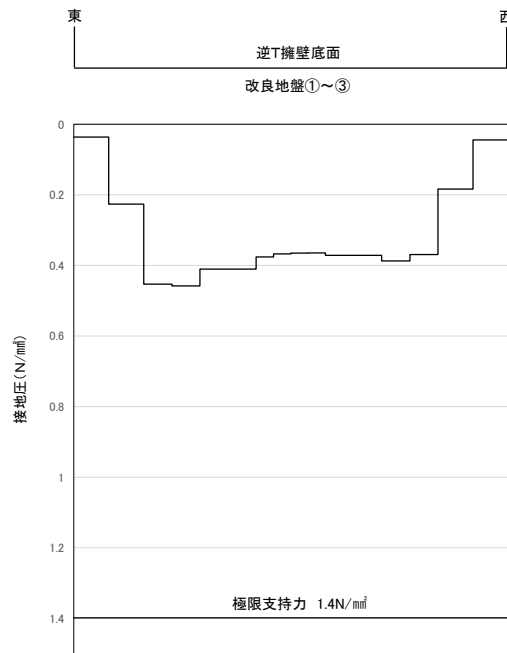


図 4.6-1(1) 支持地盤の接地圧分布図 (①-①断面, 改良地盤)

( S s - D ( - - ) )

解析ケース①：基本ケース

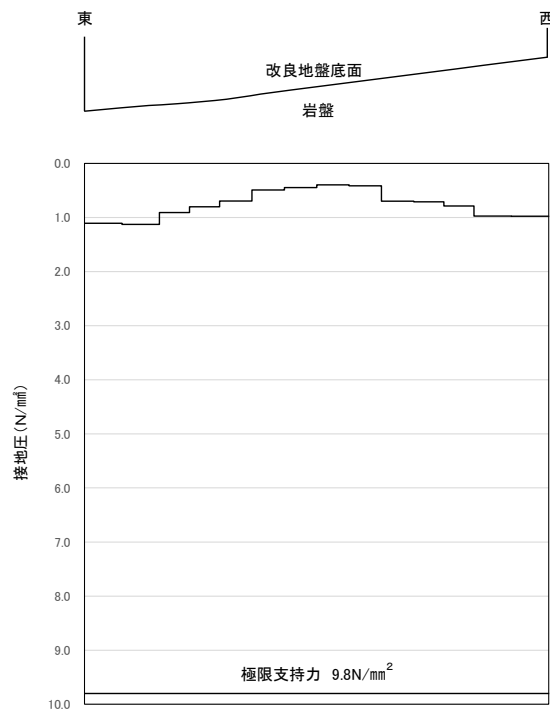


図 4.6-1(2) 支持地盤の接地圧分布図 (①-①断面, 岩盤)

( S s - D ( + - ) )

解析ケース③：地盤物性のばらつきを考慮した解析ケース (平均値 - 1 σ)



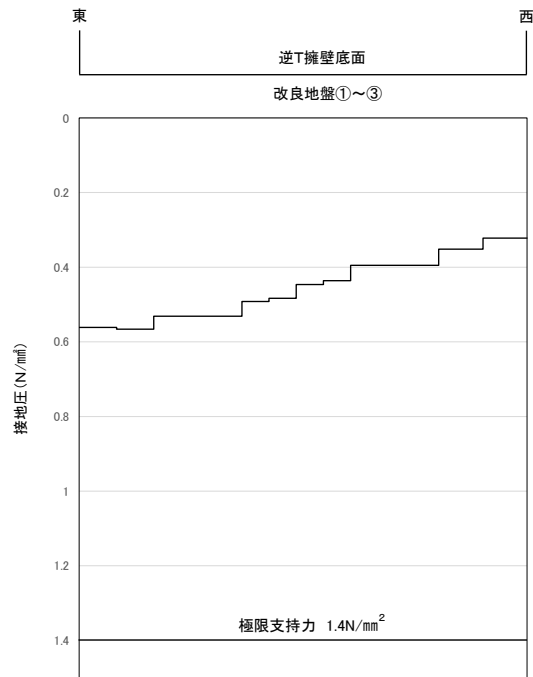


図 4.6-2(1) 支持地盤の接地圧分布図 (⑤-⑤断面, 改良地盤)  
 (S s - N 2 E W方向 (-+))  
 解析ケース①: 基本ケース

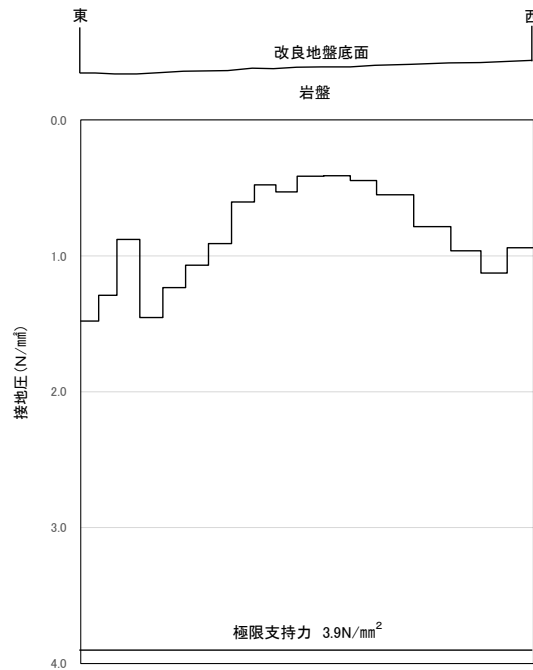


図 4.6-2(2) 支持地盤の接地圧分布図 (⑤-⑤断面, 岩盤)  
 (S s - N 1 (-+))  
 解析ケース①: 基本ケース

## 5. 防波壁（逆T擁壁）の耐震性に関する影響検討

### 5.1 防波壁前面の施設護岸の損傷による影響検討

#### (1) 概要

防波壁（逆T擁壁）の前面には、図5.1-1のとおり全線に渡って施設護岸が設置されており、施設護岸の基礎には基礎捨石及び被覆石を設置している。

施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石の役割を表5.1-1に示す。

施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石は、その形状を適切にモデル化し防波壁（逆T擁壁）の評価を実施する方針としているが、施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石は耐震性が低いことから、施設護岸が損傷した場合の解析ケースを実施する。

防波壁（逆T擁壁）の前面に耐震性の低い施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石が設置される断面においては、これらが防波壁の変形を抑制することが想定されることから、施設護岸並びに基礎捨石が損傷した場合を想定し、念のためこれらがない場合の検討を実施する。

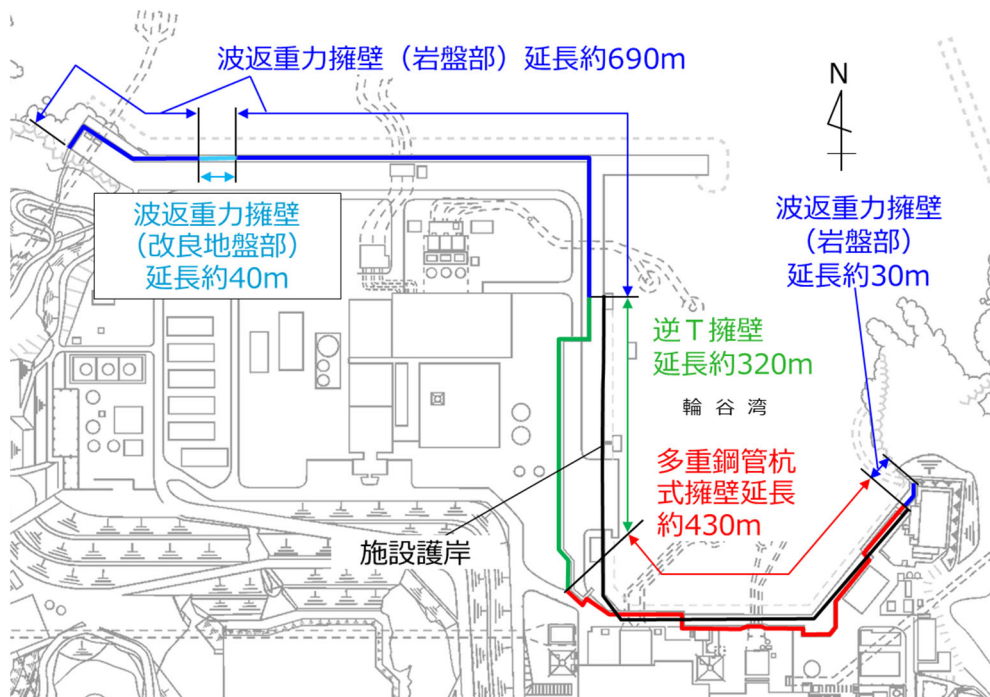


図5.1-1 防波壁と施設護岸の配置（全体平面図）

表 5.1-1 施設護岸並びに基礎捨石及び被覆石の役割

部位	役割
施設護岸	役割に期待しない (解析モデルに取り込み, 防波壁への波及的影響を考慮する)
基礎捨石及び被覆石	役割に期待しない (解析モデルに取り込み, 防波壁への波及的影響を考慮する)

(2) 評価方針

評価対象断面及び入力地震動については、「4. 評価結果」から解析ケース①～③の結果において、照査値が最も厳しい、「⑤-⑤断面, 解析ケース③, S<sub>s</sub>-N(++)」とする。

⑤-⑤断面の施設護岸が損傷した場合の地震応答解析モデルを図 5.1-2 に示す。

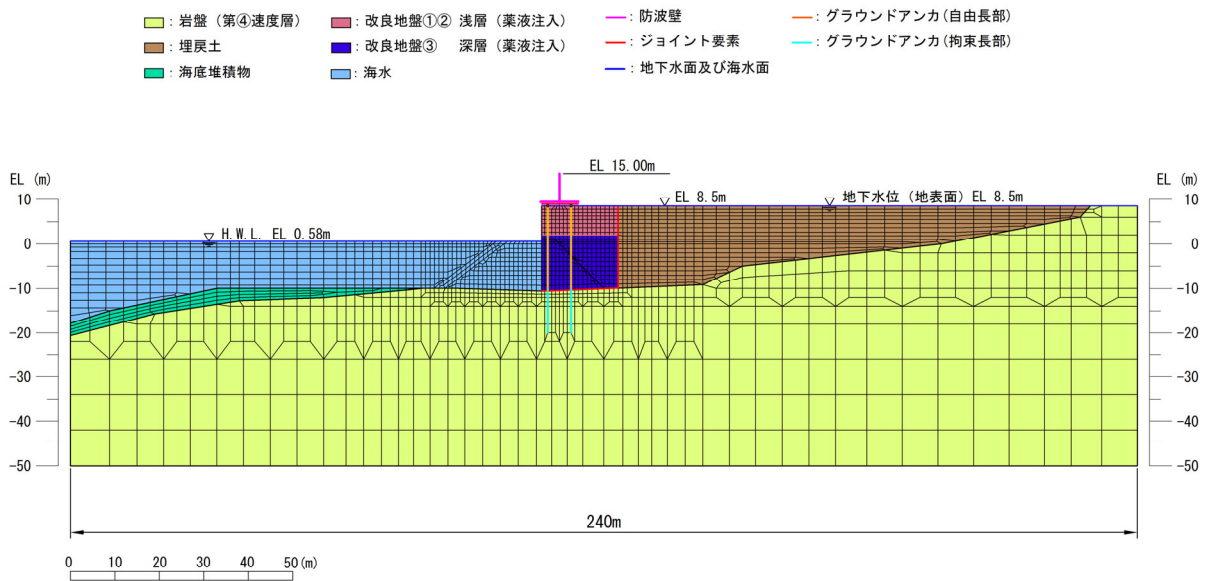


図 5.1-2 ⑤-⑤断面における施設護岸が損傷した場合の地震応答解析モデル

また、影響検討を行う解析ケースについては、表 5.1-2 に示す解析ケースに対して施設護岸が損傷した場合を考慮する。

表 5.1-2 解析ケース

	施設護岸	解析ケース	地盤物性	
			埋戻土 ( $G_0$ : 初期せん断弾 性係数)	岩盤 ( $G_d$ : 動せん断弾性 係数)
「4. 評価結果」 にて評価済み	有	ケース① (基本ケース)	平均値	平均値
		ケース②	平均値 + 1 $\sigma$	平均値
		ケース③	平均値 - 1 $\sigma$	平均値
影響検討	無	ケース③	平均値 - 1 $\sigma$	平均値

(2) 評価結果

施設護岸が損傷した場合の評価結果を表 5.1-3～表 5.1-9 に示す。

本検討の結果，施設護岸が損傷した場合の照査値は施設護岸有とした場合と比べて有意な差は無く，その影響が軽微であることを確認した。

表 5.1-3 逆 T 擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査における照査値

(⑤-⑤断面,  $S_s - N1 (+ +)$ )

	解析 ケース	発生断面力		曲げ圧縮 応力度 $\sigma_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)			
「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	-1924	153	4.4	13.5	0.326
	②	-1921	153	4.4	13.5	0.326
	③	-1921	152	4.4	13.5	0.326
影響検討	③	-1431	373	3.3	13.5	0.245

表 5.1-4 逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査における照査値

(⑤-⑤断面,  $S_s - N1 (+ +)$ )

	解析 ケース	発生断面力		曲げ圧縮 応力度 $\sigma_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)			
「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	-1924	153	198.4	294	0.675
	②	-1921	153	198.0	294	0.674
	③	-1921	152	198.1	294	0.674
影響検討	③	-1431	373	125.4	294	0.427

表 5.1-5 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査における照査値

(⑤-⑤断面, S s - N 1 (++) )

	解析 ケース	発生断面力	せん断 応力度 $\tau_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\tau_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\tau_s / \tau_{sa}$
		せん断力 (kN)			
「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	676	0.45	0.67	0.672
	②	675	0.44	0.67	0.657
	③	676	0.44	0.67	0.657
影響検討	③	552	0.36	0.67	0.538

表 5.1-6 逆 T 擁壁のグラウンドアンカによる支圧応力度に対する照査における照査値

(⑤-⑤断面, S s - N 1 (++) )

	解析 ケース	支圧 応力度 $\sigma_b$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{ba}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_b / \sigma_{ba}$
		「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	12.3
②	12.3		18.0	0.684
③	12.3		18.0	0.684
影響検討	③	12.4	18.0	0.689

表 5.1-7 グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査における照査値

(⑤-⑤断面,  $S_s - N1$  (++) )

	解析 ケース	発生アンカー力 T (KN)	テンドンの 許容拘束力 $T_{ab}$ (kN)	照査値 $T/T_{ab}$
「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	1762	2076	0.849
	②	1762	2076	0.849
	③	1762	2076	0.849
影響検討	③	1776	2076	0.856

表 5.1-8 基礎地盤の支持性能評価結果 (改良地盤①~③)

(⑤-⑤断面,  $S_s - N1$  (++) )

	解析 ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 $P_u$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $P/P_u$
「4. 評価結 果」にて評 価済み	①	0.5	1.4	0.358
	②	0.5	1.4	0.358
	③	0.5	1.4	0.358
影響検討	③	0.6	1.4	0.429

表 5.1-9 基礎地盤の支持性能評価結果 (岩盤)

(⑤-⑤断面,  $S_s - N1$  (++) )

	解析 ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 $P_u$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $P/P_u$
「4. 評価結 果」にて評 価済み	①	1.5	3.9	0.385
	②	1.5	3.9	0.385
	③	1.5	3.9	0.385
影響検討	③	1.5	3.9	0.385

## 5.2 鋼管杭の影響検討

鋼管杭をモデル化した場合の影響検討を実施する。鋼管杭の影響検討フローを図5.2-1に示す。

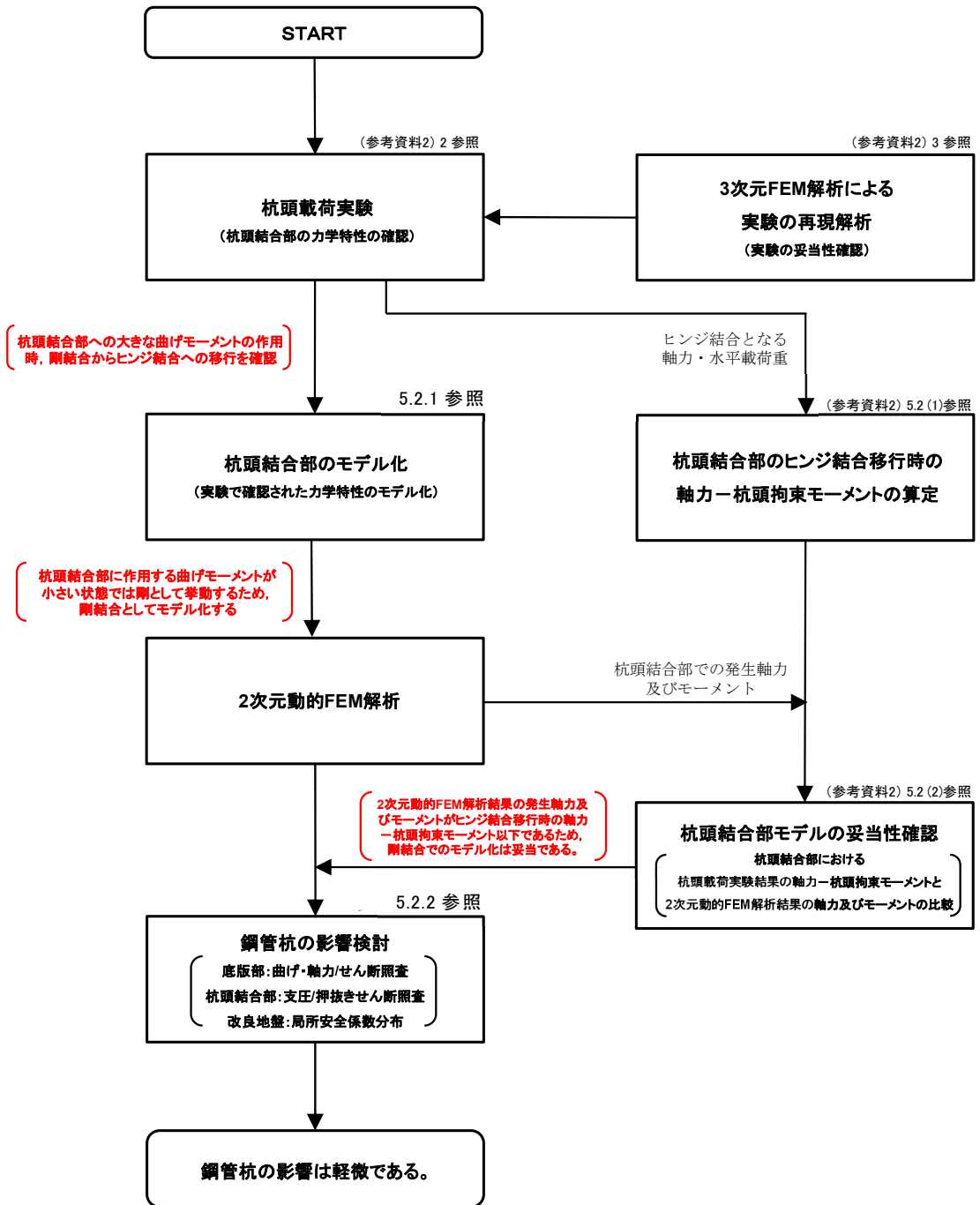


図 5.2-1 鋼管杭の影響検討フロー



### 5.2.1 評価方針

評価対象断面，評価部位および入力地震動については，耐震計算書の「4. 耐震評価結果」のうち解析ケース①（基本ケース）において，照査結果が最も厳しい「⑤-⑤断面， $S_s-D(-)$ 」とする。鋼管杭をモデル化し，鋼管杭による地震時の耐震評価への影響を確認する。図 5.2.1-1 に鋼管杭周辺の解析モデルを示す。

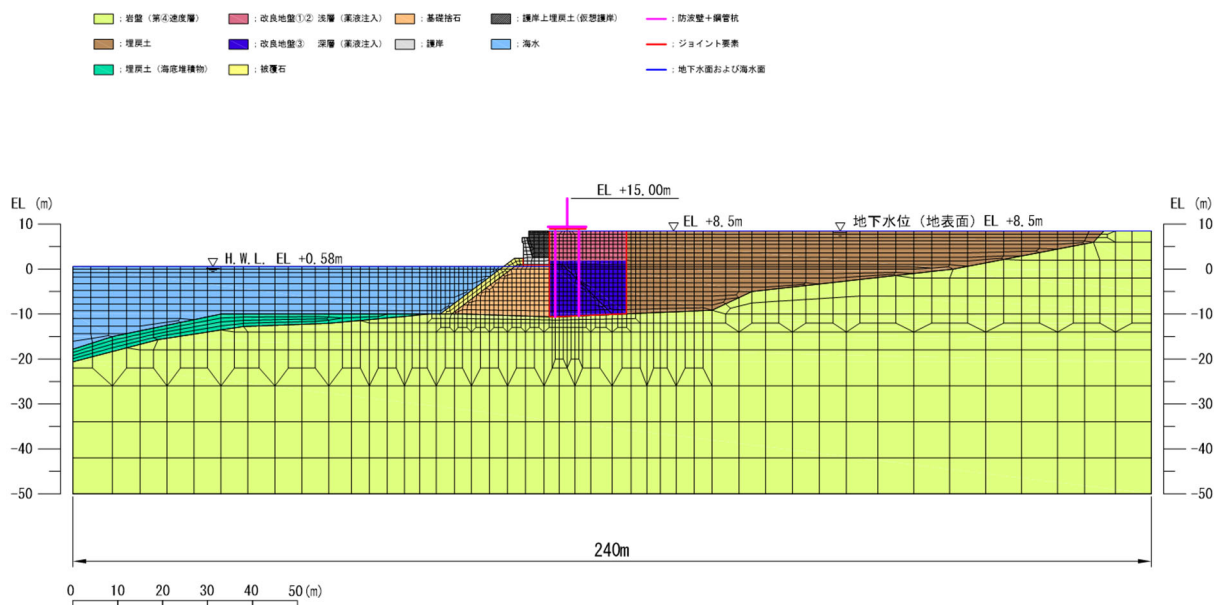


図 5.2.1-1 鋼管杭周辺の解析モデル

#### (1) 鋼管杭のモデル化

##### a. 杭頭結合部

「（参考資料 2）2. 杭頭載荷実験」に示す実験結果及び「（参考資料 2）3. 3次元静的 FEM 解析による実験の再現解析」に示す解析結果より，鋼管杭頭部は地震時を想定した正負交番載荷重下では剛結合の挙動を示すため，杭頭結合部は「剛結合」としてモデル化を行う。

一方，杭頭載荷実験でプッシュオーバーした際には，杭頭結合部のひび割れの発生に伴い，ヒンジ結合に移行することを確認している。逆 T 擁壁の役割は「止水性の保持」であり，「おおむね弾性状態にとどまること」を性能目標にしていることから，杭頭載荷実験結果と 2次元 FEM 解析結果の杭頭結合部の応力とを比較することで，鋼管杭の影響検討における杭頭結合部のモデルを「剛結合」とした妥当性を確認する。

b. 杭支持部

表 5.2.1-1 のとおり，鋼管杭支持部は支持地盤への根入れが 0.5m と浅く，水平力に対する支持性能を期待できないと考えられるため，岩盤からのせん断抵抗に期待しないケースを実施する。

また，フーチング部への岩盤からの悪影響を考慮するため，X 方向（せん断方向）にジョイント要素を設定したケースも実施する。ジョイント要素の力学特性を図 5.2.1-2 に示し，ジョイント要素のばね定数及び物性値を表 5.2.1-2 に示す。ジョイント要素のばね定数は，解析上不安定な挙動を起さないよう十分大きな値を設定し，ジョイント要素の物性値は，「VI-2-1-3 地盤の支持性能に係る基本方針」にて設定している物性値のうち，岩盤（凝灰岩，C<sub>H</sub>級）の物性値を用いる。

表 5.2.1-1 杭支持部モデル化ケース

ケース	X 方向	Y 方向
1	—	ジョイント B (剥離を考慮)
2	ジョイント A (すべりを考慮)	ジョイント B (剥離を考慮)

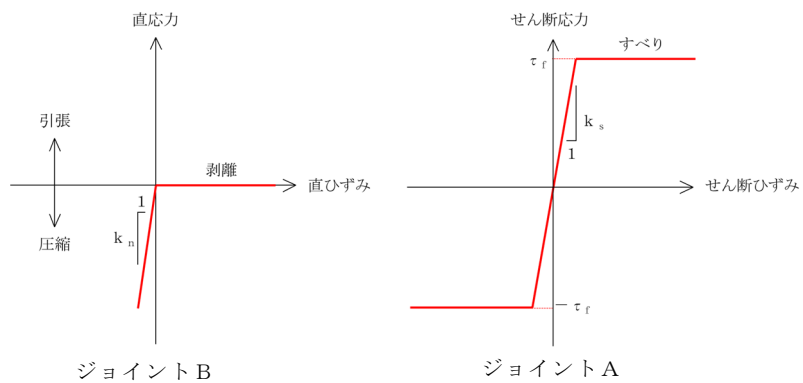


図 5.2.1-2 ジョイント要素の力学特性

表 5.2.1-2 杭支持部ジョイント要素のばね定数及び物性値

	せん断剛性 $k_s$ [kN/m <sup>3</sup> ]	圧縮剛性 $k_n$ [kN/m <sup>3</sup> ]	粘着力 $c$ [kN/m <sup>2</sup> ]	内部摩擦角 $\phi$ [°]
ジョイント A	$1.0 \times 10^6$	—	1.54	55.00
ジョイント B	—	$1.0 \times 10^6$	—	—

c. 鋼管杭本体

鋼管杭は線形はり要素でモデル化し、鋼管杭と埋戻土との間には、地震時に鋼管杭の間を埋戻土がすり抜ける効果を考慮するため、杭-地盤相互作用バネ要素でモデル化する。

鋼管杭の使用材料を表 5.2.1-3 に、材料の物性値を表 5.2.1-4 に示す。また、鋼管杭モデルを図 5.2.1-3 に示す。中詰めコンクリートの剛性については考慮しない方が鋼管杭の変形が大きくなり、逆 T 擁壁の地震時応答加速度が大きくなると考えられることから、保守的に剛性は考慮せず、単位体積重量のみ考慮する。

表 5.2.1-3 使用材料

材料	諸元
鋼管杭 φ 1300mm	t = 22mm (SKK490)
中詰めコンクリート	設計基準強度 f' <sub>ck</sub> = 18N/mm <sup>2</sup> (杭部) 24N/mm <sup>2</sup> (杭頭接合部)

表 5.2.1-4 材料の物性値

材料	単位体積重量*1 (kN/m <sup>3</sup> )	ヤング係数*2 (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比*3
鋼管杭 (SKK490)	77.0	2.0×10 <sup>5</sup>	0.3
中詰めコンクリート	22.6	—	—

注記\*1：港湾基準に記載の単位体積重量を用いる。

\*2：示方書(2018) p.51 よりヤング係数を 2.0×10<sup>5</sup> N/mm<sup>2</sup> とする。

\*3：示方書(2018) p.43 よりポアソン比を 0.3 とする。

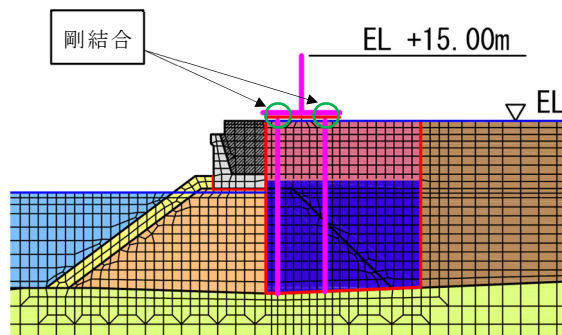


図 5.2.1-3 鋼管杭モデル

(2) 解析ケース

鋼管杭の影響検討を行う解析ケースについては、「4. 評価結果」から解析ケース①～③の結果のうち、逆T擁壁における照査値が最も厳しい「⑤-⑤断面，解析ケース①，S<sub>s</sub>-D(--)」とする。表 5.2.1-5 に解析ケースを示す。

表 5.2.1-5 解析ケース

	鋼管杭	解析ケース	地盤物性	
			埋戻土 (G <sub>0</sub> : 初期せん断弾性係数)	岩盤 (G <sub>d</sub> : 動せん断弾性係数)
「4. 評価結果」 にて評価済み	無	ケース① (基本ケース)	平均値	平均値
		ケース②	平均値 + 1σ	平均値
		ケース③	平均値 - 1σ	平均値
影響検討	有	ケース①	平均値	平均値

(3) 部材照査

鋼管杭による地震時の耐震評価への影響確認は、地震応答解析に基づいて算定した発生応力が「3.5 許容限界」で設定したコンクリートの許容限界を満足することに加え、鋼管杭結合部に作用する押抜きせん断応力と支圧応力が許容限界以下であることを確認する。

a. 許容限界

逆 T 擁壁の許容限界は、「コンクリート標準示方書 [構造性能照査編] (土木学会, 2002 年制定)」に基づき、短期許容応力度とする。表 5.2.1-6 に逆 T 擁壁の許容限界を示す。

表 5.2.1-6 逆 T 擁壁の許容限界

種別	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		短期許容応力度* <sup>2</sup> (N/mm <sup>2</sup> )
	コンクリート ( $f'_{ck}=24\text{N/mm}^2$ )	許容押抜きせん断応力度 $\tau_{a1}$	0.90
支圧応力度 $\sigma_{ba}$ * <sup>1</sup> (鋼管杭)		7.2	10.8

注記\*1: コンクリート標準示方書 p.244 より支圧応力度の算出式  $\sigma_{ba}=0.3f_{ck}$  を用いて求める。

\*2: 短期許容応力度は、コンクリート標準示方書より許容応力度に対し 1.5 倍の割増を考慮する。(押抜きせん断応力度については割増を行わない。)

b. 断面照査

鋼管杭の影響検討として、「杭基礎設計便覧 (日本道路協会, 2007 年制定)」に基づき、押込み力に対する照査及び水平力に対する照査を行う。

(a) 押し込み力に対する照査

鋼管杭の押し込み力に対する照査は、図 5.2.1-4 に示す算定される垂直支圧応力  $\sigma_{cv}$  及び押し抜きせん断応力度  $\tau_v$  が許容限界以下であることを確認する。押し込み力に対する照査図を図 5.2.1-5 に示す。

$$\sigma_{cv} = P / (\pi D^2 / 4)$$

$$\tau_v = P / \pi (D+h) h$$

ここに、

- $\sigma_{cv}$  : 杭頭結合部に発生する垂直支圧応力度 (N/mm<sup>2</sup>)
- $\tau_v$  : 杭頭結合部に発生する垂直押し抜きせん断応力度 (N/mm<sup>2</sup>)
- P : 杭頭結合部に作用する押し込み力 (N)
- D : 鋼管杭径 (mm) (=1300mm)
- h : 垂直方向の押し抜きせん断に抵抗するフーチング有効高 (mm) (=1790mm)

6-3-2 照査方法

図-III.6.1, 図-III.6.2 に示す杭頭荷重に対して、次の照査を行う。

1) フーチングコンクリートの垂直支圧応力度の照査

$$\sigma_{cv} = \frac{P}{\pi D^2 / 4} \leq \sigma_{ba} \dots \dots \dots \text{(III.6.1)}$$

一般的には杭の支持力、杭本体の耐力ならびにフーチングのせん断耐力等を考慮すれば、フーチングコンクリートの垂直支圧応力が問題になることはない。

図-III.6.1 方法 A による場合

図-III.6.2 方法 B による場合

2) フーチングコンクリートの押し抜きせん断応力度の照査

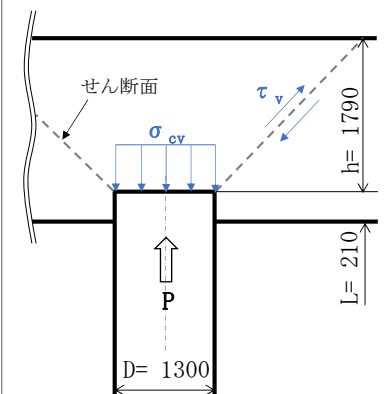
$$\tau_v = \frac{P}{\pi (D+h) h} \leq \tau_a \dots \dots \dots \text{(III.6.2)}$$


図 5.2.1-4 押し込み力に対する照査

図 5.2.1-5 押し込み力に対する照査図

(「杭基礎設計便覧 2007 年」より引用に一部加筆)

(b) 水平力に対する照査

鋼管杭の水平力に対する照査は、図 5.2.1-6 に示す水平支圧応力  $\sigma_{ch}$  及び水平方向の押抜きせん断応力  $\tau_h$  が許容限界以下であることを確認する。  
水平力に対する照査図を図 5.2.1-7 に示す。

$$\sigma_{ch} = H/DL$$

$$\tau_h = H/h'(2L+D+2h')$$

ここに、

- $\sigma_{ch}$  : 杭頭結合部に発生する水平支圧応力度 (N/mm<sup>2</sup>)
- $\tau_h$  : 杭頭結合部に発生する水平押抜きせん断応力度 (N/mm<sup>2</sup>)
- H : 杭頭結合部に作用する水平力 (N)
- D : 鋼管杭径 (mm) (=1300mm)
- L : 杭の埋込長 (mm) (=210mm)
- h' : 水平方向の押し抜きせん断に抵抗するフーチング有効厚 (=975mm)

4) フーチングコンクリートの水平支圧応力度の照査

a. 方法 A の場合

$$\sigma_{ch} = \frac{H}{Dl} + \frac{6M}{Dl^2} \leq \sigma_{ba} \dots\dots\dots(\text{III. 6. 5})$$

b. 方法 B の場合

$$\sigma_{ch} = \frac{H}{Dl} \leq \sigma_{ba} \dots\dots\dots(\text{III. 6. 6})$$

5) フーチング端部の杭に対する水平方向の押抜きせん断応力度の照査

$$\tau_h = \frac{H}{h'(2l+D+2h')} \leq \tau_a \dots\dots\dots(\text{III. 6. 7})$$

図 5.2.1-6 水平力に対する照査

(「杭基礎設計便覧 2007 年」より引用に一部加筆)

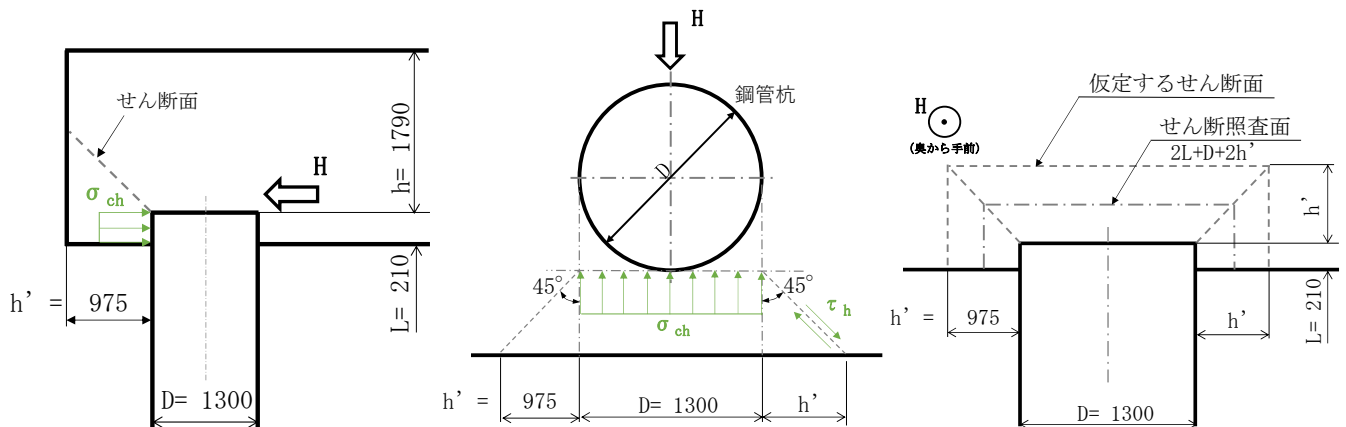


図 5.2.1-7 水平力に対する照査図  
2.1.3-182

## 5.2.2 評価結果

### (1) 鋼管杭の影響検討

#### a. 逆 T 擁壁への影響について

杭頭部を剛結合とした 2 次元 FEM 解析結果に対する底版及び杭頭結合部の照査結果を表 5.2.2-1 及び表 5.2.2-2 に示す。いずれの部材においても照査値が許容値を満足しており、基準地震動  $S_s$  に対し鋼管杭による影響が軽微であることを確認した。

表 5.2.2-1 2 次元 FEM 解析に対する部材照査結果  
(杭支持部：岩盤からのせん断抵抗に期待しないケース)

		応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	照査値	
底版	曲げ・ 軸力	( $\sigma_c$ ) 2.5	( $\sigma_{ca}$ ) 13.5	$\sigma_c / \sigma_{ca}$	0.186
		( $\sigma_s$ ) 89.9	( $\sigma_{sa}$ ) 294	$\sigma_s / \sigma_{sa}$	0.306
	せん断	( $\tau$ ) 0.57	( $\tau_a$ ) 0.67	$\tau / \tau_a$	0.851
杭頭 結合部	押込み力 に対する 照査	( $\sigma_{cv}$ ) 2.1	( $\sigma_{ba}$ ) 10.8	$\sigma_{cv} / \sigma_{ba}$	0.195
		( $\tau_v$ ) 0.16	( $\tau_{va}$ ) 0.90	$\tau_v / \tau_{va}$	0.178
	水平力 に対する 照査	( $\sigma_{ch}$ ) 4.0	( $\sigma_{ba}$ ) 10.8	$\sigma_{ch} / \sigma_{ba}$	0.371
		( $\tau_h$ ) 0.31	( $\tau_{ha}$ ) 0.90	$\tau_h / \tau_{ha}$	0.345



表 5.2.2-2 2次元 FEM 解析に対する部材照査結果

(杭支持部：X 方向（せん断方向）にジョイント要素を設定したケース)

		応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	照査値	
底版	曲げ・ 軸力	( $\sigma_c$ ) 2.5	( $\sigma_{ca}$ ) 13.5	$\sigma_c / \sigma_{ca}$	0.186
		( $\sigma_s$ ) 87.8	( $\sigma_{sa}$ ) 294	$\sigma_s / \sigma_{sa}$	0.299
	せん断	( $\tau$ ) 0.58	( $\tau_a$ ) 0.67	$\tau / \tau_a$	0.866
杭頭 結合部	押込み力 に対する 照査	( $\sigma_{cv}$ ) 2.1	( $\sigma_{ba}$ ) 10.8	$\sigma_{cv} / \sigma_{ba}$	0.195
		( $\tau_v$ ) 0.16	( $\tau_{va}$ ) 0.90	$\tau_v / \tau_{va}$	0.178
	水平力 に対する 照査	( $\sigma_{ch}$ ) 4.1	( $\sigma_{ba}$ ) 10.8	$\sigma_{ch} / \sigma_{ba}$	0.380
		( $\tau_h$ ) 0.31	( $\tau_{ha}$ ) 0.90	$\tau_h / \tau_{ha}$	0.345

b. 改良地盤への影響について

鋼管杭の変位による改良地盤への影響を局所安全係数分布図により確認する。評価時刻については、鋼管杭の変位が最大となる時刻において、改良地盤への影響が最も大きくなると考えられるため、鋼管杭の杭頭部と杭支持部の相対変位が最大となる時刻とした。

図 5.2.2-1 に示す局所安全係数分布図より、引張強度に達した要素は局所的であり、おおむね健全であることから、鋼管杭の変位による改良地盤への影響は軽微であると判断する。

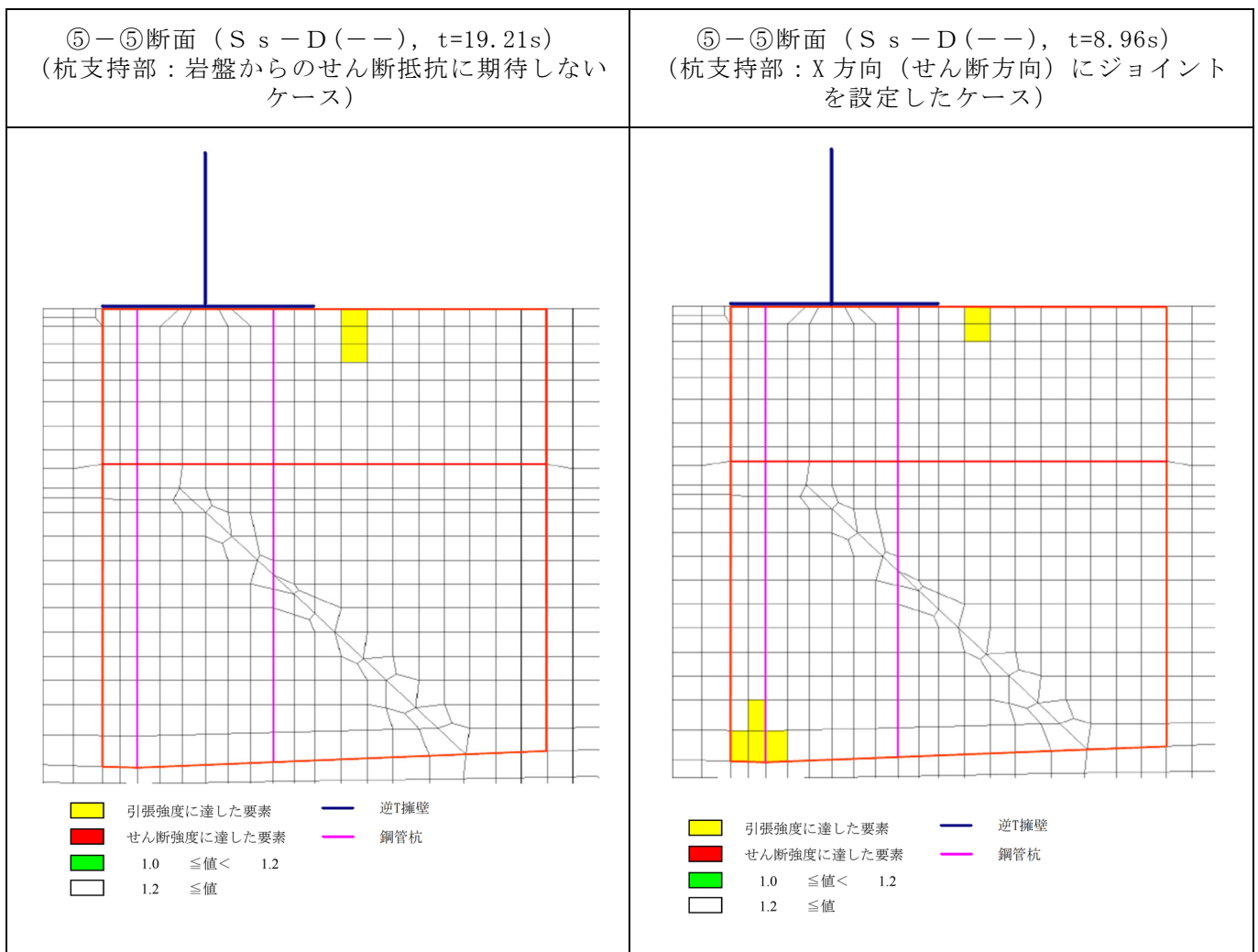


図 5.2.2-1 鋼管杭をモデル化した改良地盤の局所安全係数分布  
(杭頭部と杭支持部の変位が最大である時刻)

### 5.3 改良地盤⑧の影響検討

#### (1) 概要

防波壁（逆 T 擁壁）の近傍には、基礎地盤のすべり安定性の向上を目的として、改良地盤⑧が施工されている。改良地盤⑧については、自主的な対策であることから、防波壁（逆 T 擁壁）の耐震評価では、当該改良地盤を考慮しないこととしているが、改良地盤⑧による逆 T 擁壁への影響を確認するため、改良地盤⑧をモデル化した影響検討を実施する。

#### 5.3.1 評価方針

評価対象断面については、改良地盤⑧の近傍に位置する①-①断面において評価を実施する。評価に用いる入力地震動については、「4. 耐震評価結果」において、照査結果が最も厳しいケースの「S<sub>s</sub>-N1(++)、解析ケース①」とする。

改良地盤⑧をモデル化し、改良地盤⑧による地震時の耐震評価への影響を確認する。解析モデルを図 5.3.1-1 に示す。

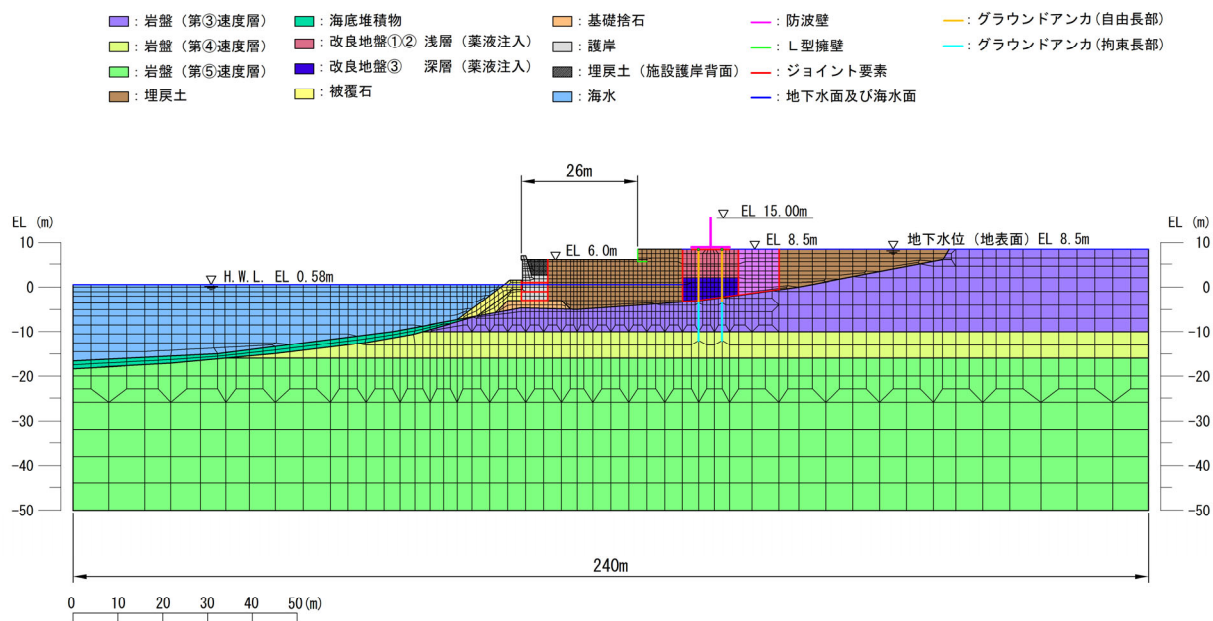


図 5.3.1-1 改良地盤⑧をモデル化した①-①断面の解析モデル

(1) 改良地盤⑧の解析用物性値

改良地盤⑧における解析用物性値は「VI-2-1-3 地盤の支持性能に係る基本方針」に基づき設定し、改良地盤⑧の解析用物性値を表 5.3.1-1 に示す。

表 5.3.1-1 改良地盤⑧における解析用物性値

		解析用物性値 (改良地盤⑧)
物理特性	密度 $\rho$ (g/cm <sup>3</sup> )	1.89
	間隙率 $n$	0.45
変形特性	弾性係数 $E$ (kN/m <sup>2</sup> )	$9.25 \times 10^6$
	ポアソン比 $\nu$	0.33
強度特性	粘着力 $C'$ (kN/m <sup>2</sup> )	1550
	内部摩擦角 $\phi'$	38.7°

(2) 解析ケース

改良地盤の影響検討を行う解析ケースについては、「4. 評価結果」から解析ケース①～③の結果のうち、逆T擁壁における照査値が最も厳しい「解析ケース①, S<sub>s</sub>-N1(++)」とする。表 5.3.1-2 に解析ケースを示す。

表 5.3.1-2 解析ケース

	改良地盤⑧	解析ケース	地盤物性	
			埋戻土 ( $G_0$ : 初期せん断弾性係数)	岩盤 ( $G_d$ : 動せん断弾性係数)
「4. 評価結果」にて評価済み	無	ケース① (基本ケース)	平均値	平均値
		ケース②	平均値 + 1 $\sigma$	平均値
		ケース③	平均値 - 1 $\sigma$	平均値
影響検討	有	ケース①	平均値 - 1 $\sigma$	平均値

### 5.3.2 評価結果

改良地盤⑧をモデル化した場合の評価結果を表 5.3.2-1～表 5.3.2-7 に示す。

本検討の結果、改良地盤⑧をモデル化した場合の評価は施設護岸有とした場合と比べて有意な差は無く、その影響は軽微であることを確認した。

表 5.3.2-1 逆 T 擁壁のコンクリートの曲げ圧縮照査における照査値

( S s - N 1 ( + + ) )

	解析 ケース	発生断面力		曲げ圧縮 応力度 $\sigma_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)			
「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	-1343	437	3.1	13.5	0.230
	②	-1338	437	3.1	13.5	0.230
	③	-1348	436	3.1	13.5	0.230
影響検討	①	-1227	436	2.9	13.5	0.215

表 5.3.2-2 逆 T 擁壁の鉄筋の曲げ引張照査における照査値

( S s - N 1 ( + + ) )

	解析 ケース	発生断面力		曲げ圧縮 応力度 $\sigma_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_s / \sigma_{sa}$
		曲げモーメント (kN・m)	軸力 (kN)			
「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	-1343	437	110.6	294	0.377
	②	-1338	437	110.0	294	0.375
	③	-1348	436	111.2	294	0.379
影響検討	①	-1227	436	98.0	294	0.334

表 5.3.2-3 逆 T 擁壁のせん断破壊に対する照査における照査値

( S s - N 1 ( + + ) )

	解析 ケース	発生断面力		せん断 応力度 $\tau_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\tau_{sa}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\tau_s / \tau_{sa}$
		せん断力 (kN)				
「4. 評価 結果」にて 評価済み	①	527		0.36	0.67	0.538
	②	525		0.36	0.67	0.538
	③	528		0.36	0.67	0.538
影響検討	①	492		0.34	0.67	0.508

表 5.3.2-4 逆 T 擁壁のグラウンドアンカによる支圧応力度に対する照査における照査値

( S s - N 1 ( + + ) )

	解析 ケース	支圧 応力度 $\sigma_b$ (N/mm <sup>2</sup> )	短期許容 応力度 $\sigma_{ba}$ (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 $\sigma_b / \sigma_{ba}$
「4. 評価結 果」にて評価 済み	①	10.6	18.0	0.589
	②	10.6	18.0	0.589
	③	10.6	18.0	0.589
影響検討	①	10.4	18.0	0.578

表 5.3.2-5 グラウンドアンカの発生アンカー力に対する照査における照査値

( S s - N 1 ( + + ) )

	解析 ケース	発生アンカー力 T (KN)	テンドンの 許容拘束力 T <sub>ab</sub> (kN)	照査値 T/T <sub>ab</sub>
「4. 評価結 果」にて評価 済み	①	1514	1764	0.859
	②	1514	1764	0.859
	③	1514	1764	0.859
影響検討	①	1492	1764	0.846

表 5.3.2-6 基礎地盤の支持性能評価結果 (改良地盤①~③)

(S<sub>s</sub> - N1 (++) )

	解析 ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
「4. 評価結果」にて評価 済み	①	0.5	1.4	0.358
	②	0.5	1.4	0.358
	③	0.5	1.4	0.358
影響検討	①	0.5	1.4	0.358

表 5.3.2-7 基礎地盤の支持性能評価結果 (岩盤)

(S<sub>s</sub> - N1 (++) )

	解析 ケース	最大接地圧 P (N/mm <sup>2</sup> )	極限支持力 P <sub>u</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	照査値 P / P <sub>u</sub>
「4. 評価結果」にて評価 済み	①	1.0	9.8	0.103
	②	1.0	9.8	0.103
	③	1.0	9.8	0.103
影響検討	①	0.8	9.8	0.082